

山 賀

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

山

賀

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

巻頭図版 1



山賀遺跡(その2)航空写真(西南より)



基本層位 Bトレンチ北壁



山賀遺跡（その2）出土ガラス玉

序 文

「山賀遺跡」は、昭和46年に楠根川の改修工事が行なわれた時、掘削土中から大量の弥生式土器や石器等が出土したことにより遺跡が所在していることが確認された。これら出土した遺物を比較検討した結果、本遺跡より北約500mに所在する瓜生堂遺跡より古い時期であることが明らかとなり、河内平野の中央部に位置する、弥生式時代最古の遺跡として注目された。

その後、昭和47年、昭和49年、昭和53年と数度の発掘調査の結果、鎌倉時代より、平安、奈良、古墳、弥生と各時代の遺構が所在することが確認され、これら各時代の遺構が非常に深い位置にあることも明らかになった。

この「山賀遺跡」は、近畿自動車道天理・吹田線が府道中央環状線中央分離帯部分を縦走する計画が施工されるに及んで確認された14遺跡の内の一つで、昭和51年より着手し現在継続して発掘調査を行っており、長原遺跡、瓜生堂遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、若江北遺跡に次いで発掘調査を実施したものである。

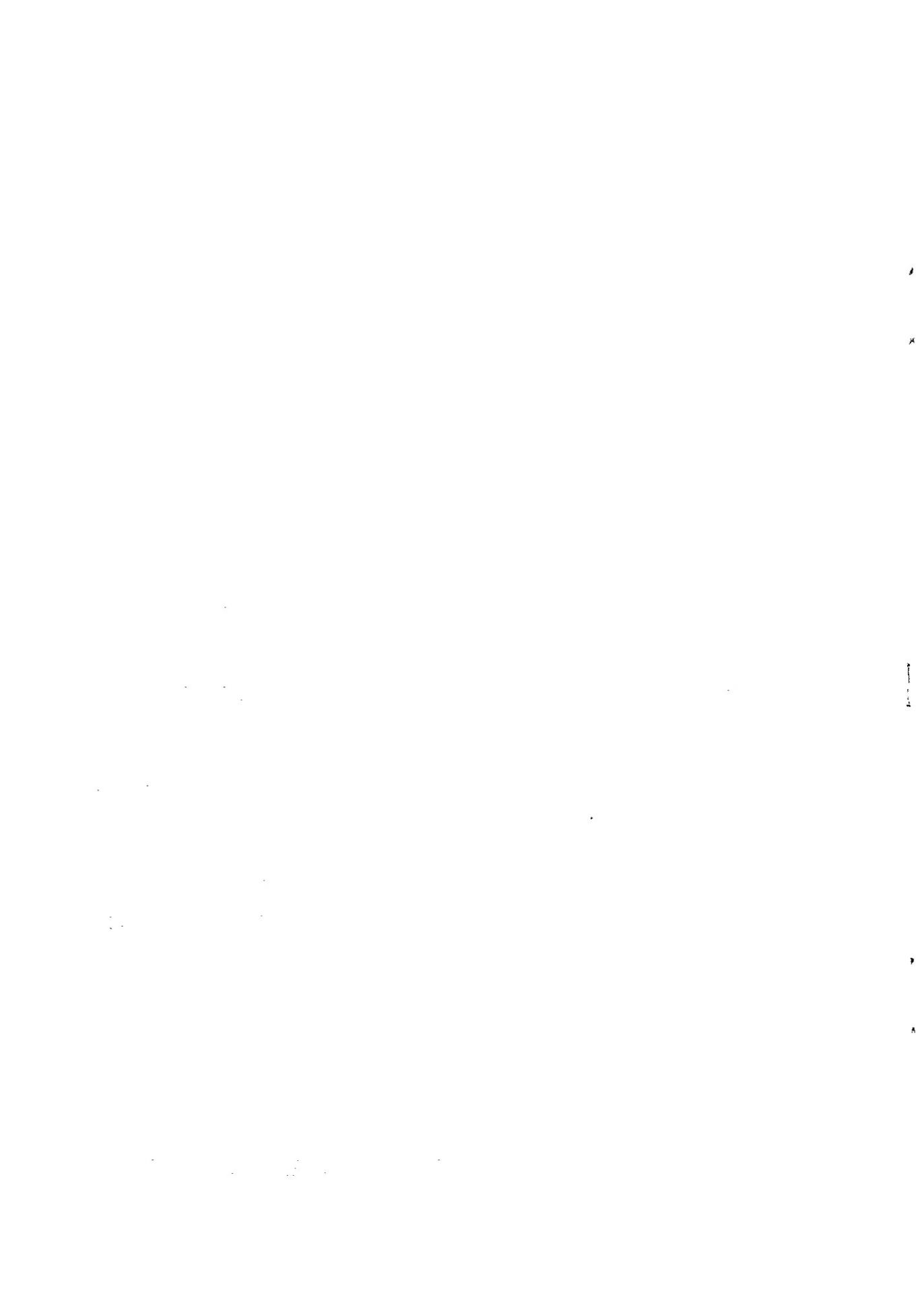
本書は、昭和54年より実施した山賀遺跡の調査概要を収録したものであり、調査の結果従前の調査結果を越えた成果を得たものと確信する。

これら調査を実施にあたって、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ関係各位ならびに一般府民多数の方々のご協力の賜物と深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和58年10月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 籾内盛雄



序 文

河内平野の中に眠る過去の人々の生活の跡は、その質、量ともに良好にして、膨大である。

古大和川が運んだ砂や土砂は、古の人々の生活の舞台となった地面を、一層一層包み込んで、2000有余年間護り続けて来た。

しかし、この、保護者としての砂や土砂の流入も、当時の人々の生活には、大きな驚異であったであろう。今より、はるかに自然環境の変化が激しかった時代、人々は、その変化に戸惑い、怖れ、そして闘い、克服していった。河内平野の歴史、その河内平野に生活した人々の歴史は、まさに自然の激しい変化の歴史であり、それと闘い、克服し、調和を求めて努力した人々の歴史といっても過言ではあるまい。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる13遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡の調査を完了し、美園遺跡、佐堂遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡等の調査を実施している。

本書は、昭和57年5月に調査を完了した東大阪市若江西新町から八尾市新家町に所在する山賀遺跡（その2）の発掘調査の概要を記したものである。

調査に要した期間、費用も膨大ならば、検出した遺構、遺物もまた膨大であり、そのすべてを本書に収録しきれなかったが、河内平野の歴史、河内平野に生活の場を求めた人々の歴史を直接肌で感じ取り、理解していただけるものと確信するとともに、始めて考古学的に、また科学的にメスの入った山賀遺跡という、河内平野で最古にして、瓜生堂遺跡と並び最大の複合集落跡の実態の解明に大きく貢献出来得るものと確信する。

最後に、当文化財センターは、設立以来10年、埋蔵文化財の保護、普及事業を積極的に実施する中で、その使命を果しながら、着実に発展してきた。今後も所期の目標を見失うことなく、一層研鑽、努力することを約すると共に、一般府民の皆様を始め、関係各位のより一層のあたたかい御理解、御支援を願ってやまない。

昭和 58 年 10 月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄



例 言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、東大阪市若江南町5丁目、八尾市新家町3・4丁目に所在する山賀遺跡（その2）調査区の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び（財）大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用 212,943,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は昭和54年12月20日から昭和57年5月15日までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理業務も、発掘調査と併行して実施した。
また、遺構図面や写真資料等の概括的な整理業務は、現地における発掘調査の合間と昭和57年3月16日から同年5月15日までの2ヶ月間に実施した。
6. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下、（財）大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清
	事務局次長兼総務課長	筒井康雄（～55.12）、大塚恭朗（56.4～）
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣、 灰本明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子、宮本 哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 妹尾直子、主事 小島容子
	業務課主幹	椋尾孝彦
調査総括責任者	業務課長	堀江門也（～56.3）、中井貞夫（56.4～）
瓜生堂分室	主幹兼業務第1係長	中西靖人
	業務第2係長	瀬川健（～56.3）、尾上実（56.4～）、技師 杉本二郎、大谷治孝、奥和之、森井貞雄、高橋雅 子、平井貞子

また、調査に際して日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、河内警察署及び八尾警察署等に格別の配慮を受けると共に、近畿大学、桃山学院大学、大阪工業大学、大阪芸術大学、四天王寺国際仏教大学、大阪外国語大学、武庫川女子短期大学、大阪樟蔭女子大学、国学院大学等の学生諸君の協力を得た。

7. 本書の遺構実測図の座標は、日本道路公団による道路中心線を準用した。また、標高はT、P。（東京湾標準潮位）による。

8. 本書に記載した各遺物は一連番号を与え、実測図と写真を対照できるようにした。土製品は番号のみで表したが、石製品はSを、木製品はWをそれぞれ頭に付して表示した。
9. 本調査では以下の諸氏の御指導、御協力を受けると共に鑑定を依頼した。
松田隆嗣（樹種）、奥田尚（砂粒、胎土）、米田敏幸（胎土）、江本義理（ガラス玉）
また、出土遺物の保存処理の一部については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
10. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カールスライドを多数作製したが、そのすべてを本書に掲載する事が不可能であるため、本書記載以外の資料については、（財）大阪文化財センターで保管している。広く利用される事を希望する。

山 賀 (その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

巻頭カラー写真図版 1～3

序文

例言

第Ⅰ章 はじめに	中西靖人	1
第Ⅱ章 調査の方法	尾上 実	6
第Ⅲ章 位置と環境	森井貞雄	8
第Ⅳ章 調査の成果	森井貞雄・高橋雅子	11
第1節 基本層序及び遺構面		11
第2節 縄文遺構面		11
第3節 弥生前期Ⅰ遺構面		24
第4節 弥生前期Ⅱ遺構面		37
第5節 弥生中期Ⅰ遺構面		50
第6節 弥生中期Ⅱ遺構面		67
第7節 弥生後期Ⅰ遺構面		70
第8節 弥生後期Ⅱ遺構面		73
第9節 弥生後期Ⅲ遺構面		78
第10節 古墳～奈良遺構面		84
第11節 中世遺構面		96
第12節 近世～現代遺構面		101
第Ⅴ章 まとめにかえて	森井貞雄	108
付 章		
1. 山賀(その2)遺跡出土木製遺物の樹種について	松田隆嗣	113
2. 土器の胎土について	奥田 尚・米田敏幸	135
3. 砂礫の分析	奥田 尚	140

挿 図 目 次

第 1 図	山賀遺跡位置図	1
第 2 図	調査地区割図	4
第 3 図	トレンチ配置図	7
第 4 図	周辺の地形と遺跡	9
第 5 図	縄文面 河川1、3断面図	12
第 6 図	縄文面 河川1出土遺物	12
第 7 図	基本土層図 (C.L.断面)	13・14
第 8 図	縄文面 A2トレンチ カニ穴 (第21層上面) 平面図	23
第 9 図	弥生前期Ⅰ面 溝1、2断面図	24
第 10 図	弥生前期Ⅰ面 溝5出土遺物	24
第 11 図	弥生前期Ⅰ面 溝6断面図	25
第 12 図	弥生前期Ⅰ面 溝6出土遺物 (1)	26
第 13 図	弥生前期Ⅰ面 溝6出土遺物 (2)	27
第 14 図	弥生前期Ⅰ面 溝6出土遺物 (3)	28
第 15 図	弥生前期Ⅰ面 溝7出土遺物	29
第 16 図	自然礫投弾実測図	30
第 17 図	弥生前期Ⅰ面 包含層第19層出土遺物	37
第 18 図	弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構想定平面図	38
第 19 図	弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構エレベーション	39
第 20 図	弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構断面図 (1)	40
第 21 図	弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構断面図 (2)	41
第 22 図	弥生前期Ⅱ面 溝2、3、4、5出土遺物	42
第 23 図	弥生前期Ⅱ面 土手6内遺物出土状況	43
第 24 図	弥生前期Ⅱ面 土手4、5、6、7出土遺物	43
第 25 図	弥生前期Ⅱ面 土手6出土遺物	44
第 26 図	弥生前期Ⅱ面 溝9断面図	45
第 27 図	弥生前期Ⅱ面 溝10平面、断面図	45
第 28 図	弥生前期Ⅱ面 小穴群平面図	47・48
第 29 図	弥生前期Ⅱ面 小穴平面、断面図	49
第 30 図	弥生前期Ⅱ面 土塀1、2平面、断面図	49
第 31 図	弥生中期Ⅰ面 畦畔3、11断面図	51

第 32 図	弥生中期 I 面	畦畔11内杭列平面、立面図	52
第 33 図	弥生中期 I 面	畦畔 6、8 断面図	52
第 34 図	弥生中期 I 面	畦畔 8 平面図	53
第 35 図	弥生中期 I 面	水田耕土内出土遺物	53
第 36 図	弥生中期 I 面	水田耕土内、畦畔 3 出土遺物	54
第 37 図	弥生中期 I 面	第 1 号方形周溝墓供献土器出土状況	55
第 38 図	弥生中期 I 面	第 1 号方形周溝墓北周溝断面図	56
第 39 図	弥生中期 I 面	方形周溝墓群平面図	57・58
第 40 図	弥生中期 I 面	方形周溝墓断面図	59・60
第 41 図	弥生中期 I 面	第 1 号方形周溝墓主体部平面、断面図	61
第 42 図	弥生中期 I 面	第 1 号方形周溝墓出土遺物	62
第 43 図	弥生中期 I 面	第 2 号方形周溝墓周溝内土器出土状況	63
第 44 図	弥生中期 I 面	第 2 号方形周溝墓出土遺物	63
第 45 図	弥生中期 I 面	第 2 号方形周溝墓主体部平面、断面図	63
第 46 図	弥生中期 I 面	第 3 号方形周溝墓供献土器出土状況	64
第 47 図	弥生中期 I 面	第 3 号方形周溝墓出土遺物	64
第 48 図	弥生中期 I 面	第 3 号方形周溝墓主体部平面、断面図	65
第 49 図	弥生中期 I 面	木槌状遺構平面、断面図	66
第 50 図	弥生中期 I 面	包含層第17層出土遺物	67
第 51 図	弥生中期 II 面	畦畔 1 断面図	68
第 52 図	弥生中期 II 面	水田耕土内出土遺物	68
第 53 図	弥生中期 II 面	第13層出土遺物	68
第 54 図	弥生中期 II 面	溝 1 断面図	69
第 55 図	弥生中期 II 面	溝 2 出土遺物	69
第 56 図	弥生中期 II 面	溝 2、杭列 1 平面図	70
第 57 図	弥生後期 I 面	溝 2、4 断面図	71
第 58 図	弥生後期 I 面	溝 2 出土遺物	72
第 59 図	弥生後期 I 面	溝 4 出土遺物	73
第 60 図	弥生後期 I 面	沼状遺構出土遺物	73
第 61 図	弥生後期 II 面	畦畔断面図	74
第 62 図	弥生後期 II 面	畦畔 2 内木材出土状況平面、立面図	75
第 63 図	弥生後期 II 面	畦畔 1、3 出土遺物	76
第 64 図	弥生後期 II 面	包含層第 7 層出土遺物	77
第 65 図	弥生後期 III 面	杭列 1 平面、立面図および杭18、21実測図	79・80

第 66 図	弥生後期Ⅱ面	杭列 1 周辺出土遺物 (1)	81
第 67 図	弥生後期Ⅱ面	杭列 1 周辺出土遺物 (2)	82
第 68 図	弥生後期Ⅱ面	河川 1 出土遺物	83
第 69 図	古墳～奈良面	古墳時代集落平面図	84
第 70 図	古墳～奈良面	建物 1 平面、断面図	85
第 71 図	古墳～奈良面	建物 2 平面、断面図	85
第 72 図	古墳～奈良面	古墳平面図	87
第 73 図	古墳～奈良面	古墳墳丘断面図	87
第 74 図	古墳～奈良面	古墳主体部平面、断面図	88
第 75 図	古墳～奈良面	古墳供献遺物	88
第 76 図	古墳～奈良面	古墳主体部副葬品出土状況平面、立面図	89
第 77 図	古墳～奈良面	古墳周溝内出土遺物	90
第 78 図	古墳～奈良面	不定形土塚群平面図	91
第 79 図	古墳～奈良面	土塚 5、8 断面図	91
第 80 図	古墳～奈良面	土塚 13 平面、断面図	92
第 81 図	古墳～奈良面	溝 1、土手 1 断面図	92
第 82 図	古墳～奈良面	溝 1 出土遺物	92
第 83 図	古墳～奈良面	落込み 1 断面図	93
第 84 図	古墳～奈良面	土手 1 平面図	93
第 85 図	古墳～奈良面	土手 1 出土遺物	94
第 86 図	古墳～奈良面	第 5 層出土遺物	95
第 87 図	古墳～奈良面	第 4 層出土遺物	96
第 88 図	中世面	土塚 2 出土遺物	96
第 89 図	中世面	溝 7、8、土塚 3 平面図	97
第 90 図	中世面	土塚 3 断面図	97
第 91 図	中世面	溝 7、8 断面図	97
第 92 図	中世面	溝 8 出土遺物	98
第 93 図	中世面	土塚 4 平面、断面図	98
第 94 図	条里制哇峠断面図		99・100
第 95 図	近世～現代面	井戸群平面図	101
第 96 図	近世～現代面	井戸 1 平面、断面図	102
第 97 図	近世～現代面	井戸 1 出土遺物	103
第 98 図	近世～現代面	井戸 2 平面、断面図	104
第 99 図	近世～現代面	井戸 3 平面、断面図	105

第 100 図	近世～現代面 井戸 4 平面、断面図	106
第 101 図	近世～現代面 坂上田 1 断面図	106
第 102 図	近世～現代面 水田 1 出土遺物	106

表 目 次

表 1	基本土層一覧表 (1)	15・16
表 2	基本土層一覧表 (2)	17・18
表 3	遺構面一覧表	19・20
表 4	花粉・珪藻分析結果概要表	21・22
表 5	第19層出土投弾石材	29
表 6	投弾一覧表 (1)	31
表 7	投弾一覧表 (2)	32
表 8	投弾一覧表 (3)	33
表 9	投弾一覧表 (4)	34
表10	投弾一覧表 (5)	35
表11	第19層出土投弾長径別個数	36
表12	第19層出土投弾重量別個数	36
表13	弥生前期Ⅱ面環状遺構溝底面の標高	39

図版目次

- 図版1 山賀遺跡付近航空写真(上方北) 昭和17年撮影
- 図版2 縄文面 B3トレンチ 河川1(東から)
A2トレンチ カニ穴(東から)
- 図版3 弥生前期Ⅰ面 B3トレンチ 溝6(西から)
B3トレンチ 溝6 用途不明木製品出土状況
B4トレンチ 溝6 鳥形木製品出土状況
- 図版4 弥生前期Ⅱ面 Aトレンチ 環濠状遺構と小穴群(南から)
Bトレンチ 環濠状遺構(南から)
- 図版5 弥生前期Ⅱ面 Bトレンチ 土手5(北から)
Bトレンチ 溝6(南から)
- 図版6 弥生前期Ⅱ面 Bトレンチ 溝3 断面(南から)
Bトレンチ 溝8と土手8 断面(南から)
- 図版7 弥生前期Ⅱ面・弥生中期Ⅰ面 B3トレンチ 土手5内土器出土状況(北から)
Bトレンチ 木樋状遺構(東から)
- 図版8 弥生前期Ⅱ面 A2トレンチ 小穴群検出状況(南から)
A2トレンチ 小穴21 断面(北から)
A2トレンチ 小穴17 断面(北から)
- 図版9 弥生中期Ⅰ面 Bトレンチ 水田(南から)
Aトレンチ 足跡群(東から)
- 図版10 弥生中期Ⅰ面 A1トレンチ 畦畔3(北から)
A1トレンチ 畦畔3 断面(北から)
- 図版11 弥生中期Ⅰ面 第1・2号方形周溝墓全景(上方北)
- 図版12 弥生中期Ⅰ面 Bトレンチ 第1、2号方形周溝墓(南から)
Bトレンチ 第1号方形周溝墓 墳丘(北から)
- 図版13 弥生中期Ⅰ面 Bトレンチ 第1号方形周溝墓 主体部(北から)
Bトレンチ 第2号方形周溝墓 主体部(西から)
- 図版14 弥生中期Ⅰ面 B8トレンチ 第3号方形周溝墓 墳丘(東から)
B8トレンチ 第3号方形周溝墓 主体部(東から)
- 図版15 弥生中期Ⅱ面 Aトレンチ 水田(北から)
Bトレンチ 溝と杭列(北から)
- 図版16 弥生後期Ⅱ面 Aトレンチ 水田(北から)

- A トレンチ 水田北部 (南から)
- A トレンチ 畦畔 2 (南から)
- 図版17 弥生後期Ⅱ面 A トレンチ 畦畔 2 水口 (西から)
- A トレンチ 畦畔 2 内木材出土状況 (南から)
- A トレンチ 畦畔 2 断面 (西から)
- B 1 トレンチ 畦畔 6 断面 (南から)
- 図版18 弥生後期Ⅲ面 A トレンチ 全景 (北から)
- A トレンチ 杭列 1 (東から)
- A 4 トレンチ 河川 1 (南から)
- 図版19 古墳～奈良面 B 6 トレンチ 集落 (北から)
- B 6 トレンチ 掘立柱建物 1 (南から)
- 図版20 古墳～奈良面 A トレンチ 全景 (北から)
- A トレンチ 古墳墳丘 (南から)
- 図版21 古墳～奈良面 A トレンチ 古墳主体部 (南から)
- A トレンチ 古墳主体部 副葬品出土状況 (北から)
- 図版22 条里制畦畔 B トレンチ 条里制畦畔 中世以前 (南から)
- B トレンチ 条里制畦畔 中世 (南から)
- B トレンチ 条里制畦畔 近世 (南から)
- B トレンチ 中世面 土壇 4 (東から)
- 図版23 近世～現代面 A トレンチ 井戸 1 (西から)
- B 1 トレンチ 暗渠 1 (北から)
- 図版24 縄文時代中～晩期・弥生時代前期土器 縄文面 河川 1 (1～3)、弥生前期Ⅰ面
溝 5 (4)、溝 6 (5)
弥生前期Ⅰ面 溝 7 (16)、第19層 (18)、
Ⅱ面 溝 2 (19)、土手 6 (30)
- 図版25 弥生時代前期土器 弥生前期Ⅰ面 溝 6 (7・8)、Ⅱ面 土手 5 (25・26)、土手
6 (31)
- 図版26 弥生時代前期土製品・中期土器・土製品 弥生前期Ⅱ面 溝 5 (23)、中期Ⅰ面 水
田耕土内 (33)、第 1 号方形周溝墓 (35～
37)、第 2 号方形周溝墓 (38)、第 3 号方
形周溝墓 (41)
- 図版27 弥生時代中・後期土器 弥生中期Ⅱ面 第13層 (43)、溝 2 (44)、後期Ⅰ面 溝 2
(45・46)、沼状遺構 (49)
- 図版28 弥生時代後期・古墳時代後期土器 弥生後期Ⅱ面 畦畔 1 (51)、Ⅲ面 杭列 1 周辺

(63)、河川1 (93)

古墳～奈良面 古墳供献 (100・101)、古墳周
溝内 (102・103)

- 図版29 古墳時代前・後期・奈良時代土器 古墳～奈良面 古墳周溝内 (105・108・109)、
土手1 (117)、第5層 (118～120)
- 図版30 古墳時代前・後期・中世土器 古墳～奈良面 第4層 (126・127・129)、第5層
(123)
中世面 土壙2 (136)、溝8 (137)
- 図版31 弥生時代前期木製品 W-1 鳥形木製品
- 図版32 弥生時代前期木製品 W-2 鳥形木製品、W-4 槌状木製品、W-6 剣形木製
品、W-7 用途不明木製品
- 図版33 弥生時代前・中期木製品 W-5・8・11・14・15・17 ヤス状木製品
- 図版34 弥生時代前期木製品 W-3 狄鍬、W-10 広鍬、W-12・13 鋤
- 図版35 弥生時代前・中期木製品 W-9・16 用途不明木製品、W-18 柄状木製品
- 図版36 弥生時代中期木製品 W-19 盤状木製品、W-20 容器
- 図版37 弥生時代中・後期木製品 W-21 用途不明木製品、W-22 えぶり
- 図版38 弥生時代後期木製品 W-23～27 用途不明木製品
- 図版39 弥生時代前・中期石器 自然礫投弾
- 図版40 弥生時代前・中期石器および近世・近代金属製品 弥生前期Ⅱ面 小穴群 (S-26～
28)
中期Ⅰ面 第7層 (S-29)
近世～現代面 井戸1 出土銭貨
近世～現代面 水田1 出土銭貨
- 図版41 古墳時代後期金属製品 古墳出土鉄鏃レントゲン写真

付 図 目 次

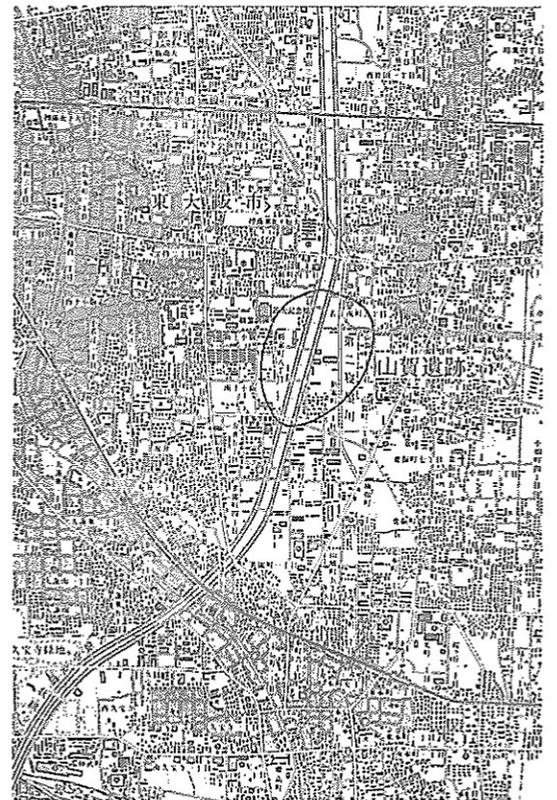
- | | | | |
|-----|--------------|------|--------------|
| 付図1 | 縄文遺構面 平面図 | 付図7 | 弥生後期Ⅱ遺構面 平面図 |
| 付図2 | 弥生前期Ⅰ遺構面 平面図 | 付図8 | 弥生後期Ⅲ遺構面 平面図 |
| 付図3 | 弥生前期Ⅱ遺構面 平面図 | 付図9 | 古墳～奈良遺構面 平面図 |
| 付図4 | 弥生中期Ⅰ遺構面 平面図 | 付図10 | 中世遺構面 平面図 |
| 付図5 | 弥生中期Ⅱ遺構面 平面図 | 付図11 | 近世～現代遺構面 平面図 |
| 付図6 | 弥生後期Ⅰ遺構面 平面図 | | |

第I章 はじめに

山賀遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内松原J.C.～東大阪I.C.13.5km区間に存在する長原、城山、亀井、久宝寺、佐堂、美園、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家の13遺跡の内、最も古くから人々の生活の場となった、いわば、平野開拓の最古の集落跡で、大阪府東大阪市若江南町5丁目、八尾市新家町3～4丁目に所在する。

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内13遺跡の取り扱いについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局を中心として協議を重ねてきたが、昭和48年になって、当該路線の存在する河内平野の特殊性を考慮し、周知されていた9遺跡（亀井、久宝寺、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家）について路線内の範囲確認と、埋没深度の把握、調査経費及び調査期間の算出根拠を得る為の第1次発掘調査を実施することで協議が整い、この調査を（財）大阪文化財センターで実施することになった。調査は、5m×5mのグリッドを45ヶ所（1遺跡平均5ヶ所）発掘調査を実施するものであり、48年度内に全て完了するのは無理であったため、48年度は亀井、久宝寺、友井東の3遺跡について実施し、49年度に山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家の6遺跡について実施することになった。これら2ヶ年度にわたる第1次発掘調査の結果は、それぞれ『亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書』『瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書』として、（財）大阪文化財センターより刊行された。

さらに、同年、大阪市交通局が建設工事を進めていた高速電気軌道第2号線建設予定地内の中、大阪中央環状線にかかる平野区長吉出戸町、同長吉長原町及び長吉川辺町地内については、遺跡の存在する可能性の極めて強い地点ということから、工事に先立って試掘調査を実施する必要があるとの行政指導が大阪府教育委員会から打ち出され、大阪市交通局は、（財）大阪文化財センターに調査の委託をすることになった。この結果、長原遺跡、城山遺跡の2遺跡が新たに発見され、昭和49年5月、（財）大



国土地理院発行2.5万分の1地形図「大阪東南部」図幅より
第1図 山賀遺跡位置図 S=1/60000

阪文化財センターより『中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告書』として刊行された。

また、昭和50年には、大阪瓦斯株式会社が進めていた天然ガスパイプラインとしての河内ラインガス導管が、前述の城山遺跡及び久宝寺遺跡の範囲内に布設されることとなり、これに伴う試掘調査も、(財)大阪文化財センターによって実施されることとなった。この結果、城山遺跡の北限を一応確認すると共に、久宝寺遺跡の範囲も確認することとなった。

一方、当該河内ラインガス導管の布設にかかる八尾市美園町部分については、大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、美園遺跡が確認されることとなった。

以上の様に、主要地方道大阪中央環状線隣接地での各種の工事に先立つ調査及び、近畿自動車道関連の一連の第一次発掘調査の結果により、当該自動車道建設予定地内に於ける遺跡の概略が把握されたのである。

これらの事実を踏まえて、大阪府教育委員会と日本道路公団は、さらに協議を重ねた結果、基本的には発掘調査の結果を尊重し、設計や工法を検討しながら橋脚位置を決定し、オール高架の道路を建設していくということで合意した。

上記合意に基づき、日本道路公団は、文化庁へ、文化財保護法に基づく協議文書を提出し、文化庁から、事前の発掘調査の徹底と、遺構の保存に十分配慮すべき旨の回答を受けた。ここに於て大阪府教育委員会は、現地に於ける発掘調査について(財)大阪文化財センターに協力を求めることとし、日本道路公団大阪建設局を含めた三者によって昭和51年4月、調査に関する協定を締結した。

そして、昭和51年7月、最南端に所在する長原遺跡の調査について上記の協定に基づいて三者で契約を締結し、現地調査に着手した。その後、長原遺跡の調査は、古墳群の発見や、掘立柱建物群の発見により、文化庁の回答の精神を踏まえて保存策が講じられ、数回にわたって設計変更に伴う契約変更を重ねながら、昭和53年3月に現地に於ける発掘調査を終了し、同年5月概要報告書作成作業を完了して、概要報告書『長原』を刊行した。

この長原遺跡の調査の終了を待って、残る12遺跡の調査について、一応の調査目標を昭和58年度末とする、5ヶ年計画を作成すると共に、長原遺跡での設計変更の繰り返し及び調査面積の拡大、期間の延長、経費の増加等々反省する点が多かったことから、調査方法の再検討を行なった。その結果建設される道路は高架道路であること、沖積平野上の遺跡の特殊性としての埋没深度の深いこと、発掘作業の安全性の確保及び、調査期間や調査費用を考慮して、いわゆる“トレンチ調査方式”を採用することとなった。“トレンチ調査方式”とは、路線の全面発掘調査より、現況保存を優先した必要最小限度の調査を目的として、発掘面積を極力限定すると共に、主要な遺構の存在する部分の保護、保存をも併せて可能とする沖積平野発掘調査の新しい試みであった。

この調査方式をもって、昭和53年2月には瓜生堂遺跡、昭和53年11月には巨摩廃寺遺跡、昭和54年4月には西岩田遺跡、昭和54年7月には新家遺跡、若江北遺跡、友井東遺跡、亀井遺跡等々順次道路の供用工程及び他の関連公共施設整備計画に基づいて調査に着手してきた。

すでに上記7遺跡の発掘調査は無事その目的を果たして終了し『瓜生堂』『巨摩・瓜生堂』等々として概要報告書の刊行をみているところである。

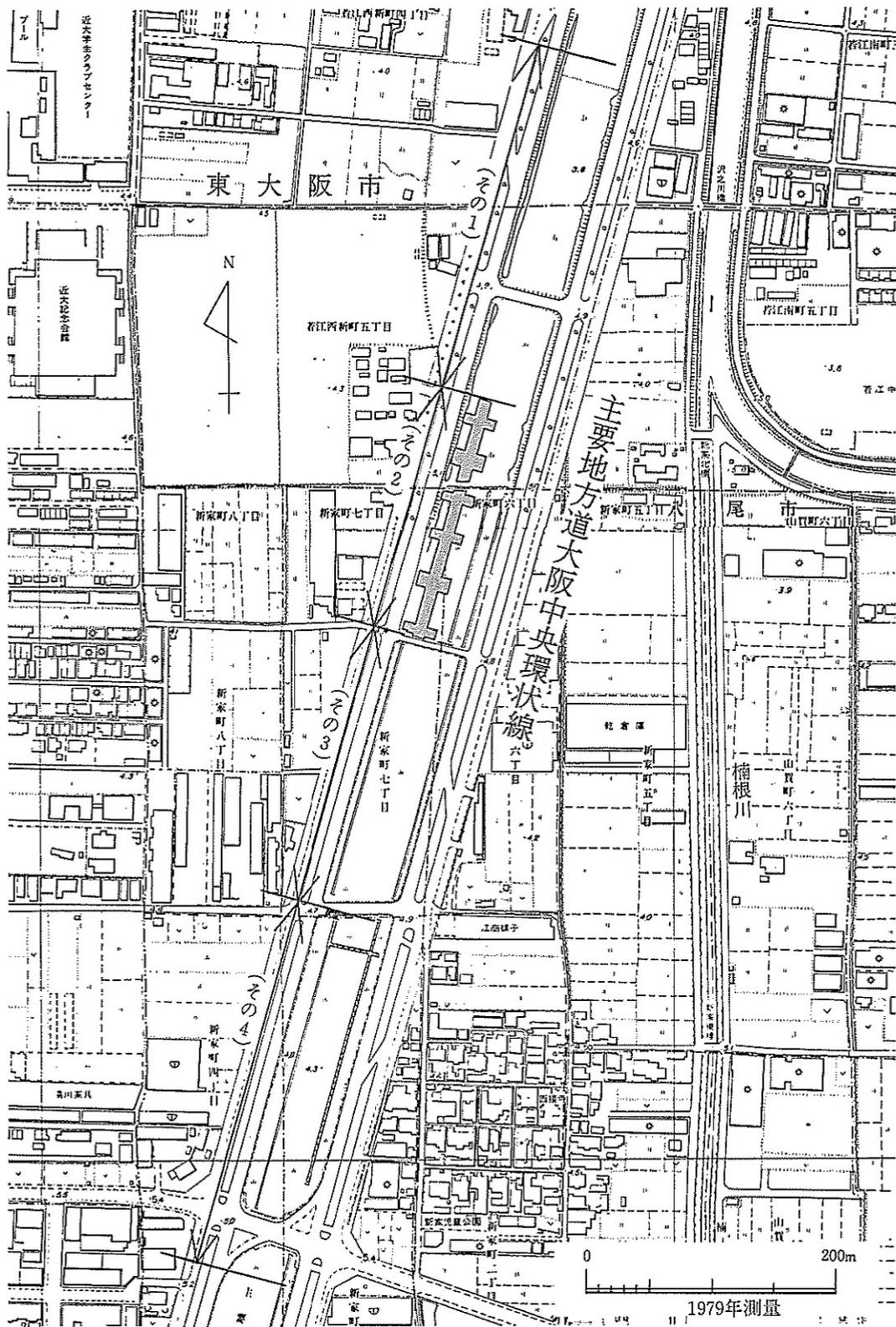
山賀遺跡は、昭和46年度に大阪府都市河川課及び寝屋川改修工営所の事業として実施された楠根川改修工事によって、その掘削残土の中に多量の弥生式土器や石器が含まれていることを、当時、奈良教育大学学生だった尾崎氏が発見され、瓜生堂遺跡調査会が事前の発掘調査を実施していた中央南幹線水管渠築造工事に伴う掘削残土ではないかとの連絡を、当時、同調査会の調査主任であった筆者が受けた。調査会の発掘調査は、弥生時代中期を中心とした時期の調査であり、また当時としては、高い問題意識にささえられた正確さをモットーとして実施しており、あらゆる嫌疑をかけられたと一同腹立たしく思いながらも、弥生時代前期の土器が多量に含まれていることに注目し、現地へ行ったのである。現地は田甫を埋めたてた状態の残土捨て場であり、おどろいたことに膨大な量の弥生式土器、特に前期の土器が一面に散布しており、石器も含まれていた。尾崎氏には、瓜生堂関連の土砂ではないことを明言すると共に、すぐ東側ですでに掘削を終了し、護岸のブロック積工事を実施していた河川改修工事施工業者に、残土を捨てたか否かをたずね、楠根川改修工事に伴う掘削残土であることを確認したのである。ここにおいて、当該工事施工地域が、瓜生堂遺跡とは別の平野部に於ける前期の集落として周知され、山賀遺跡と呼ばれると共に、大阪府、八尾市両教育委員会へも周知方、連絡をしたのである。

つづいて翌47年度には、46年度につづいて楠根川改修工事が下流部分約100mで行なわれることとなったため、大阪府教育委員会の指導の下、瓜生堂遺跡調査会によって、事前の発掘調査が行われた。結果は川の流れによる侵蝕が激しく、ヘドロの中に遺物は含まれているものの、遺構はほとんど検出されなかった。また、遺物の量も、前年度部分とは比較にならない程少量であって、遺跡の中心部よりは大きく北へはなれた地域との結論が出ている。

その後、昭和49年度に八尾市教育委員会の手で、現在の金物田地交差点東北角において下水道管渠の竖坑部分の調査が行なわれたが、ここでも遺物は検出されず、また遺構も認められなかった。ただ、竖坑が地表下約13mまでの掘削を必要としたため、最後まで立合うことと、断面観察を行なったところ、ハイガイ等海産の貝類の認められる層を確認し、河内湾時代の海がここにも達していたことが確認された。

さらに、昭和55年には、東大阪市若江中学校の校舎新築工事に伴う事前調査も、東大阪市教育委員会と東大阪市遺跡保護調査会の手で行なわれ、古墳時代や弥生時代の遺構が検出されたが、集落の中心部分よりは周辺部分にあたることが指摘された。

近畿自動車道関連の第1次発掘調査は、昭和49年度、山賀遺跡部分5ヶ所に5m×5mのグリッドを設定して行なわれた。この調査でNo.3トレンチと呼んだ部分からは、整然と堆積した砂と粘土の層序を確認すると共に、弥生時代前期から中期にかけての、多量の遺物の出土をみた。さらに、中期初頭(畿内第Ⅱ様式)の面では、カメ棺墓と考えている遺構や、前期の川を検出し集落の中心部に極めて近い部分ではないかと指摘するにおよんだ。



第2図 調査地区区割図

S = 1/5000

この様に山賀遺跡周辺における各種の調査が、わずかながら行なわれていたとは云え、集落の構造や規模等を把握出来る様な状態ではなかった。

この様な中で、山賀遺跡に関する近畿自動車道関連部分（南北約1 Km）について昭和54年12月発掘調査に着手することとなった。1 Kmに及ぶ発掘調査は、期間、経費の執行、調査担当職員の配置等々、多くの問題をかかえており、遺跡全体を単独区間として実施するのは無理だったので4つの調査区に分割して調査を実施することとした。ちなみに、北から、山賀遺跡（その1）、（その2）、（その3）、（その4）となる、この4調査区のうち、昭和54年12月20日には、北半部の（その1）、（その2）調査区について、大阪府教育委員会と日本道路公団及び（財）大阪文化財センターの三者契約を締結、翌年1月16日から現地に於ける調査に着手した。つづいて、（その3）、（その4）の2調査区は昭和55年1月31日付をもって三者契約を締結し、同年2月25日より現地調査に着手したのである。その後、トレンチ部調査から切り掘り部の調査と、各々の調査区で調査が進捗するにつれ、数回にわたる設計変更に伴う契約変更を繰返しながら（その2）調査区は昭和57年3月に現地に於ける発掘調査を全て完了した。

第Ⅱ章 調査の方法

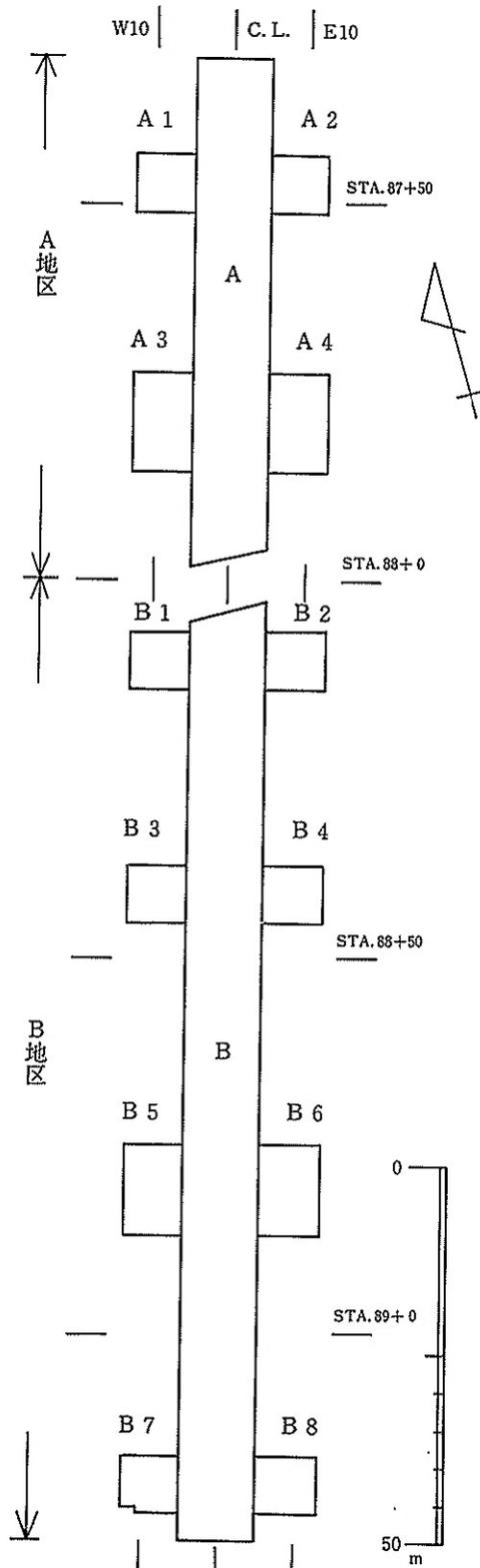
前章で述べたような経過のもとに着手する事となった山賀遺跡の発掘調査は、予定道路が高架道路である事や、遺構、遺物の埋没深度が大きい事等を勘案して、瓜生堂遺跡の調査以来採用している、いわゆる“トレンチ調査方式”によって実施した。遺跡を縦断する幅10mのトレンチを設定し（トレンチ部）、その部分の調査結果に基づき、大阪府教育委員会と日本道路公団の間で橋脚位置についての協議が進められ、協議成立を待って橋脚予定位置の調査（切り抜け部）の再開とした。本調査区では、トレンチ部の調査途上において検出された方形周溝墓（第1号、第2号方形周溝墓）について遺構保存を考慮して当該面以下の掘削を中止し、また結果的にも橋脚位置の変更によって保存される事となったため、周溝墓部分の下層の調査は実施していない。

（その2）調査区は南北の延長 195mに及ぶが、調査を横断する農業用水路が存在するため、トレンチ部の調査は、北側のAトレンチと南側のBトレンチに分断されたものになった。また切り抜け部の調査は、Aトレンチに対応してA1からA4まで、Bトレンチに対応してB1からB8まで、合計12のトレンチを数えた。

調査の実施にあたっては、掘削深度が大きく、また激しい湧水が予想されたため、各トレンチとも鋼矢板による土止めを施し、掘削の進展に伴って切梁腹起し材をも使用した。掘削深度の特に大きいトレンチでは、切梁腹起し材を2段に設置して事故防止に務めている。

調査の実測基準線については、これまで本遺跡に本格的な調査の鉤が入れられた事がないため遺跡全体を覆う地区割が設定されておらず、また道路予定路線が遺跡範囲内では直線区間となるため、遺構保存協議等の便も考慮に入れ、日本道路公団による道路中心線を準用した。座標は道路延長方向へ100m単位でS T A.として表示され、端数はm単位で表す。道路中心線（C.L.）に直交する東、西への振れはE、Wを頭に冠してm単位で表示する事とした。例を示せば、S T A. 87+35、E12とは、工事原標より南方向への路線延長距離で 8,735m、道路中心線より東へ直角方向で12m偏した位置を示す。国土座標で表示すれば、本調査区北端近くのS T A. 87+40、C.L. は $X = -149907.2628$ 、 $Y = -36653.0020$ に、南端近くのS T A. 89+20、C.L. は $X = -150080.7590$ 、 $Y = -36700.9506$ に当る。中心線方位は座標北から東へ $15^{\circ}26'56.6''$ 偏する。図中の方位は座標北を指す。

調査の記録は、各遺構面ごとに必要に応じた実測図を作成した他、方形周溝墓については写真測量を実施した。また多数検出された足跡等についても、クレーン車を利用した写真撮影を併用し、調査精度の向上とスピードアップを計った。土層は必要に応じて任意に記録した他、山賀遺跡全体の、更に将来は近畿自動車道関連遺跡全体の断面図を作成するため、道路中心線上を常に実測している。



第3図 トレンチ配置図

S = 1/1000

第Ⅲ章 位置と環境

山賀遺跡は、現在の行政区画で大阪府東大阪市若江南町5丁目、八尾市新家町3～4丁目に所在している。主要地方道中央環状線と楠根川（現在の第2寝屋川）を結ぶ直径約1Kmの円形内が、現在周知されている遺跡の範囲である。^{註1}（その2）調査区は、その中央を東西に走る農業用水を挟んで東大阪、八尾市にまたがる位置にある。この付近は、高度経済成長期までは一面の田園地帯であったが、近年、工場、宅地、道路用地などに変わりつつある。

さて、この遺跡は、巨視的には旧大和川の形成した三角洲上に立地し、現地表面の標高は4.1m前後を測るにすぎない。この三角洲は、河内平野の大部分を占め、南北12Km、東西9Kmを測る北西に開く扇形を呈している。1704年（宝永元年）付け替え以前の大和川は、この平野を北～北西方向に分流して流れ、旧河内湖に溜りこんでいた。^{註2}また微視的には山賀遺跡は旧大和川分流である長瀬川、玉串川の間を北向に流れる楠根川中流域に位置し、楠根川から北西にのびる幅0.5Km、長さ1.3～1.5Kmを測る舌状の自然堤防上に立地する。瓜生堂、巨摩廃寺、西岩田、新家遺跡もそれぞれ同様な自然堤防上にある。^{註3}（その2）調査区は、舌状の自然堤防の北斜面から氾濫平野にかけて位置しているが、この地形は、弥生時代初頭から既に存在したことが、調査の結果判明している。

山賀遺跡周辺に数多く分布する遺跡は、地下深く埋没しており、その多くは近年の大規模な土木工事等によって発見されたものである。ここでこれらの遺跡を概観しておきたい。^{註4}

縄文時代は、新家、巨摩廃寺、若江北、山賀遺跡で後期ないし、晩期の土器が出土している。

弥生時代は、遺跡が急増し、かつ内容も豊かになる。すでに淡水化した河内湖畔には農耕に適した低湿地が広がっていたものと思われる。山賀遺跡は、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、新家、上小阪、美園遺跡とともに、楠根川中、下流域の遺跡群を構成する。ここでは、前期から後期に継続する集落はなく、時期毎に移動するのが特徴である。山賀遺跡はこの遺跡群で最初に出現するが、瓜生堂遺跡が最盛期を迎える中期中葉には、一時期廃絶し、後期になって再度出現する。

古墳時代の資料も近年増えつつある。西岩田、瓜生堂遺跡は、古墳時代を通じて集落が営まれ、この時期の拠点となる。また巨摩廃寺、山賀、美園遺跡では小形方墳が検出されている。古墳前期中葉以降には地形がかなり安定し、盛んに開発が進められたようであり、河内平野の東南端に位置する古市古墳群の出現を考える上でも興味深い。

奈良時代以降も引き続いて、瓜生堂遺跡周辺が地域の中心となる。現代の若江集落は、若江郡衙、室町時代の若江城の位置とも一致し河内平野の政治的中心地の一つとなる。これに対して山賀遺跡一帯は条里制地割が広がり、奈良時代以降は主に農耕地として利用されたものと考えられる。



第4図 周辺の地形と遺跡

S = 1/40000

註1 「大阪府文化財分布図」 大阪府教育委員会 1977

註2 梶山彦太郎、市原実「大阪平野の発達史—C¹⁴年代のデータからみた—」『地質学論集』第7号
1972

服部昌之「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」『歴史地理研究と都市研究』（上）

藤岡謙二郎先生退官記念事業会編 1978

註3 「2万5千分の1 土地条件図 大阪東南部」 国土地理院 1965

註4 「考古展、河内平野を掘る—近畿自動車道関連遺跡の発掘成果を中心として—」（財）大阪文化財
センター 1981

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 基本層序及び遺構面の概略

当調査区では、深掘り部分も含めて現地表面下 5.2m（標高+4.1m～-1.1m）まで調査を実施した。この間の土層は、様々な砂、砂質土、粘質土、シルト、粘土などよりなるが、形成過程がほぼ同一と考えられるものを一括して基本土層とし、合計24層にまとめて新しいものより番号を付した。これらは更に次の如く3群に大別される。

I. 第2層～第5層

古墳時代前期から中央環状線建設直前に至る約1700年間に堆積した、主に黄灰色系統の粘質土である。厚さ0.5～0.8mを測り、大部分が各時代の農耕活動などによる直接の影響を受け、複雑な構造を示している。

II. 第6層～第18層

弥生時代前期後葉から古墳時代前期初頭に至る約500年間に堆積したものである。主に灰色、灰褐色系統の砂、シルト、粘質土、粘土の互層からなる。厚さ2.3～2.7mを測る。遺物包含層、水田耕土などの人為層と自然堆積層が互層をなしている。各土層は断続的である。

III. 第19層～第22層

弥生時代前期中葉以前の黒色粘土とシルト、砂との互層で、人為的改変を受けない自然堆積層からなる。個々の層は調査区全域にはほぼ均一に認められる。

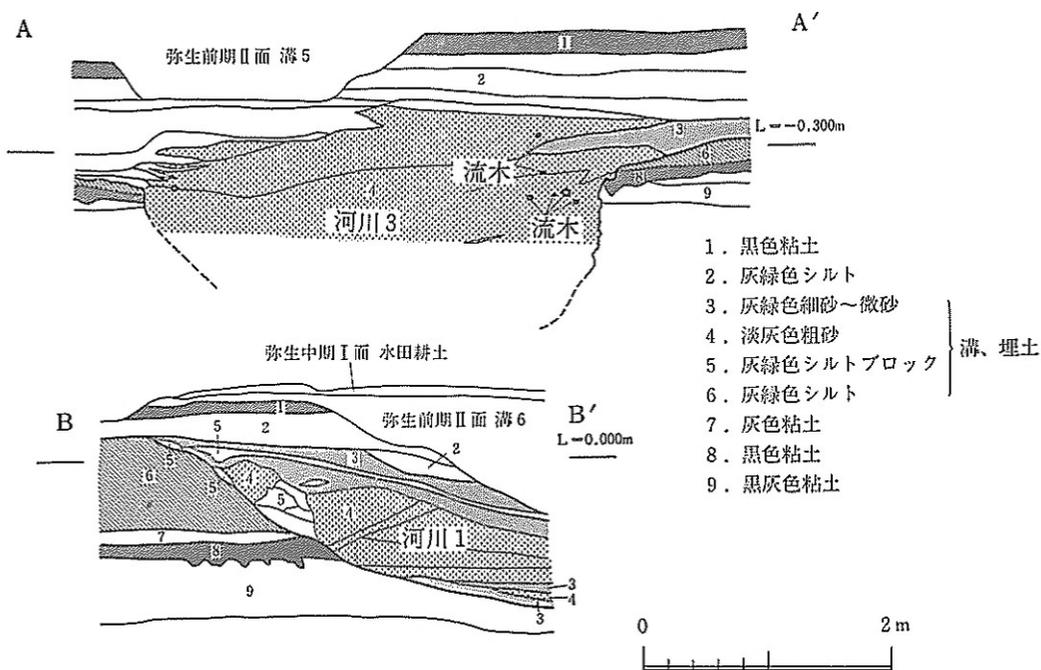
調査区全体の堆積状況は第7図に示し、各基本土層の特徴は表1・2のとおりである。また、これらの堆積層に対応して検出した遺構面は11面に整理できる。各遺構面の概要は表3に示す。

なお、今回の調査では堆積層の主要部分及び一部の遺構埋土について、花粉分析及び珪藻分析を実施し環境復元の一助とした。分析は（株）パリオ・サーヴェイによる。その結果を表4としてまとめた。これら各図・表を参照されたい。

第2節 縄文遺構面

第20層（黒色粘土層）より下位で検出された遺構を一括する。第21層上面でカニ穴が、第21層中より4条の自然河川が検出された。第21層上面は標高-0.3～-0.7mを測り、南側がやや高くなるがほぼ平坦である。自然河川に対応する遺構面は明瞭におさえられなかった。縄文晩期に比定される。

A. 自然河川

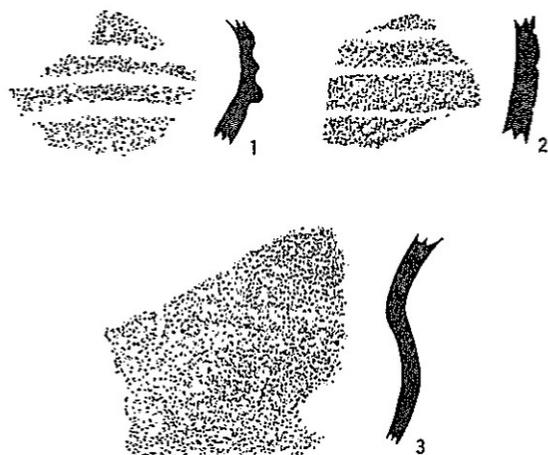


第5図 縄文面 河川1、3断面図

S = 1/60

<河川1> STA. 88+31~50に位置する。南東から西北へ延び両端は調査区外へ続く。肩は第21層上面より約25cm下った位置に認められた。上幅は6~7m、下幅は4~5m、深さ1.5mを測る。断面は逆台形である。B3、B4トレンチで底面まで掘り下げた。底面には河川と同方向に走る浅い溝状の凹地が認められた。埋土は主に砂からなり3層に大別される。中層は粗く、上・下層はやや細かい。流木がかなり含まれている。

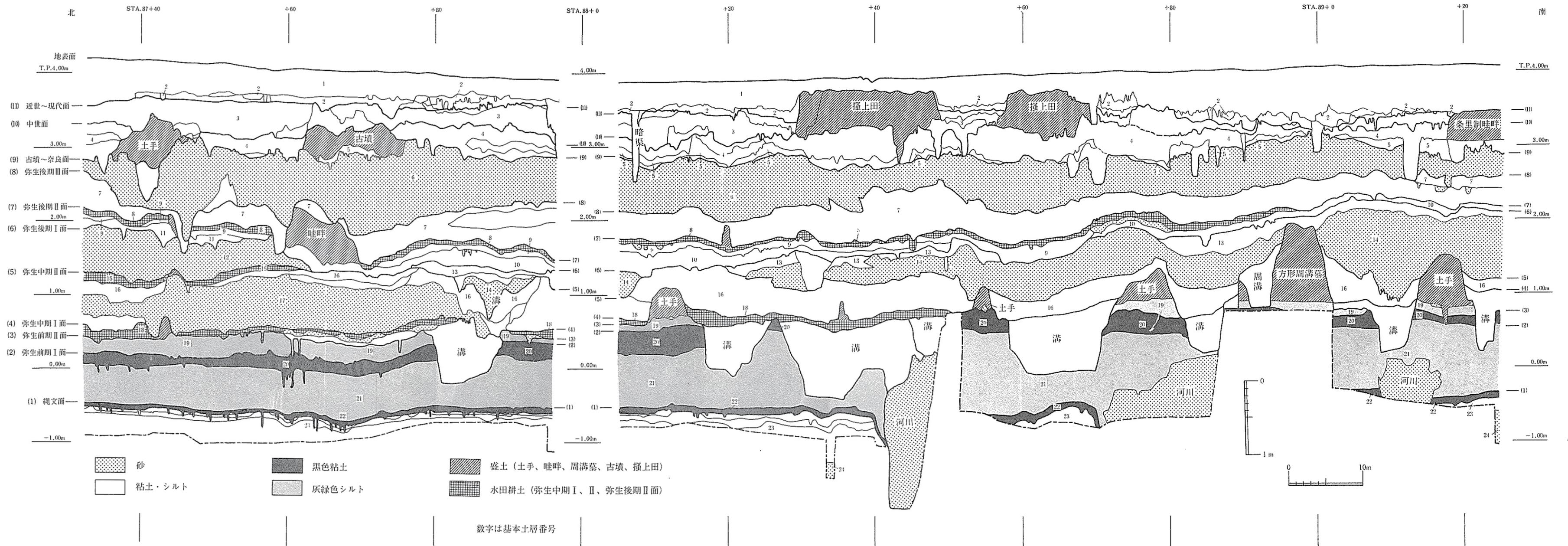
底面直上から土器が数点出土したが、形態が推定できるもの、文様の残るものについて図化した。1は口縁部に近い部分の破片である。口縁部は波状口縁と考えられ、沈線文が施される。2の沈線文間には縄文が残る。3は胴の張る深鉢の頸部から胴部の破片である。外面には頸部以下、削りの痕跡が残る。1、2は後期に、3は晩期に当る。2は胎土に角閃石を含み、黒褐色を呈す。



第6図 縄文面 河川1出土遺物

S = 1/2

<河川2> STA. 88+78~81、E10~12に位置する。深掘りで位置が確認され



第7図 基本土層図 (C.L.断面)

S = 水平1/400 垂直1/40

表1 基本土層一覧表 (1)

層番号	土層名	特徴	厚さ (cm)	分布範囲	出土遺物	時期	性格	備考
1	暗褐色砂質土	ブロック土	20 ~ 60	全域	現代遺物	現代	中央環状線設置後の盛土	
2	暗灰色砂質土	酸化鉄斑含む。	10 ~ 20	全域	陶磁器、瓦	現代	耕土	
3	灰色砂質土 黄褐色粘質土	酸化鉄斑、マンガン斑多く含む。	5 ~ 50	全域	陶磁器、瓦、銭貨、キセル	室町 ~ 現代	耕土、床土、掘上田盛土、他	
4	灰色粘質土 黄灰色粘質土	酸化鉄斑、マンガン斑多く含む。	30	全域	瓦器、須恵器、瓦、馬歯	古墳後期~室町	耕土、床土、他	
5	暗灰色粘質微砂	炭粒含む。	5 ~ 10	B地区及びA地区古墳基底部。本来は全域に広がる?	土師器	古墳前期	集落地に伴う遺物包含層	花粉分析
6	淡灰色砂	部分的に青灰色シルト層挟む。上面から15cm下までは黄褐色微砂とシルトの細かい互層。下半は粗砂で、ラミナ残る。	50 ~ 110	全域	弥生土器、用途不明木製品	弥生後期 後葉	自然堆積層 下半部は洪水による自然堆積層	砂粒分析
7	暗灰色粘質土	上半部は微砂質、黒褐色植物遺体の薄層を厚さ4~5cm挟む。下半部は青味を帯び粘性が強く茶褐色植物遺体の薄層を若干含む。	30 ~ 40	全域	弥生土器、用途不明木製品	弥生後期 中葉~後葉	自然堆積層	花粉・珪藻分析
8	緑青色粘質土	黒褐色炭化物の細片を多く含む。	5 ~ 10	STA. 89+0 以北	弥生土器	弥生後期 中葉	水田耕土	花粉・珪藻分析
9	青灰色粘土	細かい灰白色粒、茶褐色植物遺体の薄層若干含む。	5 ~ 10	STA. 88+70 以北	なし	?	水田床土に相当する。 自然堆積層	花粉・珪藻分析
10	暗灰色粘質土	径5~10mm大の灰白色粒を多く含む。	20	STA. 87+60~88+60	弥生土器	弥生後期 前葉	沼状遺構堆積層	花粉・珪藻分析
11	灰黒色砂混粘質土	有機物多い。	5 ~ 10	STA. 87+60 以北	弥生土器	弥生後期前葉 第10層と同時期	居住地近辺の遺物廃棄層	
12	淡黄褐色粗砂		60	STA. 87+60 以北	なし	?	一時的な洪水による自然堆積層 調査区北側に微高地を形成	砂粒分析
13	暗青灰色粘質土	部分的に微砂との互層になる。茶褐色植物遺体の薄層含む。	10 ~ 30	全域	なし	?	自然堆積層	花粉・珪藻分析
14	淡灰色砂	部分的に青灰色シルト層挟む。下半部はラミナが残る。	最大 110	STA. 87+80 以南	なし	?	洪水による自然堆積層 調査区南側に微高地を形成	

表2 基本土層一覽表(2)

層番号	土層名	特徴	厚さ(cm)	分布範囲	出土遺物	時期	性格	備考
15	茶灰色粘質土		10	STA 87+80 以北	弥生土器	弥生中期 後葉	水田耕土	
16	灰褐色粘質土	上半部、黒褐色植物遺体 下半部、茶褐色植物遺体含む。	50 ~ 60	STA 87+90 以南	なし	弥生中期 中葉?	自然堆積層	
17	淡青灰色砂	ラミナ残る。下から15cmまでは、灰緑色 シルト質になる。	50 ~ 60	STA 87+90 以北 +90以南では部分的に 確認	木製容器、サヌカイト剥片	弥生中期 前葉~後葉	洪水による自然堆積層 調査区北側に微高地を形成	砂粒分析
18	暗茶褐色砂混粘質土		5 ~ 10	STA 88+50 以北	弥生土器、投弾、ヤス状木 製品	弥生中期 前葉	水田耕土	花粉・珪藻分析
19	淡青灰色粘土	上半は部分的に微砂層挟む。 下半は粘性が強い。	10 ~ 30	全 域	弥生土器、投弾	弥生前期 中葉~後葉	自然堆積層 上半はイネ科花粉を多く認め一部水 田に使用か?	花粉・珪藻分析
20	黒色粘土	炭化物の微粒を多く含む。	20 ~ 30	全 域	なし	縄文晩期?	自然堆積層	
21	灰緑色粘質土) 互層 灰緑色微砂		50 ~ 110	全 域	なし	?	自然堆積層	
22	黒色粘土		10	全 域	なし	?	自然堆積層	
23	灰 色粘土 淡 灰 色 // 淡灰茶色 // 暗灰茶色 // 淡灰茶色 //	5層の総称 共に茶褐色植物遺体を多く含む。	5 ~ 10 " " " 50 ~ 60	全 域 " " " "	なし	?	自然堆積層	
24	灰茶色砂	上半は茶褐色植物遺体を多く含む。	20 以上	全 域	なし	?	洪水による自然堆積層	

表3 遺 構 面 一 覧 表

名 称	時 期	基盤土層	標 高 (m)	主 要 遺 構	主 要 遺 物	環 境	備 考
縄 文	縄 文 晩 期	21、22	-0.3 ~ 0.7	自然河川	縄文土器	氾濫原 南側が高い。	遺構の肩は、第21層上部。
弥生前期 I	弥生前期 中葉	20	0.2 ~ 0.7	溝	縄文土器、弥生土器 鳥形木製品、投弾	氾濫原 南側がやや高い。 草地	
弥生前期 II	弥生前期 後葉	19	0.4 ~ 0.8	溝、土墳、環濠状遺構 小穴群	弥生土器、石器、木杭 ヤス状木製品、サヌカイト割片	氾濫原 南側が高い。 草地	
弥生中期 I	弥生中期 前葉	18、19	0.5 ~ 0.7	水田、方形周溝墓	弥生土器	氾濫原 南側が高い。	
弥生中期 II	弥生中期 後葉	15、16	0.8 ~ 1.2	水田、溝、杭列、足跡	弥生土器、木杭	氾濫原 北側がやや高い。 湿地	第13層上面に肩をもつ遺構も含む。
弥生後期 I	弥生後期 前葉	10、12	1.2 ~ 1.8	溝、土墳、沼状遺構	弥生土器	北側に微高地、その南に後背湿地性の沼沢地	
弥生後期 II	弥生後期 中葉	8	1.4 ~ 2.3	水田、溝、足跡	弥生土器	後背湿地、北端、南側がやや高い。 湿地	
弥生後期 III	弥生後期 後葉	7	1.8 ~ 2.6	杭列、自然河川、足跡	弥生土器、木杭	氾濫原 南側がやや高い。 湿地	
古墳 ~ 奈良	古墳 前期 " 後期中葉 " 後期後葉 奈 良	5、6	2.7 ~ 3.7	集 落 (古墳前期?) 小形方墳 (" 後期中葉) 溝、土墳群 (" " 後葉) 土 手 (奈良)	須恵器、土師器 ガラス玉、鉄鏃	自然堤防 ~ 氾濫原 南側がやや高い。	第6層より上から切り込む遺構を含む
中 世	室 町	4	2.9 ~ 3.3	井戸、溝、条里制坪界畦畔 土墳	瓦製土器、瓦器 白磁	氾濫原 ~ 自然堤防 ほぼ平坦	
近世 ~ 現代	江 戸 中 期 近 代	3	3.3 ~ 3.6	水 田 (江戸中期) 井 戸 (" ~近代) 暗 渠、肥 溜 (近代~現代)	陶磁器、瓦、銭貨	氾濫原 ~ 自然堤防 ほぼ平坦	

表4 花粉・珪藻分析結果概要表

花粉分析						珪藻分析			
遺構面	土層、遺構	優占樹木 花粉	特徴樹木 花粉	優占草本 花粉	特徴草本 花粉	周辺古植生	草地 の古植生	古気候	堆積、環境
古墳前期	第5層	アカガシ亜属	シイノキ属 コナラ亜属	ヨモギ属 イネ科	アカザ科 カヤツリグサ科	照葉樹林	草地		酸性水域に堆積した淡水域の堆積物
弥・後・Ⅱ～弥・後・Ⅲ	第7層	アカガシ亜属	コナラ亜属 シイノキ属		オモダカ属	照葉樹林	沼沢地または湿地	暖温地	止水域、流水域の珪藻が混る
弥・後・Ⅱ	第8層 (水田耕土)	アカガシ亜属	コナラ亜属	イネ科	ガマ属	針広混交林	イネ科を主体とする湿地 または沼沢地		池沼、流水、湿地などあらゆる水域の珪藻が混る、好酸性種含
弥・後・Ⅰ	第10層 (沼状遺構埋土)	スギ属	マツ属		ミズワラビ属				止水域での堆積物
弥・中・Ⅰ～弥・中・Ⅱ	第13層		コウヤマキ属		サンショウモ	止水域での堆積物			
弥・中・Ⅰ	第18層 (水田耕土)	アカガシ属				河川等が流入する池沼域での堆積物、好アルカリ性種含			
弥・前・Ⅰ～弥・前・Ⅱ	第19層		シイノキ属 コナラ属			水の影響の少ない乾燥した環境での堆積物			
弥・前・Ⅱ	溝6上層	アカガシ属	スギ属 シイノキ属 コナラ属		オモダカ属	照葉樹林	イネ科主体の湿地または沼沢地		流水の流入する池沼域での堆積物
弥・前・Ⅱ	溝6下層	アカガシ属	スギ属 クワ属		ガマ属 ミズワラビ属	針広混交林	湿地または沼沢地		流水の影響を伴った池沼域での堆積物
弥・前・Ⅱ	小穴群埋土上層	スギ属	シイノキ属 コナラ属		イネ科	サンショウモ	イネ科主体の湿地または沼沢地		池沼等の止水域での堆積物
弥・前・Ⅰ	溝6中層				ヨモギ属		?		ヨモギ属を主体とする草地

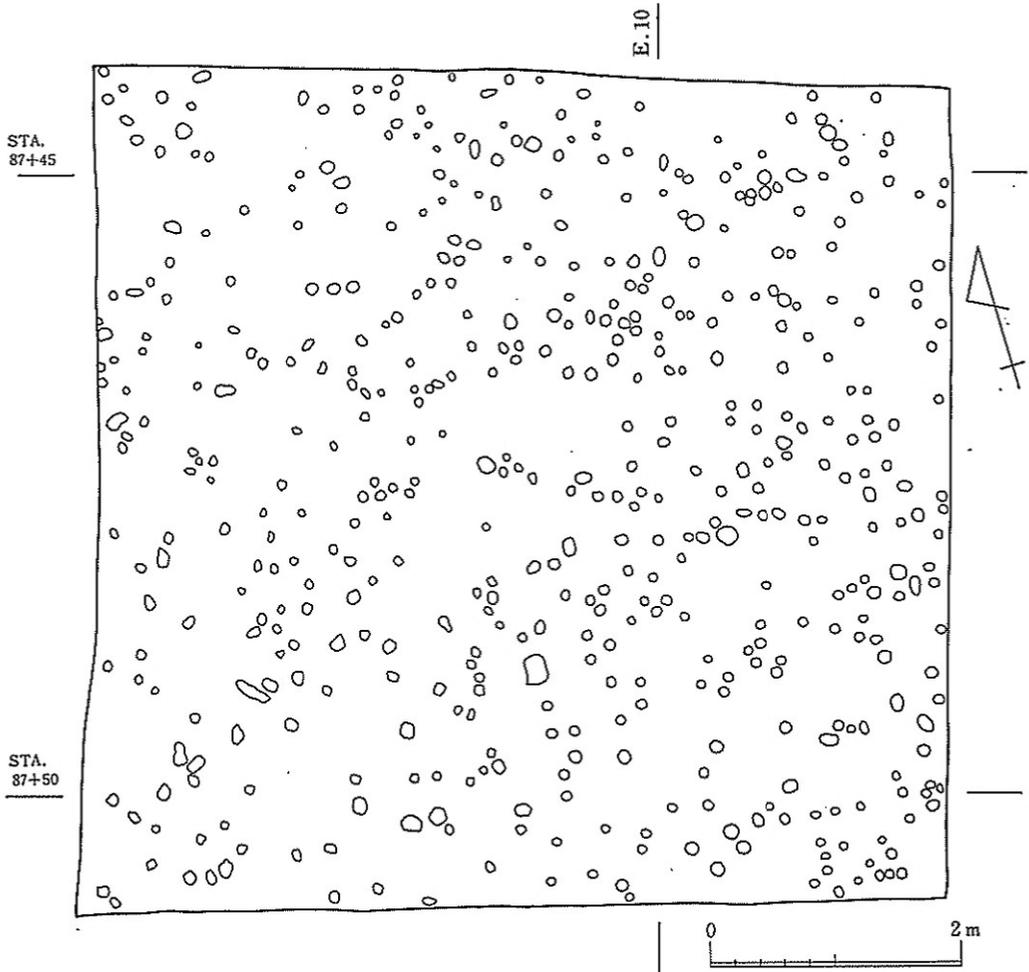
た。南から北に延び、上幅2m以上、深さ0.6mを測る。埋土は主に砂である。

<河川3> STA. 88+69~90、W4~E4に位置する。深掘りで確認された。ほぼ南北に延び、上幅4.5m、深さ1.5m以上を測る。埋土は主に砂で流木を含む。

<河川4> STA. 89+8~20、W11に位置する。深掘りで確認された。南西から北へ曲がりながら延びる。上幅2.5~3.5m、深さ0.6m以上を測る。埋土は主に砂である。

B. カニ穴群

カニ穴とはカニの越冬用の巣穴である。第21層上面の全面に認められた他、第23層上面でも確認した。直径5~15cm、深さ10~25cmを測り、深く細くやや斜めに掘り込まれている。埋土は黒色粘土である。



第8図 縄文面 A2トレンチ カニ穴(第21層上面)平面図

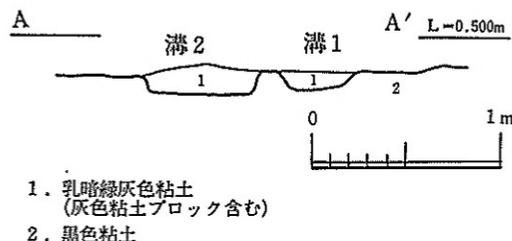
S=1/60

C. 小結

4条の自然河川は全て調査区の南半部に限られることから、第Ⅲ章で述べた「舌状の自然堤防」の形成に関連した旧河道の一部と考えられる。細片の縄文土器は上流から流されたものであり、付近に縄文集落があった直接の証拠とはなりにくい。カニ穴は湿地を示すと見られ、カニ穴を覆う第20層、第22層の堆積時には、当調査区が湿原化していたことを窺わせる。すなわち自然河川が認められる氾濫原的な環境と湿原が交互に繰り返した事を示している。

第3節 弥生前期Ⅰ遺構面

第20層（黒色粘土層）を基盤とする遺構面で、溝、足跡・鋤跡⁴が認められた。標高-0.2～-0.7mを測り、南側がやや高くなるがほぼ平坦である。溝出土土器から、弥生前期中葉から後葉に比定される。



第9図 弥生前期Ⅰ面 溝1、2断面図 $S = \frac{1}{4}0$

平行して延び、上幅0.6m、深さ0.1～0.15mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は淡灰色粘土からなる。なお、溝1、2は幅10m、深さ0.05mの東西にのびる遺構面の凹地に位置している。ともに、人為的に掘られたものか否かは明らかではない。

<溝5> STA. 88+24～38、E 2～5に位置する。東側を弥生前期Ⅱ面溝3、西側を同面溝4で破壊される。南端は溝6と合流している。最大幅4.5m、延長14.5m、深さ0.9mを測り、南北に長い舟底状を呈す。底はほぼ平坦であるが、北端はV字谷状となる。埋土は3層からなり、

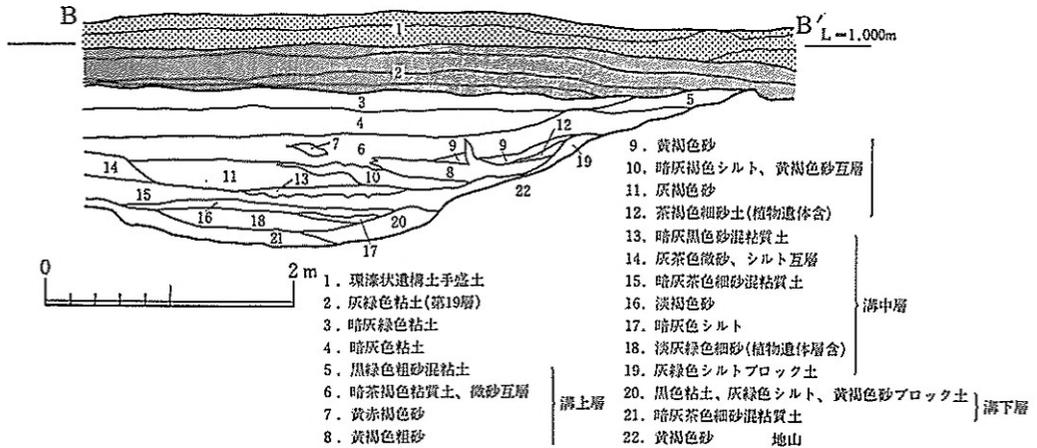


第10図 弥生前期Ⅰ面 溝5出土遺物 $S = \frac{1}{2}$

下層は暗灰色粘土、中層は茶褐色砂混粘質土で、灰白色粒、タニシ、ドブガイなどの淡水産貝類を含む。上層は茶褐色粘質土である。中層は一時期沼状に滞水した事を示している。

中層からは縄文土器（4）が一片出土しているが混入であろう。深鉢の胴部破片で、斜め方向の削り調整があり、晩期末に属する。角閃石を含む生駒西麓産の胎土で、色調は茶褐色。

<溝6> STA. 88+38～53に位置する。弥生前期Ⅱ面溝3・4・5により一部破壊される。基盤は縄文面河川1の埋土であり、砂からなる。南東から北西にゆるく曲りながら延



第11図 弥生前期I面 溝6断面図

S = 1/60

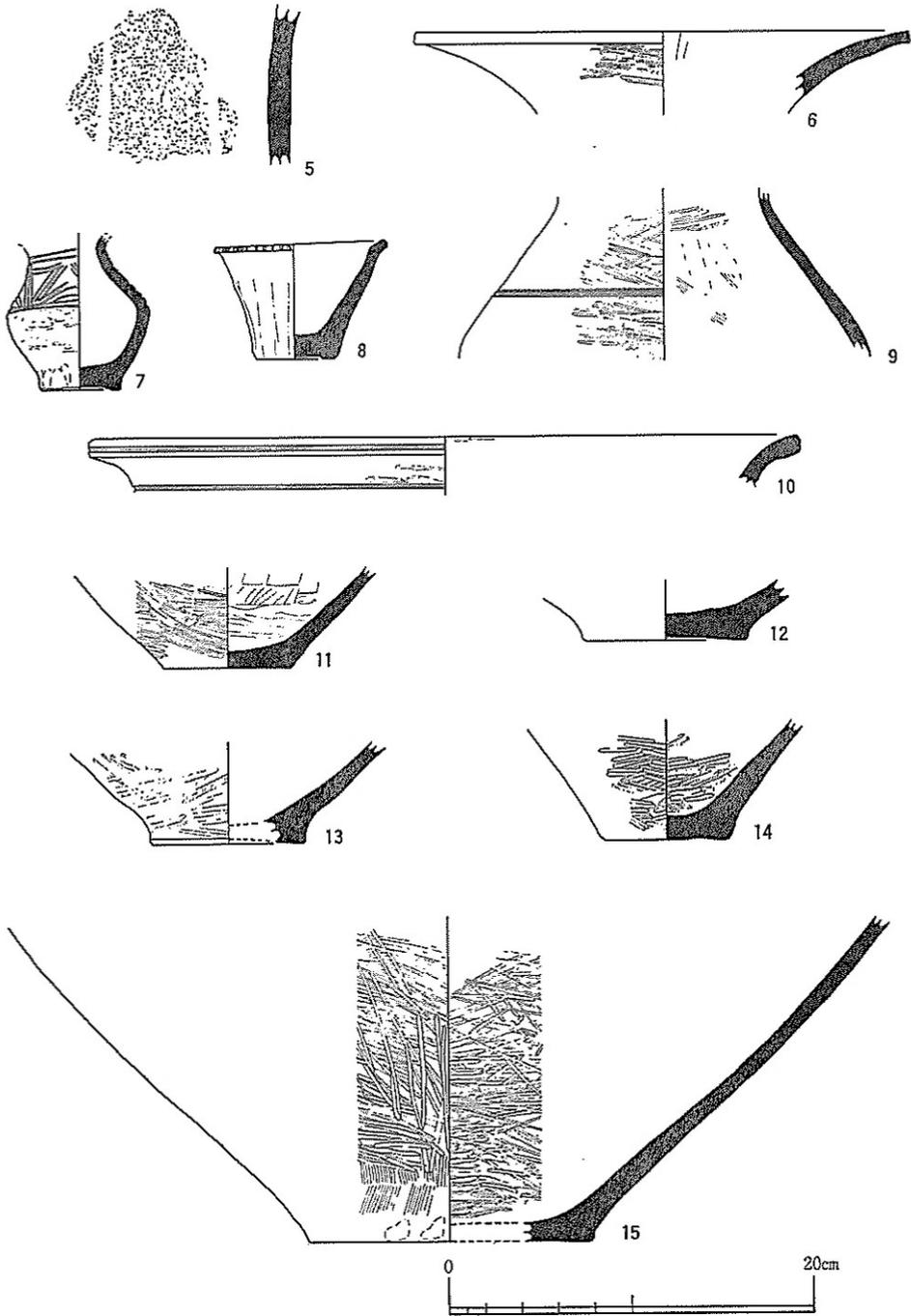
び、両端は調査区外へ続く。上幅は10~4.5mと差がある。深さ1.0~1.3m、底面の標高は-0.35~-0.95mを測る。断面逆台形を呈し、斜面は部分的に階段状となる。埋土は主に茶褐色粘質土で、砂層をはさんで3層に分れる。中・下層からは土器が、上・中層からは木器が出土している。

壺形土器(6)は大きく開く口縁部である。小形壺形土器(7)は頸部および体部上半に篋描沈線文を2条施し、その間に山形文及び円弧文が描かれる。沈線文を2条施した体部破片もある(9)。小型鉢(8)は口縁部が短く外反し、端部には刻み目を施す。更に大型の壺形土器の底部と考えられるもの等、底部が数点出土した。小型壺・鉢はほぼ完形である。6を除き、生駒西麓産の胎土。6、12は中層出土、他は下層出土。これらの土器は畿内第I様式中段階から新段階にかけてのものであろう。この他に下層から磨滅の著しい縄文土器片(5)が出土している。深鉢の胴部破片で、縦方向に沈線文が2本はしる。中期末(屋田式)に比定できよう。

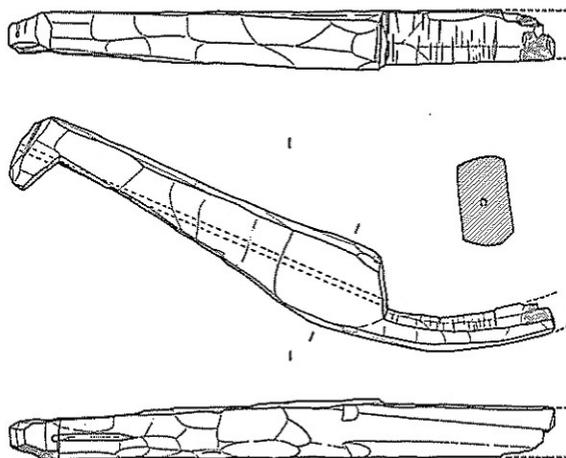
鳥形木製品(W-1)は、長さ22.7cm、胴部の幅約3.6cm、厚さ2.0cmを測る。平面はほぼ同じ厚さで、側面で鳥形を表現する。頭部を残し、頸部から胴部にかけて削り込む。尾部も背部から削り込んで薄くし、曲げることによって形作られている。尾の先端は欠損する。また頭部は先に向って細く削り口先としている。背部・腹部は丸みを出し、尾部も腹部から続いて上下とも丸みをもつ。頭部より尾部まで小孔が貫通しており、喉部では表面に現われる。樹種はヤマフジかと思われる。中層より出土した。W-2は頭部を作り出した、断面カマボコ形の細い木製品である。下端は徐々に細くなる。中央部を削り込んで細くしており、胴部と尾部に区分しているものとするれば、鳥形木製品とも考えられる。狭鋏(W-3)は全体に磨滅が著しく、刃部は欠損する。頭部は使用によるものか、一方が低い。W-4は直径10cmの棒材の両端を切断したものである。一端の中央部には柄が作り出されていた可能性があり、槌であったものと考えられる。ヤス状木製品(W-5)は両端を細くし、中央部を周囲から削る。柄に縛りつけて使用したものであろう。若江北遺跡、鬼鹿川遺跡などに類例がある。W-6は細長い板の側面を面取りし、先端は丸く仕上げている。形状より剣形木製品とも考えられる。W-7は厚さ約3cm、幅約23cmの板の3ヶ所

に方形の孔をあけた木製品である。中央部で折損したものが並んで検出された。W-2~7は上層出土。

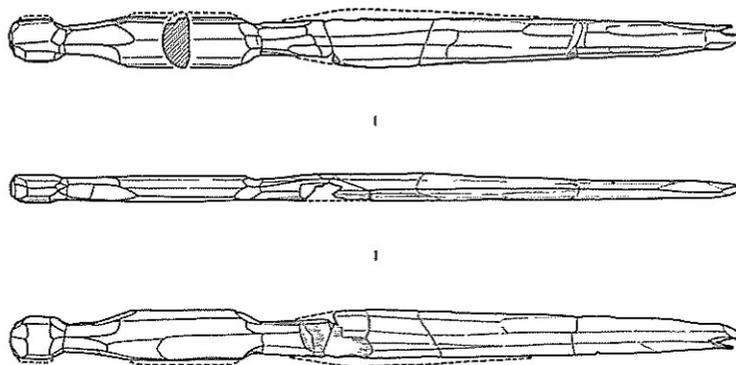
<溝7> S T A. 88+44, W 1~13に位置する。溝6の南側を東西に延び、東端は弥生前期Ⅱ面溝4で破壊されるが、溝6と合流するようである。上幅1.0~1.5m、深さ0.4mを測る浅いU



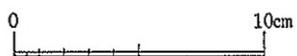
第12図 弥生前期Ⅰ面 溝6出土遺物(1) 5 S=1/2、6~15 S=1/4



W-1

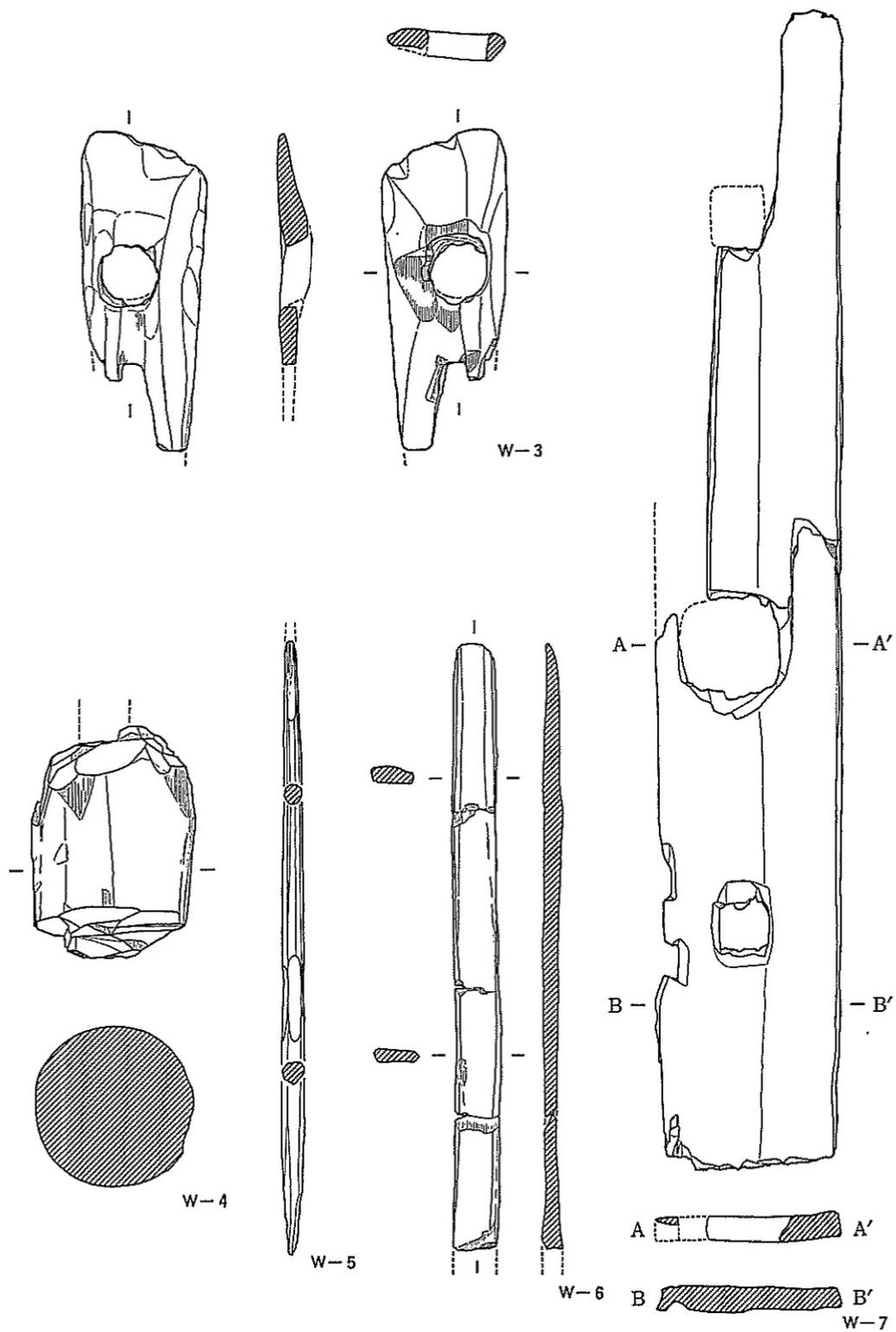


W-2



第13図 弥生前期I面 溝6出土遺物(2)

S = 1/4



第14图 弥生前期I面 溝6出土遺物(3)

W-3・4・6 S=1/4, W-5 S=1/2, W-7 S=1/6

字溝である。埋土は茶褐色粘質土からなる。文様土器片が出土している。(16)。

なお、溝5～7周辺には、これらに合流する溝3・4・8・9がある。いずれも埋土は茶褐色粘質土で遺物は含まない。これらの溝は形状から見て、人為的に掘られた可能性は少ない。但し、溝6には祭祀に使われた遺物があり、この付近が何らかの祭場であった可能性が指摘できる。



第15図 弥生前期I面 溝7出土遺物
S = 1/2

B. 足跡・鋤跡群

STA. 87+75～87、E5付近に位置する。厚さ2～3cmの砂層が帯状に拡がり、その下から検出できた。西側は弥生前期II面溝1で破壊される。幅10cm、長さ12cmの鋤跡?や人間の歩行した跡、鹿らしい動物の足跡が混在し、いずれも深さ3～5cmを測る。

C. 投弾散布地

遺構面直上の第19層からは投弾とみられる自然礫が117個(うち破損品16個)出土した。弥生前期II面溝や小穴で攪乱されないA地区北半に多く認められたが、本来は全域に広がっていた可

表5 第19層出土投弾石材

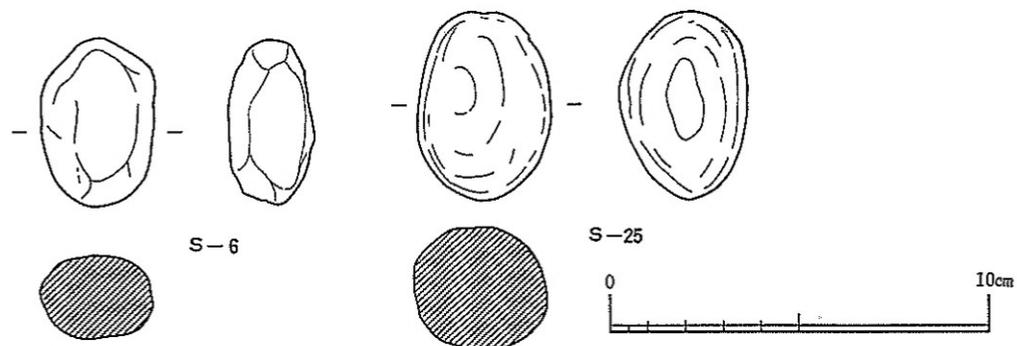
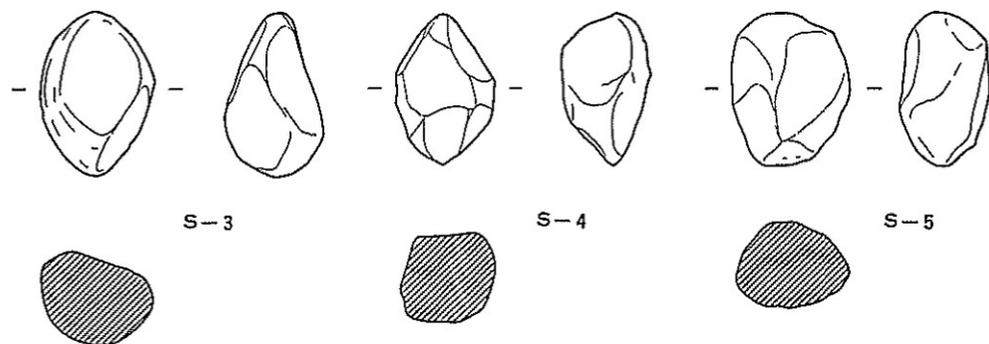
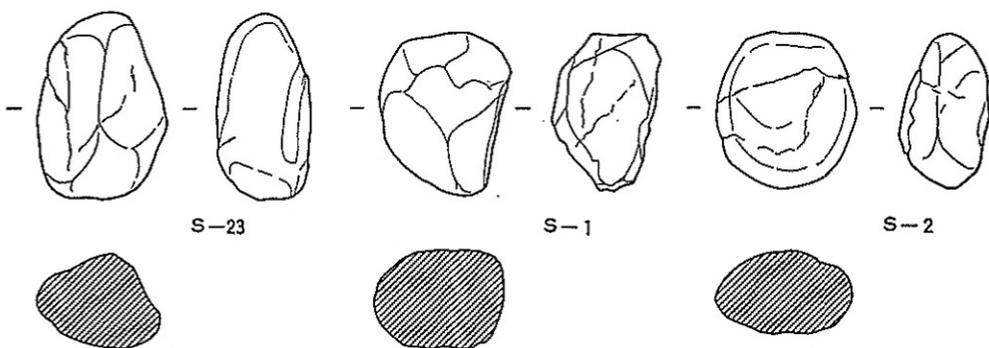
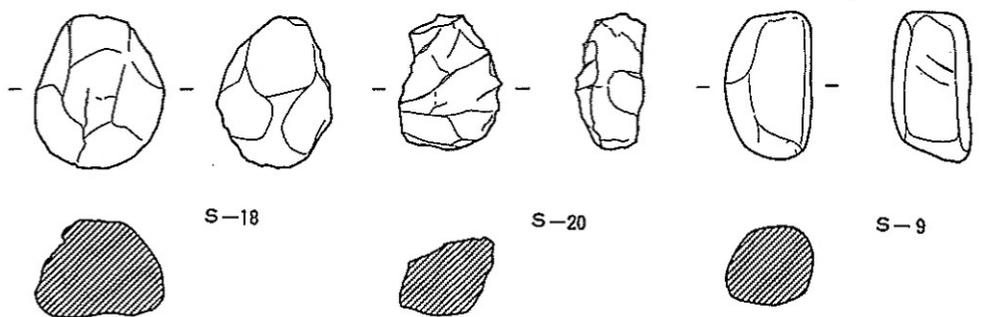
岩石名	個数
黒雲母花崗岩	4
白雲母花崗岩	1
片麻状白雲母花崗岩	1
ペグマタイト	1
閃緑岩	1
安山岩	2
黒雲母石英安山岩(寺山)	1
流紋岩	4
砂岩	34
礫岩	6
アブライト	4
珪岩	3
チャート	18
流紋岩質溶結凝灰岩	19
不明	2

鑑定は奥田尚氏による。

能性がある。分散して検出されることから、投弾の使用地と考えられる。

投弾は加工を加えない円礫ないし亜円礫で、長径3.5～4.5cm、重さ20～50gの楕円形の横断面をもった、やや細長い紡錘形を呈するものが多い。石材は砂岩、チャート、流紋岩質溶結凝灰岩が主なもので、大和川、石川流域に産出するものである。河内平野低地部では、この大きさの礫を自然には見かけず、しかも粘土中に単独に存在したことから、人為的に遺跡に搬入されたものと推定される。また、民俗例の示す投弾と類似することから、上記の用途を考えたものである。

なお、表5、11、12は破損品を除く101個についての数値である。



第16图 自然磔投弹实测图

S = 1/2

表6 投弾一覽表(1)

番号	長径 (cm)	中径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	岩石名	備考	出土場所	番号(S)
1	4.3	3.2	3.6	39.3	流紋岩質溶結凝灰岩 (秘果流紋岩)		A 4 北東部 第20層?	
2	3.7	3.2	2.1	30.5	チャート			
3	4.3	2.7	1.9	29.1	礫質砂岩		B 弥生前期Ⅰ面溝6	
4	(2.8)	(1.1)	(0.8)		チャート	破片		
5	4.0	3.6	1.9	38.2	チャート		A STA. 87+35~40W 第19層	
6	3.9	2.9	2.5	36.2	流紋岩質溶結凝灰岩			
7	3.3	2.7	2.2	22.0	中粒砂岩			
8	(2.7)	(2.3)	(1.7)		流紋岩質溶結凝灰岩	破損		
9	6.0	2.7	1.7	41.5	中粒砂岩		A STA. 87+35~40E 第19層	
10	3.7	2.9	2.3	40.6	礫質砂岩			
11	4.7	3.0	2.1	40.5	中粒砂岩			
12	4.2	3.5	1.8	32.0	アブライト			
13	3.6	2.4	2.2	26.0	中粒砂岩			
14	5.7	3.4	2.0	48.7	礫岩			
15	5.1	3.9	2.2	58.5	流紋岩質溶結凝灰岩			
16	3.8	3.5	3.1	47.8	中粒砂岩			
17	3.8	3.3	2.0	39.2	チャート			
18	3.8	3.3	2.8	44.2	チャート			
19	3.9	2.6	1.5	22.5	流紋岩質溶結凝灰岩			
20	3.2	2.6	2.1	20.7	チャート			
21	3.5	2.8	1.9	24.6	チャート			
22	4.0	3.0	1.9	32.5	中粒砂岩			
23	4.6	3.6	1.8	40.6	中粒砂岩			
24	3.7	2.8	1.9	27.5	中粒砂岩			
25	4.0	2.6	2.0	25.3	安山岩			
26	3.7	2.0	1.4	14.2	流紋岩質溶結凝灰岩			
27	4.1	3.4	2.8	54.7	中粒砂岩			
28	4.1	2.7	2.1	29.7	中粒白雲母花崗岩			
29	(2.0)	(2.1)	(1.6)		アブライト質黒雲母花崗岩	破損		
30	(4.0)	(2.8)	(2.8)		砂岩	破損		
31	(4.7)	(2.8)	(2.1)		礫岩	破損		
32	3.7	2.4	1.8	19.6	流紋岩質溶結凝灰岩		A STA. 87+40~50W 第19層	

表7 投弾一覽表(2)

番号	長径 (cm)	中径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	岩石名	備考	出土場所	番号(S)
33	4.1	3.8	2.2	42.7	不明		A STA. 87+40~50W 第19層	
34	5.2	3.3	3.3	54.8	細粒砂岩			
35	5.4	3.7	2.7	59.0	硅岩			
36	4.4	3.2	1.8	35.0	チャート			
37	4.5	3.8	3.2	68.6	礫岩			
38	4.6	3.0	2.0	32.6	粗粒黒雲母花崗岩			
39	4.5	3.2	2.0	43.2	流紋岩質溶結凝灰岩			
40	4.1	2.8	2.3	29.8	チャート			
41	3.8	3.6	2.0	37.8	流紋岩			
42	3.5	3.1	2.4	32.8	礫質砂岩			
43	3.0	2.6	2.1	22.8	アプライト			
44	3.9	2.8	2.5	39.5	中粒砂岩			
45	3.7	2.2	2.2	24.0	中粒砂岩			
46	3.9	2.4	2.3	30.6	黒雲母花崗岩			
47	2.9	2.3	2.0	17.8	流紋岩質溶結凝灰岩			
48	3.2	2.2	2.0	17.3	粗粒砂岩			
49	4.3	3.3	2.2	43.0	流紋岩質溶結凝灰岩 (稜果流紋岩)			
50	(3.7)	(3.2)	(1.9)		中粒砂岩	破損		
51	(4.1)	(2.9)	(2.4)		ミロナイト様閃緑岩	〃		
52	(3.6)	(1.6)	(1.6)		粗粒黒雲母花崗岩	〃		
53	(3.7)	(2.6)	(2.3)		不明	〃		
54	3.9	2.7	2.1	24.5	細粒砂岩		A STA. 87+40~55E 第19層	S-12
55	3.7	2.2	1.8	23.7	チャート			S-13
56	4.7	2.9	2.5	40.5	流紋岩質溶結凝灰岩			S-14
57	4.1	2.6	1.9	27.7	チャート			S-15
58	4.1	3.4	1.7	37.2	チャート			S-16
59	4.2	2.2	2.0	18.6	流紋岩質溶結凝灰岩			S-17
60	4.0	3.4	2.6	46.3	礫岩			S-18
61	(3.5)	(3.2)	(2.2)		中粒砂岩	破損		S-19
62	3.6	2.5	1.7	14.0	不明			S-20
63	4.4	2.9	2.3	35.3	チャート			S-21
64	(4.5)	(2.8)	(2.0)		チャート質砂岩	破損		

表8 投弾一覽表(3)

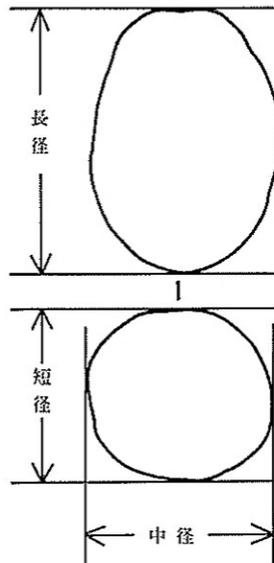
番号	長径 (cm)	中径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	岩石名	備考	出土場所	番号(S)
65	4.4	2.7	2.6	40.2	中粒砂岩		A STA. 87+60~70W 第19層	
66	4.3	2.6	2.5	35.1	黒雲母花崗岩			
67	4.4	3.8	2.8	53.6	ペグマタイト			
68	3.6	2.8	2.0	27.4	アブライト			
69	3.8	3.2	3.0	41.2	黒雲母石英安山岩(寺山)			
70	4.7	3.7	2.3	43.0	流紋岩		A STA. 87+50~60E 第19層	S-7
71	4.2	3.0	2.5	37.7	中粒砂岩			S-8
72	4.0	2.4	2.1	31.7	チャート			S-9
73	5.2	2.7	2.4	40.8	安山岩(寺山)			S-10
74	5.2	2.9	2.0	42.2	礫質砂岩			S-11
75	5.0	3.8	2.3	59.1	中粒砂岩		A STA. 87+60~70E 第19層	
76	4.4	2.6	1.5	25.5	中粒砂岩			
77	5.8	2.8	2.6	56.8	流紋岩質溶結凝灰岩			
78	4.3	2.3	1.6	18.9	チャート			
79	3.5	2.6	1.8	19.6	中粒砂岩			
80	3.7	2.4	1.5	18.5	チャート			
81	4.5	3.7	1.9	43.5	流紋岩質溶結凝灰岩(棒原石)			
82	4.0	3.2	1.5	25.5	中粒砂岩			
83	4.9	3.2	1.9	37.7	流紋岩質溶結凝灰岩			
84	2.3	1.9	1.4	8.5	硅岩			
85	(3.7)	(3.2)	(2.4)		礫質砂岩	破損		
86	4.8	3.1	1.7	37.3	細粒礫岩		A STA. 87+60~80W 第19層	S-22
87	4.8	3.2	2.4	51.8	中粒礫岩			S-23
88	3.8	3.1	2.1	32.8	中粒礫岩			S-24
89	3.7	2.3	2.2	30.7	流紋岩			
90	4.6	2.7	1.9	23.2	片麻状白雲母花崗岩			
91	(2.0)	(2.0)	(1.4)		礫質泥岩	破損		
92	4.3	3.2	2.7	52.2	閃緑岩		A STA. 87+70~80E 第19層	S-1
93	4.1	3.7	2.3	44.1	流紋岩質溶結凝灰岩			S-2
94	4.2	3.0	2.4	36.3	細粒砂岩			S-3
95	3.9	2.5	2.3	24.6	粗粒砂岩			S-4
96	4.1	3.1	2.3	39.7	チャート			S-5

表9 投 弾 一 覧 表 (4)

番号	長径 (cm)	中径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	岩 石 名	備考	出 土 場 所	番号(S)
97	4.4	2.9	2.2	41.0	流紋岩質溶結凝灰岩		A STA. 87+70~80 E 第19層	S-6
98	(2.6)	(2.4)	(1.9)		ミロナイト様閃緑岩	破損		
99	4.8	2.6	2.1	39.1	アブライト			
100	4.6	2.9	2.1	26.8	粗粒黒雲母花崗岩			
101	5.0	3.1	1.6	33.4	流紋岩質溶結凝灰岩			
102	(4.0)	(3.4)	(2.7)		流紋岩質溶結凝灰岩	破損		
103	4.0	2.2	1.8	23.8	チャート		A STA. 87+70~80 第19層	
104	4.7	3.1	2.6	38.3	礫質砂岩			
105	3.2	2.5	1.7	15.6	中粒砂岩		A STA. 87+90~95 W 第19層	
106	3.8	2.3	1.8	24.7	中粒砂岩			
107	4.2	2.9	2.2	46.6	流紋岩			
108	(5.2)	(3.2)	(2.1)		中粒砂岩	破損		
109	4.1	3.0	2.5	46.3	細粒砂岩		A 1 第19層	
110	4.2	3.5	2.5	49.2	硅岩		A 3 第19層	
111	4.4	3.1	2.1	38.7	流紋岩質溶結凝灰岩			
112	4.6	2.5	2.3	39.3	チャート			
113	5.9	3.8	2.4	64.5	チャート		A 4 第19層	
114	4.4	2.7	2.4	42.6	中粒砂岩			
115	4.4	2.7	2.2	42.5	中粒砂岩			
116	3.7	2.7	2.2	28.3	中粒砂岩		B 1 第19層	
117	(5.2)	(2.7)	(2.6)		中粒砂岩	破損	B 4 第19層	
118	3.3	2.4	2.2	44.0	流紋岩質溶結凝灰岩 (礫岩中の礫)		B 5 第19層	
119	4.7	3.0	2.3	46.3	流紋岩質溶結凝灰岩 (礫岩中の礫)		B 8 第19層	
120	5.0	3.1	2.0	39.7	中粒砂岩			
121	5.1	2.2	1.9	29.6	中粒砂岩		B STA. 88+57 E 第19層	
122	4.6	3.4	2.3	45.7	ミロナイト様閃緑岩		A 1 弥生前期Ⅱ面 溝1 上層	
123	3.6	3.4	2.6	46.0	中粒砂岩		A 1 弥生前期Ⅱ面 溝1 中層	
124	(2.9)	(2.7)	(2.1)		礫質砂岩	破損	B 5 弥生前期Ⅱ面 溝6 上層	
125	4.5	3.4	2.3	43.5	粗粒砂岩		B 5 弥生前期Ⅱ面 土手6 盛土	
126	4.0	2.6	2.2	27.3	ミロナイト様閃緑岩		B 6 弥生前期Ⅱ面 土手4 盛土	
127	4.3	2.5	1.9	28.6	礫質砂岩		B 6 弥生前期Ⅱ面 溝3 下層	
128	3.1	2.3	1.4	11.8	中粒砂岩		B 2 弥生前期Ⅱ面 溝9 下層	

表10 投弾一覽表(5)

番号	長径 (cm)	中径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	岩石名	備考	出土場所	番号(S)
129	4.9	2.9	2.8	55.0	アブライト		A 弥生前期Ⅱ面 溝8	
130	(3.5)	(2.6)	(1.9)		粗粒黒雲母石英閃緑岩	破損		
131	(2.9)	(2.5)	(1.8)		中粒変輝緑岩	破損		
132	(2.3)	(1.3)	(0.6)		黒雲母花崗岩	破片		
133	3.0	2.8	2.1	23.6	中粒砂岩		A STA. 87+38W 第18層	
134	3.7	2.7	1.7	20.7	チャート			
135	5.7	2.8	2.7	55.7	中粒砂岩		A STA. 87+40.5W 第18層	
136	4.3	3.1	2.0	39.1	礫質砂岩		A STA. 87+42.5W 第18層	
137	5.0	3.5	3.3	78.5	粗粒砂岩		A STA. 87+43W 第18層	S-25
138	4.8	2.8	1.8	33.4	中粒砂岩		A STA. 87+45W 第18層	
139	4.4	2.6	1.9	29.2	流紋岩質溶結凝灰岩		A STA. 87+85E 第18層	
140	3.6	2.9	2.2	30.4	中粒砂岩			
141	5.3	2.9	2.2	47.6	中粒砂岩		A 1 第18層	



投弾計測位置

表11 第19層出土投弾長径別個数

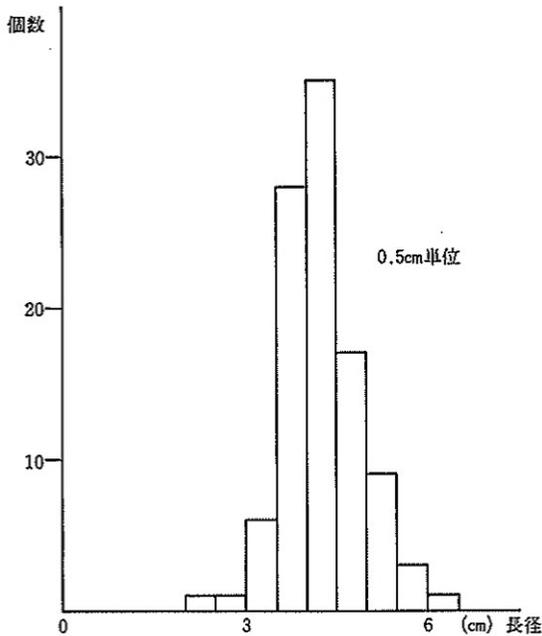
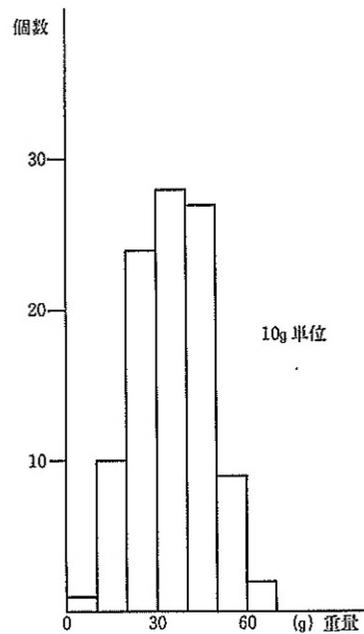


表12 第19層出土投弾重量別個数



D. 包含層出土遺物

本遺構面を覆う第19層からはB地区で土器が、A地区で木器が出土した。

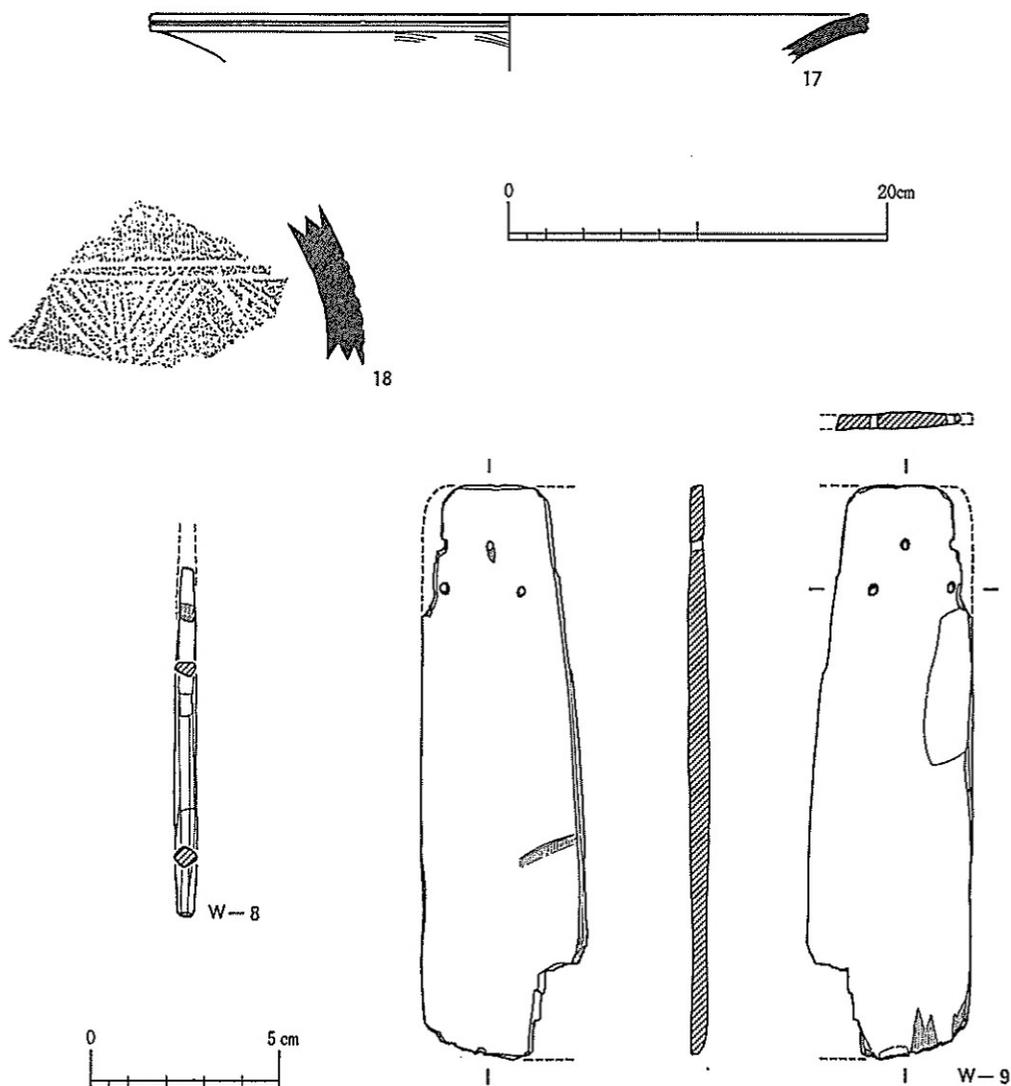
壺形土器(17)は大型で、口縁部が大きくひろがる。端面には篋描沈線文を施す。胴部に山形文を施した体部破片(18)の胎土は生駒西麓産である。ヤス状木製品(W-8)は先端が欠損する。下端は丸く、中央部分は削られる。他に用途は不明であるが、有孔の板状木製品(W-9)が出土している。

E. 小結

本遺構面は、当調査区で確認された弥生時代最古の遺構面である。住居址などの遺構は検出されなかったが、遺物のあり方から集落に近接した場所とみられる。特に溝6については、集落のはずれの祭場といったイメージが浮ぶ。なお、ここから出土した鳥形木製品は、弥生時代最古の例で、木鳥祭祀の初源や系統を考える重要資料である。また、投弾も福岡県板付遺跡の夜臼式～板付Ⅱ式期水田層^{註2}に類似しており、弥生文化の伝播を考えるうえで興味深い資料であり、今後類例に注意したい。

註1 大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 「若江北」 1983
 国道308号線関係遺跡調査会 「鬼虎川遺跡」 1981

註2 八幡一郎編 「弾談義」 1982



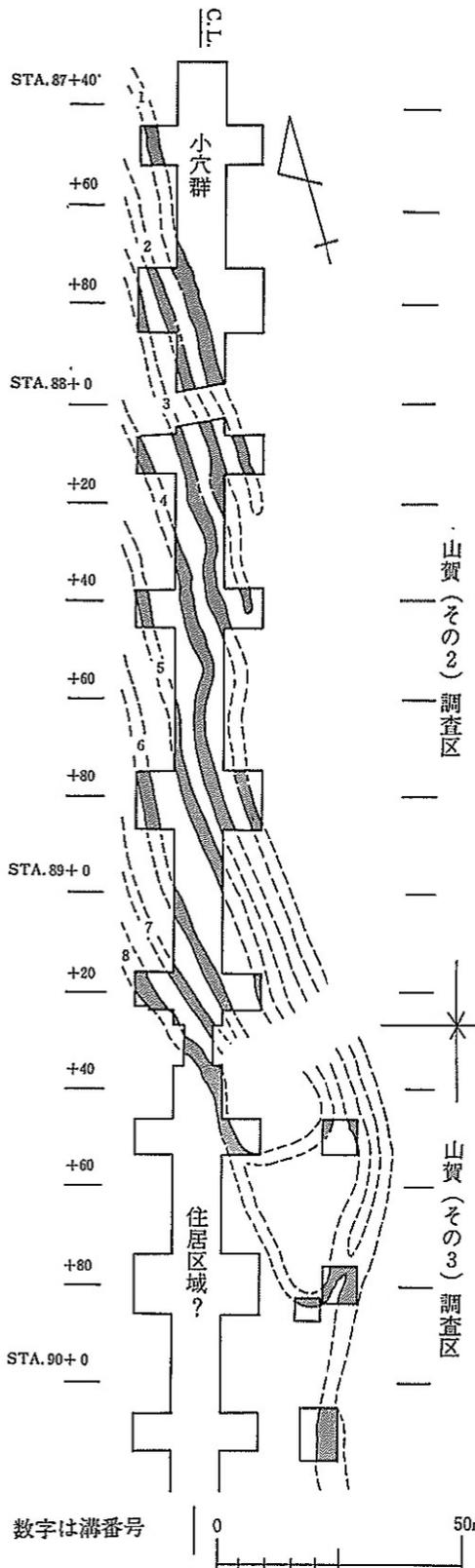
第17図 弥生前期Ⅰ面 包含層第19層出土遺物 17・W-9 S=¼、18・W-8 S=½

第4節 弥生前期Ⅱ遺構面

第19層（淡青灰色粘質土）を基盤とする遺構面で、遺構の重複関係から新旧2時期に分かれる。前半期には溝、土塹、後半期には土手を伴う環濠状遺構、小穴群が検出された。遺構面の標高は+0.4~+0.8mを測り、南西側がやや高くなる。時期は、主に環濠状遺構出土土器から弥生前期後葉に比定される。

A. 環濠状遺構

後半期の遺構である。南北にはほぼ平行して走る8条の大溝とそれに伴う9条の土手が検出され



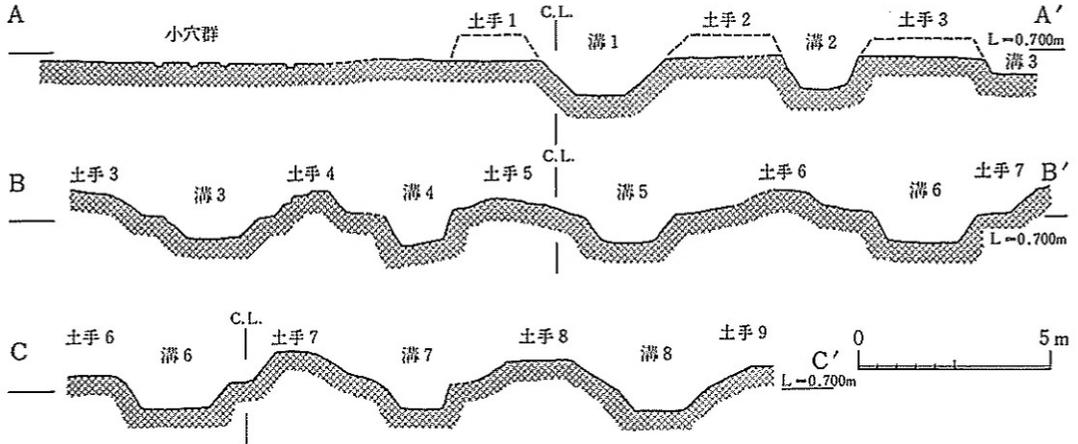
第18図 弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構想定平面図 S=1/1500

た。これらは更に調査区外へ続くため、全体の形状は不明であるが、東限は土手1と考えられ、その規模は幅55m以上、長さ190m以上を測る。溝2のみはSTA. 88+48、E10の地点で途切れるようである。溝・土手はほぼ直線状に延びるが、STA. 88+30~70の間は『S』字状にゆるやかに屈曲する。溝相互の間隔は、中心部で5.5~6.0m程度を測るが、場所によっては最大11m近く離れる。溝1~3はほぼ平行し、溝4~8はその方向にややばらつきが認められる。

同一溝の各地点における底面のレベル差は0.35m以内であり、溝2・6・7は北へ僅かに低くなる。また西側の溝の方が東側より底面の平均標高がやや高く、溝1と溝7の間では後者が約0.5m高い。これは地山面が溝1の付近から西に向かって高くなることとも関連し、環濠状遺構の西南部に位置する微高地の斜面に等高線に沿って溝が設けられたことを示している。なお集落は地形から見て溝8の更に南側に想定される。

溝は平均して上幅3.5m、下幅1.5m、掘り込み面からの深さ0.9mを測る。断面は2段の逆台形を呈し、まず幅の広い浅い溝を第20層上面に達するまで掘り、次にこの底から上幅1.8m、深さ0.6~0.7mの急斜面の溝を、第21層よりやや深い位置に達するまで掘ったものと考えられる。溝底面の中央には溝の方向に平行して低い盛り上がり残り、斜面には階段状のテラスが所々に認められるが、ともに溝掘削時の鋤跡と考えられる。なお、溝内には、橋・堰などの施設は認められなかった。

埋土はほぼ3層に分かれる。下層には細砂層を含んだ茶灰色シルト層が厚さ5~10cmあ



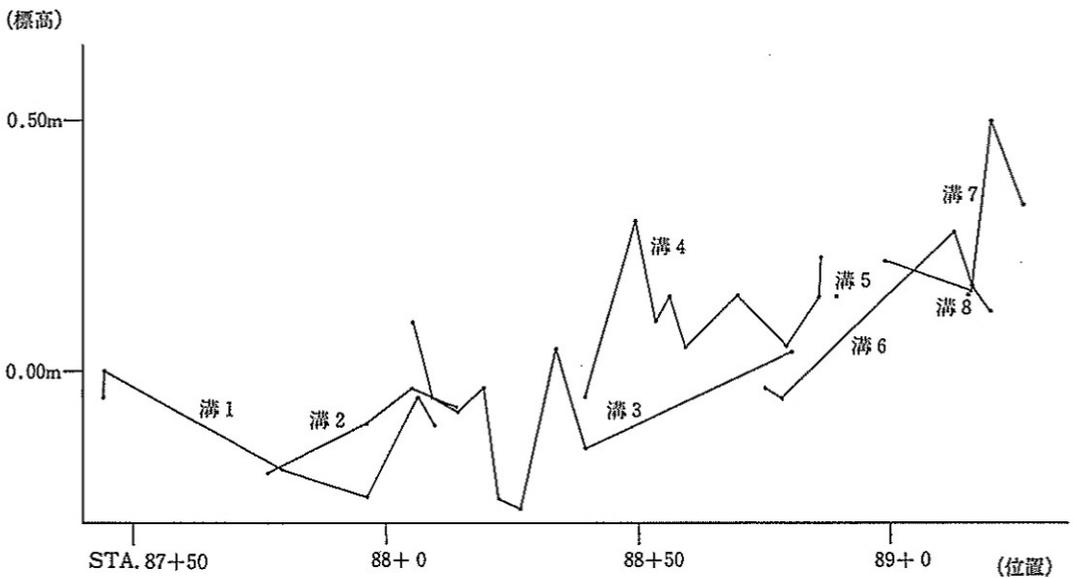
第19図 弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構エレベーション

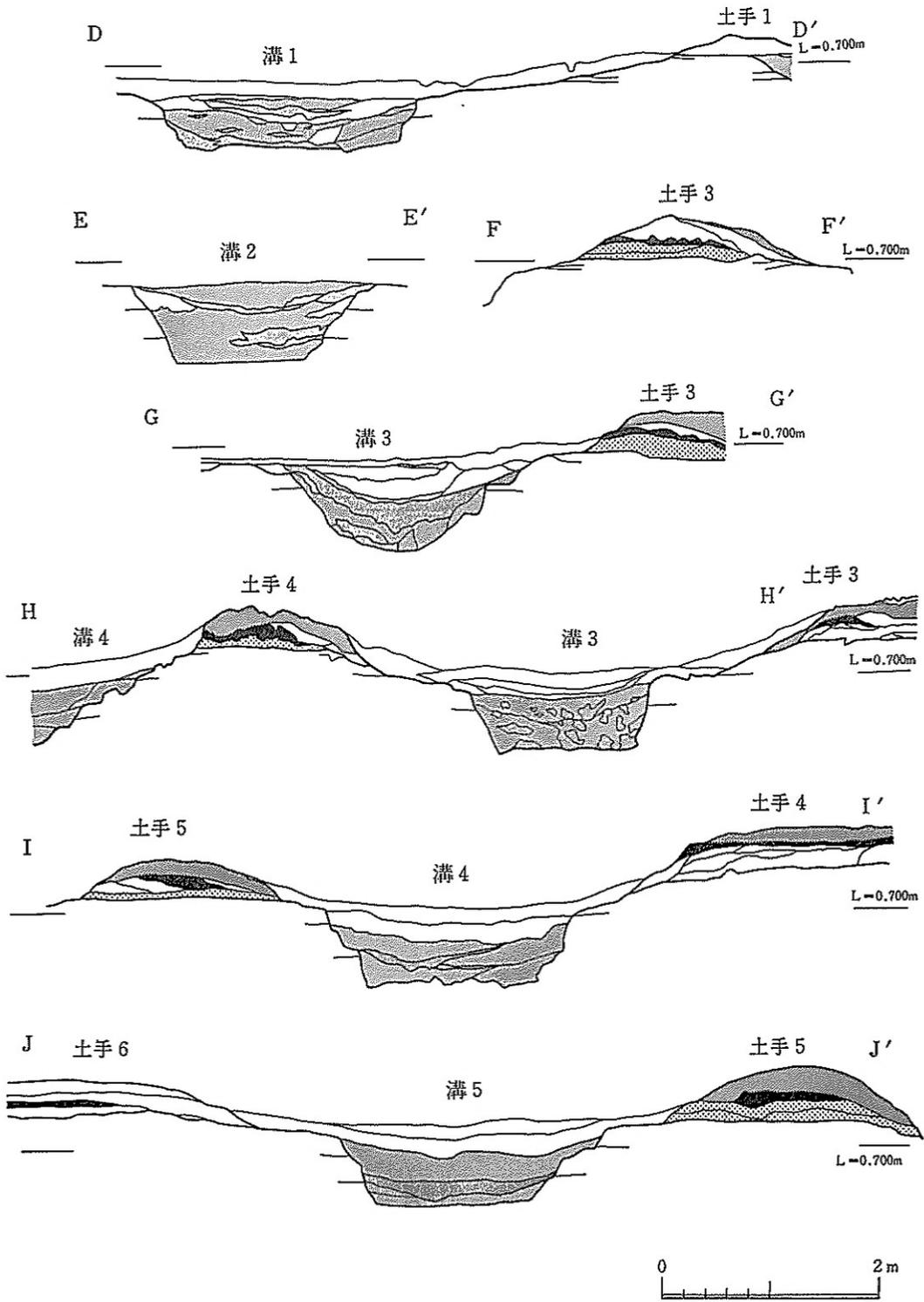
S=1/200

り、珪藻分析からも流水があった事がうかがえる。中層は黒色粘土、灰緑色シルト主体のブロック土からなり、溝斜面直下が最も粗く、両肩から流れ込んだ状況を示す。上層は、中層上面の浅い凹地を埋めた茶褐色粘質土で、その下半部には細砂層を、上半部には灰白色粒や植物遺体、貝殻を含み、次第に滞水していったようである。調査区北半部ではこの層の上に弥生中期Ⅱ面水田造成時のブロック土が認められた。なお、溝埋土からは弥生土器片、ヤス状木製品など僅かな遺物を検出したのみであり、遺物を多量に出土する弥生集落に伴う通有の環濠とは様相がやや異なる。

土手は調査区南側で良く残存していたが、北側では弥生中期Ⅱ面水田造成時に削平を受けてい

表13 弥生前期Ⅱ面環濠状遺構溝底面の標高

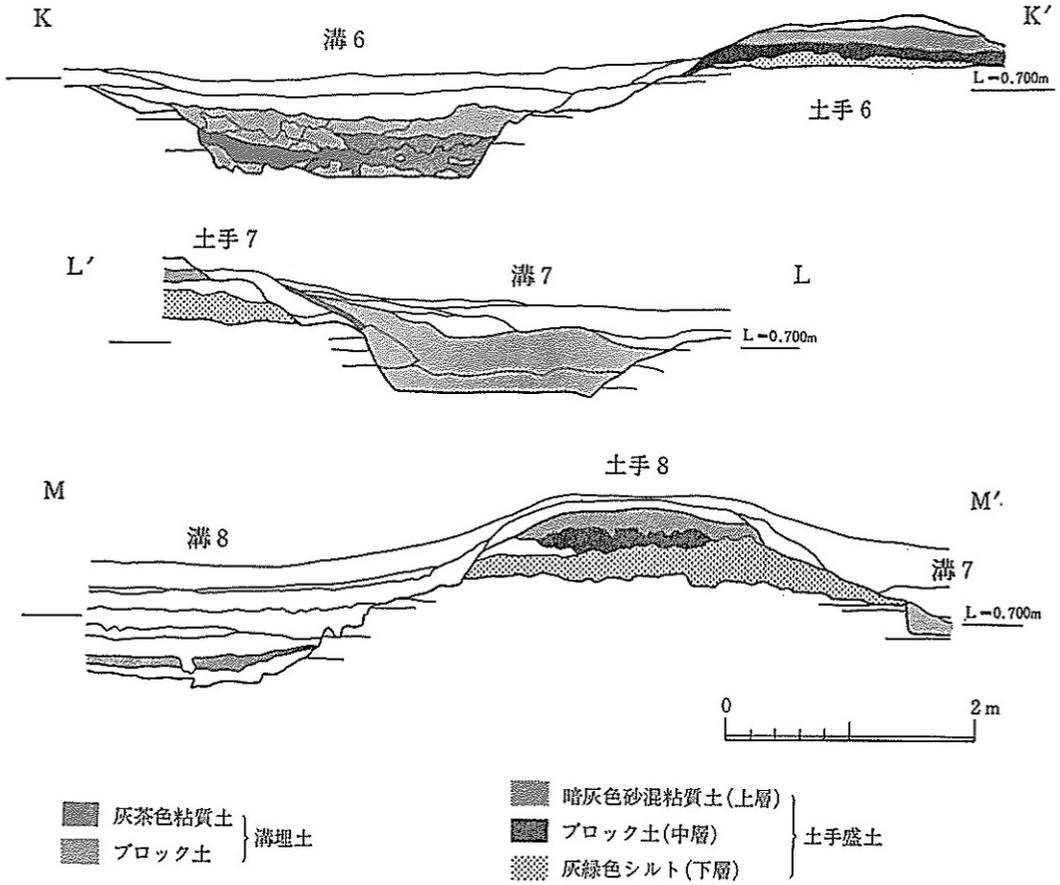




スクリーントーンの凡例は第21図

第20図 弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構断面図(1)

S=1/60



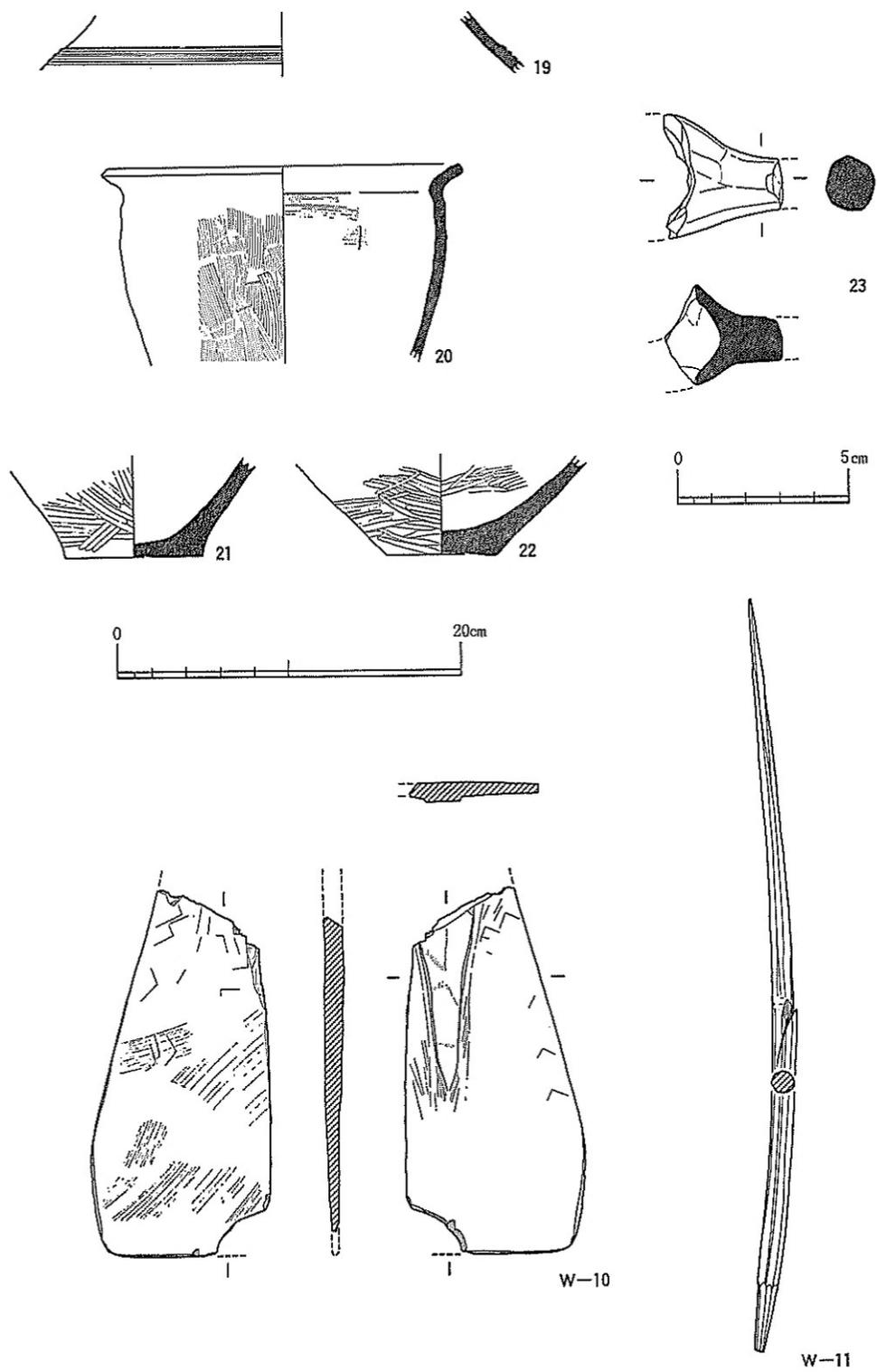
第21図 弥生前期Ⅱ面 環濠状遺構断面図(2)

S=1/60

る。検出時の規模は、基底部からの高さ0.45~0.55m、底幅は場所によって異なるがほぼ1.5~2.5m、上幅は0.7~1.0mを測る。断面はカマボコ形を呈し、斜面には土砂崩を起した凹地が所々認められる。なお、土手の現状の頂部と溝底との比高は1.2~1.6mを測る。

土手の盛土はほぼ3層に分れる。下層はブロック状を呈した灰綠色シルトで、基盤の第19層を盛ったものであろう。中層は灰綠色シルトと黒色粘土が互層をなす。ともに第21層・第20層を盛ったものであろう。土手3~5は中層の傾斜する方向から、溝の東側にその排土を積んだと考えられる。上層は暗灰色を帯びた砂混粘質土で、土手表面を覆っている。これは、植物の腐蝕土からなる2次的な表土、もしくは溝さらえによる泥土を積み上げたものであろう。

溝からの遺物の出土は少ない。溝2・3・4・5から壺形土器の体部、甕形土器口縁部、底部などが出土している(19~22)。19は、体部に段と篋描沈線文を3条以上施したものである。これは削り出し突帯とも考えられる。全て生駒西麓産の胎土。溝5には匙形土製品(23)がある。匙部の大半と柄部が欠損するが、匙の端部の一部は残存し、粘土を内側へ折り曲げて端部としている。溝3出土のヤス状木製品(W-11)は木片を断面円形に加工し、両端を細く削ったもので



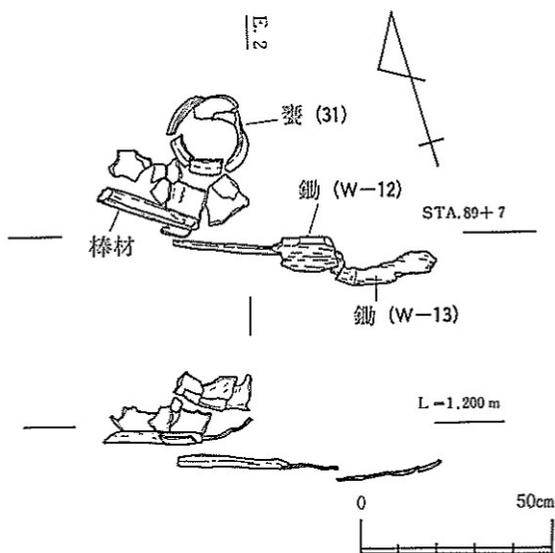
第22図 弥生前期Ⅰ面 溝2 (19)、溝3 (20・W-10・W-11)、溝4 (21)、溝5 (22・23) 出土遺物
 19~22・W-10 S=1/4、23・W-11 S=1/2

ある。特に先端は鋭く尖る。全長22.1cm。

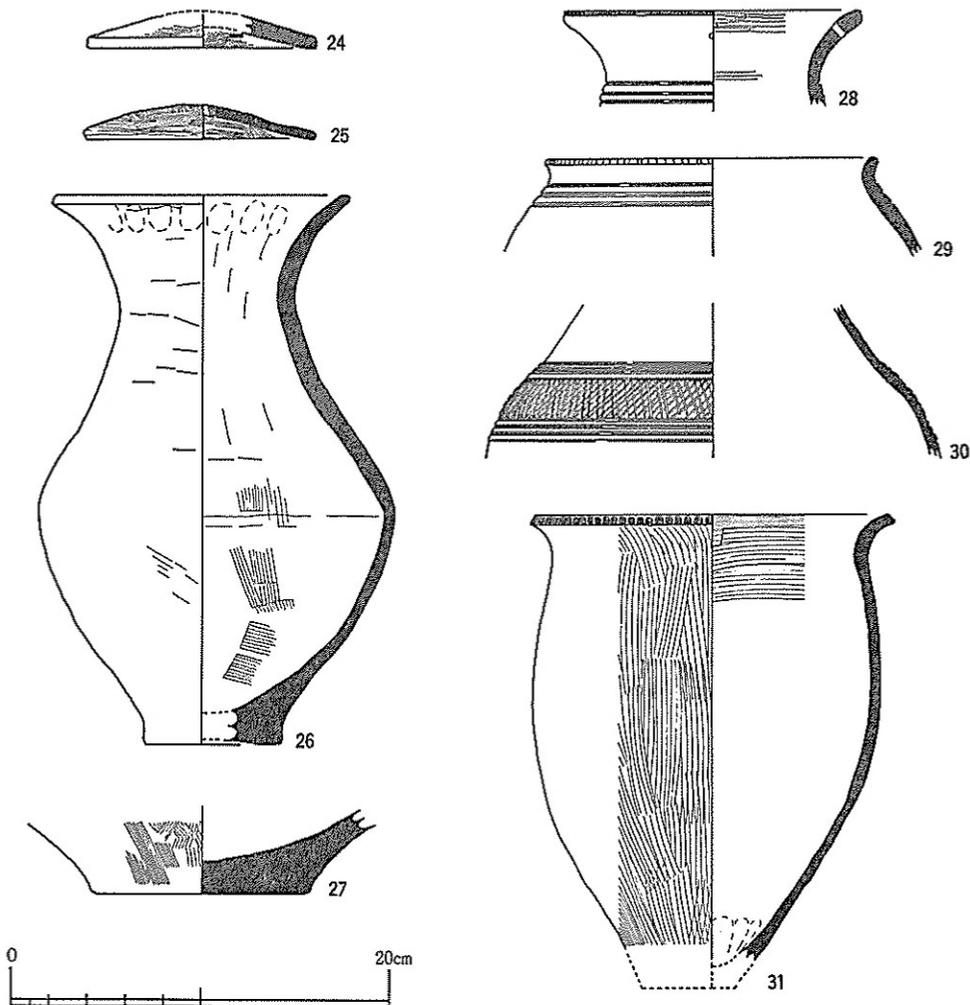
中央部の破損を除き完存している。鍬

(W-10)は低い突起があり、両面には加工痕が残る。また裏面には幅の広い擦痕が見られるが、加工の痕跡とも考えられる。なお、この鍬は溝底に密着して検出されたもので、弥生前期Ⅰ面溝6に伴う可能性もある。

土手5からは壺形土器(26)が出土した。これは無文で、ほぼ完形。生駒西麓産の胎土をもつ。前期新段階の後半に比定される。また、土手6の盛土と思われ



第23図 弥生前期Ⅱ面 土手6内遺物出土状況 S=1/20

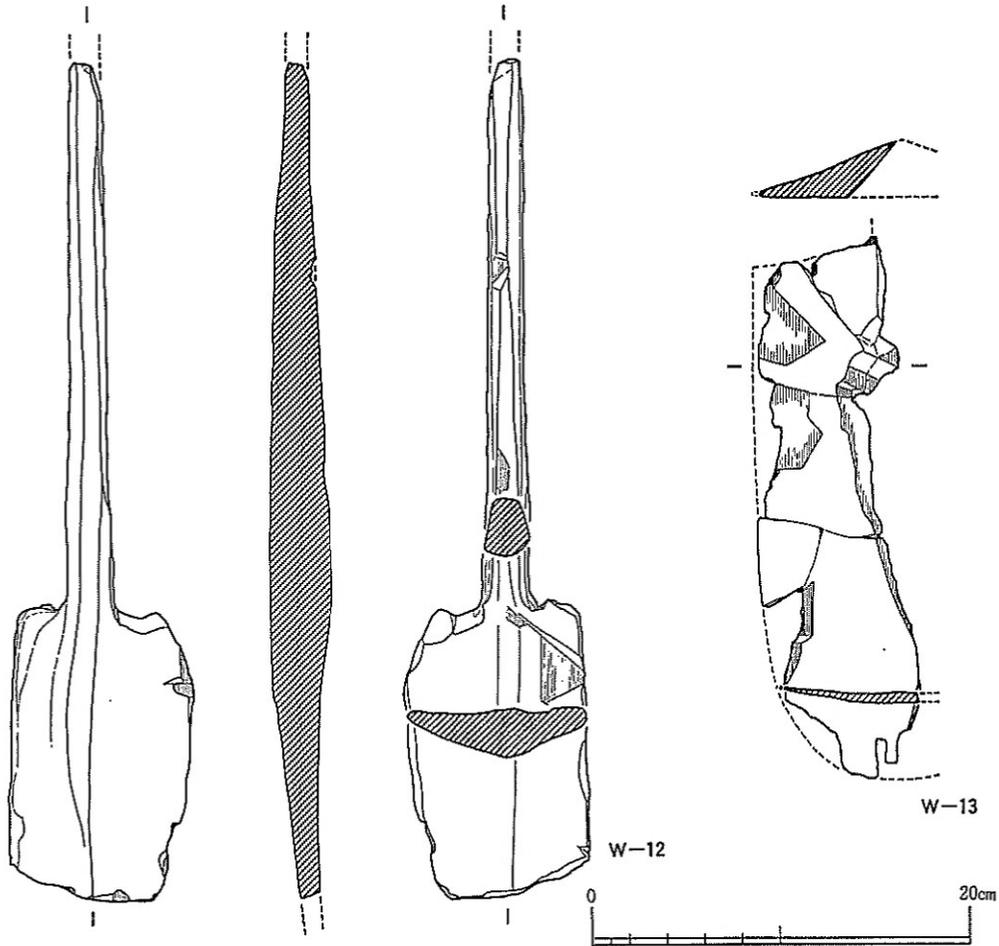


第24図 弥生前期Ⅱ面 土手4(24・29)、土手5(25~27)、土手6(30・31)、土手7(28) 出土遺物 S=1/4

る、弥生中期Ⅰ面第1号、第2号方形周溝墓間の高まりからは、甕形土器(31)および鋤2点(W-12・W-13)が出土した。31はいわゆる大和型甕で、口縁部の刻み目、粗い刷毛目が特徴的である。胴の張りは少ない。ほぼ完形。これは、従来中期前葉に比定されるものである。W-12は柄の先端、身の周囲が欠損し、全体の磨滅が著しい。W-13は鋤先のみが約 $\frac{1}{2}$ 残る。これら31、W-12、W-13については、位置的に方形周溝墓に伴った可能性も否定できない。

なお、土手盛土中からは、この他にも壺形土器、甕形土器、鉢形土器等の小破片が出土している(24・25・27~30)。これらの小破片は溝の掘削土に含まれていた、すなわち下層の弥生前期Ⅰ面に本来伴ったものであろう。

環濠状遺構の構築時期は、土手盛土内より出土した土器から、弥生前期後葉でもやや新しい段階におくことができる。また溝の埋没時期は、層的に弥生中期前葉以前である。各溝・土手の時期差は出土遺物からは明らかにし得なかったが、遺構に重複関係がなく、溝の埋没状況が類似していることから、ほぼ同時に作られたと考えられる。



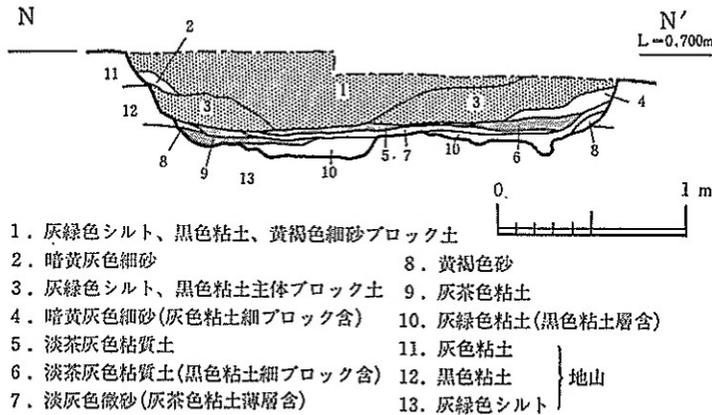
第25図 弥生前期Ⅱ面 土手6出土遺物

S = $\frac{1}{4}$

B. 溝

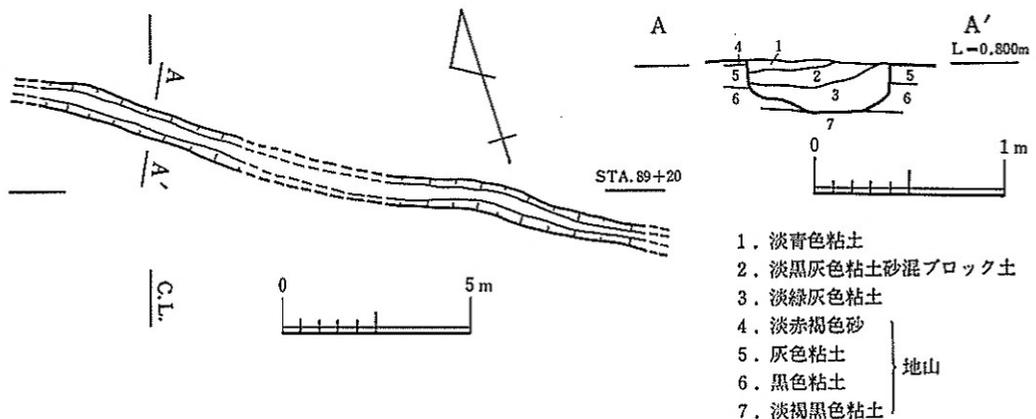
<溝9> 前半期の遺構である。STA. 88+7~25、E13~W5に位置する。北東から西南にゆるく曲がりながら延びる。両端は調査区外に続く。環濠状遺構に切られている。上幅2.6~3.0m、底幅1.8m、深さ0.6mを測る。底面の標高は+0.05~+0.2mを測り、西にやや低くなる。断面逆台形を呈す。溝底には茶灰色シルトが、その上に両肩部から流入したブロック土が、更にその上面には人為的に投げ込まれたと考えられる粗いブロック土が見られる。環濠状遺構構築時に埋められた可能性が高い。

<溝10> 前半期の遺構である。STA. 89+16~23に位置する。東南東から西北西に『S』字状にゆるく屈曲しながら延びる。環濠状遺構に切られる。上幅0.7~0.8m、深さ0.3mを測るU字溝である。埋土は下層が淡緑灰色粘土、上層が同質のブロック土である。



第26図 弥生前期Ⅱ面 溝9断面図

S = 1/40



第27図 弥生前期Ⅱ面 溝10平面、断面図

S = 1/200, 1/40

C. 小穴群

後半期の遺構である。S T A. 88+44~86、E13~W5に広がる小土壙群である。合計 246個を検出した。その分布範囲は環濠状遺構のすぐ外側（土手1東側）にあたる。個々の小穴は、ほぼ0.3~1.0m離れて分布するが、規則性や切り合い関係は認められなかった。ただしS T A. 87+60以北で土手1から約10mの間は小穴がほとんど認められない空白地がある。

小穴の規模は上径25cm前後、深さ15~20cmを測り、平面が隅丸の長方形を呈するものが多い。壁面は一方が斜めに直線的に落ち、その対面がややなだらかで凹凸をもって落ちるものが多い。底面は第20層をやや掘り込んだ位置にある。埋土は、下部が約5cm厚の灰色粘質土で、上部は砂を含んだ暗灰色粘質土である。なお3ヶ所の小穴の埋土内から、サヌカイトの剝片が出土した（S-26~28）。

これらの小穴群は前記の環濠状遺構とは重複しない範囲に分布する。従って環濠状遺構とはほぼ同一時期と考えられる。

小穴群の性格としては、①柱穴、②粘土探掘坑、③農作物の掘り取り痕、④樹株、などが想定されるが、いずれとも断定し難い。

D. 土壙

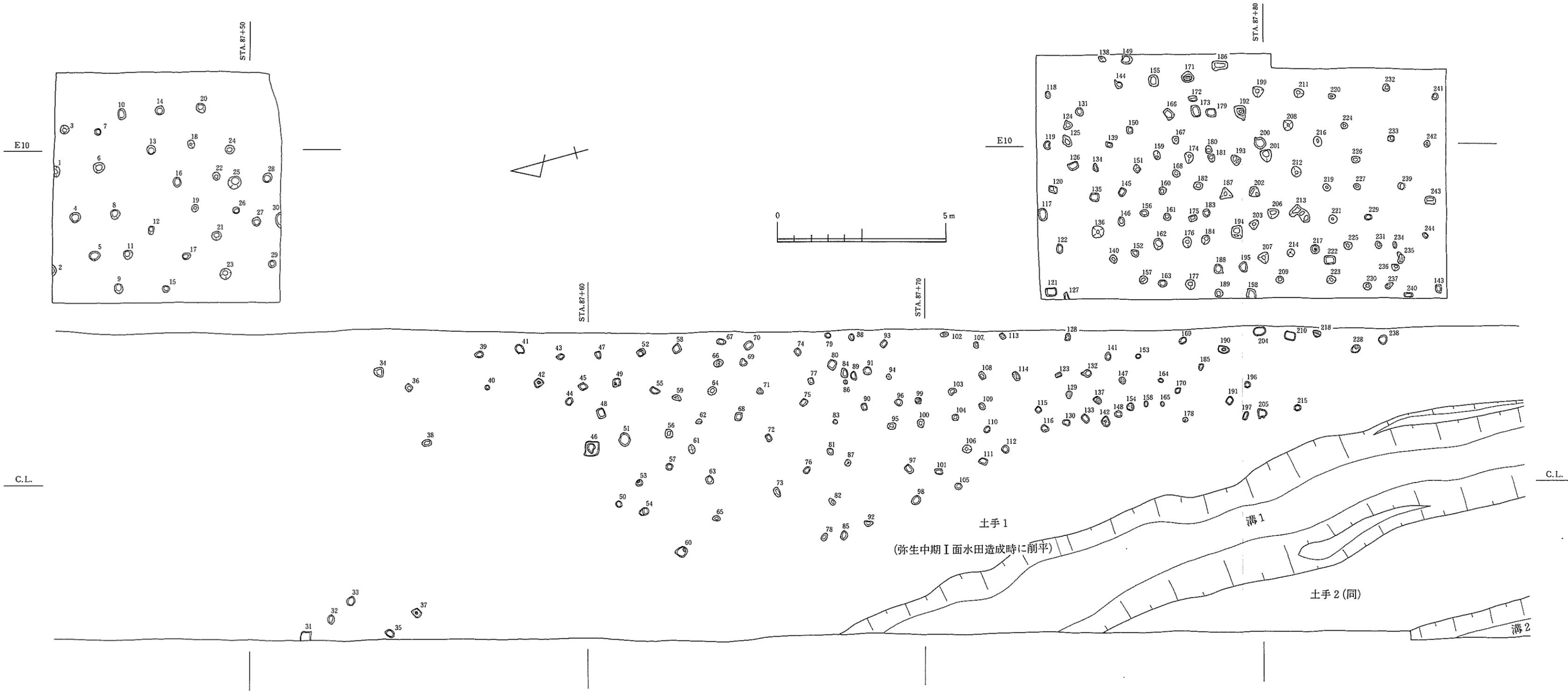
<土壙1> 所属時期は不明である。S T A. 87+36、W4に位置する。平面はほぼ三角形を呈し、上幅1.0×1.8m、深さ0.47mを測る。壁は垂直に落ち、底は平坦である。埋土は灰色粘土層をはさむブロック土である。粘土から水が溜っていたことが窺われ、水溜めの的な用途も考えられる。ブロック土は人為的に埋め戻された事を示している。

<土壙2> 前半期の遺構である。S T A. 87+46、W12に位置する。西半は調査区外にある。土手2直下に位置しこれに先行する。平面はほぼ方形で幅1.8m、深さ0.46mを測る。壁面は垂直に落ち、平底で埋土も土壙1に類似し、同様な用途が考えられる。

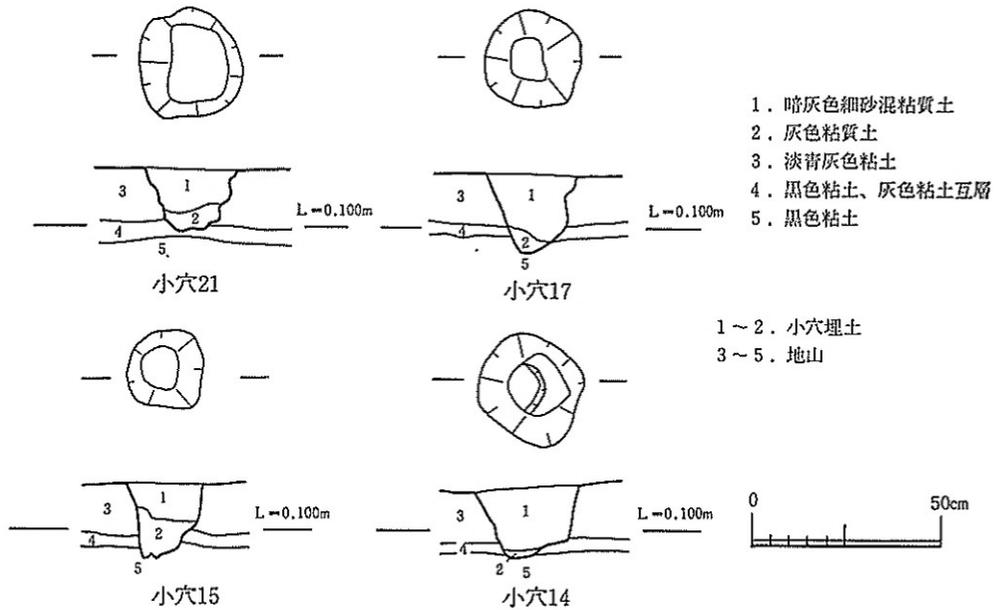
E. 小結

弥生前期後葉は、確実に人為的に築かれた遺構が出現する時期である。前半期は若干の溝・土壙が認められる程度であるが、溝9は後半期の環濠状遺構の大溝に類似し、その先駆的なものかもしれない。また、第19層の上部は花粉分析の結果、水田層の可能性が指摘されている。

後半期はこれらの遺構群を埋め戻して、環濠状遺構及び小穴群が作られる。前者は条数の点で従来の弥生集落の環濠を凌ぐものであるが、全体の形状も含めそれが集落と如何なる関係にあったのか現在のところ不明で、機能についても保留せざるを得ない。

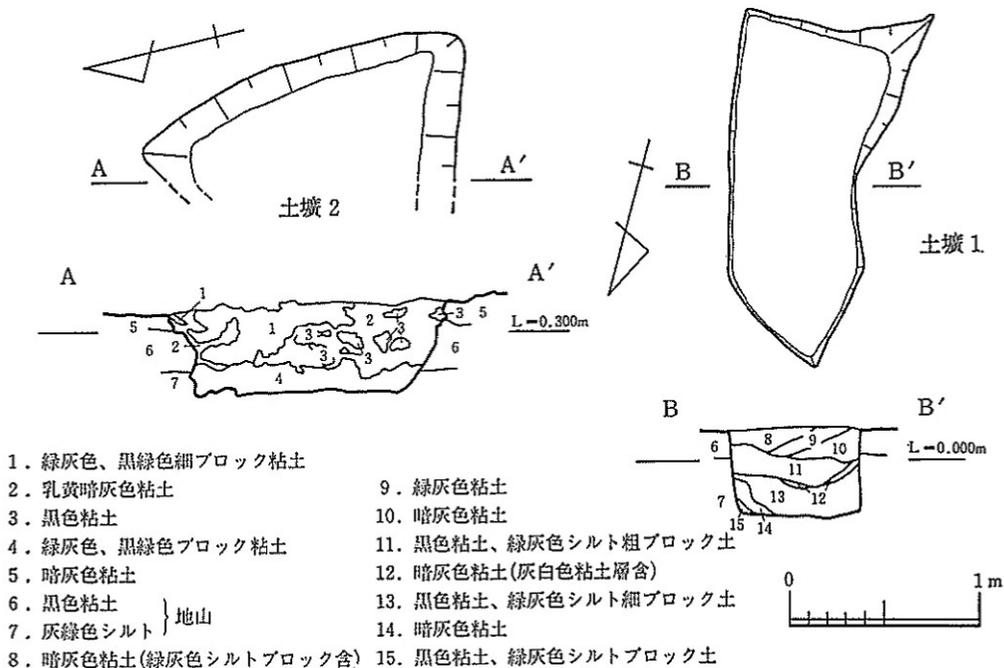


第28図 弥生前期 I 面 小穴群平面図 S = 1/100



第29図 弥生前期Ⅱ面 小穴平面、断面図

S = 1/20



第30図 弥生前期Ⅱ面 土城1、2平面、断面図

S = 1/40

第5節 弥生中期Ⅰ遺構面

当遺構面は、弥生前期Ⅱ面とはほとんど間層をはさまないものである。調査区の北半では第18層（暗茶褐色砂混粘質土）、すなわちこの時期の水田耕土上面を、南半では弥生前期Ⅱ面環濠状遺構の溝が埋没した時点における地表面を遺構面としている。標高+0.5~0.7mを測り、全体的にはほぼ平坦である。水田、方形周溝墓が検出された。時期は、水田耕土中の土器や方形周溝墓供献土器から、弥生中期前葉におかれる。

A. 水田

S T A. 88+50以北に位置する。水田面は大部分が灰緑色シルトで厚さ10cm程覆われ、その上に第17層（砂）があり、一部この層に直接接する。水田の造成に際しては、第4節で述べたように、弥生前期Ⅱ面環濠状遺構に伴う土手を削り、あるいは畦畔に転用し、溝跡の凹地を埋めるなどの整地作業を行っている。また調査区南半では前時期の土手がそのまま残り、水田域の南限がおさえられた。

水田耕土は、水田域全体に一様に拡がる、厚さ0.1~0.2mの暗茶褐色砂混粘質土（第18層）からなる。これには靱殻を含み、また微細なブロック状をなしており、何度も耕起された事を示す。耕土直下には淡青灰色粘質土（第19層）が拡がり、その下も黒色粘土（第20層）で、水持ちが良い半面、十分な排水がなされない場合は滞水したものと考えられる。

畦畔は、不明瞭なものを含め合計11本検出した。

<畦畔1・2> ともにやや不規則で、畦畔ではないかもしれないが、底幅1.0mを測る。

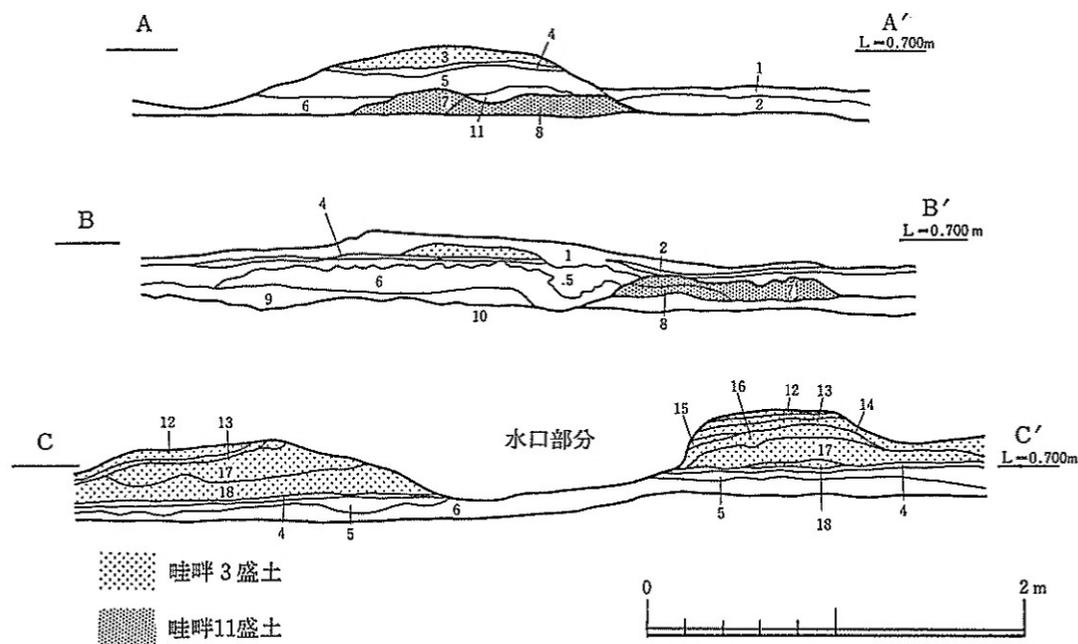
<畦畔3> 底幅1.5~2.0m、高さ0.2mを測り、断面は台形に近いカマボコ形を呈する。約0.6m離れて2ヶ所の水口を設け、その部分で屈曲する。北側の水口は上幅2.8m、下幅0.7mを測り、南側はそれよりやや小規模である。両方の水口のすぐ北側の水田面は浅く凹み、水落と考えられる。畦畔自体は耕土上に築かれ、主に耕土を盛り上げている。

<畦畔11> 東は畦畔3と重複し、これに先行している。底幅1.2m、肩幅0.8m、高さ0.1mを測るが、畦畔3と重複しない西側では上面がやや削平され、その上に新しい時期の耕土がある。この畦畔は第19層直上に築かれ、地盤の土を盛り上げている。畦畔内には小木杭が不規則に打ち込まれていた。木杭は先端を2方向から削って尖らせたもので、長さ10~30cm、直径3cm前後のものである。

<畦畔4> 底幅1.3m、高さ0.2mを測り水口を伴う。弥生前期Ⅱ面土手1と同位置にあり、これを削平し新たに築いたもので、第19層直上に築かれる。

<畦畔5> 底幅1.0m、高さ0.05~0.1mを測り、やや屈曲する。耕土上に築かれる。

<畦畔6> S T A. 88+8~30の長さ22mにわたって、弥生前期Ⅱ面土手3をはほぼそのまま転用している。底幅3~4m、高さ0.4~0.5mを測る。その南及び北側は土手を一坦削平したのち、



- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. 灰茶色粘質土(植物茎含) | 10. 淡灰色粘土(地山) |
| 2. 黄灰色微砂 | 11. 淡茶緑灰色粘質土 |
| 3. 暗茶色粘質土(植物茎含) | 12. 暗茶灰色粘質土 |
| 4. 暗茶褐色植物遺体層 | 13. 黒褐色植物遺体層 |
| 5. 暗茶灰色砂混粘質土 | 14. 暗灰色微砂~細砂混粘土 |
| 6. 暗黄茶灰色砂混粘質土 | 15. 黒灰色砂混粘土 |
| 7. 緑暗灰色粘質土(植物茎、灰白色斑含) | 16. 暗灰色微砂混粘土 |
| 8. 淡緑暗灰色粘土 | 17. 暗灰色砂混粘土ブロック土 |
| 9. 暗黄緑灰色砂混粘土 | 18. 暗灰色粘質土 |

第31図 弥生中期I面 畦畔3、11断面図

S = 1/40

新たに築いており、北側は底幅0.4m、高さ0.1mを測る。南側は大半が流出するが水口を伴っていた。

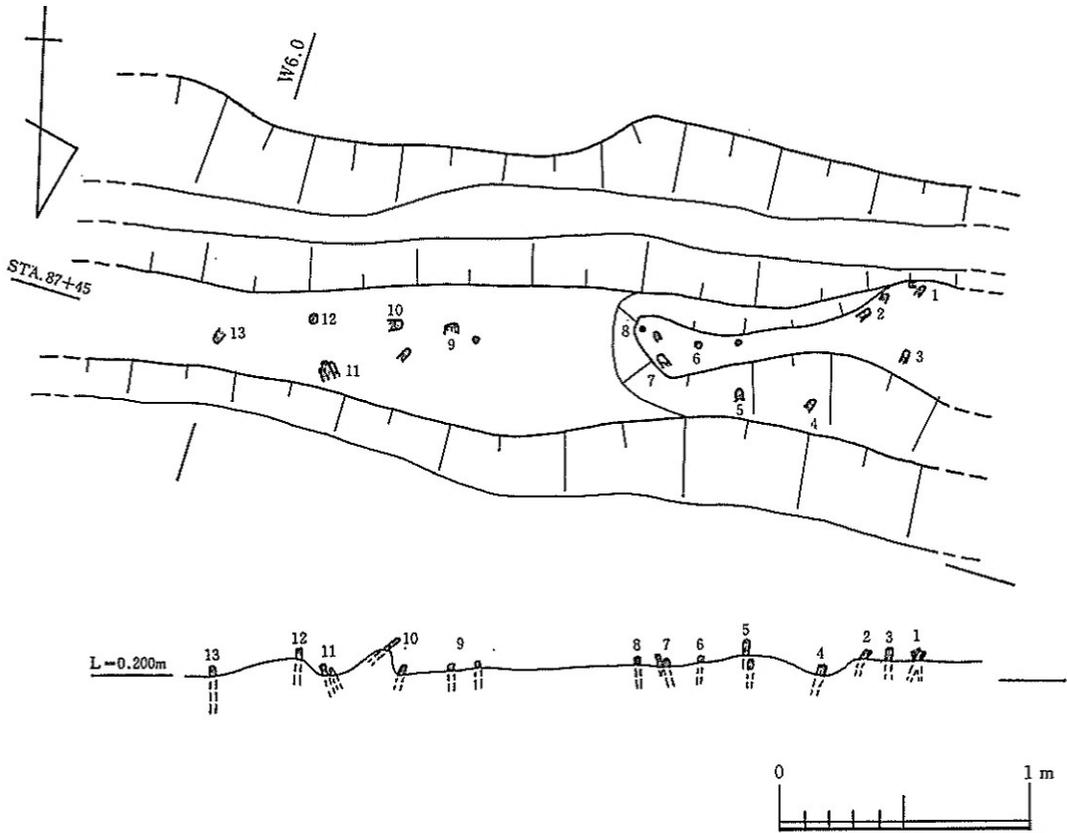
<畦畔7> ごく一部分を検出したに過ぎないが、東西に延び底幅1m以上、高さ0.3m以上と推定される。耕土上に築かれる。

<畦畔8> 底幅0.8m、高さ0.25mを測り耕土上に築かれる。盛土内に小木杭が打たれ、長さ約0.8mの木の枝が横倒しに埋め込まれていた。

<畦畔9> 大半が流出する。

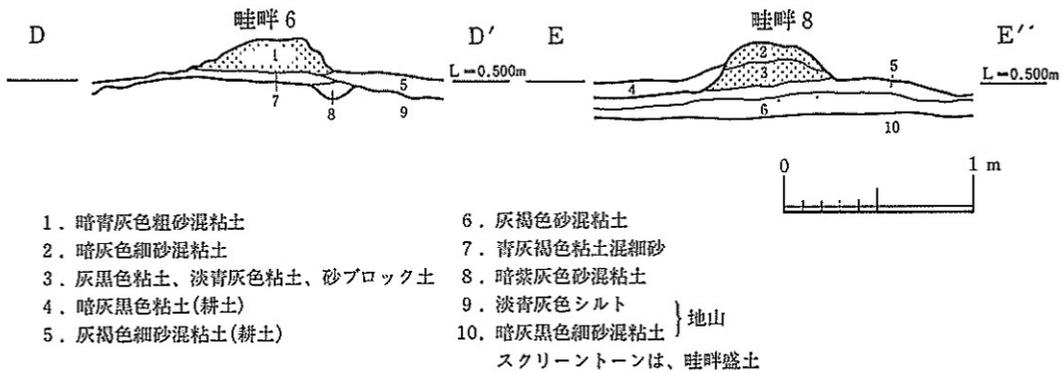
<畦畔10> 弥生前期Ⅱ面土手5を転用したもので、底幅4.0m、高さ0.5mを測る。

水田区画は、調査範囲内では十分には把握できなかったが、3面の大区画と、更にそれを細分する小区画に分けて考えることができる。



第32図 弥生中期I面 畦畔11内杭列平面、立面図

S = 1/60



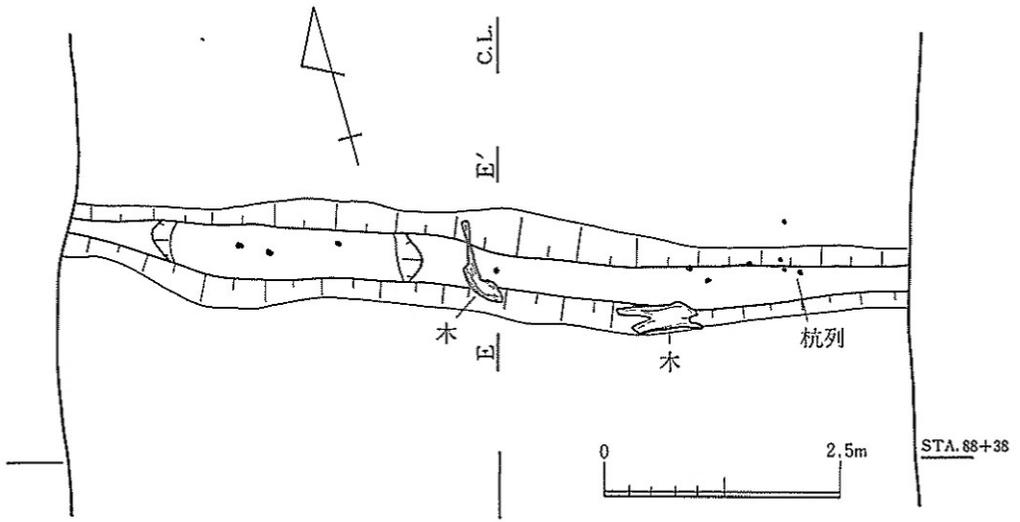
第33図 弥生中期I面 畦畔6、8断面図

S = 1/40

<大区画1> 東西畦畔3より北側に位置し、水田面は標高約+0.35mを測る。

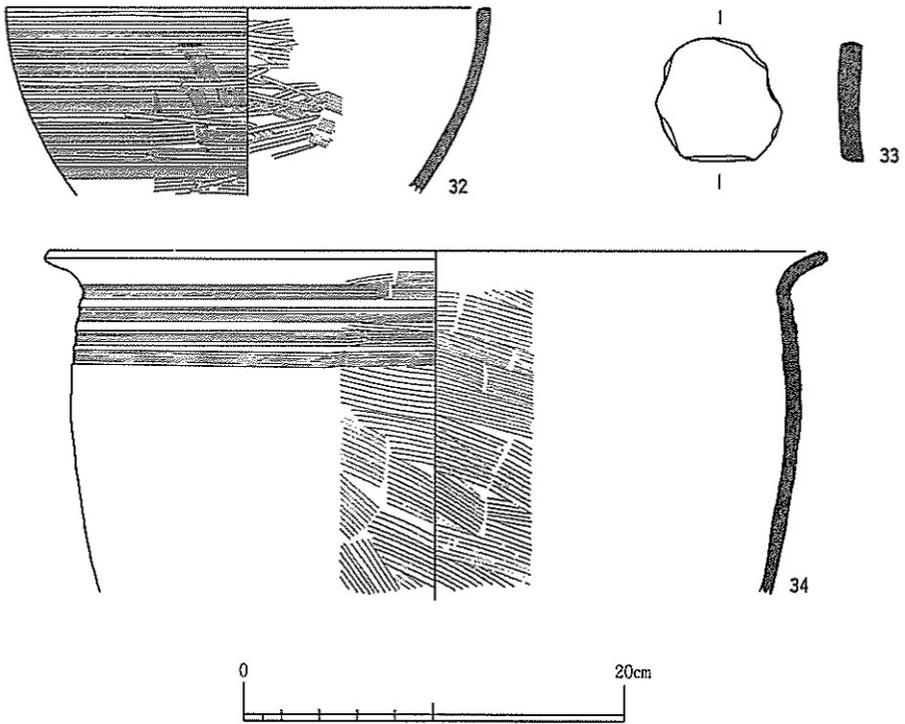
<大区画2> 東西畦畔3と、東西畦畔7の間、南北55mの範囲で、標高+0.4mを測る。小区画は認められない。

<大区画3> 東西畦畔7から水田城南限までの南北52mの範囲で、標高+0.45~0.50mを測る。

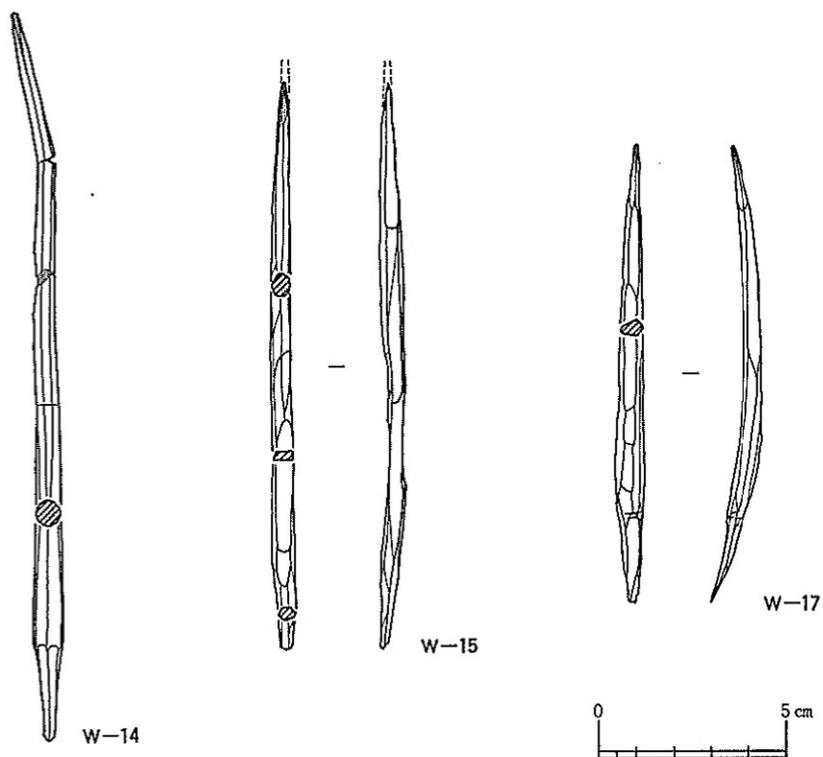


第34図 弥生中期I面 畦畔8平面図

S = $\frac{1}{60}$



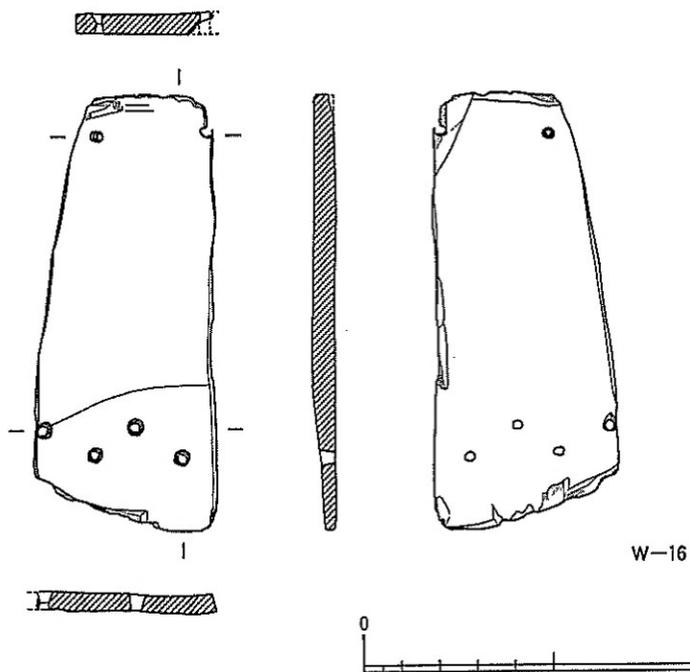
第35図 弥生中期I面 水田耕土内出土遺物 32・34 S = $\frac{1}{4}$ 、33 S = $\frac{1}{2}$



W-14

W-15

W-17



1

W-16



第36图 弥生中期Ⅰ面 水田耕土内 (W-14~W-16)、畦畔3 (W-17) 出土遺物
 W-14・W-15・W-17 S = 1/2、W-16 S = 1/4

この大区画は更に南北に平行して走る畦畔4・6・10と、それに直交する東西畦畔5・8・9が互い違いに設けられ、ほぼ長方形の小区画が作られる。面積を知り得る良好な区画はなかった。

これら大区画は約5cmの比高差で、階段状に順次北に向って下っており、地形面を区画したと考えられる。

水田耕土内、及び畦畔3から遺物が出土している。

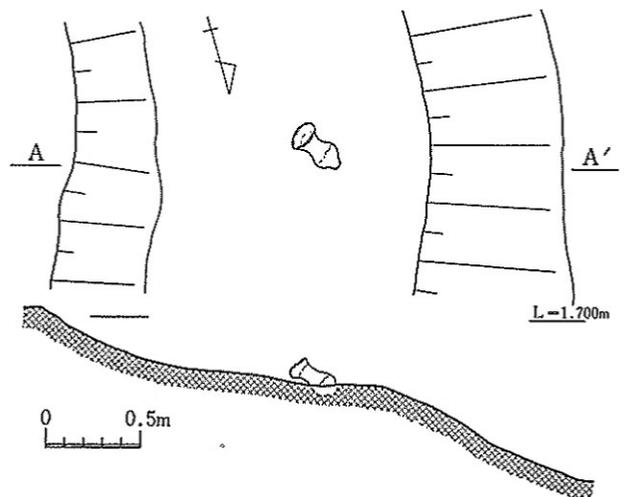
鉢形土器(32)は、櫛描直線文間に篋磨研線を施す。甕形土器(34)は、口縁下に直線文を4条施す。外面には煤が付着する。土製円板(33)の周縁は研磨していない。水田耕土内より出土したこれらの土器は畿内第Ⅱ様式に属し、その胎土は生駒西麓産のものである。木製品としてヤス状木製品が3点(W-14・W-15・W-17)と用途不明木製品(W-16)が見られる。W-15は中央部分を両面から削り、断面台形に加工する。側面では木目が斜めにはしる。W-17は扁平に面取りし、全体に彎曲する。先端は尖り、下端は削って薄くする。下部の周囲には横方向の擦痕があり、柄に縛り付けた痕跡と考えられる。W-16は板の片面の一部を削平し、両端に穿孔する。W-17は畦畔3盛土内より、他は水田耕土内より出土した。

耕土内より出土した土器により、水田使用時期は弥生中期前葉と推測されるが、畦畔には作り替えが認められ、若干の時期幅が考えられる。

B. 方形周溝墓群

STA. 88+90~89+25に位置する。3基が南北に並んで検出された。いずれも弥生前期Ⅱ面土手6のやや幅の広い場所に、土手の方向に直交する周溝を両側に設け、その掘削土を間に盛り上げて、墳丘としている。第1号方形周溝墓の北側では、この土手幅が狭くなる事から、この周溝墓が一群の北限と考えられるが、南限については不明である。各周溝墓とも供献土器から弥生中期前葉に比定されるが、3基の築造順序は明らかではない。

<第1号方形周溝墓> ほぼ全体を検出し得た。墳丘は四隅がやや張り出した長方形を呈し、南北7.6m、東西7.2m、北周溝底からの高さ1.14mを測る。墳頂部は南北6m、東西4mの平坦面をなし、西側の墳丘斜面に幅1.4mのほぼ三角形のテラスを設けている。このテラス部からはほぼ完形の壺形土器1点を検出したが、下半部を埋置したものと考えられる。周溝は平面楕円形を呈し、北周溝は肩幅4.8×6.6m、深さ0.65



第37図 弥生中期Ⅰ面 第1号方形周溝墓供献土器出土状況
S=1/40

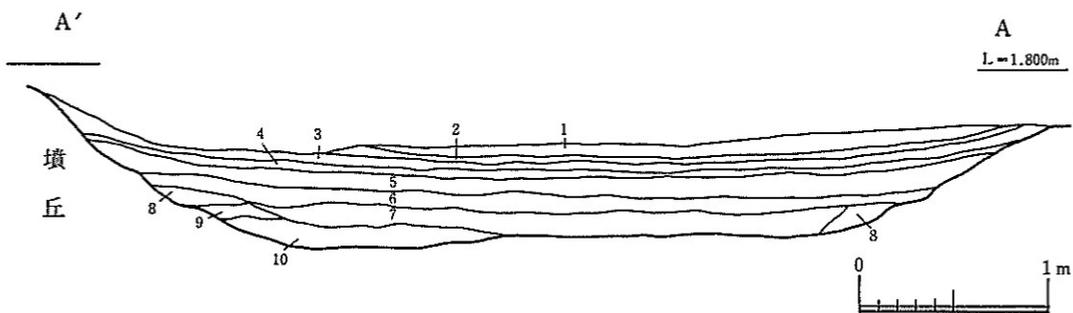
m、南周溝は肩幅4.2×5.0m、深さ 0.6mを測る。周溝底面直上には灰白色粒（沼鉄鉱？）を含む暗青灰色粘土が堆積し、築造当時滯水状態にあったと見られる。

主体部は墳丘中央部に南北に主軸をもつ組み合わせ式木棺1基を検出した。木棺の内寸は長さ135cm、幅45cm、深さ20~25cmを測る。棺材は蓋板以外は腐蝕が著しい。東側板は土圧により内側へ彎曲していた。木棺は、最初に小口板を棺底より深く埋め込み、次に7枚以上の短冊形の板材を墓壇底に主軸に直交して敷き並べたのち、側板を小口板の外側になるよう底板の上に置いている。蓋板は棺身より長い一枚板を使用するが、やや北側へずれているのは土圧による移動と考えられる。

棺内からは成人人骨1体が検出された。かなり消失していたが、頭部を南に向け、腕・膝を折り曲げた横臥状態で埋葬されている。^{註1}

墳丘西斜面のテラス部から出土した壺形土器（35）は、漏斗状に開く長い口縁部をもち、端部は外側に折り曲げて成形する。口縁の一部が欠損しており、その割れ方から人為的に打ち欠かれたものとも考えられるが、出土状況からは確認できない。口縁部外面と体部下半の周囲に煤が付着する。底部には木葉痕が見られる。前期の壺の形態を引き継ぐもので、本遺跡（その3）調査区では生駒西麓産の胎土をもつ同様な壺形土器が出土している。

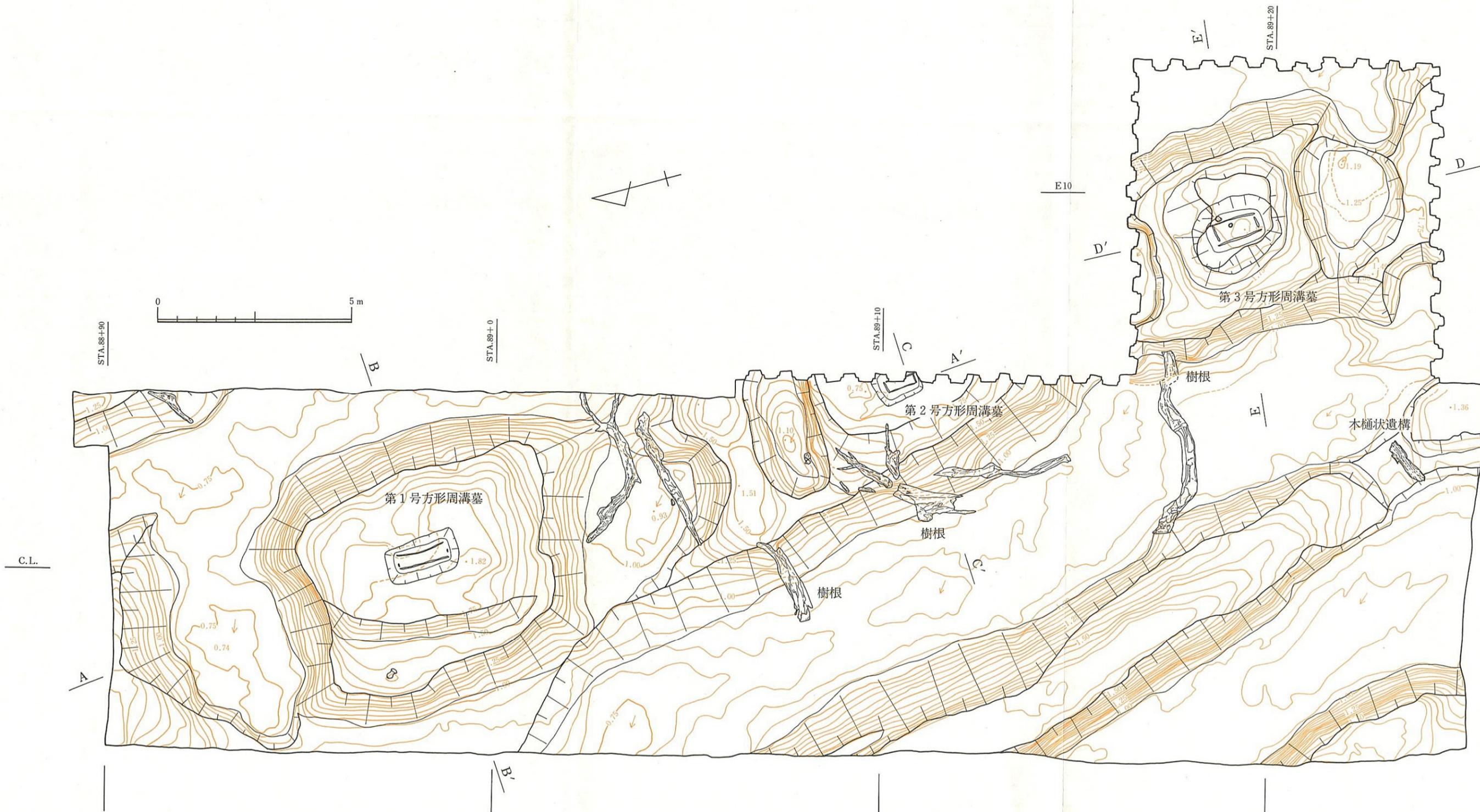
北周溝埋土からは柄状木製品（W-18）が出土している。側面が彎曲し、その内面を切り欠いたもので斧の柄の可能性がある。樹種はヤマグワ。墳丘の南西斜面上からは土製円板が2点出土している（36・37）。土器片の再加工品で、36は周囲の大部分を研磨する。ともに生駒西麓産の胎土。W-19は墳丘南東斜面上から出土した盤状木製品で、炭化が進み破損が著しい。内面には加工痕と考えられる連続した凹みが見られる。36・37・W-18・W-19は本来この周溝墓に伴うものか明らかではない。この他墳丘西南裾部からは短冊状の木製品5枚が出土している。ヒノキ



- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 1. 淡茶青灰色シルト | 7. 暗青灰色粘土(灰白色粒、砂含) |
| 2. 黒褐色植物層 | 8. 暗青灰色微砂混粘質土 |
| 3. 茶青灰色粘質土(茶褐色植物層含) | 9. 暗青灰色砂混粘質土(灰白色粒含) |
| 4. 青灰褐色粘土(黒褐色植物層含) | 10. 青灰色粘土、黒色粘土ブロック土 |
| 5. 淡茶灰色粘土(茶褐色植物層少し含) | |
| 6. 暗青灰色細ブロック粘土(細灰白色粒砂含) | |

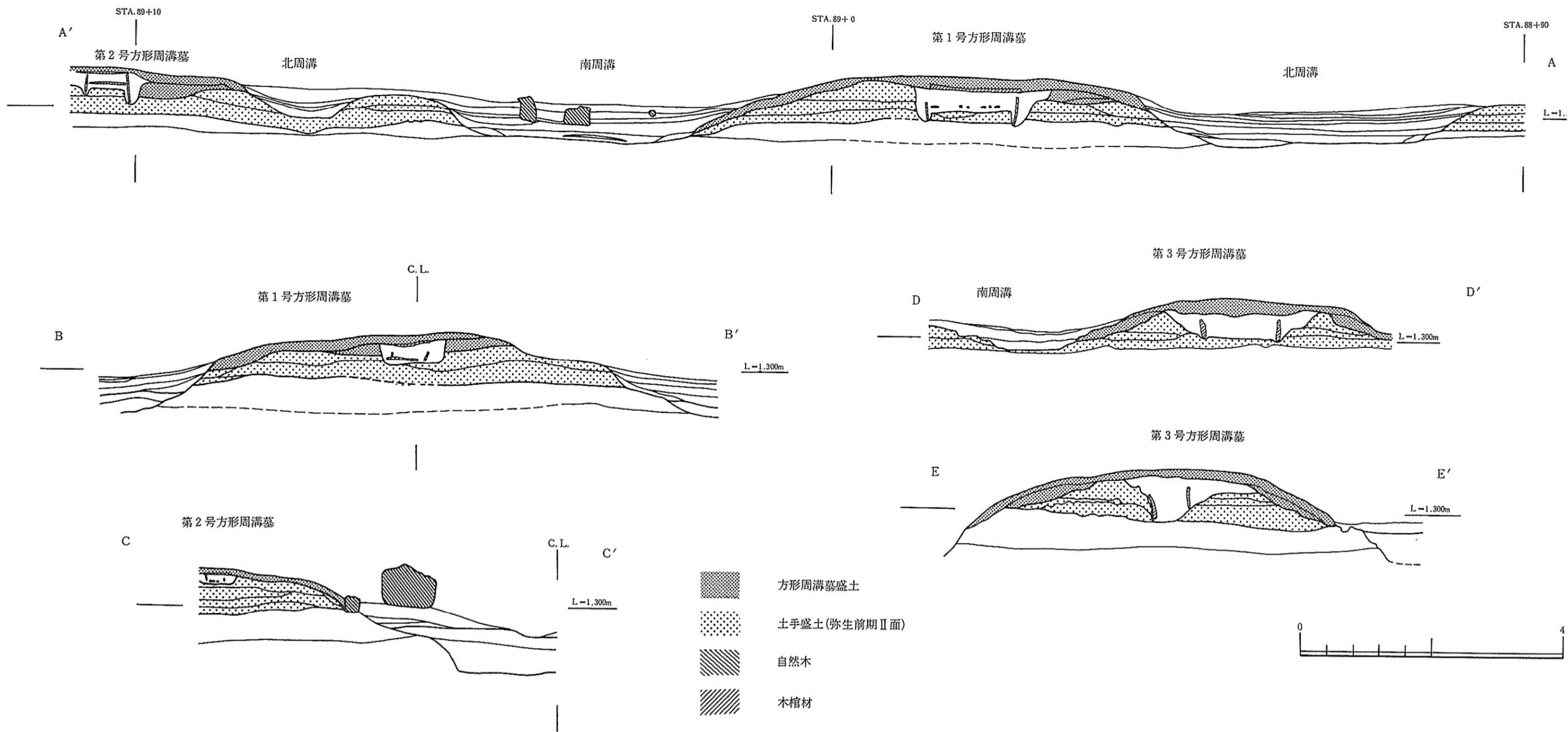
第38図 弥生中期I面 第1号方形周溝墓北周溝断面図

S = 1/40

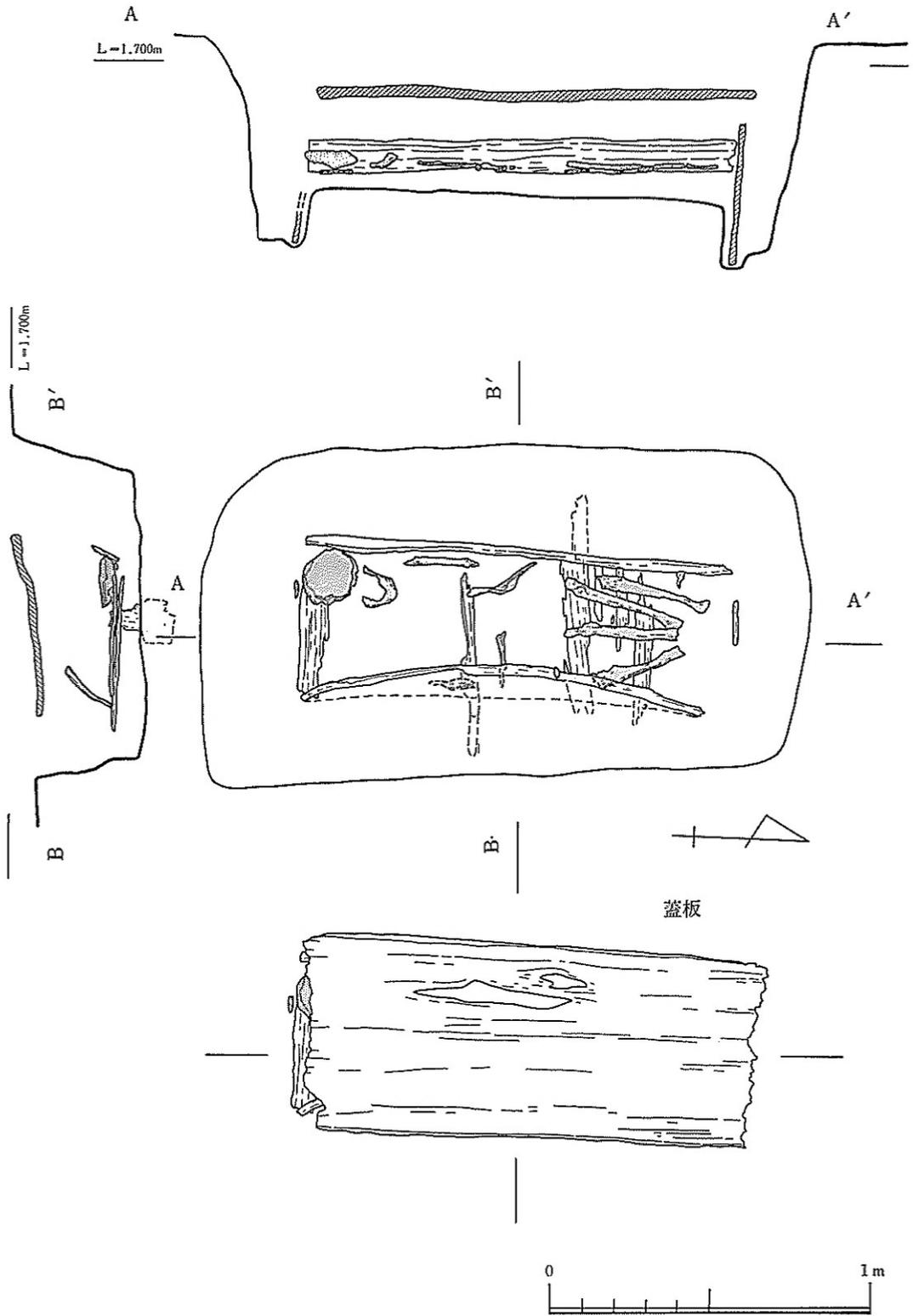


第39図 弥生中期I面 方形周溝墓群平面図 (数字は標高m、コンタは5cm間隔)

S = 1/100

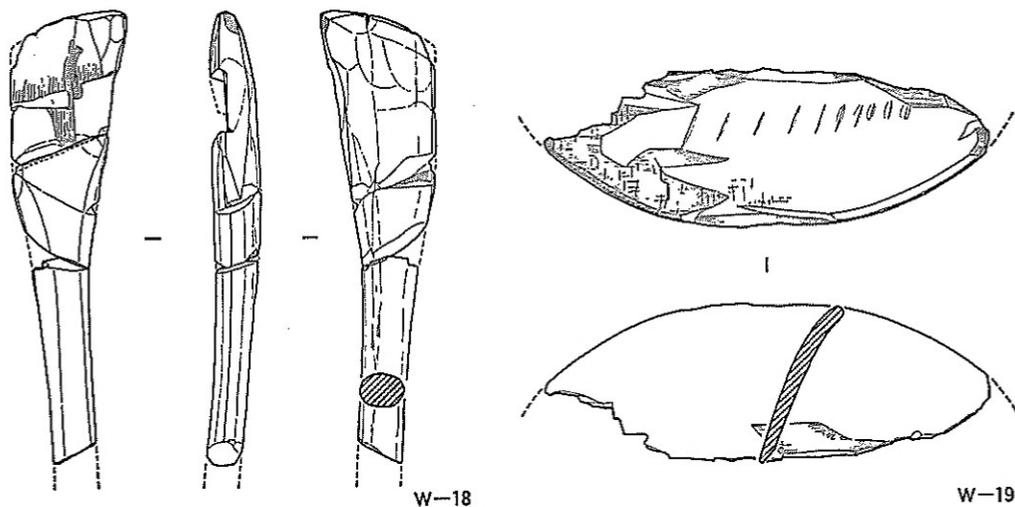
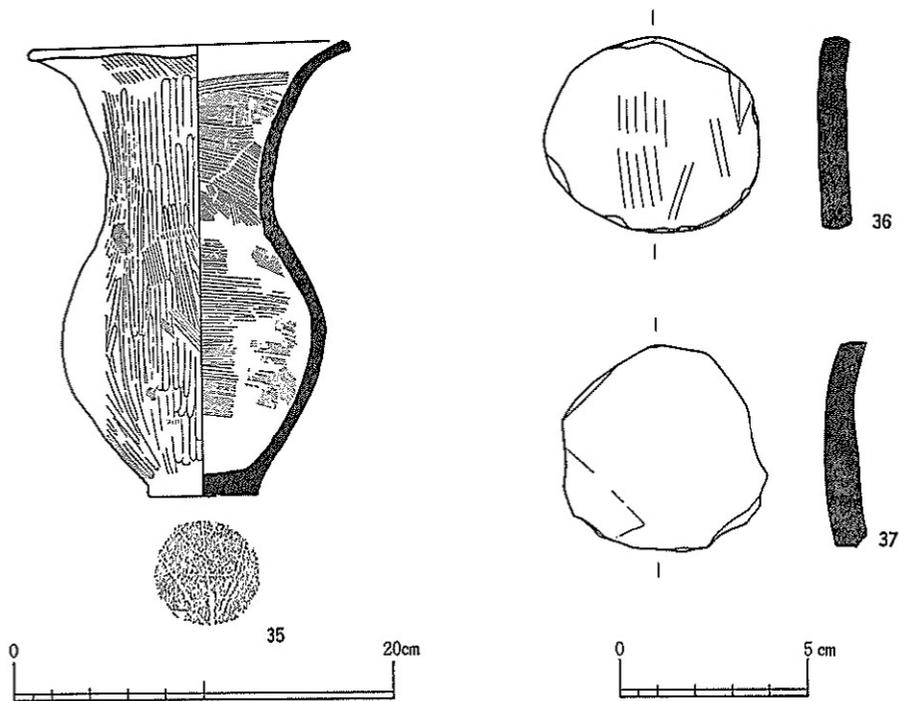


第40图 弥生中期Ⅰ面 方形周沟墓断面图 S=1/60



第41図 弥生中期Ⅰ面 第1号方形周溝墓主体部平面、断面図

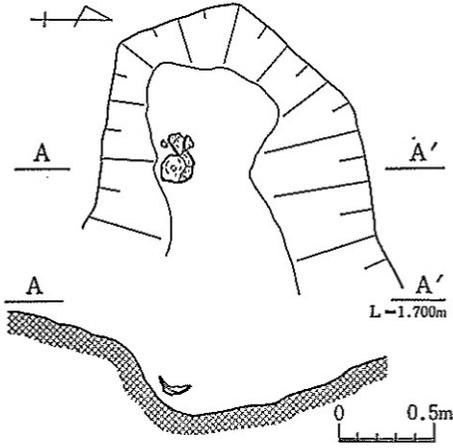
$S = \frac{1}{20}$



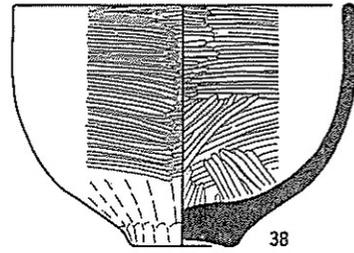
第42図 弥生中期Ⅰ面 第1号方形周溝墓出土遺物 35・W-18・W-19 S = ¼、36・37 S = ½

製。

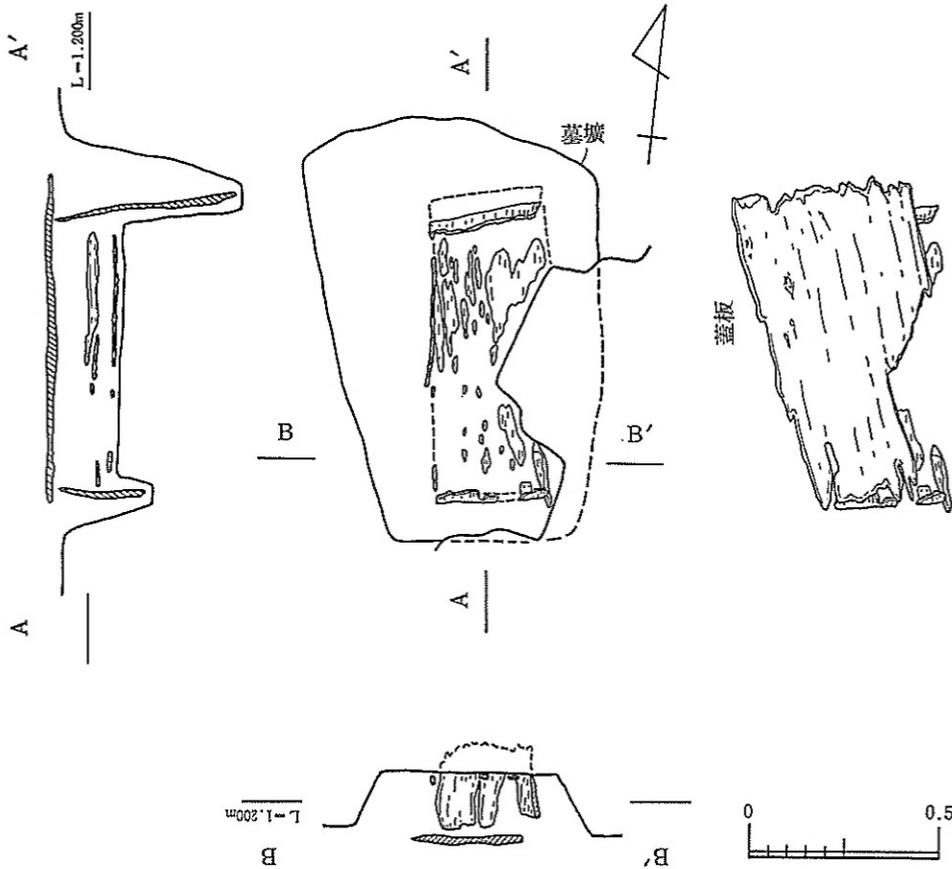
〈第2号方形周溝墓〉 墳丘の西半分を検出した。墳丘は南北約6m、東西5m程度と推定される。上面は後世に少し削平されているが、北周溝底から高さ0.5mを測る。周溝は北側のみ検出され、肩幅3.7×1.7m、深さ0.4mを測る楕円形を呈している。底からやや浮いた状態で鉢形土器1個体が検出された。周溝南端に位置する事から、墳丘上から転落した可能性も高い。埋土は青灰色シルトである。



第43図 弥生中期I面 第2号方形周溝墓周溝内
土器出土状況 $S = \frac{1}{40}$



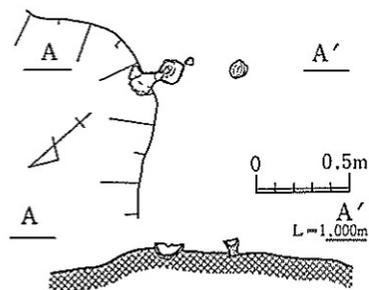
第44図 弥生中期I面 第2号方形周溝墓
出土遺物 $S = \frac{1}{4}$



第45図 弥生中期I面 第2号方形周溝墓主体部平面、断面図 $S = \frac{1}{20}$

主体部は、墳丘中央から南北に主軸をもつ組み合わせ式木棺1基が検出された。内寸で、長さ70cm、幅30cm、深さ15cmを測る。蓋板・小口板以外は腐蝕が著しい。底板は1枚板からなる。小口板は底板より深く埋め込まれていたが、二枚の小口板の長さはかなり異なる。側板と底板、小口板の関係は不明である。

木棺内からは5~6才児の臼歯が1個検出された。南東部に位置した事から、頭部を南に向けて埋葬されていた可能性が高い。



第46図 弥生中期Ⅰ面 第3号方形周溝墓供献土器出土状況 S=1/40

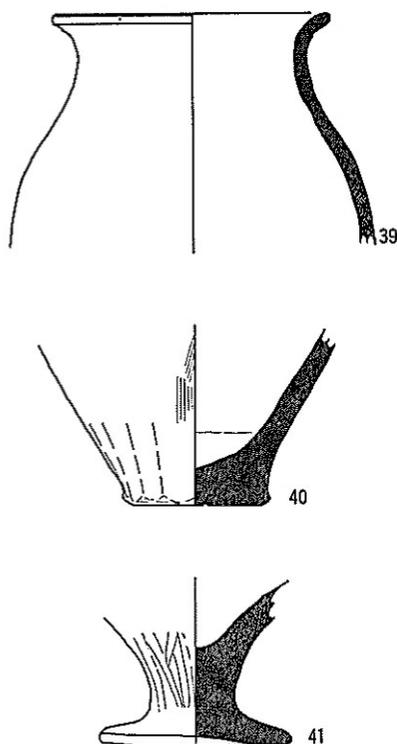
北周溝から出土した鉢形土器(38)の口縁部は直立し、端部は面をもつ。底部は厚く、上げ底で中央部が凹んでいる。内外面は篋磨き調整する。生駒西麓産の胎土。

<第3号方形周溝墓> 北周溝を除いてほぼ全容を検出し得た。墳丘は四隅がやや張り出した方形を呈し、南北4.7m、東西5.5m、南周溝底からの高さ0.78mを測る。墳丘上半部は直径約3m、高さ0.27mの楕円形を呈する。墳頂部表面のやや北側から壺・高杯などが検出され、供献土器と考えられる。南周溝は楕円形平面を呈し、肩幅3.7×2.7m、深さ0.3mを測る。埋土は灰緑色シルト。

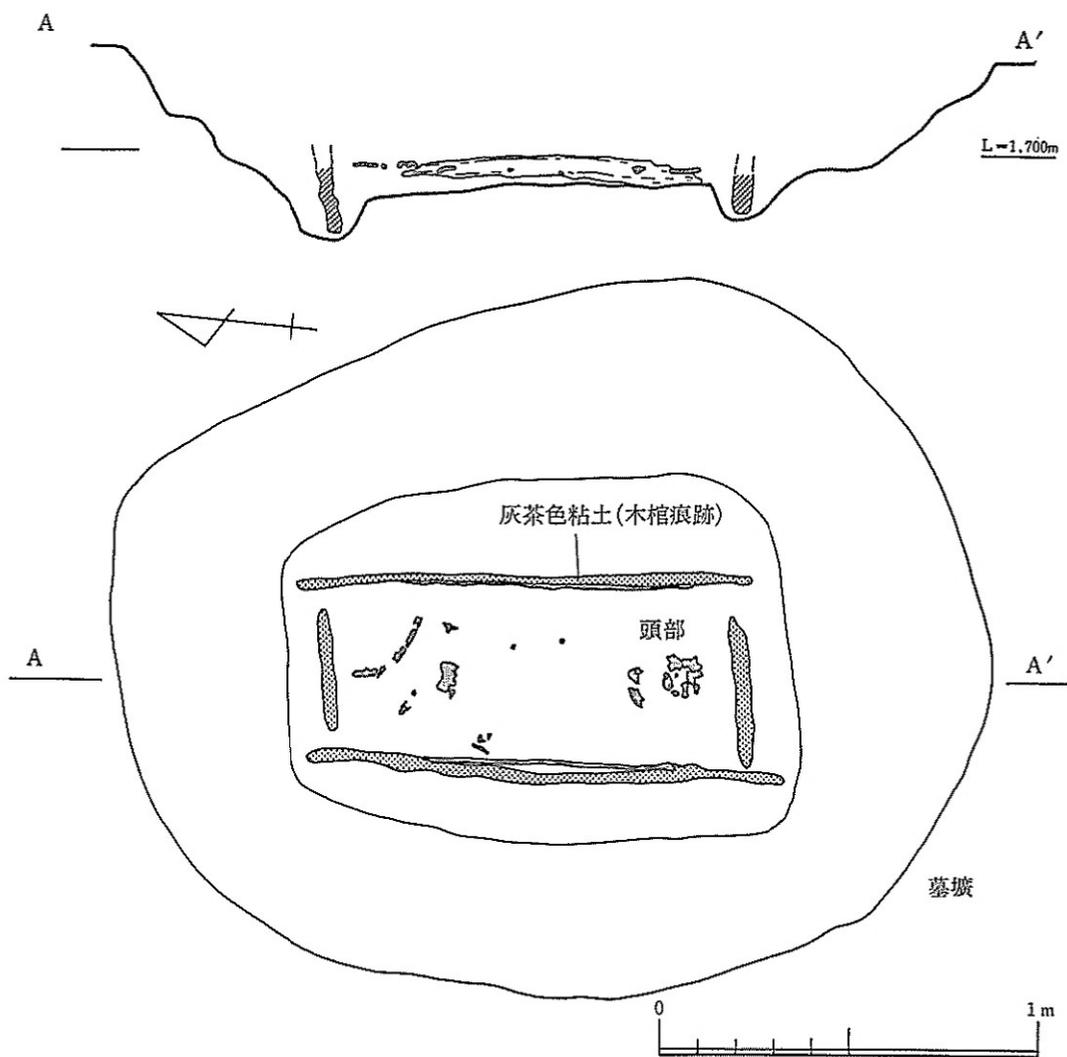
主体部は墳丘中央部に位置し、南北に主軸をもつ1基の組み合わせ式木棺である。内寸は長さ150cm、幅は北小口部で50cm、南小口部で42cmを測り、平面形は台形を呈する。高さは25cm程度と推定される。棺材はほとんど腐蝕し、小口板、蓋板は暗灰色粘土化していた。棺の構造の詳細は明らかではないが、側板は小口板の外におかれ、小口板とともに棺底よりも深く埋め込まれていたようである。底板の有無は確認できなかった。

棺内から成人人骨1体を検出した。保存状態はよくなかったが、頭部を南に向け、更に腕・膝を折りまげて埋葬されていた。

墳頂部から検出された供献土器は保存状態が良くない。壺形土器(39)は太く短い頭部をもつ。底部(40)とは胎土が非常に良く似ており、同一個体となるかも知れない。高杯形土器(41)は杯底部から



第47図 弥生中期Ⅰ面 第3号方形周溝墓出土遺物 S=1/4



第48図 弥生中期Ⅰ面 第3号方形周溝墓主体部平面、断面図

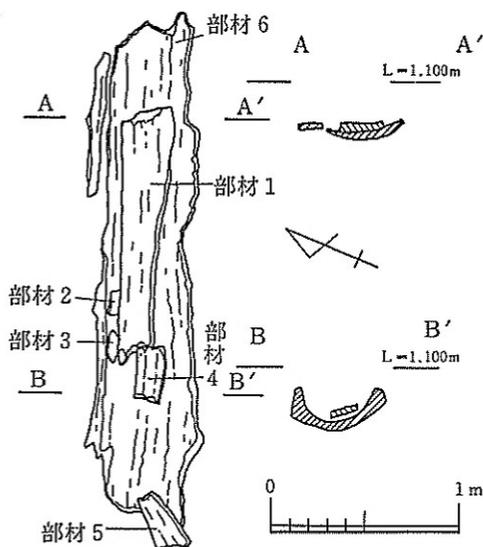
S = 1/20

脚部にかけてが遺存する。杯部は斜めに立ち上るが形態は不明。柱状部は短く、中実。脚部内面の中央は凹む。

C. 木槿状遺構

STA. 89+23、E 3に位置する。弥生前期Ⅱ面土手7を、長さ4mにわたって掘り込んで凹ませ、その底部に土手方向に直交して設けられている。

構造は、底板1板、蓋板1枚の他、小型の板材4板を組み合わせたもので、土圧により押しつぶされていた。底板は半裁した丸太を削り抜いたもので、長さ2.7m、幅0.6m、深さ0.15m、厚さ0.05mを測る。蓋板は長さ1.28m、幅0.25m、厚さ0.03mの長方形の板材である。底板内面の標高は東端で+0.92m、西端で+1.08mに当り、東へ僅かに低くなる。その構築が弥生前期Ⅱ面



第49図 弥生中期Ⅰ面 木榿状遺構平面、断面図
 $S = \frac{1}{40}$

の時期にまで遡る可能性も否定できない。

D. 足跡群

S T A. 87+73~88に位置する。水田面直上に堆積した、厚さ15cmの灰緑色シルト上面に印されている。主に東南東から西北西に歩行した人間の足跡で、深さは6~10cmを測る。

E. 樹林

S T A. 88+90以南の方形周溝墓周辺に分布する。樹種は未鑑定であるが柳と推定される。方形周溝墓の築かれた土手6の西側斜面の3ヶ所に樹根が見られる。年輪数は、最大約40を数える。いずれも周溝墓築造以後に生育したものであろう。

F. 包含層出土遺物

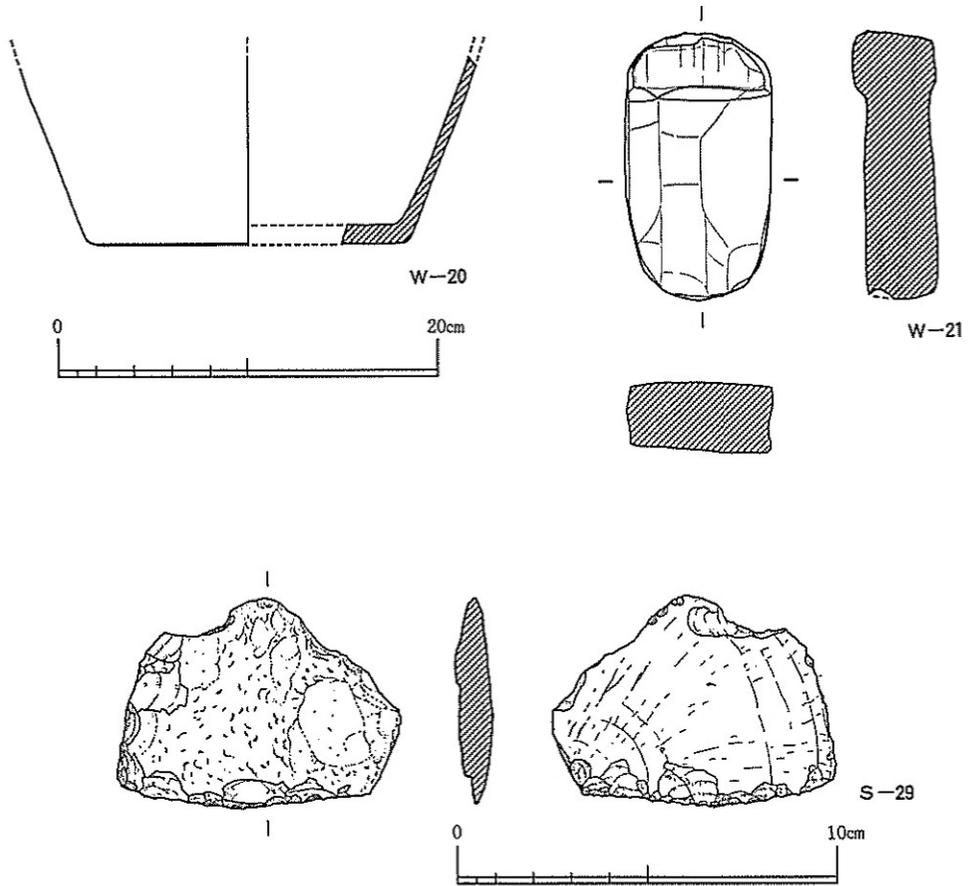
本遺構面を覆う第17層からは少量の木器が出土している。W-20は円形容器の体部から底部にかけての破片である。W-21は一部に低い平坦な面を残し、両面を削平しているが用途は不明。樹種はコウヤマキ。他に、サヌカイト製の不定形刃器(S-29)が出土した。

G. 小結

本遺構面では、弥生中期前葉の水田と墓地、及びその両者の関係が明らかになった。弥生前期Ⅱ面とは時間的な隔りがあるにもかかわらず、土地利用に大きな変化が認められる。

北側に位置する水田は、その一部を検出したにすぎないが、南北幅50m前後の大区画と、それを区切る小区画が認められた。また耕土などを盛土したカマボコ形の畦畔は、近年各地で発掘されている弥生水田とほとんど変わらないものである。^{註2}

水田域の南にある方形周溝墓群は、河内平野では、東大阪市鬼虎川遺跡とともに最古の部類に属している。また3基に共通した特徴として、①単次葬、②小口板埋め込み式の木棺、③四隅がやや張り出した墳形、④南向き埋葬が、2基に共通するものとして、⑤腕・膝を折り曲げた屈葬が指摘できる。①~③、⑤は、河内地方の弥生中期後半の周溝墓にはあまり見られない特徴である。3基の被葬者は年齢に差はあるものの、同一の階層、ないし家族集団に所属した可能性が、以上の共通性から窺える。^{註3}



第50図 弥生中期Ⅰ面 包含層第17層出土遺物 W-20・21 S=¼、S-29 S=½

註1 第1、2号方形周溝墓出土人骨の鑑定は、京都大学理学部 池田次郎教授による。

註2 工楽善通 「西日本の水田遺構」『考古学研究』114 1982

註3 東大阪市教育委員会により調査された。

第6節 弥生中期Ⅱ遺構面

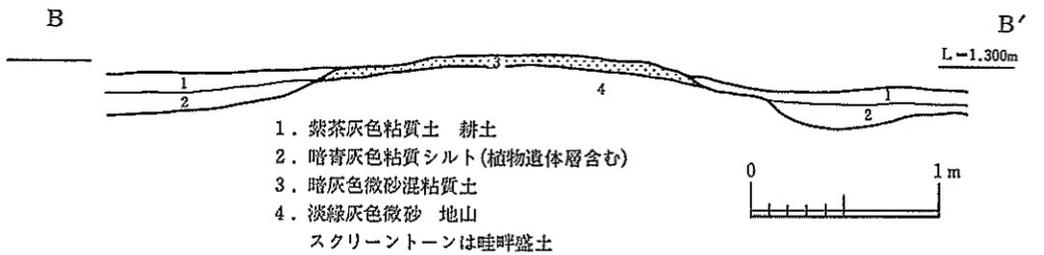
A地区北側では、第15層（茶灰色粘質土層）すなわち水田層上面を本遺構面とする。この第15層が途切れるA地区南側からB地区にかけては、第16層（灰褐色粘質土層）上面、およびこの層を覆って堆積する第14層（淡灰色砂）、第13層（暗青灰色粘質土）上面がともに第15層上面と対応すると考えられ、従って、2面に分離できる南半部をここでは一括した。溝2、杭列は第13、14層上面にある。弥生中期Ⅰ遺構面との間には北側では砂（第17層）、南側ではシルト（第16層）の厚い間層が見られ、また遺物の上からも、この時期、弥生中期中葉ごろには土地利用の空白が認められる。

遺構面の標高は+1.2~+2.0mを測り、南側がやや高くなる。水田・溝・杭列があり、時期は弥生中期後葉に比定される。

A. 水田

S T A. 87+52以北に位置する。砂（第12層）で覆われた部分に検出された。水田耕土は更に南へ続くが、途中で不明瞭になる。

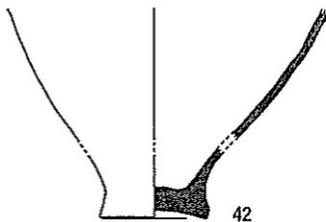
耕土は茶灰色粘質土（第15層）からなり厚さ約0.1mを測る。耕土直下は暗青灰色粘質土層（第16層）で、更にその下層は砂（第17層）となるが、畦畔部分ではこの砂層が盛り上っている。



第51図 弥生中期Ⅱ面 畦畔1断面図

S = 1/40

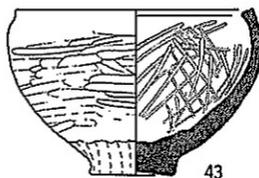
畦畔は1条検出したのみであるが、東西に延び、底幅3.0m、肩幅0.8m、高さ0.15mを測る。断面カマボコ形を呈す。東側に肩幅3.8mの水口を設けるが、水口部分を屈折点として畦畔は北へ向うようである。畦畔部分では第17層が盛り上っており、この高まりを利用して更に耕土を盛り上げて畦畔を作っている。盛土は周辺の耕土と同じ。水口付近には人間の南向きの歩行を示す足跡が検出された。深さが0.15m前後あり、水田面がかなり軟弱な時期に付着したと考えられる。



第52図 弥生中期Ⅱ面 水田耕土内出土遺物 S = 1/4

区画は明らかではないが、水田面の標高は畦畔の北側で+1.25~+1.35m、南側で+1.30~+1.40mを測り、南側がやや高い。また畦畔の南西側に接して深さ約0.1mの不定形の落込みが認められたが、これは水田面が水流で抉られたものと見られ、別の水口が付近にあったことを窺わせる。

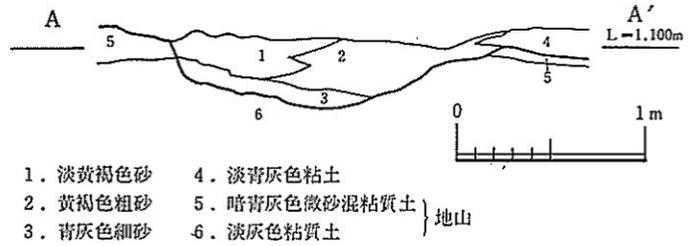
耕土中より出土した土器(42)は、表面に煤が付着し、剝離が著しい。底部内面にも炭化物が付着する。胎土は生駒西麓産である。なお、水田域からは離れるが第13層出土の鉢形土器(43)は完形に近い状態で検出された。内彎する口縁部をもち、端部は内傾する。内外面は篋磨き調整を施す。



第53図 弥生中期Ⅱ面 第13層出土遺物 S = 1/4

B. 溝・自然河川

〈溝1〉 STA. 87+74~88
+16に位置する。『L』字状に
曲る溝で、東からの溝が屈折部
に合流する。屈折部以南では肩
幅1.8m、深さ0.4m、を測り断
面U字形を呈するが、北側では
幅が拡がり、なだらかな断面形
となる。底面の標高はSTA.

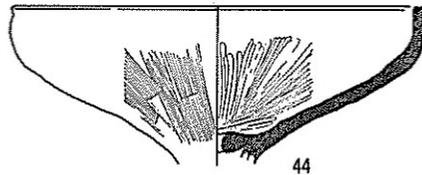


第54図 弥生中期Ⅱ面 溝1断面図 S=1/40

88+4で+1.94m、北西端で+1.70mを測り、北西へ低くなる。STA. 87+94付近の溝底には
径約0.3mの浅い凹みがあり、そのすぐ南側に木組の痕跡がみられた。木組はしがらみとも考え
られるが、確認はできなかった。埋土は砂である。底面や溝の周囲には多数の人間の足跡が認め
られた。

〈溝2〉 STA. 88+13、E5~W1に位置する。肩幅0.8~1.2m、深さ0.2~0.3mを測るU
字溝である。河川1埋没後に設けられたものである。『S』字状に屈曲して東西に延び、西側で
は2条に分岐するが、両端とも充分には検出し得なかった。分岐点近くの両肩には溝に平行して
木の枝などが置かれていたが、護岸的な施設と考えられる。埋土は灰白色粒（沼鉄鉱?）を含む
暗緑灰色粘質土。

埋土中からは高杯形土器の杯部が出土してい
る(44)。約1/2が残存する。杯底部は両側から
穿孔する。口縁上端面には凹線文状の強いナデ
が1本入る。外面は板状具によるナデ、内面は
筥磨き調整。



第55図 弥生中期Ⅱ面 溝2出土遺物 S=1/4

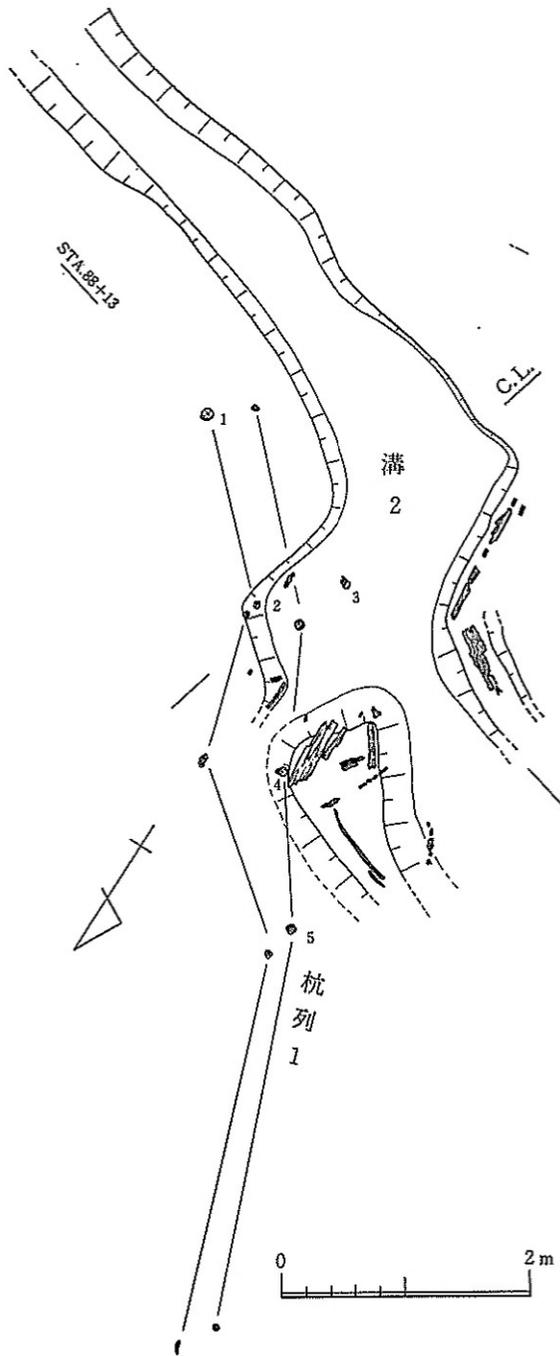
〈河川1〉 STA. 88+10~48に位置する。南々東から北西に流れる肩幅約9m、深さ0.2m
を測る浅い自然河川で、西方調査区外で溝1と合流するようである。南東部は次第に浅くなり2
条に分かれる。埋土は砂である。

C. 足跡群

STA. 88+50以南に位置する。弥生前期Ⅱ面の環濠状遺構面の起伏がこの時期まで残り、そ
の溝状の凹部に人間の歩行を示す足跡が多数認められた。深さ0.15~0.18mを測るものが多い。

D. 杭列

STA. 88+12、E2~W4位置する。溝1の埋土上から打ち込まれており、溝より後出する。
溝4と重複するが前後関係は明らかではない。東西に約0.4m離れて2本が対をなし、それが3.0
m間隔に5列認められた。ほぼ直線的に延びる。用途は不明。



第56図 弥生中期Ⅱ面 溝2、杭列1平面図 S=1/60

杭は長さ30~40cm、直径8~10cmのやや太いもので、先端を数方向から丁寧に削り尖らせている。

E. 小結

本遺構面の時期には北側は水田となったが、南側は積極的な土地利用はされなかったと見られる。しかし、時期が下るにつれ南側へ遺構が拡大しはじめるようであり、これと前後して南側が砂で埋没し地盤が上昇する。

水田は畦畔が一条検出されたのみである。また、2条の溝も灌溉用水路の可能性が高いものである。

第7節 弥生後期Ⅰ遺構面

第12層（淡黄褐色砂）及び第10層（暗灰色粘質土）上面を遺構面とする。A地区北半は微高地状を呈し、ここには、土塹、溝が認められた。A地区南半からB地区北半にかけては沼地となる。

B地区南半は前代から引き続きゆるやかに高まる。標高+1.2~+2.2mを測る。時期は、微高地上遺構群出土の土器より弥生後期前葉に比定される。

A. 微高地上遺構群

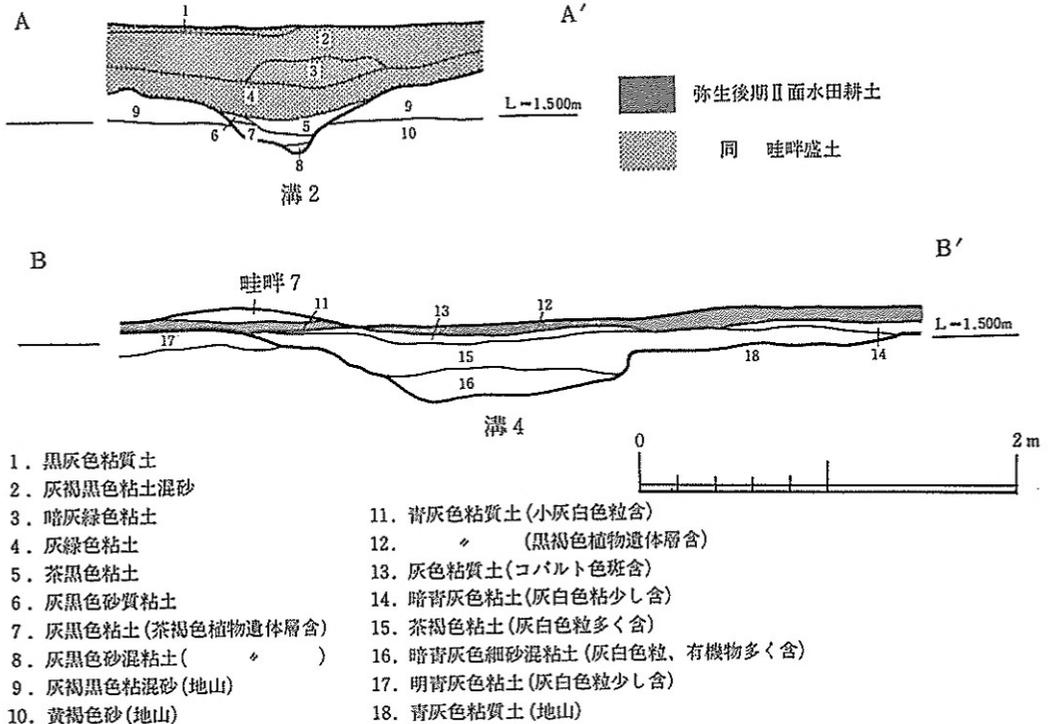
S T A. 87+52以北の微高地上の溝・土塋からなる。

<土塋1> S T A. 87+44、E 9に位置する。南半部のみ検出し、上径 0.3m以上、深さ0.08 m以上を測る。埋土は茶黒色粘土。

<溝1> S T A. 87+44~46に位置する。ゆるく『L』字状に曲る。肩幅0.8m、深さ0.1mを測るV字溝。埋土は茶黒色粘土である。

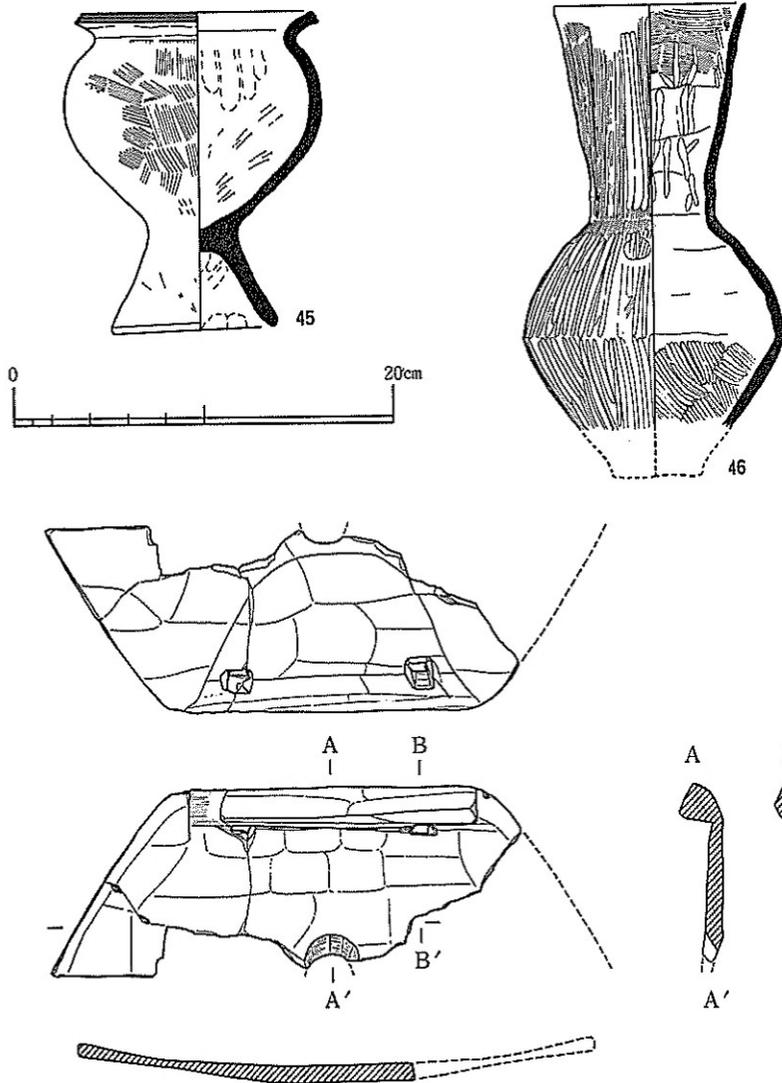
<溝2> S T A. 87+41に位置する。西北西から東南東にほぼまっすぐに延びる。肩幅1.6m、深さ0.35mを測るV字溝。E 4地点で、延 1.8mにわたって落込み状に溝幅が拡がり、この中からはほぼ完形の長頸壺形土器を検出した他、埋土からは少量の土器・木器が出土した。溝底は東にやや低くなる。埋土は茶黒色粘土からなり、下部には砂粒・植物遺体を含む。

落込み状拡幅部から出土した長頸壺形土器(46)は、口頸部が斜めにほぼ真直ぐ開く。胴部は張る。肩部には浮文の剝離跡と考えられる痕跡がある。台付甕形土器(45)は肩の張る体部をもつ。口縁部端面には凹線文を2条施す。台部は斜めに開く。体部内面には指押え痕があり、体部下半と、底部外面から台部を篋削り調整する。色調は明褐色を呈す。W-22は上部に横長の突起



第57図 弥生後期Ⅰ面 溝2、4断面図

S = 1/40



第58図 弥生後期I面 溝2出土遺物

S = 1/4

を残した木製品である。突起の下方には2ヶ所の穿孔がある。中央部の孔は柄孔とも考えられ、えぶりの可能性がある。

<溝3> STA. 87+48、W10に位置する。南北にのび、肩幅0.4m、深さ0.1mを測るV字溝である。埋土は茶黒色粘土。

<溝4> STA. 87+38~46、E11に位置する。南北にのび、途中で『く』字状に曲る。肩幅1.5~2.0m、深さ0.2mを測るU字溝である。埋土中には有機物を多く含む。

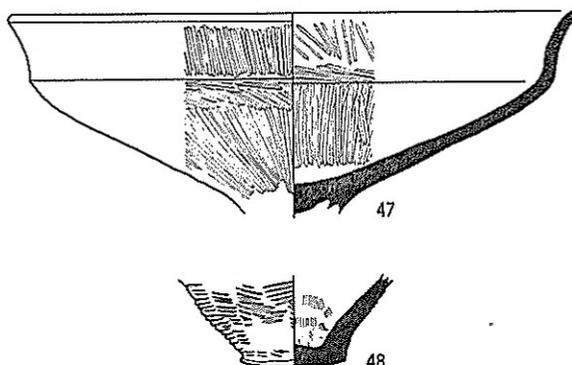
埋土より出土した高杯形土器(47)は、体部から屈曲して立ち上がり、外反する口縁部をもつ。内外面は篋磨き調整を施すが、屈曲部分の調整は粗雑である。杯部外面には刷毛目調整が残る。杯部と脚部の接合は円板充填による。生駒西麓産の胎土をもつ。他に甕形土器の底部もある(48)。

B. 沼状遺構

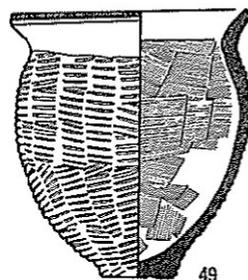
S T A. 87+45~88+70に位置する。南北約70mを測る。埋土は暗灰色粘質土（第10層）で、この上面を遺構面とした。厚さ0.2~0.3mを測る。菱の実が出土しており、やや水深のある沼状を呈したものと見られる。

埋土中からは甕形土器（49）が出土している。口縁部は短く外反し、体部の最大径は上半にある。

やや突出した底部で、中央は浅く凹む。体部上半の叩き目は、水平もしくはやや右下りである。内面は刷毛目調整。外面には煤が付着する。色調は淡茶褐色を呈している。



第59図 弥生後期Ⅰ面 溝4出土遺物 S=¼



第60図 弥生後期Ⅰ面 沼状遺構出土遺物 S=¼

C. 小結

弥生後期前葉には、調査区の北側に洪水堆積物からなる新たな微高地が出現し、この結果、南側が排水不良の沼地になったものと考えられる。こうした地形変化に伴って微高地上には土壌・溝が作られるが、これを覆う包含層に有機物や土器片を比較的多く含むことなどから、この付近に住居地があったものと見られる。

第8節 弥生後期Ⅱ遺構面

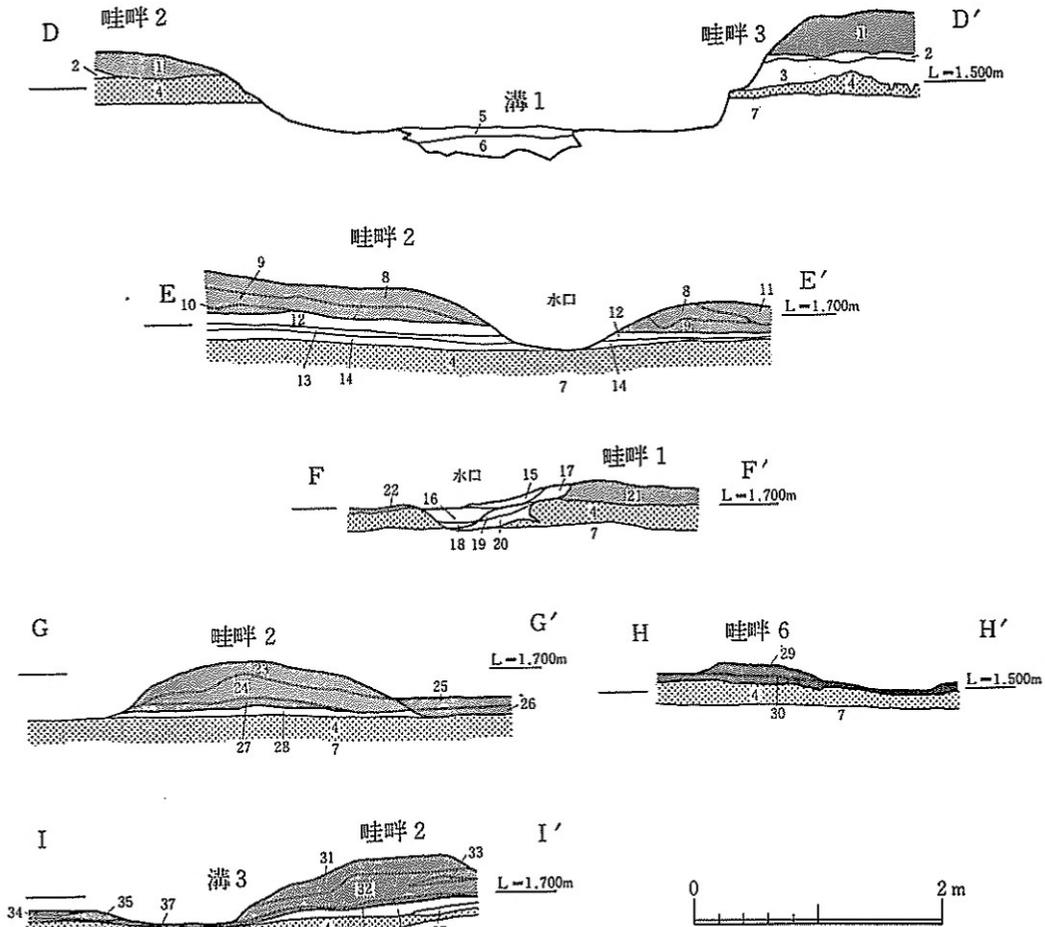
第8層（青灰色粘土層）上面を遺構面とする。弥生後期Ⅰ面との間に薄い間層（第9層）を挟むが、これは水田の床土として機能する。従って先行する遺構面の起伏を受け継いでいる。標高+1.4~+2.3mを測る。水田遺構・溝が検出された。時期は弥生後期中葉である。

A. 水田

S T A. 88+40以北に位置する。水田面はシルト層（第7層）で覆われている。南限は地盤が上昇して、明瞭な境界施設をもたないまま水田耕土が途切れている。

水田耕土は青灰色粘土（第8層）で、中に黒褐色の炭化した多量の植物遺体の細片（イネの茎葉かと思えるが未確認）と、コバルト色の斑点（昆虫などの動物遺体か？）を含む。厚さ5~6cmを測る。

畦畔は幅2~3m、高さ0.3m以上の大畦畔と、幅1m、高さ0.2m以下の小畦畔に分かれ、合



1. 緑青灰色粘土(灰白色粒、茶褐色植物茎、砂層含)
2. 暗茶灰色粘土
3. 青灰色細砂(茶褐色植物層含)
4. 灰黑色粘土(灰白色粒含)
5. 暗緑灰色細砂土
6. 淡灰色細砂
7. 明青灰色粘土
8. 紫褐色粘質土
9. 淡灰褐色粘土(灰白色斑含)
10. 赤褐色粘土
11. 褐色粘質土
12. 暗灰色粘土
13. 緑褐色粘土(赤黄色砂混り)
14. 黄褐色砂
15. 暗灰色シルト
16. 暗灰色粘土(灰色粒、植物遺体、コバルト斑含)
17. 赤褐色微砂
18. 赤褐色細砂
19. 暗灰色粘土(灰色粒、植物遺体、コバルト斑含)
20. 赤褐色細砂
21. 暗灰色~明青灰色粘土(小灰白粒多い)
22. 暗茶灰色粘土

23. 暗青灰色細砂混粘土(明黄灰色粒含)
24. 明青灰色粘土(小灰白粒含、ブロック土)
25. 明青灰色粘土(小灰白粒含)
26. 茶褐色粘土(茶褐色植物層含)
27. 暗緑灰色粘土(黒褐色植物層含)
28. 暗青灰色粘土
29. 緑灰色細砂混ブロック粘土 小哇畔盛土
30. 青灰色粘土(黒褐色炭化植物層を6-7層含)
31. 暗青灰色細砂混粘土(植物粒、黒色粘土粒含)
32. 明緑灰色粘土
33. 暗褐色粘土混砂
34. 青灰色粘土(小灰白色粒含)
35. 青灰色粘土(黒褐色植物層、微砂含)
36. 青灰色粘土
37. 淡灰褐色細砂

第61図 弥生後期Ⅰ面 哇畔断面図

S = 1/60

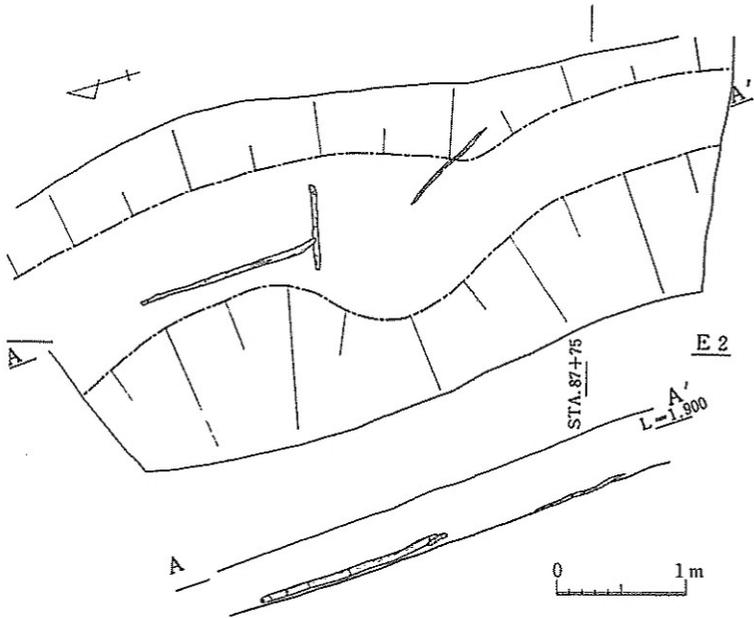
計8条検出した。後者は土層断面で確認した。

<畦畔1> STA. 87+35~47に位置する。『L』字形に屈曲し、北端は弥生後期Ⅲ面河川1で破壊される。底幅2.0m、肩幅0.8m、基底面からの高さ0.3m、北側耕土面から高さ0.5mを測る。断面はカマボコ形を呈す。屈曲部のすぐ西側、E2.7m地点には肩幅0.6mの水口が、砂、粘土の互層によって閉じられた状況で検出された。

畦畔1の屈曲部からは完形の甍形土器(51)が埋置された状態で出土した。口縁部は『く』字形に外反する。体部最大径は中程にあり、底部は突出する。叩き目は口縁部外面に及び、肩部まで縦方向の刷毛目が施されている。内面は口縁部を横方向の刷毛目で、体部を斜め方向の刷毛目で調整される。底部外面には木葉痕がある。同地点では更に1点の甍形土器破片(50)が出土している。口縁端部には面を持つ。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整されるが上半では粘土紐の継ぎ目が残る。外面には煤が付着する。胎土は生駒西麓産。以上の他、同畦畔西部からは高杯形土器(52)が出土している。椀型で刷毛目調整の上に篋磨きを細かく施す。53と同一個体であろう。生駒西麓産。

<畦畔2> STA. 87+44~88+20に位置する。

畦畔1の屈曲部のすぐ東側から大きく曲りながら南へ延び、延長は73m以上に及ぶ。一部弥生後期Ⅲ面河川1によって破壊されている。底幅2.6~3.0m、肩幅0.7~1.5m、基底部からの高さ0.5~0.6m、耕土上面からの高さ0.3~0.5mを測る。水口は畦畔1との間、及びSTA. 87+87地点の2ヶ所に認められた。畦



第62図 弥生後期Ⅲ面 畦畔2内木材出土状況平面、立面図 $S = \frac{1}{60}$

畔西側に接して幅1.0~1.2m、深さ0.1mの浅い溝(溝3・4)があり、溝3は北側の水口に通じていた。畦畔は耕土上に築かれ、芯に灰緑色粘土と砂のブロック土、表面に砂を含む暗青灰色粘質土を盛る。なお、STA. 87+77付近の畦畔内部の基底面直上には、棒状の木材が、畦畔築造時に置かれた状況で出土した。

<畦畔3> STA. 87+73~88+14に位置する。一部を検出したにすぎないが、溝1を隔てて畦畔2と平行する。南側の低い部分は水口であろうか。西側が弥生後期Ⅲ面河川1で若干削られ

るが、現底幅3.0m、肩幅0.6m、耕土上面から高さ 0.3mを測る。耕土上に築かれ、盛土は畦畔1と同様である。

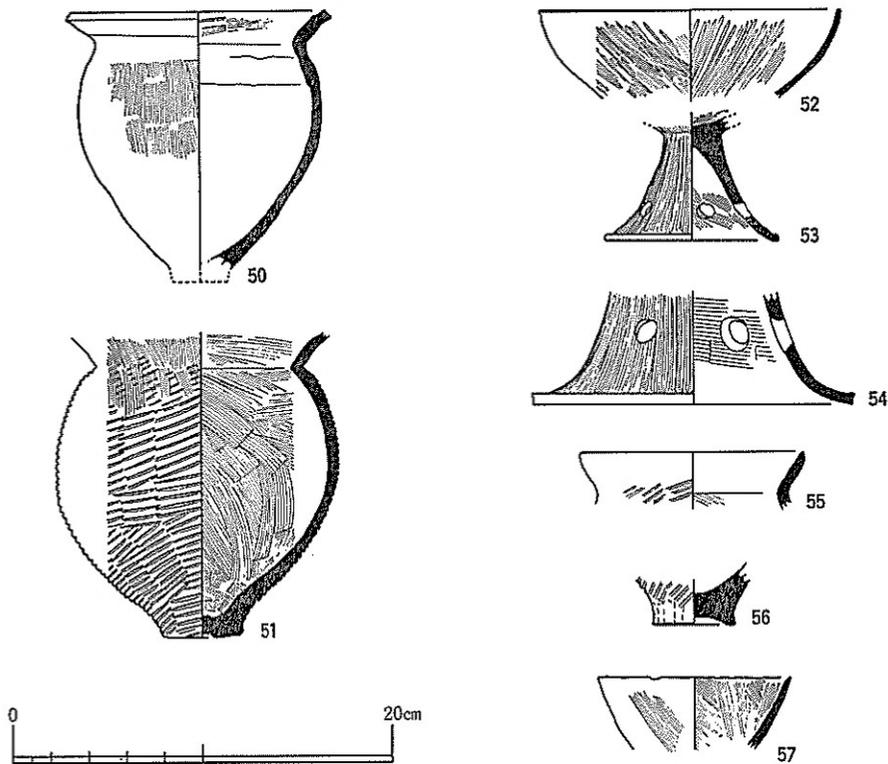
畦畔3からは鉢形土器の口縁部片(57)が出土した。

<畦畔5~8> 上記の3条の大畦畔に対して、これらは小畦畔である。畦畔6は底幅 1.0m、高さ0.1mを測り、西側に幅0.8m、深さ0.08mの小溝を伴う。畦畔7は底幅 0.8m、高さ0.06mを測る。いずれも断面は扁平なカマボコ形を呈す。耕土上に築かれ、耕土を盛り上げているが、細かいブロック状を呈し、灰白色粒を若干含んでいる。

水田遺構に伴う溝は、前述の畦畔側溝の他に、次の2条が検出された。

<溝1> STA. 87+73~88+14に位置する。南北方向にのび、検出された範囲では畦畔2・3間にある。即ち畦畔2、3は溝1の堤防となっている。溝自体は、同じ位置を流れた弥生後期Ⅱ面河川1によって大半が破壊され、底部の一部が残存するのみである。底幅は現状で 1.0mを測り、底面から畦畔2・3上面に至る比高は1.1~1.2mを測る。本来の肩幅は約3mと推定される。残存した埋土は下部に細砂が見られ、水流があった事を示している。上部は有機質を多量に含む暗緑灰色細砂土である。

<溝2> STA. 88+14、E12に位置する。東西にのび、溝1と合流する。畦畔3盛土の下にあり、これに先行する。肩幅1.6m、深さ0.3mを測るU字溝である。埋土は溝1と共通する。



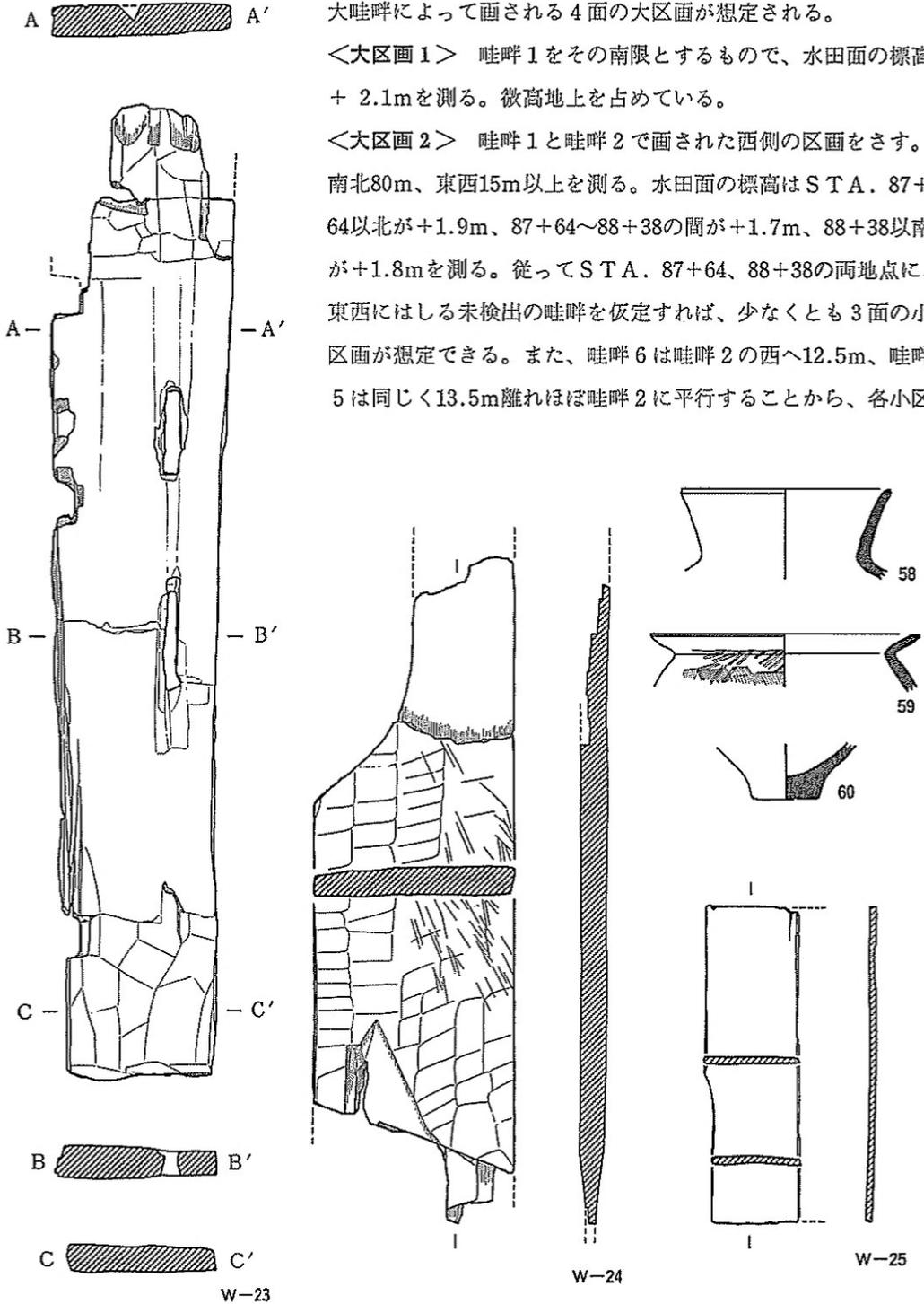
第63図 弥生後期Ⅱ面 畦畔1 (50~56)、畦畔3 (57) 出土遺物

S = 1/4

水田区画については小畦畔が十分に検出できず、また調査範囲の制約もあって、十分に明らかにする事はできなかったが、大畦畔によって画される4面の大区画が想定される。

<大区画1> 畦畔1をその南限とするもので、水田面の標高 + 2.1mを測る。微高地上を占めている。

<大区画2> 畦畔1と畦畔2で画された西側の区画をさす。南北80m、東西15m以上を測る。水田面の標高はS T A. 87+64以北が+1.9m、87+64~88+38の間が+1.7m、88+38以南が+1.8mを測る。従ってS T A. 87+64、88+38の両地点に、東西にはしる未検出の畦畔を仮定すれば、少なくとも3面の小区画が想定できる。また、畦畔6は畦畔2の西へ12.5m、畦畔5は同じく13.5m離れはほ畦畔2に平行することから、各小区



第64図 弥生後期Ⅱ面 包含層第7層出土遺物 58~60・W-24 S=1/4、W-25 S=1/2、W-23 S=1/6

面の東西幅は約12~13mあったと推定される。

<大区画3> 畦畔2を西限とし、溝1との間に想定されるものである。標高+1.6mを測る。

<大区画4> 畦畔3を西限として想定されるもので、標高+1.6mを測る。

C. 包含層出土遺物

遺構面を覆って堆積する第7層からは土器や木器が出土している。土器は全て磨滅の著しい小片である(58~60)。W-23は両端をわずかに薄く加工する。長辺の一方に3ヶ所の挟りがあり、長方形の孔を穿つ。一端は破損する。W-24は長辺の一方を丸く削り込んだもので、両面には加工痕が残る。表面には斜め方向の擦痕が見られる。両端は欠損するが、一端は徐々に薄く加工する。W-25は長辺の一方をわずかに削り込むにすぎない。

D. 小結

本遺構面の水田は、弥生後期I面に見られた沼池の部分に排水路の役割を果す溝1を設け、一方微高地は大畦畔で囲むことによって水平面を維持するなど、地表面の起伏に応じた工夫が認められる。特に微高地上の水田は、未検出の導水路、ないしは水の汲み上げによる灌漑法が想定される。

第9節 弥生後期Ⅲ遺構面

第7層(暗灰色シルト層)上面を遺構面とし、標高+1.8~+2.6mを測る。南側がより高くなるが、北側も先行する微高地の高まりをわずかに残す。遺構としては杭列・自然河川と足跡群が検出された。時期は自然河川内、あるいは覆土中の土器から弥生後期後葉に比定される。

A. 杭列

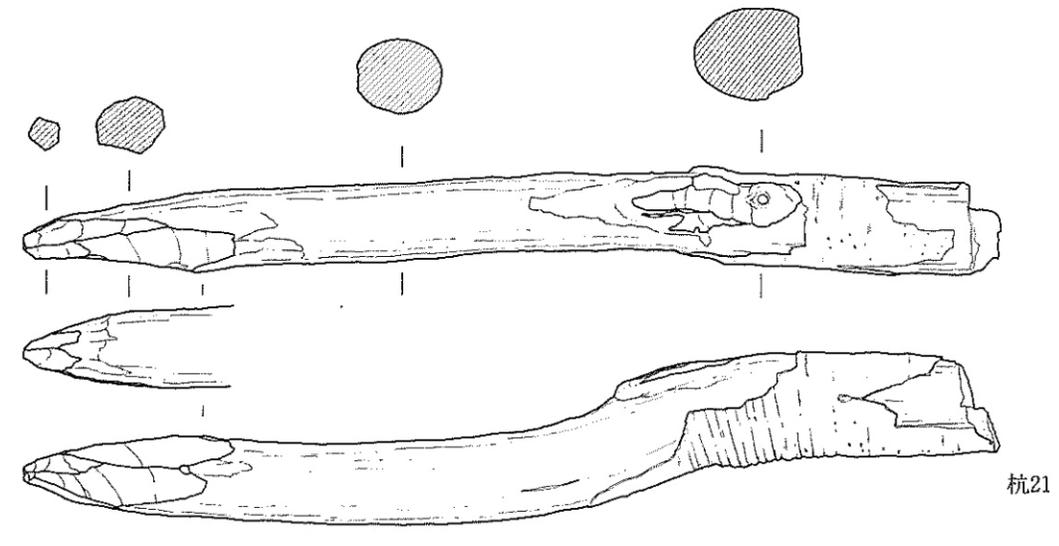
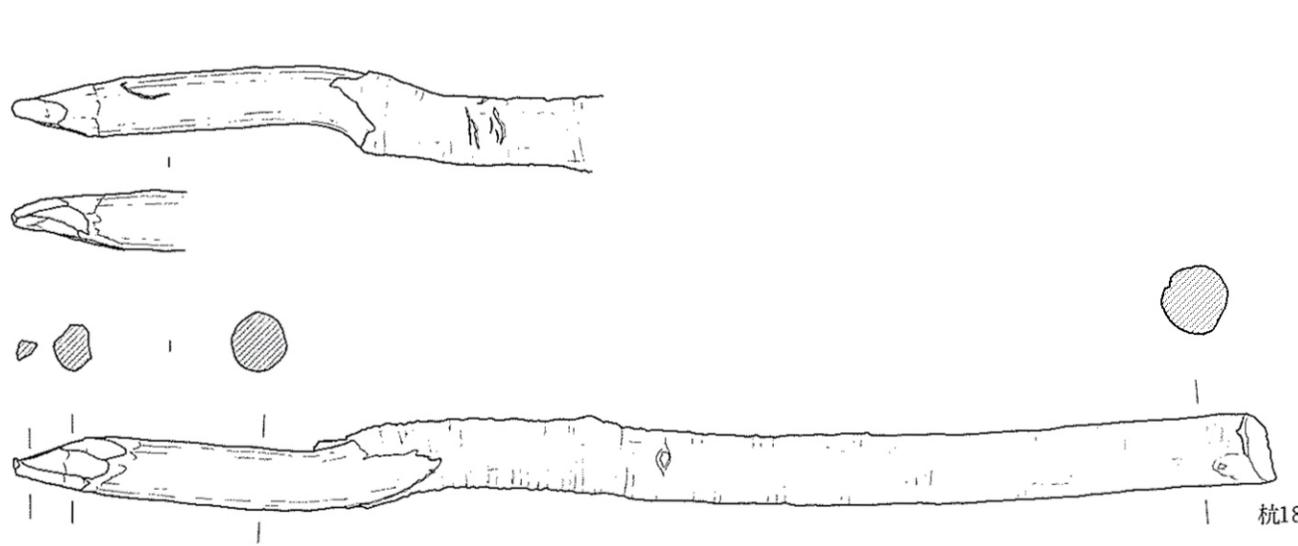
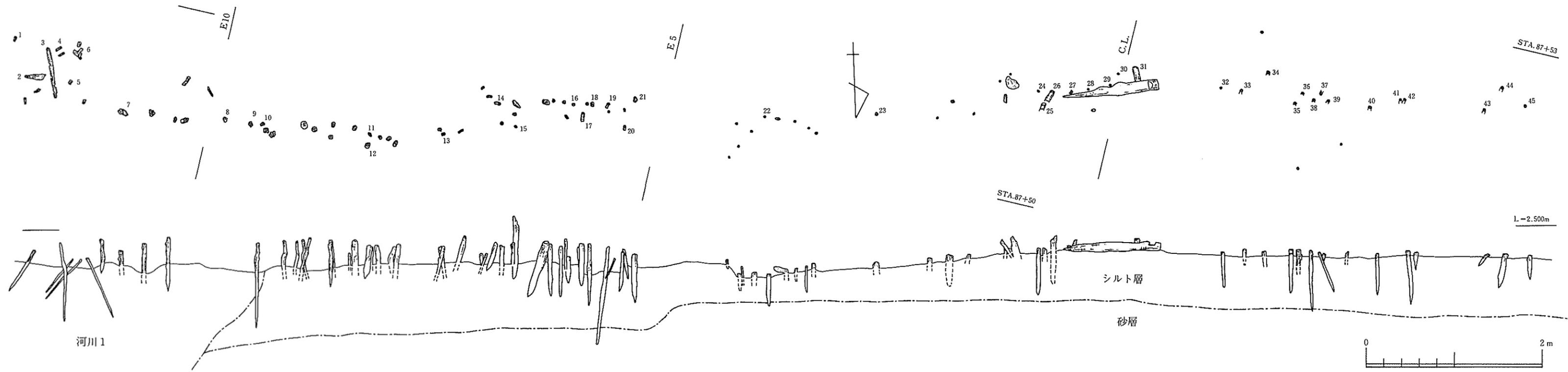
STA. 87+50に位置する。幅約0.5m、延長17.6m以上の杭列で、東西にはほぼ直線的に延び、両端は調査区外に続く。東側では河川1埋土上に打ち込まれ、河川に後出する事がわかる。

大半の杭は頭をやや南に傾け、10~15cm程度遺構面より露出するが、砂層(第6層)堆積時にその上部が流失していたものと考えられる。杭の配列は第65図のとおりであるが、杭列の延びる方向と約0.1~0.2mの間隔で数本が一単位となって並んでいる場所もあり、所によっては2列が平行している。

C.L.付近では、長さ110cm、径12cmの棒材が横に置かれていた。

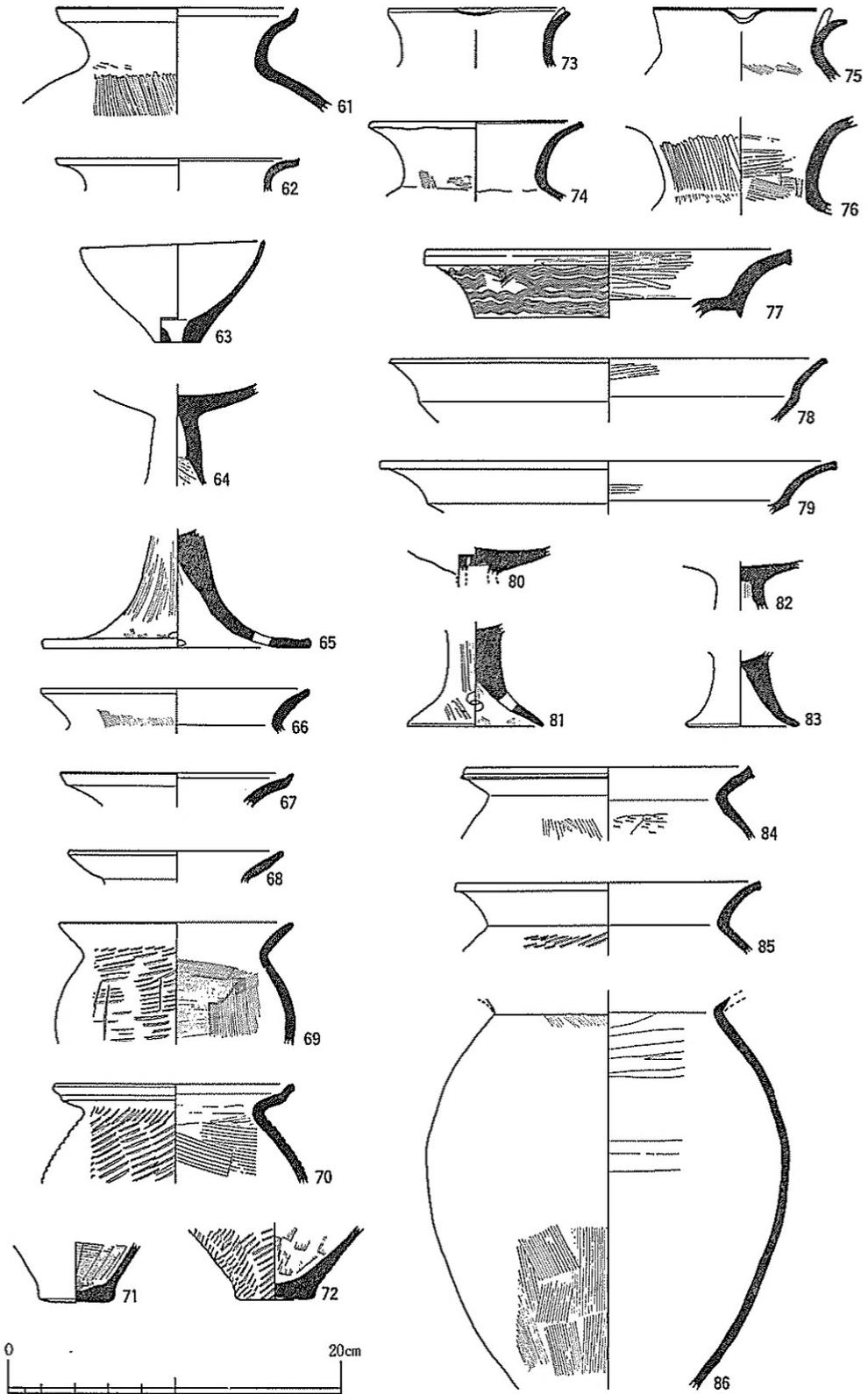
検出された木杭は合計65本を数える。長さ0.4m前後のもの、長さ1.0m前後の長、短2種類に分けられるが、前者は浅く打ち込まれ数も少ない。直径はともに3~4cmを測る。先端は3~4方向から斜めに尖らせる。

この杭列は、流失した畦畔に伴う杭、土留め杭、及びしがらみの一部とも考えられるが、周囲



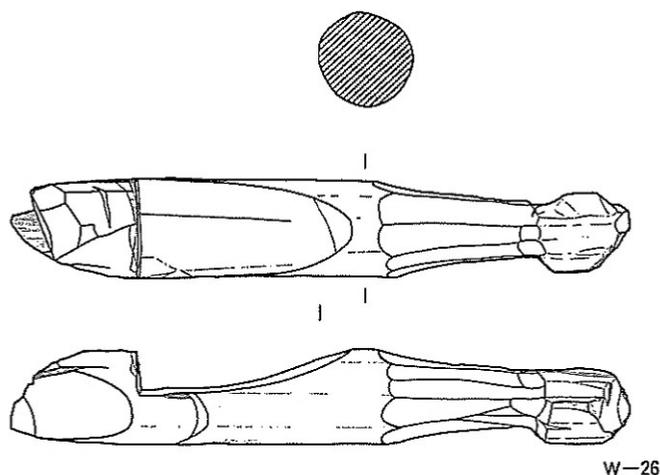
第65図 弥生後期Ⅲ面 杭列1平面、立面図および杭18、21実測図 $S = \frac{1}{40}$, $S = \frac{1}{4}$



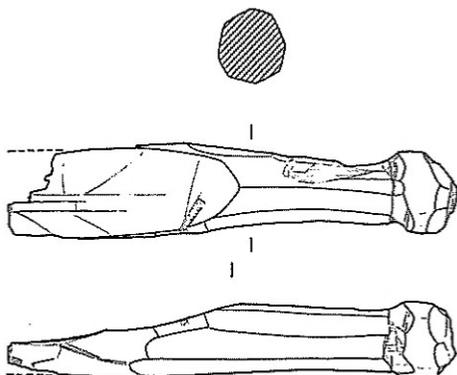


第66図 弥生後期Ⅲ面 杭列1周辺出土遺物(1)

S=1/4



W-26



W-27



第67図 弥生後期Ⅲ面 杭列1周辺出土遺物(2) S=¼ 外面を刷毛目、内面を肩部

まで篋削りしたもの(84)もある。86は体部破片で、外面は刷毛目調整、内面は篋状工具によるナデ調整である。他に底部破片もある。後期の土器以外に、前期・中期の土器も混入している。

木製品は2点出土した。ともに頭部を作り出し、周囲の一部を挟り込んだ棒状木製品である。W-26の尾部には切り込みがある。末端の加工と他の部分では、時間的に差があるかも知れない。類例が瓜生堂遺跡より出土している^{BE 1}。時期も同様に後期である。

B. 河川1

STA. 87+32~88+14に位置する。ほぼ南北に延びる自然河川である。南側では弥生後期Ⅰ面溝1跡の凹地を流れる。肩幅3.5m、深さ1.2mを測る。兩岸は水流で抉られている。埋土は大きく2層に分かれる。下層は粗砂層で土器を含み、上層は細砂・砂・小礫が互層をなす。この河

の状況からは用途は断定できない。

杭列の周辺からは土器や木器がかなり出土しているが、土器は磨滅した小破片が大部分である。

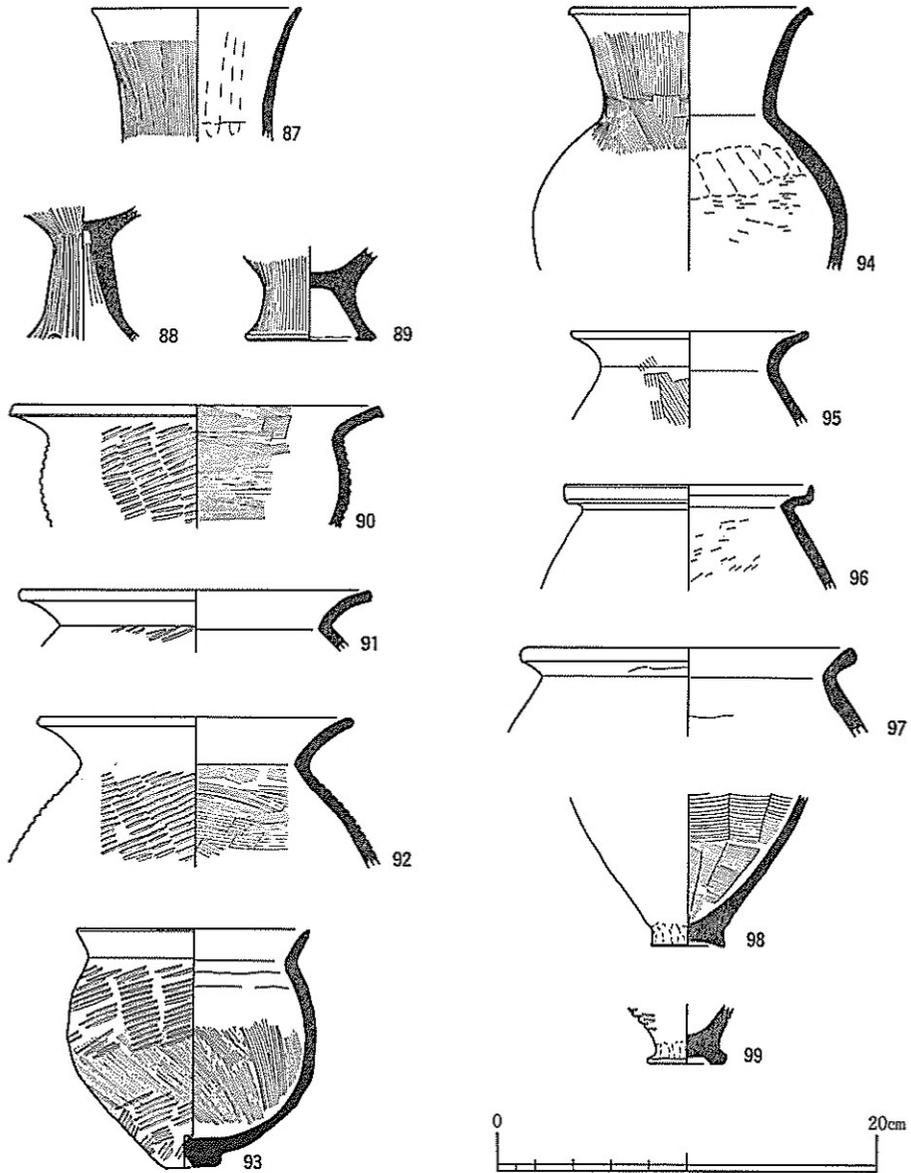
広口壺形土器(61)の口縁部は端部をつまみ上げたものである。二重口縁の壺(77)は、端面に乱雑な波状文を施す。片口の口縁部をもつ壺形土器もある(73・75)。鉢形土器(63)は底部に焼成前の穿孔が見られる。高杯は口縁部と脚部が数点見られる。口縁部は外反し、体部との稜線は明瞭である。脚部は全体的に短く小型が多い。脚部に杯部を接合し、脚頂が杯底部となる。甕形土器の口縁部形態は、端部が丸くおわるもの、面をもつもの、受口状口縁がある。調整は叩き目以外に、

川埋没後の溝状凹みには薄く青灰色シルトが堆積する。

土器はS T A. 87+70~80の範囲を中心に出土したが、かなり磨滅している。壺形土器(94)は体部内面の中程まで篋削り調整する。甕形土器は口縁部が外反しそのまま終るもの他に、受口状口縁(96)がある。93の口縁部は短く、体部最大径の位置はかなり低い。底部は小さく、突出して中央部は凹む。外面は肩部、体部下半の叩き目を刷毛目で消している。

C. 足跡群

S T A. 88+43~53に位置する。幅10m、長さ20m以上の範囲に人間の足跡が多数検出された。



第68図 弥生後期Ⅱ面 河川1出土遺物

S = ¼

一部に歩行状態を留める。足跡は深さ4～10cmを測る。足跡の付着面は周囲より20cmあまり帯状に高まる。

D. 小結

自然河川は、弥生後期Ⅱ面を覆うシルト層を堆積させた河川の最終段階の姿と言える。この中に土器がかなり含まれ、上流にこの時期の居住地があったものと見られる。杭列はそうした堆積作用が一応終結した直後に築かれたものであるが、それに伴う遺構面の性格は明らかではない。

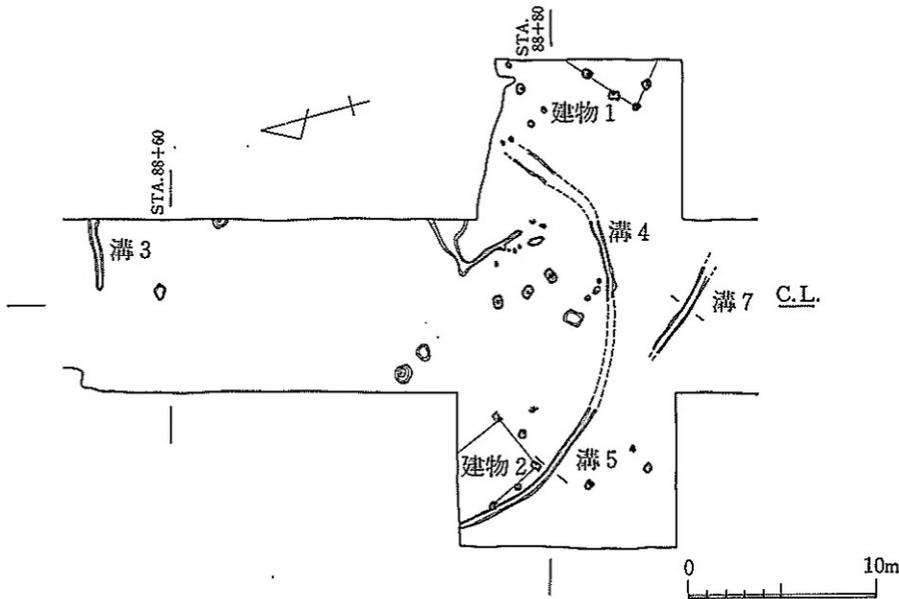
註1 大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター「瓜生堂」 1980

第10節 古墳～奈良時代遺構面

第6層(淡灰色砂層)上面で検出された遺構、及びこれを覆う第5層(暗灰色粘質微砂層)上面の遺構を一括した。標高+2.7～+3.2mを測り、南側がやや高まるものの、ほぼ平坦と言って良からう。古墳時代前期から奈良時代にかけての遺構を含む。古墳前期?では掘立柱建物を伴う集落、後期中葉では小形方墳、後期後葉では不定形土壙群が、また奈良時代では土手などが検出されている。

A. 集落

STA. 88+50～90に位置する。掘立柱建物、土壙、溝からなる。遺構の分布域は南北約30m



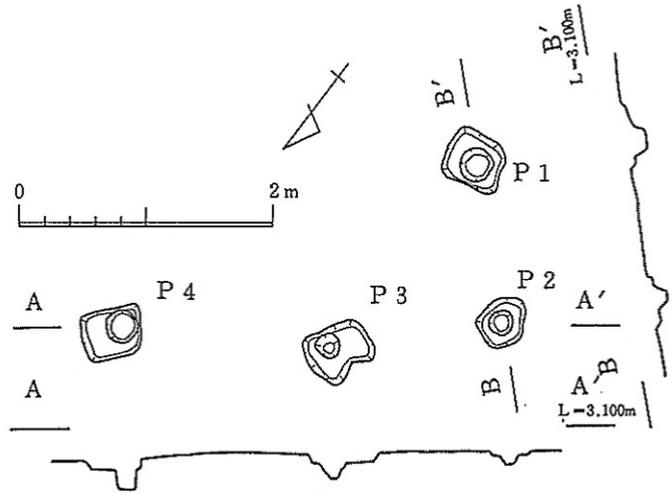
第69図 古墳～奈良面 古墳時代集落平面図

S = 1/400

に限られるが、南側では地盤がやや高くなる事から、後世の削平を受けた可能性も考えられる。遺構面の大部分を覆って堆積するのは第5層である。遺構内埋土からは土器は出土していないが、第5層出土遺物から推せば、古墳前期となる可能性が高い。

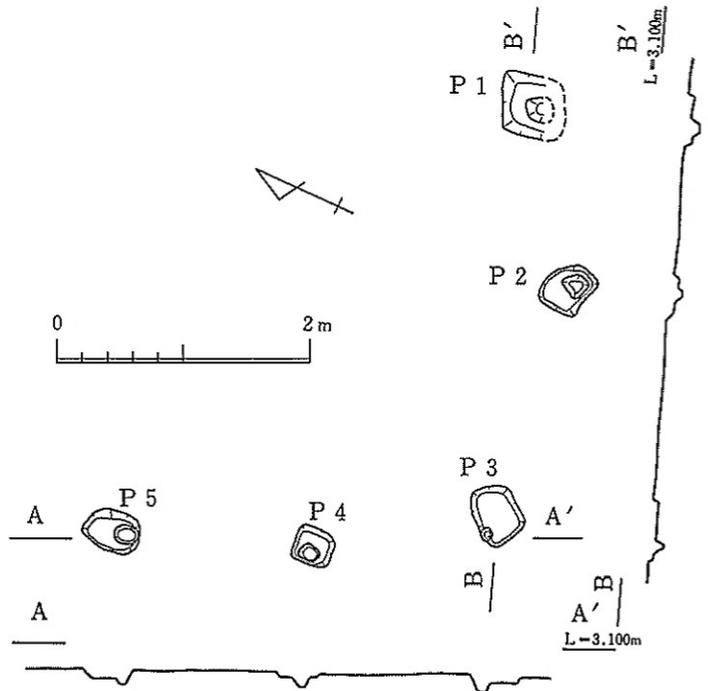
掘立柱建物は2棟確認されたが、他にも柱穴は検出されており、更に多くの建物の存在が想定できる。

<建物1> STA. 88+85、E12に位置する。西半分を検出し、規模は2間×2間以上で柱間寸法は南北が1.4~1.7m、東西が1.3mを測る。柱穴掘り方は1辺0.4m、深さ0.2mの隅丸方形を呈し、直径0.1~0.15mの柱痕が検出された。



第70図 古墳~奈良面 建物1平面、断面図 S=1/60

<建物2> STA. 88+78、W8に位置する。北半は後世の削平を受ける。規模は2間×2間以上と見られる。南妻柱(?)は柱筋よりやや外に位置する。柱間寸法も必ずしも一致しない。柱穴掘り方は1辺0.3m、深さ0.1m前後の隅丸方形で、直径0.07~0.1mの柱痕をもつ。なお、溝5と重複するが先後関係は明らかではない。



第71図 古墳~奈良面 建物2平面、断面図 S=1/60

<溝> 5条検出された。ともに幅0.4~0.5m、深さ0.2~0.3mを測るU字溝である。溝4・5は同じ溝の可能性が強く、北向きの円弧を描くことから、区画を意図したものかもしれない。

B. 古墳

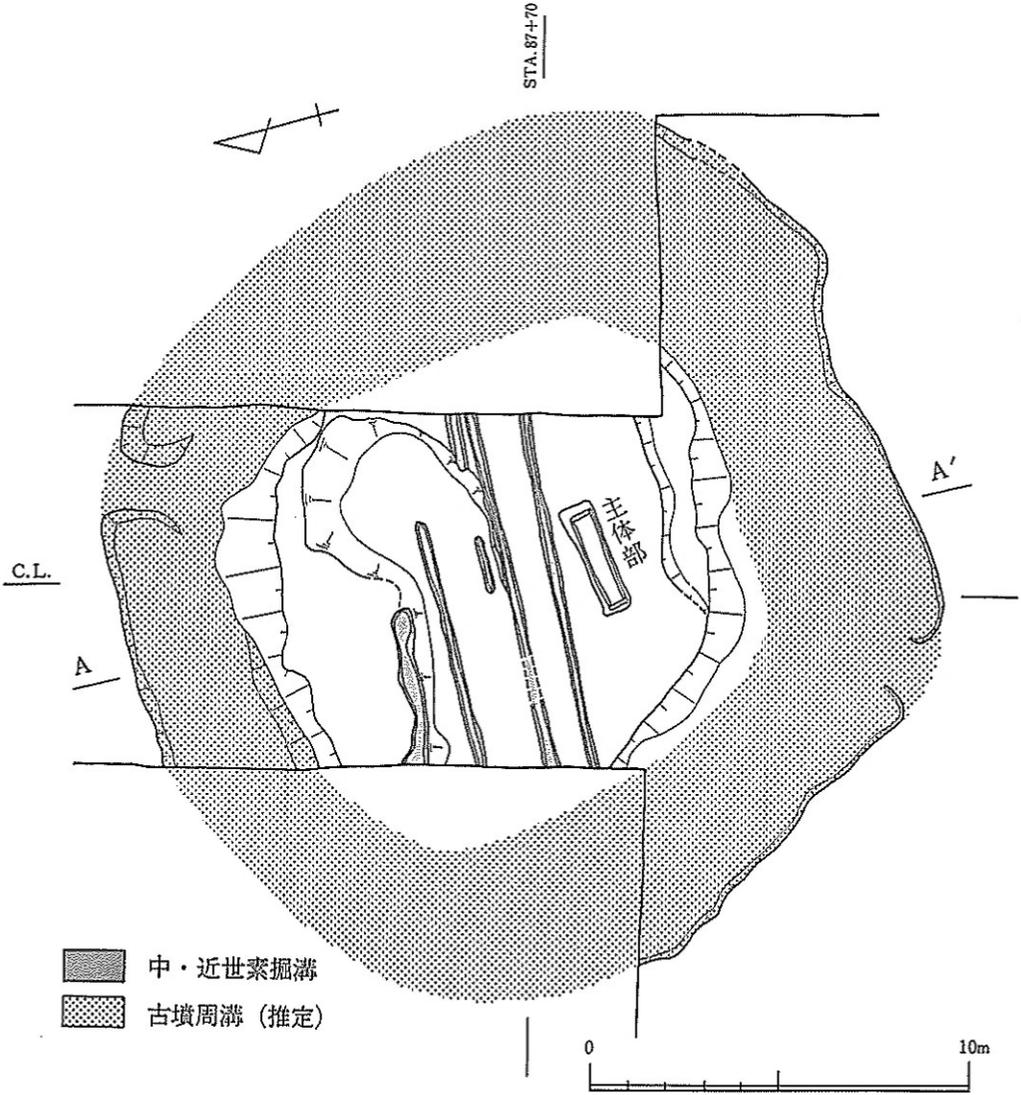
S T A. 87+60~70に位置する。墳丘は東及び西の角を除いてほぼ全体を検出し得た。墳丘は方形プランを呈し、現状で南北13m、東西12m、周溝底からの高さ0.68mを測る。墳丘の頂部や周辺は後世の削平を受けており、墳頂部には中・近世の素掘り溝が認められた。墳丘の主軸方位はN-8°-Wにあたる。墳丘は第5層上に構築されている。南北断面の所見によれば、まず、外周に暗茶褐色粘質土を底幅2~3m、高さ0.4~0.5mの堤状に積み、次にその中央の凹地を灰茶褐色土及び淡茶褐色土で埋めている。

周溝は墳丘の四周に設けられ、最大幅3.8m、深さ0.3mの浅い『U』字状断面をなす。周溝の外郭線は不整な円形を呈し、墳丘隅部分では陸橋状に浅くなる。埋土は、墳丘埋土の再堆積層と見られる茶褐色土で、底部の一部には青灰色粘土が見られる。埋土中からは須恵器片がかなり出土している。また東側周溝内より円筒埴輪片が出土したが、本来、この古墳に伴うものか否か明らかではない。

主体部は墳頂部のやや南寄りに1基検出された。主軸をほぼ東西に向けている。木質部分は腐蝕し、既に桃色の粘土に変化していたが、その痕跡から箱形木棺と推定され、内寸で長さ2.6m、東小口幅0.5m、西小口幅0.35mを測る。本来の高さは不明で、現状では底から0.04m程度残存していたにすぎない。木棺痕跡確認前に取り上げてしまったが、木棺東南隅から須恵器2点が出土している。この主体に伴う供献土器と考えられる。なお、この主体部は墳頂部の南寄りにある事から、中心部もしくは北寄りに別の埋葬主体が設けられていた可能性が高い。

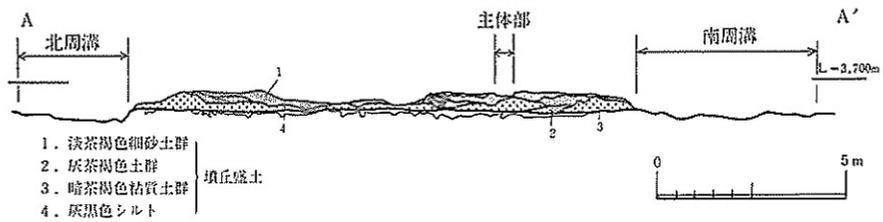
木棺内部には鉄鏃・ガラス玉が副葬されていた。また人骨がごくわずかに残存していた。これらはともに木棺の東南部にあった。鉄鏃は合計10本あり、切先を東向きにそろえて重ね並べられている。基部のやや西側には木質が見られ、矢柄を付けたまま埋納されたと考えられる。ガラス玉は破片を含めて合計80点出土した。数点が連なって残る部分も見られ、復元した長さから耳輪と考えられる。木棺は上半部が削られているため、この他にも副葬品を伴った可能性は否定できない。人骨はガラス玉と一部重なって、その下から検出された。耳輪との推定が正しければ、頭部を東向きに埋葬されたものであろう。なお、ガラス玉の蛍光X線分析によれば微量の水銀が検出された。調査時には確認できなかったが、木棺、もしくは人骨等に塗付された水銀朱がガラス玉にも付着したものであろう。

<ガラス玉> 直径3~4mm、孔径1mm前後、厚さ2~4mmを測る。形態は両端に丸みがあるもの、両端が平坦なものに大別できる。色調は濃青色を主体とし、他に青緑色、緑色など多種類のもものが混在する。大部分が散在して出土したため、ガラス玉の本来の配列を想定する事は困難である。総延長は約18cm。蛍光X線分析によれば材質はアルカリ石灰ガラスであり、鉄と銅により着色されている事が判明している^{註1}。また微量の水銀も検出されたが、これは主体部に伴った水銀朱の影響であろうか。



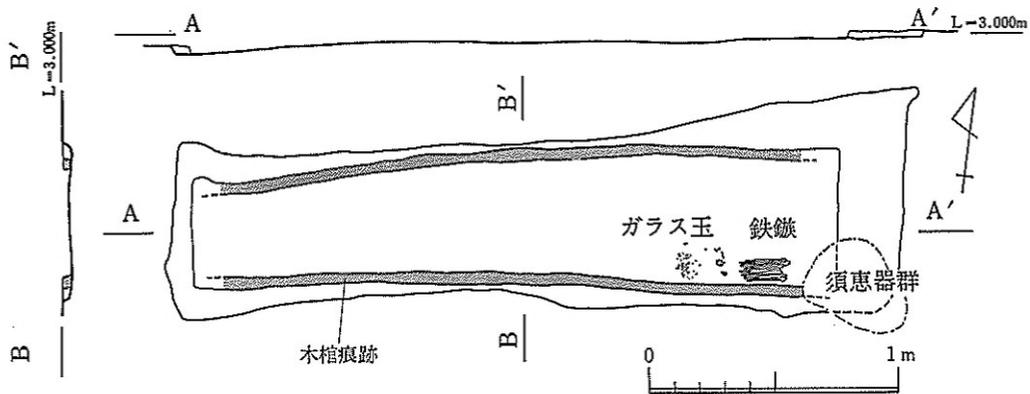
第72図 古墳～奈良面 古墳平面図

S = 1/200



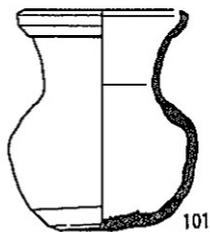
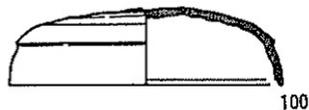
第73図 古墳～奈良面 古墳墳丘断面図

S = 1/200



第74図 古墳～奈良面 古墳主体部平面、断面図

S = 1/30



第75図 古墳～奈良面 古墳供献遺物 S = 1/4

〈鉄鏃〉 鏃身と茎の間に長い棒状の筥被のある長頸鏃である。錆が著しく詳細は明らかではないが、鏃身は小さく、筥被の断面は長方形を呈しているものと考えられる。全長約17cm、茎の長さ約6cm、鏃身の幅約1.1cm、筥被の中央部の幅約0.6cmである。茎部には、樹皮が巻かれており、矢柄を着装した状態が認められる。

〈供献土器〉 供献土器として、須恵器の杯蓋、壺がある。杯蓋（100）は稜がわずかに残る。口縁部・天井部は彎曲する。完形品。壺（101）は頸部が太く、口縁部を外方に屈曲させ内方へつまみ上げて端部とする。円孔を伴わないが、形態は壺に類似する。

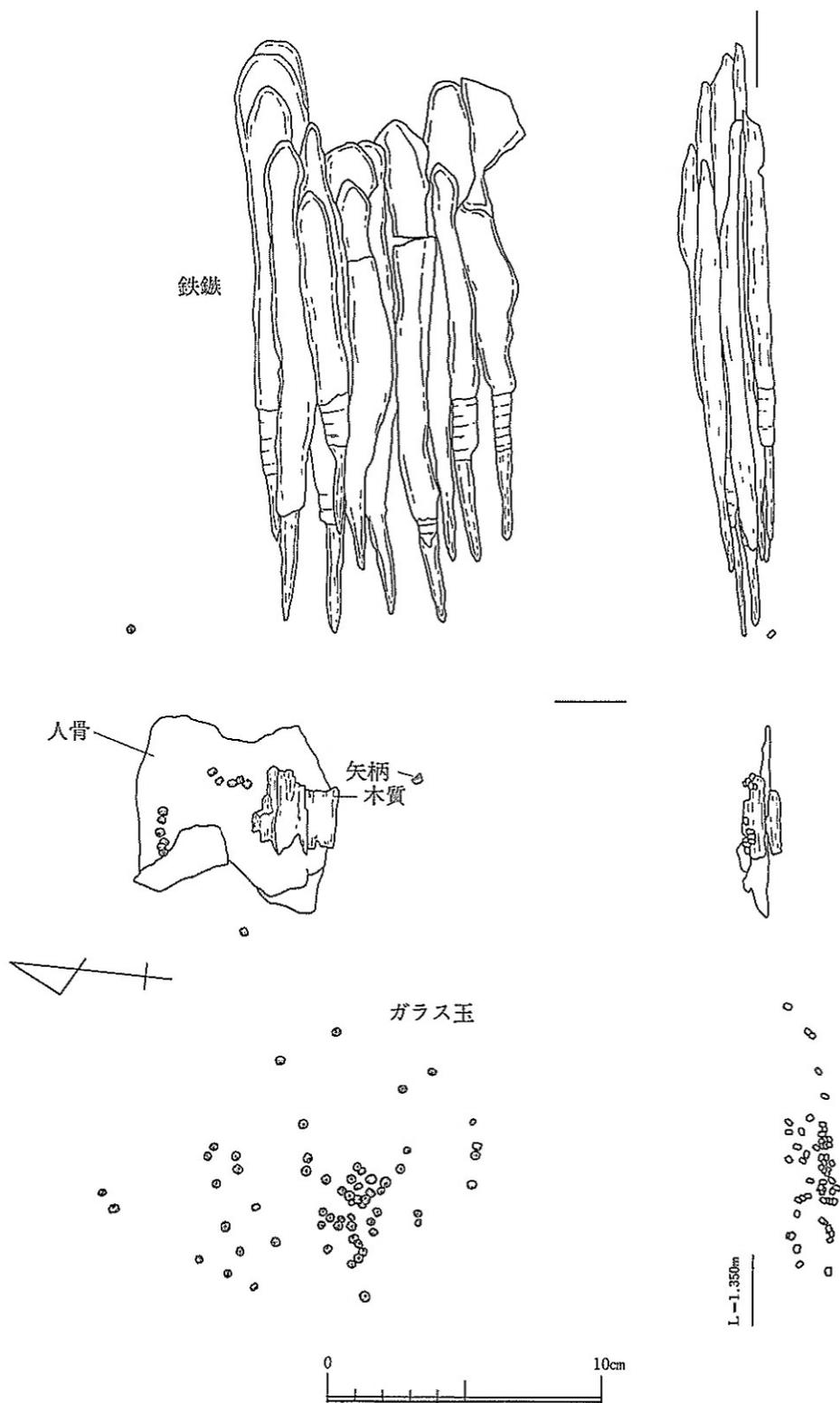
〈周溝内出土土器〉 東周溝より須恵器の杯蓋（104）、壺の口縁部（107）、短頸壺（110）が出土した。短頸壺はほぼ完形。

他に円筒埴輪片（111）も見られる。北周溝では杯蓋（102・103）、短頸壺（109）、埴瓶（106）がある。西周溝では台付壺（105）が出土している。また墳丘東南隅部からも完形の短頸壺（108）が出土している。周溝内の土器は器種が豊富で完存するものもあり、周溝内に置かれた供献土器とも考えられるが、墳頂部の供献土器の転落、周辺よりの流入等の可能性も否定できず、個々の識別は困難である。

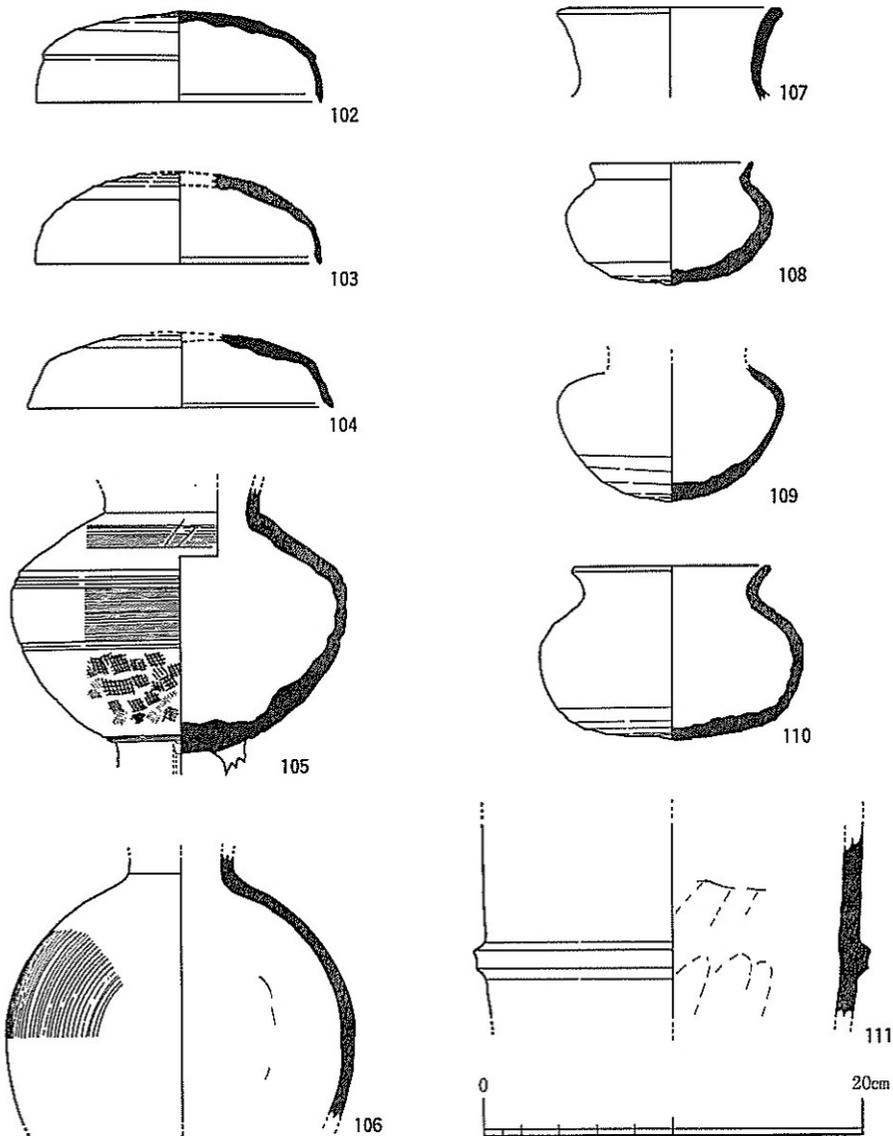
この古墳の築造時期は、主体部供献土器から古墳時代後期中葉に置くことができよう。

B. 不定形土墳群

S T A. 88+42以南に位置する。合計14基検出された。各土墳は、円形・楕円形・溝状と様々な平面形を呈する。溝状をなすものは数基が切り合っている可能性もあるが、断面からは確認で



第76図 古墳～奈良面 古墳主体部副葬品出土状況平面、立面図

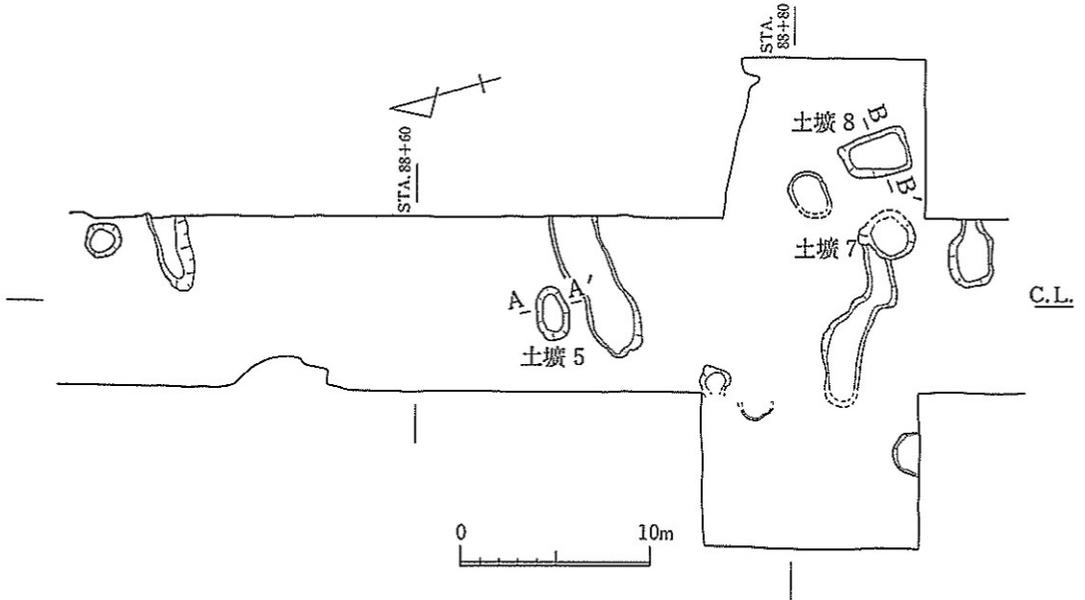


第77図 古墳～奈良面 古墳周溝内出土遺物

S=1/4

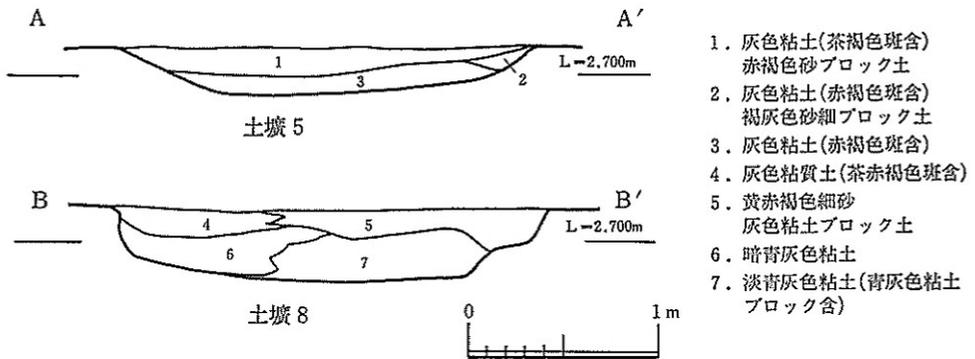
きなかった。上径は2.0～2.5m、深さ0.2～0.6mを測る。底面はほぼ平坦で暗灰色シルト（第7層）をやや掘り込んだ位置にまで達する。壁面下半は砂層（第6層）から成り、この層から湧水が認められた。埋土は、灰色粘土・暗灰色粘質微砂・砂を主体としたブロック土で、一気に埋め戻された様相を呈する。下部はグライ化している。土壌7からは須恵器杯身片が出土している。

この土壌群の性格は、側壁に砂層があることなどから、水溜めないし井戸の可能性が高いが、そうであるならば、いずれも浅く、素掘りであるなどの点から、臨時に掘られ、使用後は埋め戻したものであろう。



第78図 古墳～奈良面 不定形土壇群平面図

S = 1/400



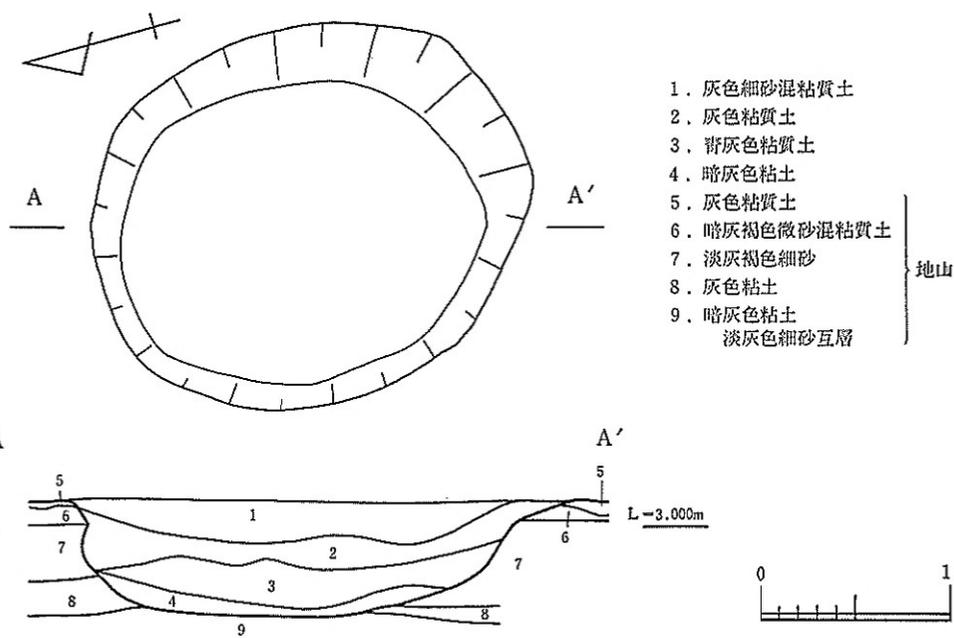
第79図 古墳～奈良面 土壇5、8断面図

S = 1/40

出土遺物と層位から、大半の土壇は古墳時代後期後葉に比定できる。しかし、一部については更に上位の遺構面の掘り残しを含むかもしれない。

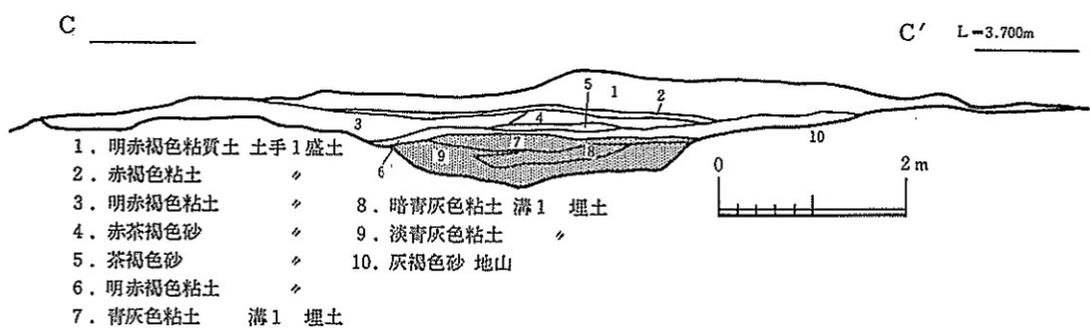
C. 溝

溝1はSTA. 87+40に位置する。東西に延び西側で北へ曲る。幅は一定せず1.7~3.8cmを測る。



第80図 古墳～奈良面 土墳13平面、断面図

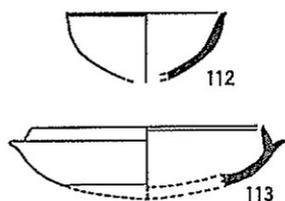
S = 1/40



第81図 古墳～奈良面 溝1、土手1断面図

S = 1/60

東側の底部には深さ 0.6mの円形落込みがあり、底面は起伏が多い。埋土は茶褐色砂混粘質土で、落込み内には青灰色粘土がたまっていた。埋土から土師器（112）・須恵器（113）が出土している。古墳時代後期後葉。



第82図 古墳～奈良面 溝1 出土遺物 S = 1/4

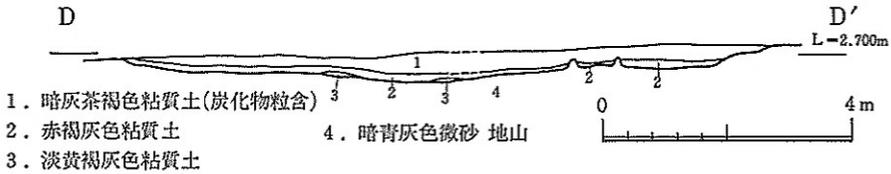
D. 土壇・落ち込み

<土壇1> 溝1のすぐ北側に位置する。径 1.0× 1.1m、深さ 0.57mを測る円形の土壇で、壁面がほぼ垂直に落ちる。埋土は茶

褐色砂混粘質土。

<土壌2> 溝1西側の肩部に位置する。溝1との前後関係は明らかではない。上径0.8m、深さ0.17mを測り、埋土は茶褐色砂混粘土よりなる。

<落込み1> S T A. 87+82に位置する。南・西側は調査区外へ続く。東西13m、南北10m以上、深さ0.5mを測る。埋土は褐色を帯びた粘質土で、上部には炭化物粒を含む。土師器の細片が出土した。



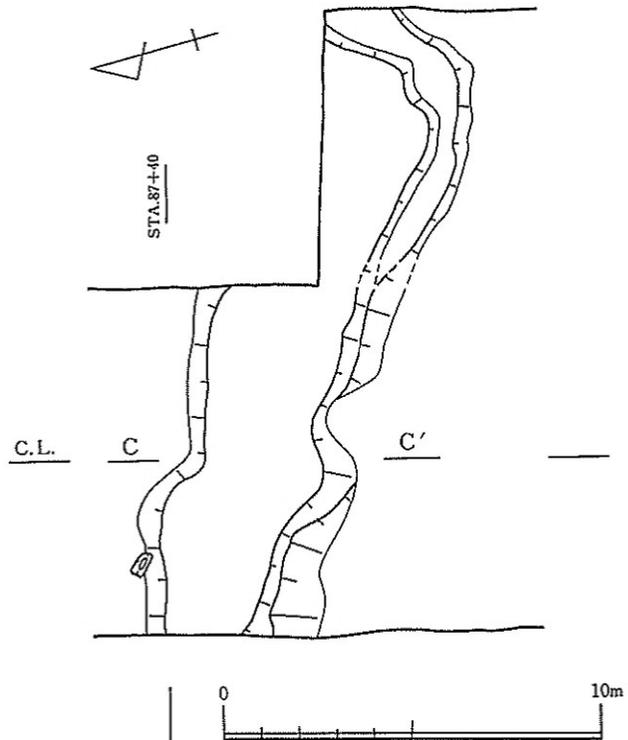
第83図 古墳～奈良面 落込み1断面図

S = 1/20

<落込み2> S T A. 88+36~37に位置する。東西方向に帯状にのび、幅約8m、深さ0.2mを測る。埋土は灰色粘土で水分を多く含む。埋土中からイネ花粉が検出され、周囲の地盤がやや高いことから、水田耕土が一部のみ残った可能性がある。

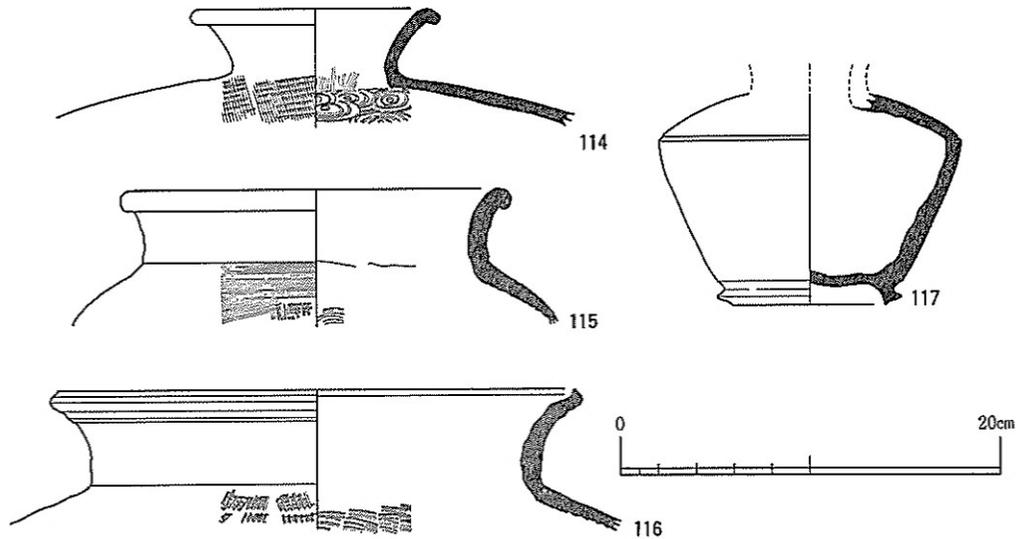
E. 土手

土手1はS T A. 87+43に位置する。一部溝1埋土上に築かれる。南西から北東に延びるが、調査区端から更に北に曲るのか、この地点で終るのかは明らかではない。底幅5.0m、肩幅2.5~3.0m、高さ0.45mを測る。断面台形を呈する。盛土は、明赤褐色粘質土からなる。堤防状を呈するが、その性格は不明である。埋土中の土器(114~117)から、築造の上限を奈良時代におさえられる。



第84図 古墳～奈良面 土手1平面図

S = 1/200



第85図 古墳～奈良面 土手1出土遺物

S = 1/4

F. 包含層出土遺物

本遺構面に対応する遺物包含層として、集落遺構を覆う第5層と、更にその上面にのる第4層がこれに当る。但し、第5層の遺存状況は必ずしも良好ではなく、同層に属する遺物として明確に把握できたのは、盛土によって保護された古墳基底部より出土した土器のみである。

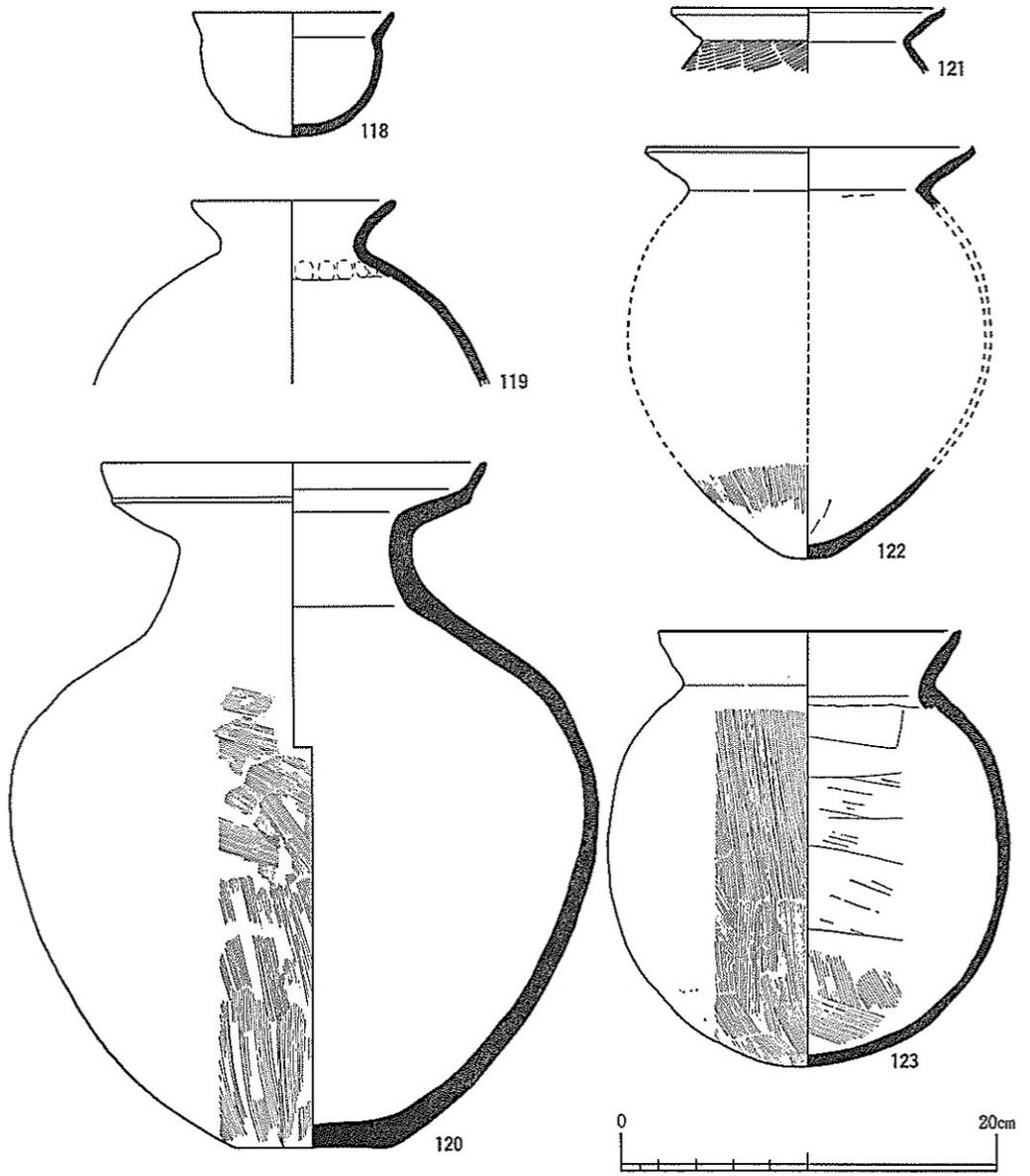
<第5層出土遺物> 120は長く伸びる頸部が特徴的な吉備地方の壺形土器である。砂粒の多い胎土で、表面は磨滅が著しい。1個体分のはほぼ全容が出土した。123の甕は、外面刷毛目調整、内面は篋削り調整される。他に、小型鉢・庄内式甕などがある。なお、123は古墳盛土中から出土したもので、本来第5層に伴ったと考えられるが、時期が若干下る可能性がある。

これらの土器は若干の時期幅をもつが、集落遺構の時期を示すものであろう。

<第4層出土遺物> 須恵器の杯蓋・杯身・高杯、土師器の甕、朝顔形埴輪などがある。第5層上面遺構に対応する。

G. 小結

本遺構面は基盤が砂層からなり、以前とは環境が大きく変化している。特に集落の出現は、当調査区が居住可能な微高地になった証拠である。また古墳時代前期初頭の吉備系の土器は地域交流を示す貴重な資料であろう。小形の方墳は大阪市長原遺跡^{RE 2}で既に数多く検出されているものであるが、山賀遺跡では単独で検出されている。また時期的にもかなり降る。古墳後期後葉の土壌群は、付近に同時期の集落を求め難い点からすれば、灌漑用の水溜めの可能性が高く、この時期の須恵器などの遺物がこの遺構面全域に広がる事と併せ、一帯が水田化したものと考えられる。奈良時代の土手については用途は不明であるが、本調査区が条里制地割の分布範囲内にあるにも



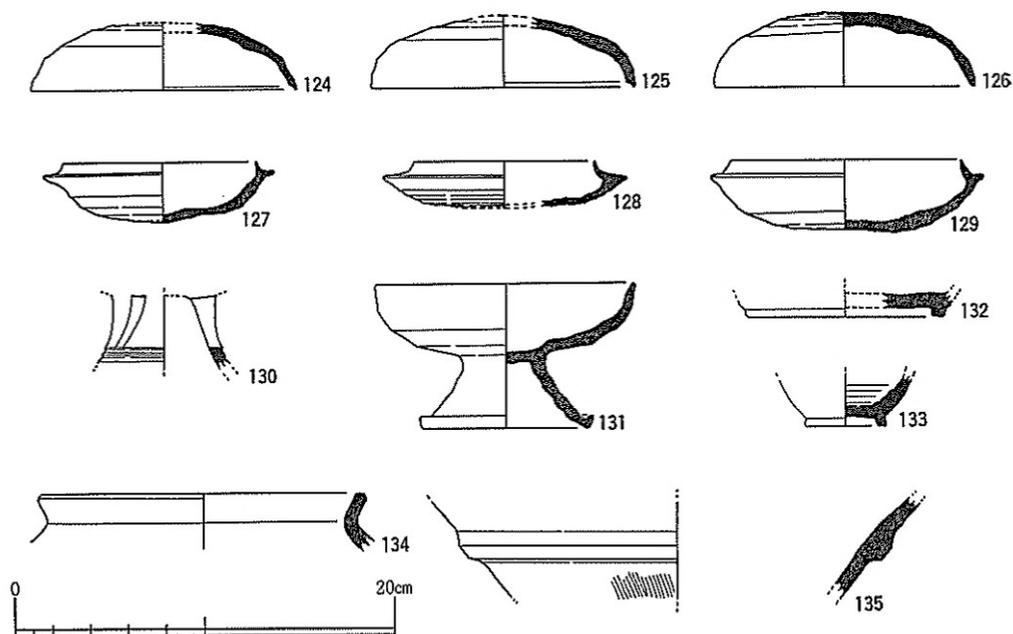
第86図 古墳～奈良面 第5層出土遺物

S = 1/4

かかわらず、この時期にもそれとは方位的に合致しない遺構が存在した事が指摘される。

註1 分析は東京国立文化財研究所保存科学部長、江本義理氏による。

註2 京嶋 覚 「長原遺跡古墳群」『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会 1982



第87図 古墳～奈良面 第4層出土遺物

S = 1/4

第11節 中世遺構面

第4層（灰色・黄灰色粘質土）上面を遺構面とする。標高+2.9～+3.3mを測る。中央部がやや低い、ほぼ平坦である。素掘り井戸・条里坪界畦畔・土塙など、主に水田に関係した遺構が検出される。時期は室町時代を中心とするが、その前後の遺構も含む。

A. 土塙

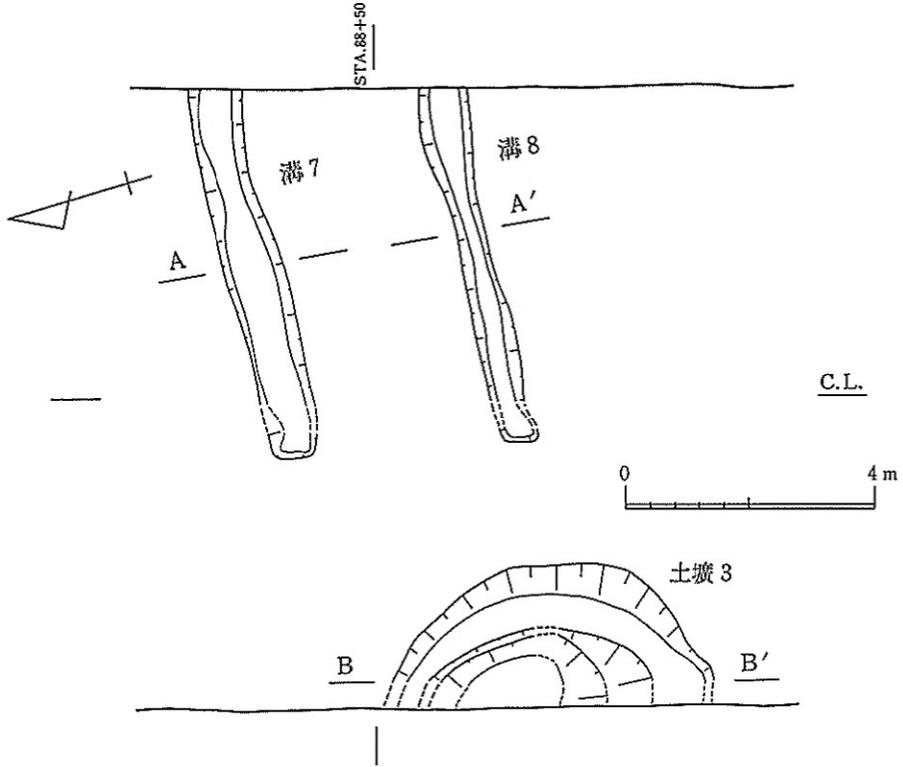
<土塙1> STA. 87+32、E 0.5に位置する。上径1.5m、深さ1.6mを測る。平面は円形で壁面はほぼ垂直に落ちる。壁面下部には厚さ0.8mにわたって砂層（第6層）を露出することから、井戸と考えられる。埋土はブロック土。



第88図 中世面 土塙2出土遺物 S = 1/4

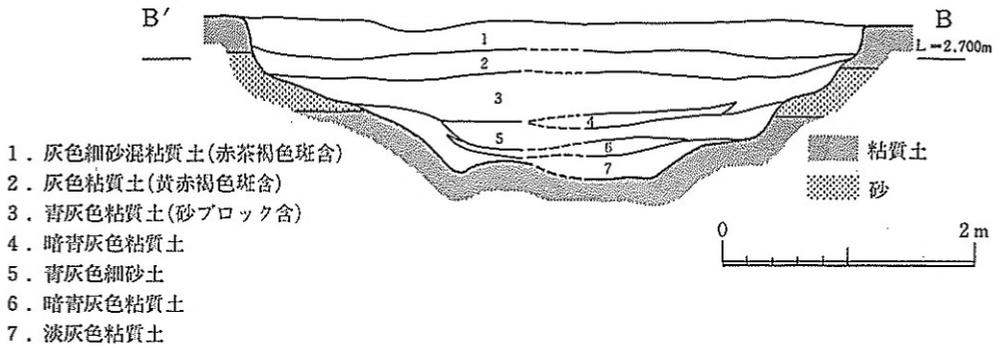
<土塙2> STA. 87+33、W3に位置する。上径2.2m、深さ0.9mを測る。平面はほぼ円形で掘鉢伏の断面を示す。壁面下部に砂層（第6層）があることから井戸と考えられる。埋土は下部が青灰色粘土、上部はブロック土。出土土器から室町時代頃に比定される（136）。

<土塙3> STA. 88+53、W3に位置する。東半分のみ検出した。上径5.5m、深さ1.25mを測る。平面はほぼ円形で掘鉢状に凹む。壁面に厚さ0.4mにわたって砂層（6層）が認められることから、井戸と考えられる。埋土は下部が青灰色粘土と砂の互層、上部がブロック土となる。



第89図 中世面 溝7、8、土壇3平面図

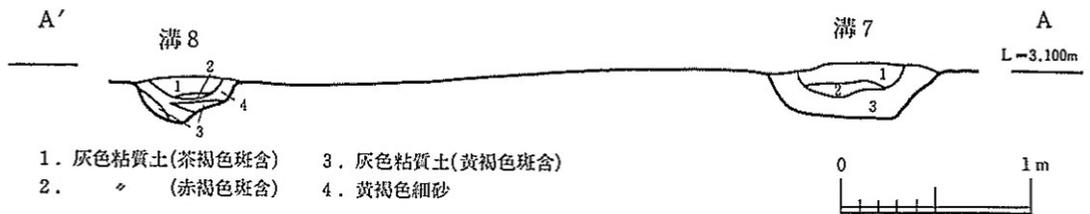
S = 1/120



1. 灰色細砂混粘質土(赤茶褐色斑含)
2. 灰色粘質土(黄赤褐色斑含)
3. 青灰色粘質土(砂ブロック含)
4. 暗青灰色粘質土
5. 青灰色細砂土
6. 暗青灰色粘質土
7. 淡灰色粘質土

第90図 中世面 土壇3断面図

S = 1/60



1. 灰色粘質土(茶褐色斑含)
2. * (赤褐色斑含)
3. 灰色粘質土(黄褐色斑含)
4. 黄褐色細砂

第91図 中世面 溝7、8断面図

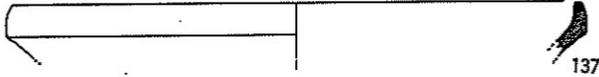
S = 1/40

B. 溝

<溝1> STA. 87+49に位置する。最大幅 0.6m、深さ0.07mのU字溝である。埋土は灰色粘土からなる。

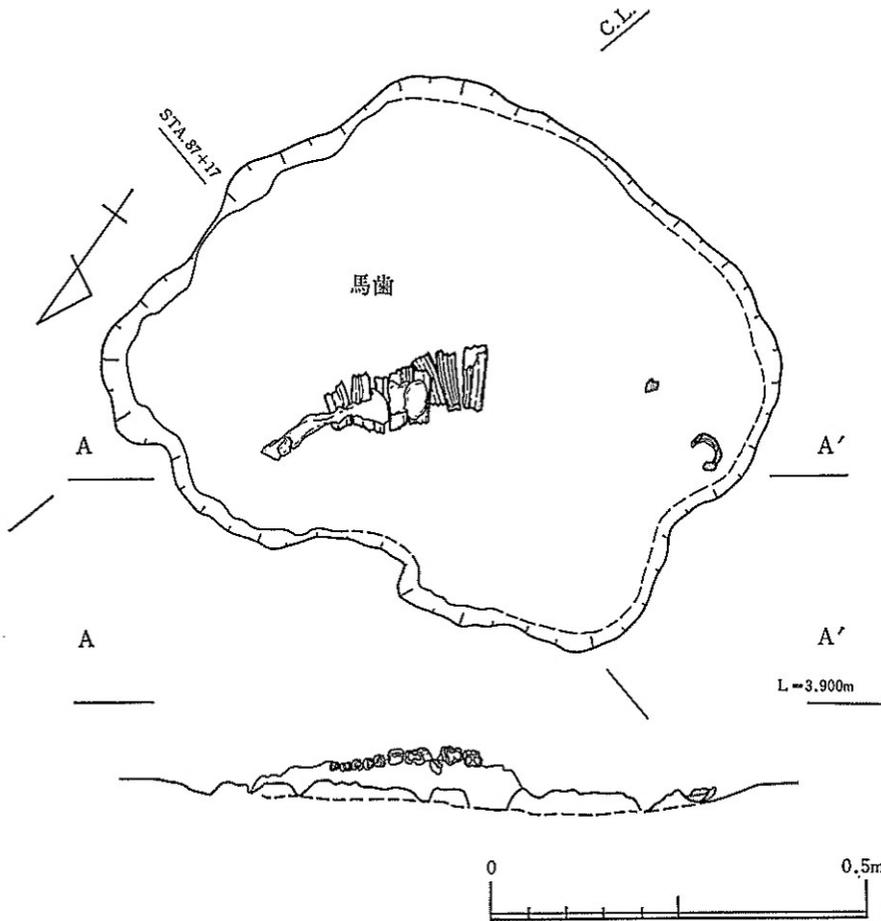
<溝7> STA. 87+48に位置する。東西に直線状に走り、土城3の手前で終る。肩幅0.5m、深さ0.2~0.3mを測るU字溝で、埋土は粘質土および砂層からなる。

<溝8> 溝7の南側へ約 3.5m離れて平行して走る溝。肩幅0.6~0.8m、深さ0.25mを測るU字溝である。埋土中から東播系須恵器の練鉢口縁部(137)が出土し、室町時代(14世紀)に比定される。



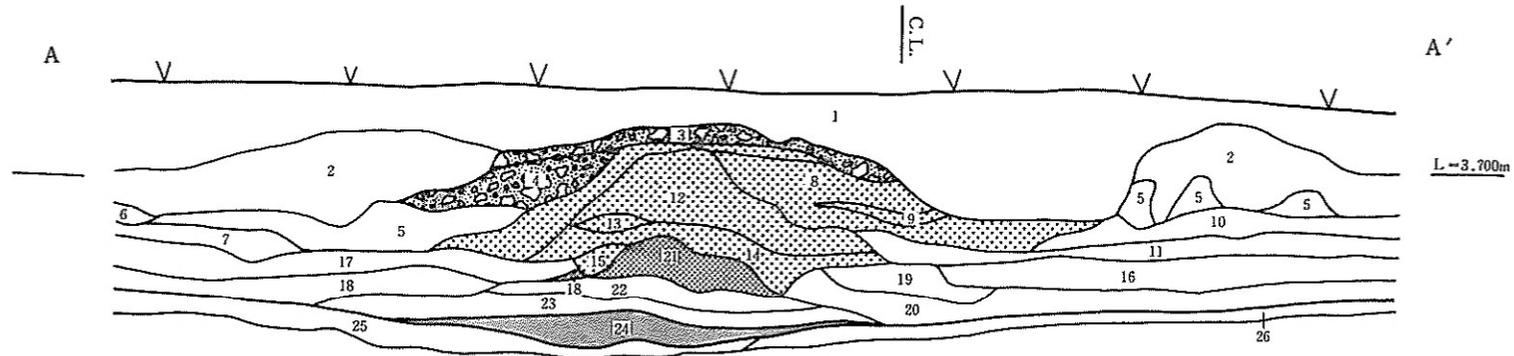
第92図 中世面 溝8出土遺物

S = 1/4



第93図 中世面 土城4平面、断面図

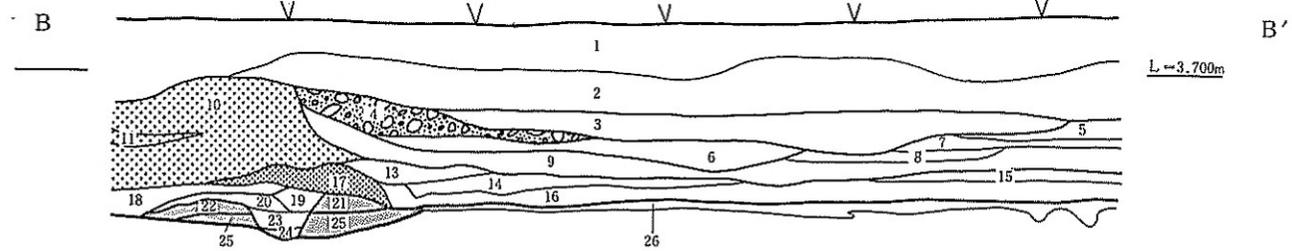
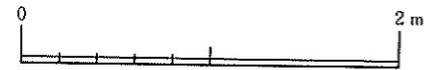
S = 1/10



- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1. 暗灰褐色土(瓦礫含)盛土 | 14. 明赤褐色粘質土 |
| 2. 暗灰色土(赤褐色斑、径3~5cm円礫含) | 15. 赤褐色粗砂土(角礫含) |
| 3. 淡茶褐色粘質土 | 16. 灰色粘質土(淡黄褐色の部分あり、マンガン斑含) |
| 4. 灰色土(赤褐色柱状斑含) | 17. 灰黄色粘質土 |
| 5. 灰色粘質土(赤褐色斑含) | 18. 灰色粘土(黄褐色斑含) |
| 6. 灰色土(赤褐色斑含) | 19. 灰黄色粘質土(マンガン斑少し含) |
| 7. 灰茶褐色粘質土 | 20. 淡灰黄褐色粘質土(マンガン斑少し含) |
| 8. 灰色砂質土(茶褐色柱状斑含) | 21. 赤褐色粘質土(マンガン斑多く含み堅くしまる) |
| 9. 灰色粗砂混土(茶褐色斑含) | 22. 灰色細砂土(赤褐色柱状斑少し含) |
| 10. 灰赤褐色土 | 23. 赤褐色細砂土(マンガン斑少し含) |
| 11. 灰黄色粘質土(マンガン斑含) | 24. 赤褐色と淡灰色の斑状細砂土 |
| 12. 淡灰茶褐色土 | 25. 灰赤褐色シルト |
| 13. 明赤褐色細砂 | 26. 褐灰色シルト |

畦畔の盛土時期

- | | |
|--|------|
| | 近・現代 |
| | 近世 |
| | 中世 |
| | 中世以前 |



- | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 暗灰色砂礫土 現代盛土 | 11. 黄橙色粘質土(マンガン斑含) | 21. 暗灰黄褐色粘質土(マンガン斑含) |
| 2. 暗灰色砂質土 | 12. 黄褐色細砂 | 22. 暗褐色土(マンガン斑含) |
| 3. 暗灰色細砂混土(赤褐色斑含) | 13. 灰黄色微砂混粘質土 | 23. 灰褐色細砂 |
| 4. 灰色細砂混粘質土(赤褐色柱状斑含) | 14. 灰黄色細砂 | 24. 淡灰褐色微砂混粘土(マンガン斑含) |
| 5. 青灰色粘質土(赤褐色柱状斑含) | 15. 灰色粘質土 | 25. 淡褐色砂質土 |
| 6. 青灰色細砂混粘質土(赤褐色柱状斑含) | 16. 灰黄色細砂混粘質土(マンガン斑含) | 26. 暗紫褐色細砂混粘質土 |
| 7. 灰色粘質土(黄褐色柱状斑含) | 17. 黄褐色細砂混粘質土 | |
| 8. 黄灰色細砂混粘質土 | 18. 褐色粘土混砂質土 | |
| 9. 橙黄灰色細砂混粘質土 | 19. 淡褐色土(マンガン斑含) | |
| 10. 茶褐色灰色混粘質土 | 20. 黄褐色土(マンガン斑含) | |

第94図 条里制畦畔断面図

<土壌4> 条里坪界畦畔の交差部のやや東北部分に位置し、中世畦畔の下から検出された。不整形を呈し、径0.8m、深さ0.1mを測る。中から馬歯が並んで検出された。骨格部分はほとんど腐蝕していたが、馬の首を、鼻先を東に向けて埋納していたと見られる。時期は中世頃と考えられるが確定できない。条里坪界畦畔に伴うものと考えられる。

D. 小結

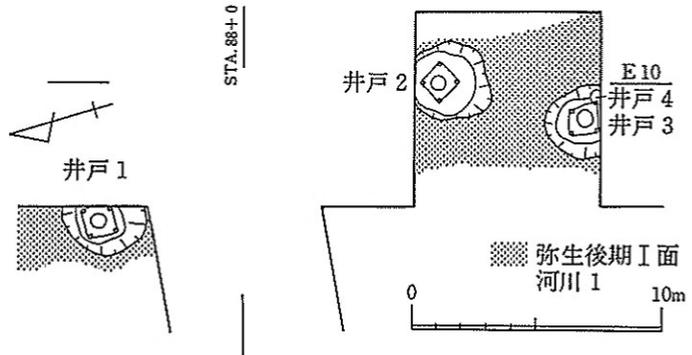
本遺構面からは、14世紀から16世紀後半までの水田遺構が検出された。水田面の具体的な様相は明らかにしえなかったが、条里制地割に規制された土地割が少なくとも調査区南半に広がっていたことを示している。また井戸群も灌漑用と考えられる。条里坪界畦畔はかなり小規模である。また馬首を埋納した土壌は農耕祭祀に関係するものであろうか。

第12節 近世～現代遺構面

本調査区における最も新しい遺構面で、第3層（灰色・黄褐色粘質土層）上面である。標高+3.3～+3.6mを測り、ほぼ平坦。検出された遺構は、江戸時代中期以後、昭和時代に及ぶが、大半は江戸時代中期より明治時代頃までの水田遺構である。

A. 井戸群

STA. 87+92～88+14に位置する。4基検出され、全て木組み井筒を伴っている。これらは、埋没した弥生後期Ⅲ面河川1と位置的に一致し、この旧流路内の地下水を採取したものと考えられる。



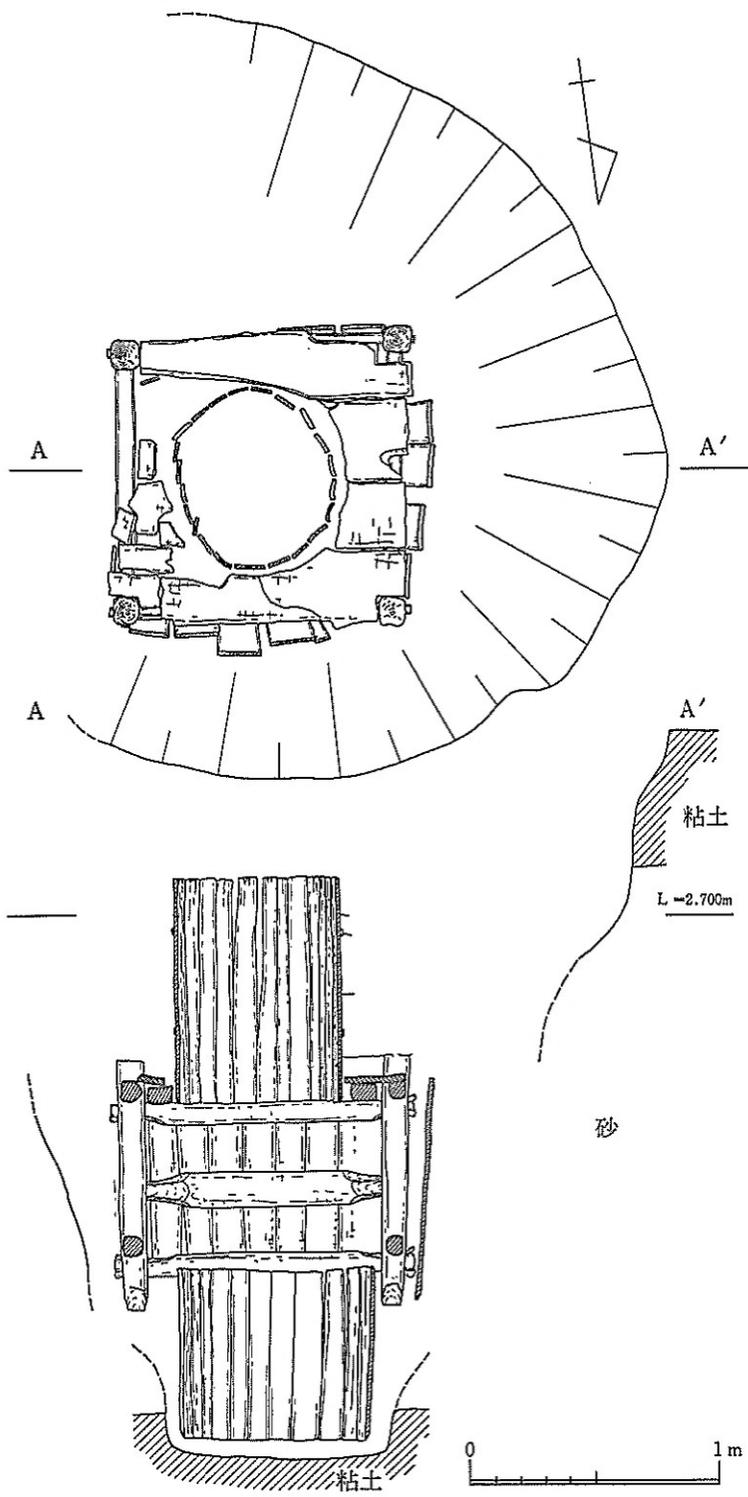
<井戸1> STA. 87+94、

第95図 近世～現代面 井戸群平面図

S = 1/500

E5に位置する。東端は調査区外に続く。掘り方は上径3.1m、深さ3.0mを測る。井筒は3段からなり、上・下2段は桶、中段は立方形の、太い梁をもつ木組の側に縦に側板を当てている。下段の内径75cm、高さ68cm、中段は1辺120cm、高さ100cm、上段は内径63cm、高さ92cmを測る。細部の構造は第96図を参照されたい。また井筒内から平瓦が多量に出土した。これは、井筒の最上段に積まれていたものであろう。地山層との関係では、下段が粘土層をやや掘り込んで設けられ、中段が透水層中に、上層が不透水層中にある。従って、各井筒の機能としては、下段は水溜めに、中段は取水に、上段及び最上段は井筒上部の保護を果したものであろう。なお、井筒内埋土から明治15年銘の2銭銅貨が出土しており、廃絶の上限を同年におくことができる。

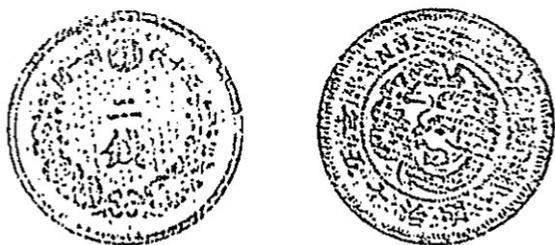
<井戸2> STA. 88+8、E10に位置する。掘り方は上径3.0m、深さ2.5mを測る。井筒は本



第96图 近世~现代面 井戸1平面、断面图

S = 1/30

米井戸1と同様と考えられるが、上・下段は抜き取られ、中段のみが遺存した。中段は1辺130cm、高さ110cmを測る。横の梁がやや細く、また上面の構造が井戸1とは異なる。井戸廃絶後は、その上面を黄色粘質土で整地している。埋土上層から伊万里焼染付椀、施釉陶器皿、赤褐色胎土の土瓶が出土し、廃絶の時期は近代に下ると思われる。



第97図 近世～現代面 井戸1出土遺物 S=1

<井戸3> S T A. 88+14, E 8に位置する。掘り方は直径2.3m、深さ2.6mを測る。井筒は本来井戸1と同様と考えられるが、上段が抜き取られ、また最上段の一部とみられる平瓦が井筒内に転落していた。下段は内径44cm、高さ20cm、中段は1辺108cm、高さ96cmを測る。中段の側板は2重になっていた。

<井戸4> 井戸3に西側を破壊されており、井戸3より古い。下段の桶のみが残存する。内径70cm、高さ56cmを測る。

B. 水田

S T A. 87+75～88+90に位置する。確認された水田遺構は、周囲よりやや低く、耕土を残すもの(水田1～4)と、周囲より高く盛り上げるもの(^{註1} 掘上田1～2)がある。前者の耕土は全て灰色砂質土で、現代のそれとほとんど変わらない。これらは全てほぼ東西に長い長方形を呈している。

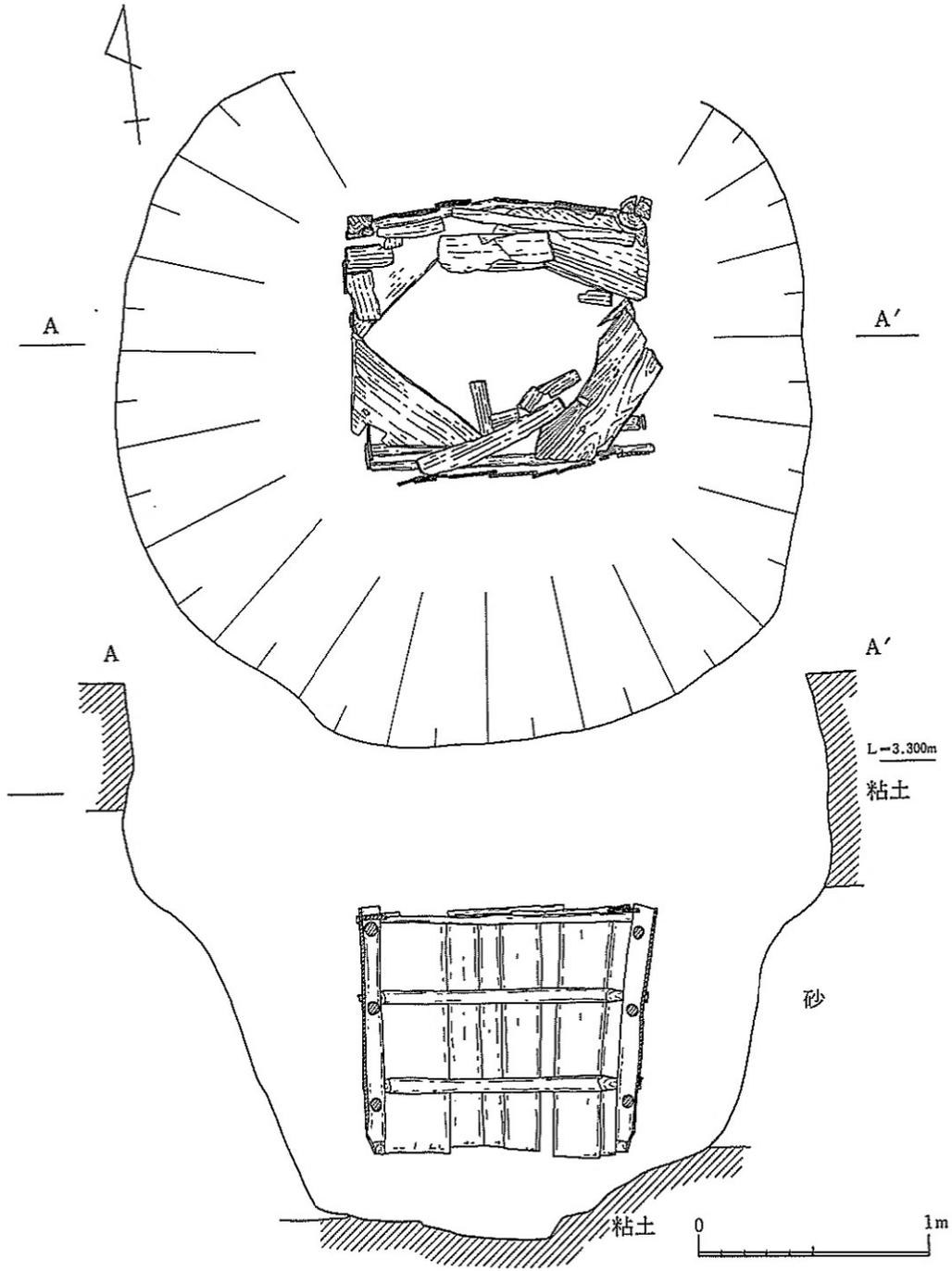
<水田1> 南北幅10mを測り、北・南側には底幅1.2～1.5mの畦畔を伴う。耕土上面は、周囲の水田床面より約0.08m低い。耕土は厚さ0.07mを測る。耕土直上には厚さ約0.1mの黄褐色粘質ブロック土が見られ、水田廃絶後整地された事を示している。この整地層は現代水田の床土に相当する。耕土中から寛永通宝と伊万里焼染付椀片が出土している。

<水田2> 南北幅7mを測る。耕土上面に周囲の水田床面とほぼ同じ高さで、水田1同様に整地される。

<水田3> 掘上田1と2に挟まれた位置にある。南北幅9mを測る。耕土上面は掘上田床面より0.25m低い。床面の南北両側に幅0.5mの断面『U』字形の東西溝がはしる。

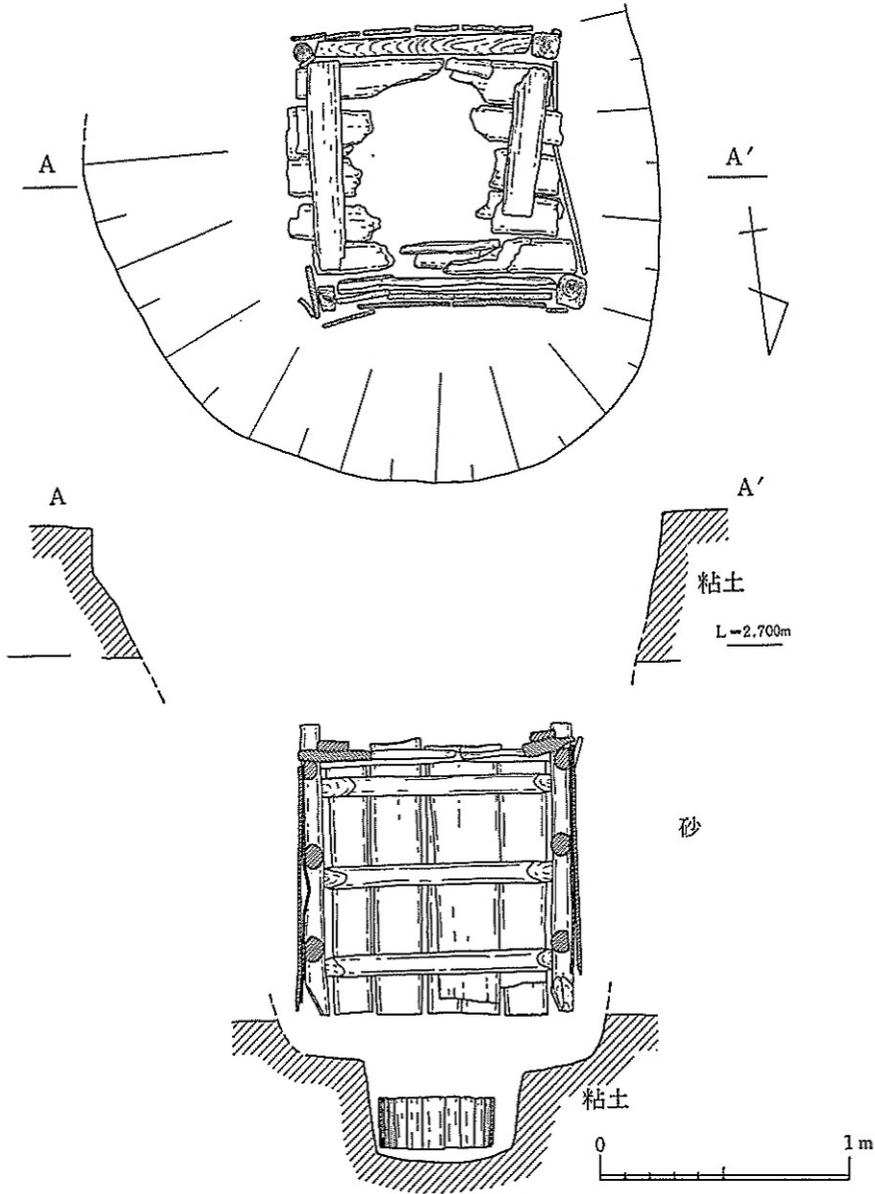
<水田4> 掘上田2の北側に位置する。南北幅6mを測る。掘上田2床面より0.3m低い。床面には浅いU字溝が認められた。水田1～4はいわゆる「掘下田」と考えられる。

<掘上田1> 南北の底幅18mを測る。築造時の掘上田上面に現代の耕土がのり、現在でも周囲より0.2～0.3mの高まりとなって残っている。灰黄褐色粘質土を盛り上げたもので、3回の拡張が行なわれている。盛土直下に中世遺構面溝7が位置することから、14世紀以降の構築になる事は明らかである。また3回目の拡張時の盛土が水田3耕土上の上のっていることから、拡張は江戸時代中期以降に及んだと考えられる。



第98図 近世~現代面 井戸2 平面、断面図

S = 1/30



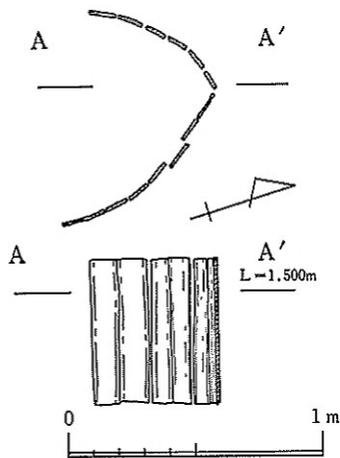
第99図 近世～現代面 井戸3平面、断面図

S = 1/30

<掘上田2> 水田3と4の間に位置し、南北幅9m、高さ0.5mを測る。盛土は掘上田1と同様で、南側へ幅1.8mにわたって2回拡張している。

C. 溝

水田区画とみられる溝がS T A. 87+42~63に2条検出された。長さ21m以上にわたって直線的に南北に延びる溝と、その南端で西へ曲がる溝がある。ともに幅0.4m、深さ0.15mを測るU字溝である。埋土は茶褐色粘質土で江戸時代の陶磁器を含む。



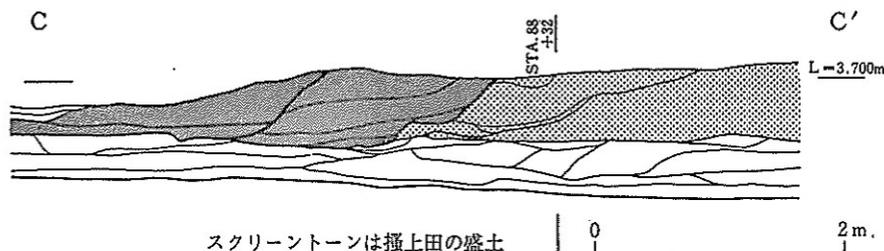
第100図 近世～現代面 井戸4
平面、断面図 S=1/30

D. 条里坪界畦畔

中世条里坪界畦畔と重複するものである。南北畦畔は底幅1.0～1.5m、上幅0.4～0.5m、同時期の水田面からの高さ0.5mを測る。断面台形を呈している。中世畦畔上に淡茶褐色ブロック土を盛土したものである。これは更に茶褐色土が盛られることによって拡張されるが、その中から18世紀頃の陶磁器が出土することより、この畦畔の時期を18世紀以前に求めることができよう。この条里畦畔はその後更に拡張を重ね、中央環状線建設直前まで里道として使用されていたものである。

E. 暗渠

STA. 88+11以南で2条検出された。ともに現代水田の床



第101図 近世～現代面 掻上田1断面図

S=1/60



第102図 近世～現代面 水田1出土遺物 S=1/4

面から掘り込まれている。断面逆台形の溝状掘り方内に、土管を一行に直線的に継ぎ、埋め戻されていた。

<暗渠1> 東西に延びる。土管は内径35cm、長さ70cmを測る大型のものである。内にはヘッド

<暗渠2> 南北に延びる。土管は内径15.5cm、長さ65.5cmを測るやや小型のものである。途中にコンクリート製の貯水枡が設けられていた。この暗渠1、2は互いに直交する位置関係にあり、調査区の西側で接合していたようである。付近の住民の方の話によれば、この暗渠の布設は昭和9年頃との事である。

F. 肥溜め

STA. 88+67～92で2基検出された。掘り込み面は明らかでないが、いずれも現代の水田床土をやや掘り凹めて砂利を敷き、その上に漆喰を浅鉢状に塗り固めて構築している。内面は平滑

に仕上げられる。上面は破損していた。ともについ最近まで使用されていた可能性が高い。

<肥溜め1> 円形で、内径1.2mを測る。

<肥溜め2> 隅丸長方形で、内径2.0×1.5mを測る。

G. 小結

本遺構面は主に水田遺構からなり、ほぼ調査区全域が江戸時代以降、農耕地となったことを示している。また条里坪内の土地割も、B地区からA地区南半は東西、A地区北半が南北に長い区画をもっていたと推定される。また掘上田、あるいは掘下田は現在も見られる河内平野低地部の土地景観であるが、少なくとも江戸時代中期頃に遡ることが明らかとなった。また木組み井筒の井戸は、水田域に設けられることから灌漑用と考えられ、大和川の付け替え（1704年）による水不足に対処したものであろうか。土管製の暗渠は、昭和9年の楠根川改修工事に伴う周囲の地域の土地改良事業に結びつくものであろう。

註1 浮田良典「江戸時代～昭和前期の摂河泉稲作地帯における土地利用形態——とくに「半田」を中心に——」『人文地理』13-2 1961

金子章裕「条里制施行地における島畑景観の形成」『地理学評論』49-4 1976

第Ⅴ章 まとめにかえて

昭和46年の楠根川改修工事によって発見された山賀遺跡も、今回の近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査によって、その内容がようやく明らかになりつつある。本書においてその概要を報告した（その2）調査区においても、遺跡の変遷の一端をうかがい得た事は、前章に述べたとおりである。ここでは、調査によって得た成果を再度時代別に概観してまとめにかえたい。

縄文時代

現在の地表面下 4.3mにて、晩期の自然河川と、その埋土から後・晩期の土器細片を検出した。土器は磨滅が著しく、2次的に移動したものと考えられる。しかし第Ⅲ章で述べたように近年、河内平野低地部でこの時期の資料が増えており、その一例として低地の縄文遺跡のあり方を探る資料となろう。また、次期の弥生文化とのつながりにおいても注目される。

弥生時代

今回の山賀遺跡の調査の主目的の時期であるだけに、当調査区に於ても前期中葉（第Ⅰ様式中段階）、後葉（第Ⅰ様式新段階）、中期前葉（第Ⅱ様式）、後葉（第Ⅳ様式）、後期中葉（第Ⅴ様式古段階）、中葉（第Ⅴ様式中段階）、後葉（第Ⅴ様式新段階）の合計7枚の遺構面が検出された。各遺構面は自然堆積の間層を挟み、沖積作用の激しさを窺わせる。また第1次調査から、予想された通り、当調査区は弥生時代を通じて自然堤防から後背湿地に至る立地にあり、弥生集落の縁辺に特徴的な遺構、遺物が検出された。

主要な遺構として、環濠状遺構、方形周溝墓、水田等がある。

環濠状遺構は、弥生前期中葉に比定される。8条以上の大溝と土手からなる大規模な遺構で、居住域を区画する環濠の一部となる可能性は高いが、機能については断定し得なかった。いずれにせよその構築には大量の労働力が必要と見られ、河内平野の弥生時代の労働編成を考える上で興味深いものである。

方形周溝墓は、弥生中期前葉に比定され、3基が近接して検出された。自然堆積層によって覆われていたため墳丘が良好に残り、土手の削り出し、単次葬、長円形平面の周溝、打ち込み式小口板や、短冊型木材組合せ式の底板をもつ木棺などの諸特徴が明らかになった。また河内平野では最古の一例で、今後弥生墓制の変遷や系譜を考える重要資料となろう。

水田は、弥生中期前葉、中期後葉、後期中葉の3時期のものが検出された。調査範囲が限定されていることもあって、不明な点が多いが、全て、土を盛り上げた畦畔が確認された。畦畔には水口を伴うと共に、地形面に応じた区画割りや、水路が認められ、灌漑が十分施されたことを窺わせる。

一方、土器、石器などの遺物は概して少なかったが、弥生前期中葉の鳥形木製品と、同時期の自然礫を使用した投弾が注目され、共に稲作文化の系統を知る重要資料となろう。

古墳時代

この時期の遺構面は、現地表から0.5~0.8m下にあり、これ以降、土砂の堆積量が減ることから、地形環境がかなり安定したと考えられる。前期に遡る可能性のある集落は、掘立柱建物を確認することにとどまり、集落全体の規模や構造は不明であった。吉備からの搬入壺は、従来から注目されていた河内と吉備の交流を物語る資料である。

一方、供献土器から後期中葉に比定される小形方墳は、河内平野では既に長原遺跡、巨摩廃寺遺跡、美園遺跡、八尾南遺跡、成法寺遺跡などで知られ今後も更に類例が増えそうである。今のところ本例は最も時期が下り、既にこの時期には築造の開始されている生駒山西麓にある横穴式石室をもつ群集墳との関係が注目される。また主体部及び副葬品は、この種の古墳の性格を明らかにする手がかりとなろう。

奈良時代以降

各遺跡面は後世の削平を受けやすく、遺構の検出や、時期の確認にはかなりの困難を伴った。確認されたものは大半が水田遺構である。

条里制関係では、その坪界の大畦畔が中世より現代に至るまで連綿と続く状況が観察された。しかし、その初源は中世以前としか、時期を明らかにし得なかったのは残念である。一方、条里坪内の区画は14世紀に遡るのが最も古く、現代見られる区画は、大半が江戸時代中期以降のものであることが確認された。水田に伴う溝、畦畔等の時期の明確なものを集成することによって、今後この地域における条里地割施行の時期をおさえることができよう。

以上、当調査区で得られた成果は、縄文から近代に至る各時期のものを含み、特に弥生時代では、層的に細かく土地利用の変遷を明らかにし得た。これは、河内平野という地理的な特殊条件に由来することである。今後、まず山賀遺跡の変遷を、各調査区の成果を総合して明らかにすると共に、周辺地域の発掘成果を整理、再構成することによって、河内平野の地域史が描かれねばならないであろう。

付 章

1. 山賀（その2）遺跡出土木製遺物の樹種について……………松田隆嗣
2. 土器の胎土について……………奥田 尚・米田敏幸
3. 砂礫の分析……………奥田 尚

1. 山賀(その2)遺跡出土木製遺物の樹種について

松田隆嗣*

1. はじめに

山賀(その2)遺跡より出土した木製遺物の樹種の同定を依頼により行なった。同定点数は137点である。遺物としては鋤・鍬・槌・碇などの農耕具と、山賀遺跡関係に見られる特徴的な榎・木棺などが主要なものである。用材としては、農耕具へのカシの利用は言うまでもなく、モミ(榎)・ヒノキ(木棺)の利用は他の遺跡にはあまり見られないものである。

また、杭類も多数出土しており、これらについても同定を行なった。杭の用材は、他の遺物に用いられている用材とは明らかに異なるばかりでなく、時期により利用されている用材に相違が認められる。この変化は弥生中期から後期における遺跡の水利状況の変化を表わしているように考えられる。

2. 同定方法

樹種の同定は顕微鏡により材の内部形態的特徴を観察し、その結果をもとに同定を行なった。このため次のような方法により切片を作成した。

破損した部分のような遺物のオリジナルな面でない所から、木口・柾目・板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて直接に作成した。これらの切片はサフラニンで染色後、エチルアルコール・n-ブチルアルコール・キシレンを用いて常法に従い脱水し永久プレパラートに仕上げた。

3. 同定理由

同定により以下の22種の樹種が明らかとなった。

A. 針葉樹

カヤ モミ マツ スギ コウヤマキ ヒノキ

B. 広葉樹

ヤナギ クヌギ コナラ カシ シイノキ ムクノキ ヤマグワ クスノキ タブノキ サクラ
ヤマフジ? ユズリハ ムクロジ サカキ シヤシャンボ カキノキ 不明

針葉樹

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. (イチイ科 Taxaceae)

垂直・水平樹脂道、樹脂細胞は存在しない。材仮道管および放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行は非常にゆるやかである。仮道管壁にラセン肥厚を認めないが、恐らく埋没中に崩壊したものであると思われる。分野壁孔はヒノキ型であるが、崩壊が著しい。

モミ *Abies firma* Sieb. et Zucc. (マツ科 Pinaceae)

垂直・水平樹脂道、樹脂細胞は存在しない。材仮道管および放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行は急激である。分野壁孔はスギ型であるが、一般に崩壊の進んでいるものが多い。

* (財)元興寺文化財研究所研究員

放射柔細胞壁末端にジュズ状の肥厚を認める。

マツ *Pinus spp.* (マツ科 Pinaceae)

垂直・水平樹脂道とも存在する。春材部から夏材部への移行は急激である。放射組織は放射柔細胞、放射仮道管よりなる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の水平壁が鋸歯状の肥厚を認めることから二葉松 (*Diploxylon*) であると思われる。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don (スギ科 Taxodiaceae)

垂直・水平樹脂道は存在しない。仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行は急激であり、樹脂細胞は、夏材部で接線方向に並ぶ。分野壁孔はスギ型。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. (スギ科 Taxodiaceae)

垂直・水平樹脂道、樹脂細胞は存在しない。仮道管・放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行はゆるやかである。分野壁孔は窓状である。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. (ヒノキ科 Cupressaceae)

垂直・水平樹脂道は存在しない。仮道管・樹脂細胞、放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行はゆるやかであり、樹脂細胞は散在するものが多い。分野壁孔は崩壊の進んでいるものが多いが、所々にヒノキ型壁孔を認める。

広葉樹

ヤナギ *Salix spp.* (ヤナギ科 Salicaceae)

多くの道管がほぼ均一に分布する(散孔材)。道管管孔は楕円形のものが多いが、所々に接合膜の残っている道管を認める。春材部から夏材部の移行によっても道管径の減少はあまりない。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で、単列放射組織よりなる。

クヌギ *Quercus acutissima* Carr. (ブナ科 Fagaceae)

道管はすべて孤立管孔よりなり、円形～楕円形の道管が年輪にそって配列する(環孔材)。孔圏外で道管は徐々にその径を減じ、放射方向に配列する。道管の膜厚は厚い。穿孔は単穿孔。放射組織は同性で、単列放射組織と広放射組織よりなる。

コナラ *Q. serrata* Thumb. (ブナ科 Fagaceae)

円形～楕円形の道管が年輪にそって1～2列に配列する(環孔材)。孔圏外で急激にその径を減じ、複合して火炎状に配列する。短接線柔組織を認める。穿孔は単穿孔。放射組織は同性で、単列放射組織と広放射組織よりなる。

カシ *Q. (Cyclobalanopsis) spp.* (ブナ科 Fagaceae)

道管はすべて孤立管孔よりなり、放射方向に配列する。道管の膜厚は厚く、多くは楕円形である。短接線状柔細胞を認める。穿孔は単穿孔。rylosisの著しく発達したものが多い。放射組織は同性で、単列放射組織と広放射組織よりなる。

シイノキ *Castanopsis spp.* (ブナ科 Fagaceae)

春材部の道管は楕円形で大きく、夏材部に移行するに従い漸次その径を減じ放射方向に配列す

1. 山賀(その2) 遺跡出土木製遺物の樹種について

る。短接線状柔組織を認める。穿孔は単穿孔。放射組織は同性であるが、やや異性がかかる。単列放射組織よりなる材が多い。

ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. (ニレ科 Ulmaceae)

楕円形の道管が年輪にそって1~3列に配列する(環孔材)。夏材部に移行するに従い道管径は徐々に減少する。それとともに多数が不規則に複合し配列する。6~10細胞幅の帯状柔組織が顕著である。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1~3細胞幅。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. (クワ科 Moraceae)

楕円形の道管が年輪にそって3~4列に配列する(環孔材)。夏材部に移行するに従い道管はその径を徐々に減じ、多数が不規則に複合し配列する。2~5細胞幅のターミナル柔組織を認める。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1~6細胞幅。

クスノキ *Cinamomum Camphora* Sieb. (クスノキ科 Lauraceae)

長楕円形の道管がほぼ均等に分布する(散孔材)。夏材部に移行するに従い徐々にその径を減じるが、その径の減少は少ない。道管は2~3個が放射方向に接続するものが多い。周囲柔組織および油細胞の存在が著しい。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で2細胞幅。

タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. (クスノキ科 Lauraceae)

道管はほぼ均等に分布する(散孔材)。道管はほぼ円形であり、放射方向に2個複合するものが多い。穿孔は単穿孔および階段穿孔よりなる。放射組織は異性で1~2細胞幅。

サクラ *Prunus spp.* (バラ科 Rosae)

道管はほぼ均等に分布する(散孔材)。多くの道管は2~4個が放射方向に配列し複合する。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1~3細胞幅。

ヤマフジ? *Wistaria brachbotrys* Sieb. et Zucc. (マメ科 Leguminosae)

大きな楕円形の道管が年輪界に沿ってまばらに1列のみ配列する。年輪は狭い。大きな道管の間あるいは晩材部に小道管がまばらに配列する。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1~4細胞幅。

ユズリハ *Daphniphyllum marcopodum* Miq. (トウダイグサ科 Euphorbiaceae)

楕円形の道管が均等に分布する(散孔材)。多くの道管はやや角ばった形態である。春材から夏材へ移行するに従い若干道管径が減少する。2~3細胞幅のターミナル柔組織を認める。穿孔は階段穿孔で階段数は多い。放射組織は異性で1~3細胞幅。

ムクロジ *Sapindus Mukurossi* Gaertn. (ムクロジ科 Sapindaceae)

楕円形の大きな道管が年輪に沿って1~2列に配列する。孔圏外で道管は急にその径を減少し、多数が不規則に複合し斜状に配列する。3~7細胞幅のターミナル柔組織を認める。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1~10細胞幅。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. (ツバキ科 Theaceae)

楕円形の道管がほぼ均等に分布する(散孔材)。2~3個が不規則に接合するものが多い。夏材部へ移行するに従い若干道管径が減少する。穿孔は階段穿孔で階段数は多い。放射組織は異性

で単列。

シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. (ツツジ科 Ericaceae)

楕円形の道管が均等に分布する(散孔材)。その分布数は非常に多い、また道管の多くはやや角ばっている。春材から夏材へ移行してもあまり道管径に変化はない。穿孔は単穿孔および階段穿孔の両者が混っている。放射組織は異性で1~7細胞幅、多くは単列および5~7細胞幅である。

カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. var. *Sylvestris* Makino (カキノキ科 Ebenaceae)

円形~楕円形の道管がまばらに分布する(散孔材)。短接線柔組織・周囲柔組織および1~3細胞幅のターミナル柔組織を認める。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1~2細胞幅。

不明

円形~楕円形の道管が均等に配列する。2~3個が放射方向に接続するものが多い。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1~3細胞幅。

4. 結果

農具

鋤(2点)・鍬(2点)・槌(1点)が出土している。

鋤・鍬はすべてカシが用いられている。全国的に見てもカシが選択されるのが一般であり、他の樹木が用いられることは少ない。これは鋤・鍬などの耕作用具はその使用において強度が要求されることからカシが選択されたことはよく知られている。しかし、カシが全国的に広く用いら

表1 槌・砧の用材

時代	遺跡	時期	府県	針葉樹			広葉樹			
				マツ科 <i>Abies</i> 属	スギ科 <i>Sciadopitys</i> <i>ecyparis</i> 属	ヒノキ科 <i>Chama-</i> <i>ecyparis</i> 属	ブナ科 <i>Quercus</i> 属	その他の属	ツバキ科 <i>Camellia</i>	その他
弥生時代	山木 瓜郷 篠東 唐古 東奈良	後中 前初 後古墳	静岡		コウヤマキ(1)					
			愛知		コウヤマキ(2)					
			愛知			ヒノキ(1)				
			奈良				クスギ(1)			
			大阪	モ	ミ(1)					ユズリハ(1)
古墳時代	山賀 恩智 池上 上東	前中 中後	大阪			カシ(1)*		ヤマツバキ(1)*	カナメモチ(1)*	
			大阪			ヒノキ(1)	カシ(1)	ヤマツバキ(1)		
			大阪岡山				カシ(1)			
	辻田	縄文 ~古墳	福岡				クリ(1)			
古墳時代	菅生 瓜生堂	初	千葉				カシ(1)		サイカチ(1)	
			大阪				クスギ(1)シイノキ(1)		エノキ(1)	
	落合Ⅱ	平安	岩手				コナラ(1)		ハクウンボク(1)	

*槌の転用具も槌としてまとめた。

1. 山賀（その2）遺跡出土木製遺物の樹種について

れている理由としては、強度のみによるものではなく他の理由も考えられる。事実、カシと同等あるいはそれ以上の強度を有する材の分布する地域においても鋤・鍬類にはカシが利用されるのが普通である。この理由としては、カシの分布地域が広く、かつその地域において鋤・鍬を作成するのに十分な太さのカシ材の入手が容易であったことも一因と考えられる。また、他の理由として、鋤・鍬の製作ということと、用材の選択という知識が同時に伝達されたためにこのように全国的に広くカシの利用が行なわれた可能性も存在する。

カシの分布していない東北地方においても、鋤の用材として種々の樹木を用いずにカシと同じ *Quercus* 属のミズナラを利用しているのもこのためであると推測される。

槌の用材としてはモミが利用されている。全国的な用材の利用状況としては、表1に示す通りであるが、一般に重く堅い木の利用が多い。山賀（その2）遺跡で用いられているモミは針葉樹の中でも軽軟な材で、割裂性も大きく、狂いの生じやすい材として知られている。このような軽軟な材を用いた槌（砧）の出土例は他にもあることから、その使用においては十分役立ったものと思われる。しかし、重く堅い材を用いた槌（砧）と軽く軟かい材を用いた槌（砧）とでは、使用目的・使用する対象物に相違があったと考えた方が適切であると思われる。これらの点については今後さらに検討せねばならない問題であると思われる。

狩猟用具

杈

杈が6点出土している。すべてモミが利用されている。山賀（その2・3・4）遺跡からは、杈の出土が極めて多数にのぼり、そのほとんどすべてにモミが利用されているのが大きな特徴である。

木製杈の出土例自体あまり多くなく、その比較は容易にできない。しかし、杈に用いられているモミの材質を考えると、次のようなことが言える。

モミの性質として、その材は軽く軟らかいことから、切削加工が容易であり割裂性も大きい。一般的に強度的性質は良くない。ただ、材が無味無臭であることから食品包装用に用いられることが多い。また、鼠害が少ないことから包装用の箱類にも用いられている。

表3 木材の硬度（木口面）

樹種	カヤ	モミ	アカマツ	スギ	ヒノキ	アカガシ	ケヤキ	ヤマグワ	イスノキ
ブリネル硬さ	3.8	3.5	4.3	3.2	3.7	5.5	4.5	4.4	7.0

Kg/mm²

このようなことを考え合せると、杈の用材としては必ずしも適した材とは考えられない。

また、一般的に、骨・角と言った堅い素材が選ばれていた資料にモミのような軟らかい素材に変化することは考えにくい。また、その出土点数が多数に登ることから考えて、何か消耗品的な利用のために作製されたか、使用する対象が多数になることがうかがえる。

なお、アイヌの民具にイマニツと呼ばれる刺し串があり、形態的にも若干涙に似ておりこれらとの関連も興味のあるところである。

容器

円形容器が1点発見されており、材はヤマグワが用いられている。

大阪府下の弥生遺跡から出土する容器類の用材としては、ケヤキ・ヤマグワ・クスノキなどが利用されることが多い。山賀遺跡の容器の用材にもこの傾向がうかがえる。

このような樹木が選択される理由としては、これらの樹木の径が大きくなること、材の堅さとして中康～やや堅い部類に属し加工が容易であったことがあげられる。

鳥形木製品

鳥形木製品は2点発見されている。用材はヤマフジ?が用いられており、もう1点は不明である。

山賀遺跡の他に、弥生時代のこのような鳥形の木製遺物としては、池上、瓜生堂遺跡などで発見されている。

用材としては、ヒノキ、シイノキが用いられており、山賀遺跡の資料とは異なる。しかし、形態的にも若干の相違が認められることから、用材の点から検討を行うにはもっと多数の資料が集まるまで待つ必要があるように思われる。

木棺

組合せ式の木棺が2点発見されている。用材としてはヒノキ・コウヤマキが用いられている。

大阪府下の弥生時代の遺跡から発見されている組合せ式木棺の用材の大半はコウヤマキが用いられている。そのコウヤマキの用材も、蓋板・小口板・側板・底板がおのおの一枚の板で作られたものが多く、巨径な材を選んで作成したことがうかがえる。しかし、山賀遺跡の木棺は構造的に異なり、蓋板・側板・小口板は一枚の板で作られているが底板は小さな板を多数組合せる方法を用いている。1号墓の場合の用材は、蓋板をコウヤマキで作っているが、小口板・側板・底板はヒノキが利用されている。

表4 木 棺 の 用 材

	南小口板	北小口板	東側板	西側板	蓋 板	底 板			
						1	2	3	4
第1号方形周溝墓 主体部木棺	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ?	ヒノキ	コウヤマキ (6)	ヒノキ	ヒノキ (8)	ヒノキ (9)	ヒノキ
第2号方形周溝墓 主体部木棺	コウヤマキ	コウヤマキ	コウヤマキ	コウヤマキ	コウヤマキ (7)	コウヤマキ			

() 内は写真番号

このような、用材の用い方の相違は何にもとづくものか明らかではない。ただ、ヒノキとコウヤマキの生育条件を考えると次のようなことが明らかとなる。

つまり、ヒノキの方がコウヤマキより低地（近畿付近では、ヒノキは200m前後から、コウヤマキは500m前後）から分布している。また、樹の太さとしては、ヒノキは大きなもので直径約

1. 山賀（その2）遺跡出土木製遺物の樹種について

2 mまで到するのに対し、コウヤマキは1 m程度までである。

このように見てくると、ヒノキの方がコウヤマキに比較し、入手しやすいと思われるのは明らかである。しかし、山賀遺跡の場合を見ると、蓋板はコウヤマキの一枚板を用いている反面、底板にヒノキの板を数枚組合せている点は理解し難い。このようなヒノキとコウヤマキを用いた例としては、瓜生堂遺跡で発見された木棺(弥生時代中期)に見ることはできる。しかし、小口板・底板はヒノキで作られているものの、すべて一枚板が使用されており山賀遺跡の例とは異なる。また、このことからヒノキの巨径な材の入手が可能であったことも明らかである。

このように考えてくると、山賀遺跡の木棺の材の用い方は単に用材が入手困難であったためと考えるよりもむしろ、社会的な慣習上の相違あるいはその慣習の結果として容易に材が入手できなかったことにもとづくもののように思われるが明らかではない。

杭

杭に用いられている樹木は16種に及び、用材を選択して用いたとは考えられない。ただ、遺構・遺物の時期とその用材の種類を見ると、次のような関連が認められる。

弥・中・Ⅰ畦畔11の杭にはヤナギの利用が多く認められる。このヤナギの生育する環境は、土壌中に水分の多くある所に見られ川岸や堤などに多い。このことから弥生中期においては、附近の状況もこのような状況にあったものと思われる。

一方、弥・後・Ⅲ杭列1の杭に用いられている樹木はその種類が多くなるとともに、シイノキ・カシの使用が多くなる傾向が認められる。

このことから、弥生時代後期には山賀（その2）遺跡付近においては、ヤナギの木がなくなるような環境変化が生じたように考えられる。

樹種の変化からのみではどのような環境変化が生じたかを正確に明らかにすることはできないが、樹木の生育環境を考えると次のようなことが推測される。

ヤナギは一般に水辺あるいは川岸などの水の豊富に存在する所に生育することが多いが、シイノキ・カシなどはこのような所に生育することは少なく、現在の大阪府下の平野部に見られるように適度に水の存在する所に生育する。

杭の用材の利用状況の相違が、付近に生育している樹木の変化によるものとするれば、山賀（その2）遺跡付近の環境は弥生時代中期の水辺あるいは川岸のような状況から後期には適度の水分が土壌中に存在するような状況まで変化したことがうかがえる。

その他

木樋が出土している、用材としてはヒノキ（4点）とクスノキ（2点）が用いられている。

すでに、何例かの木樋状の遺物の出土例も報告されているが、用材についての報告がなくその利用状況は不明である。

ただ、山賀（その2）遺跡における材の利用状況を見ると、ヒノキ・クスノキと言った耐水性に富んだ材が用いられていることが特徴として上げられる。

終りに

山賀遺跡から発見される木製遺物の用途・用材の用い方には、大阪府下の他の弥生時代の遺跡から発見される木製遺物とは異なった資料が多い。特にヤス・木棺の用材の用い方は興味深い。他に比較する資料が少ないためどのような理由からこのような材の利用を行なったのか正確に推定することはできないが、これらについては今後に残された問題と思われる。

また、杭の用材については、報告が少なく用材の利用状況は明らかではない。しかし、山賀（その2）遺跡においては、樹木を選択して用いているとは考えにくい。各時期における用材の相違は遺跡付近の樹木相の変化が反映していると考えられることから、杭などのあまり用材を選択せずに用いたと考えられる資料は各時期における遺跡付近の樹木相を知る上で重要なデータを提供すると考えられ、このような用材についてもできるだけ明らかにしてゆくことが重要であると考えられる。

文献

- 亙理俊次、山内 文 植物性出土品—木材、山木遺跡、95～100 (1962)。
亙理俊次、山内 文 自然遺物、木材、登呂 (本編)、343～353 (1954)。
亙理俊次、山内 文 自然遺物、瓜郷、84～110 (1963)。
山内 文 篠東遺跡出土の木材、篠東 (第一次)、54～57 (1960)。
同 上 篠東遺跡出土の木材、篠東 (第二次)・樞王・行明調査報告書、18～19 (1961)。
三重県教育委員会 木製遺物、納所遺跡 一遺構と遺物一、59～69 (1980)。
尾中文彦 木器の用材、大和唐古弥生式遺跡の研究、117～182 (1943)。
杉原荘介、大塚初重 京都府深草遺跡、日本農耕文化の生成、339～354 (1961)。
松田隆嗣 木製遺物の樹種について、瓜生堂遺跡、445～447 (1980)。
嶋倉巳三郎 恩智遺跡から出土した木製品の樹種、恩智遺跡、201～206 (1980)。
杉原荘介、神沢勇一 大阪府瓜破遺跡、日本農耕文化の生成、325～337 (1961)。
東奈良遺跡調査 木製品、東奈良発掘調査概報Ⅰ、237～242 (1979)。
嶋倉巳三郎 茨木市東奈良遺跡出土木材調査報告、東奈良発掘調査概報Ⅰ、242～244 (1979)。
東奈良遺跡調査会 木製品、東奈良発掘調査概報Ⅱ、77～84、102～106 (1981)。
松田隆嗣 木製遺物の樹種について、池上・四ツ池遺跡、自然遺物、131～144 (1980)。
岡山県教育委員会 上東遺跡、岡山県埋蔵文化財報告書第二集 (1974)。
同 上 川入・上東、岡山県埋蔵文化財報告書第16集 (1977)。
福岡市教育委員会 板付、福岡市埋蔵文化財調査報告書、第35集 (1976)。
松本 昶、林 弘也 辻田遺跡から出土した木材資料の樹種同定について、山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書、第12集、144～154 (1979)。
松本 昶、林 弘也 門田遺跡谷地区出土の木材片の樹種について、山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書、第11集、159～161 (1978)。
松本 昶、堤 壽一、林 弘也、北原龍士 北部九州の遺跡から出土した木材及び木製品、自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 (総括報告書)、241～248 (1980)。
乙益重隆 木器・木製品、上総菅生遺跡、33～43 (1979)。
朴沢正耕 木製品、落合Ⅱ遺跡、岩手県文化財調査報告書50集、289～324 (1980)。
金平亮三「大日本産重要木材の解剖学的識別」台湾總督府中央研究所林業部報告 4 1926
工藤祐舜「訂正・日本有用樹木分類学」 1933
川林 暹「朝鮮産木材の識別」 (朝鮮總督府林業試験場「林業試験場報告 27」) 1938

1. 山賀（その2）遺跡出土木製遺物の樹種について

- 小林彌一「本邦における針葉樹材のカード式識別法」林試研報 98 1957 P.1～84
須藤彰司「本邦産広葉樹材の識別」林試研報 118 1959 P.1～138
山林 暹「木材組織学・改訂版」森北出版 1962
遺島恒夫・岡本省吾・林 昭三「原色木材大図鑑」保育社 1962
島地 謙「木材解剖図説」地球社 1964
堀川芳雄「日本植物分布図譜 I・II」学習研究社 1972・1976
島地 謙・須藤彰司・原田 浩「木材の組織」森北出版 1976
渡邊 全「改訂 世界樹木字彙 復刻版」第1書房 1977
萱野 茂「アイヌの民具」「アイヌの民具」刊行運動委員会 1978
平井信二「木の事典 1～10」かなえ書房 1979～1981
伝統的工芸品産業振興協会「伝統的工芸品技術事典」グラフィック社 1980
松田 修「古典植物辞典」講談社 1980

表5 樹 種 一 覧 表

番号	品 名	遺構面	トレンチ・遺構・層位	時 期	樹 種	顕微鏡 写真 番号
W-1	鳥形木製品	弥・前・I面	B 溝6 中層	弥生前期(中~新)	ヤマフジ?	25
W-2	鳥形木製品	〃	B 4 溝6 上層	〃	不明	33
W-3	鍬	〃	B 4 溝6 上層?	〃	カシ	
W-4	槌状木製品	〃	B 4 溝6 上層	〃	モミ	3
W-5	ヤス状木製品	〃	B 3 溝6 上層	〃	モミ	
W-6	剣形木製品	〃	B 溝6 上層	〃	カシ	
W-7	用途不明木製品	〃	B 3 溝6 上層	〃	ヒノキ	
W-8	ヤス状木製品	〃	A 包含層(第19層)	〃	モミ	
W-9	用途不明木製品	〃	B 包含層(〃)	〃	モミ	
W-10	鍬	弥・前・II面	B 溝3?	弥生前期(新)	カシ	15
W-11	ヤス状木製品	〃	B 溝3 下層	〃	モミ	
W-12	鋤	〃	B 土手6	〃	カシ	16
W-13	鋤	〃	B 土手6	〃	カシ	
W-14	ヤス状木製品	弥・中・I面	A 2 水田耕土内(第18層)	弥生中期(前葉)	モミ	2
W-15	〃	〃	A 6 水田耕土内(〃)	〃	モミ	
W-16	用途不明木製品	〃	B 水田耕土内(第18層)	〃	不明	
W-17	ヤス状木製品	〃	A 畦畔3内	〃	モミ	
W-18	柄状木製品	〃	B 第1号方形周溝墓北周溝	〃	ヤマグワ	20
W-19	盤状木製品	〃	B 〃 墳丘直上	〃	ヤマグワ	
W-20	器	〃	B 2 包含層(第17層)	〃	ヤマグワ	21
W-21	用途不明木製品	〃	B 包含層(〃)	〃	コウヤマキ	
	用途不明木製品	〃	B 包含層(〃)	〃	コウヤマキ	
	用途不明木製品	〃	B 包含層(〃)	〃	ヤナギ	10
W-22	えぶり	弥・後・I面	A 2 溝2	弥生後期	カシ	
W-23	用途不明木製品	弥・後・II面	B 6 包含層(第7層)	〃	マツ(二葉松)	4
W-24	〃	〃	A 4 包含層(〃)	〃	モミ	
W-25	〃	〃	A 4 包含層(〃)	〃	ヒノキ	
W-26	〃	弥・後・III面	A 杭列1	〃	カヤ	1
W-27	〃	〃	A 2 杭列1	〃	タブノキ	23
	杭	不 明	B		サカキ	30
	棒 材	弥・前・II面	B 土手6	弥生前期(新)	コウヤマキ	
	短冊型木器 ①	弥・中・I面	B 第1号方形周溝墓 墳丘南西部盛土内	弥生中期(前葉)	ヒノキ	
	〃 ②	〃	B 〃	〃	ヒノキ	
	〃 ③	〃	B 〃	〃	ヒノキ	
	木 槿 ① 大	〃	B 木槿状遺構	〃	ヒノキ	
	〃 小	〃	B 〃	〃	クスノキ	22
	〃 ②	〃	B 〃	〃	ヒノキ	
	〃 ③	〃	B 〃	〃	ヒノキ	
	〃 ⑤	〃	B 〃	〃	ヒノキ?	
	〃 ⑥	〃	B 〃	〃	クスノキ?	
	木 棒	弥・中・II面	B 4 河川1	弥生中期	ヒノキ	

(木製品の番号は本文中の遺物番号に対応)

1. 山賀（その2）遺跡出土木製遺物の樹種について

表6 弥・中・Ⅰ 畦畔11内杭列樹種一覧表

番号	樹種	写真番号
1	ヤナギ	11
2	ヤナギ	
3	ヤナギ	
4	広葉樹	
5	広葉樹	
6	ヤナギ	
7	ヤナギ	
8	ヤナギ	
9	ムクロジ	26
10	ムクロジ	
11	① ムクロジ	
	② ムクロジ	
	③ ヤナギ	
	④ ヤナギ	
12	ムクロジ	27
13	ムクロジ	

(番号は本文中 第32図の杭番号に対応)

表7 弥・中・Ⅱ 杭列1樹種一覧表

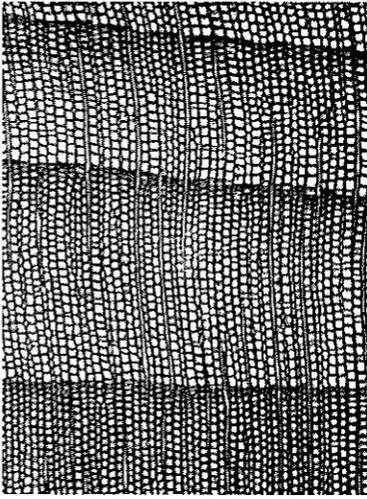
番号	樹種	写真番号
1	クヌギ	
2	ムクノキ	19
3	コナラ	
4	ヤマグワ?	
5	コナラ	13
	コナラ	
	コナラ	14

(番号は本文中 第56図の杭番号に対応)

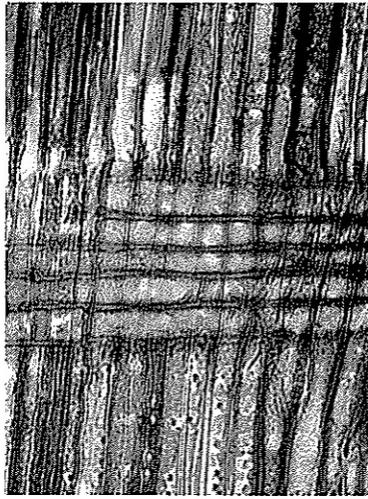
表8 弥・後・Ⅲ 杭列1樹種一覧表

番号	樹種	写真番号
1	タブノキ	
2	シイノキ	
3	サカキ	
4	カシ	
5	シイノキ	
6	シイノキ	
7	シイノキ	
8	シイノキ	
9	カシ	
10	カシ	
11	シイノキ	
12	シイノキ	
13	サカキ?	
14	クヌギ	
15	ユズリハ	
16	カシ	
17	タブノキ	
18	カシ	
19	カシ	
20	① ヒノキ?	
	② シイノキ	
21	カシ	
22	カシ	
23	シイノキ	
24	カシ	
25	シイノキ	
26	タブノキ	
27	① カシ	
	② サカキ	
	③ シイノキ	
28	カシ	
29	シイノキ	18
30	カキノキ	32
31	シイノキ	
32	サクラ	24
33	シャシャンボ	31
34	サカキ	
35	クヌギ	12
36	シイノキ	
37	コナラ	
38	サクラ	
39	シイノキ	
40	シイノキ	17
41	カシ	
42	ユズリハ	29
43	ユズリハ	28
44	クヌギ	
45	カシ	
	カシ	
	スギ	5

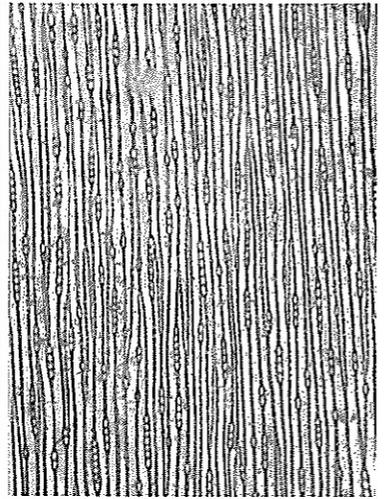
(番号は本文中 第65図の杭番号に対応)



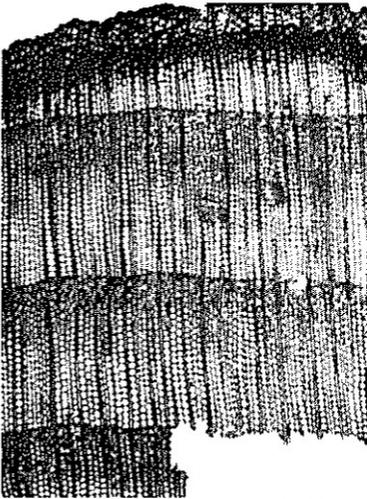
1. カヤ C-50x
用途不明木製品 (W-26)



R-200x



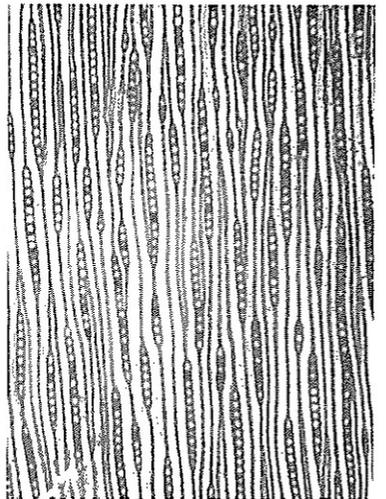
T-50x



2. モミ C-30x
杖状木製品 (W-14)



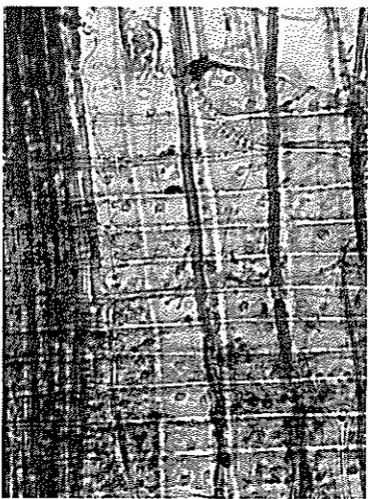
R-200x



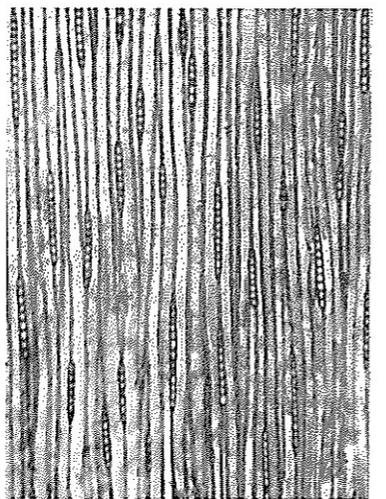
T-50x



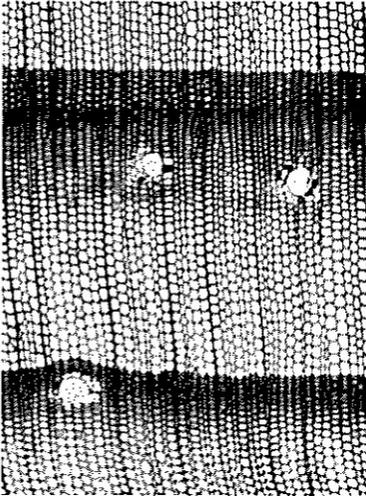
2. モミ C-30x
槌状木製品 (W-5)



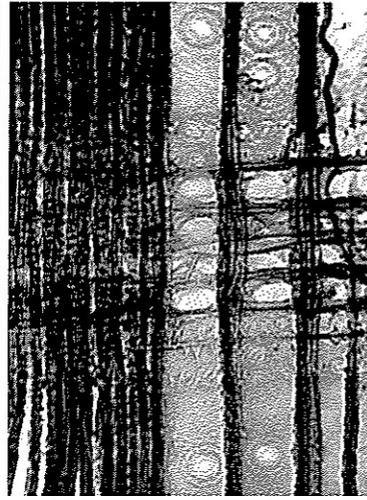
R-200x



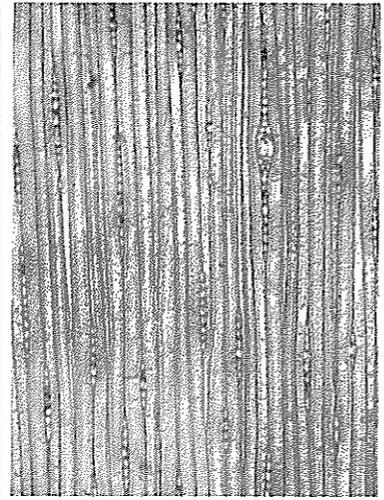
T-50x



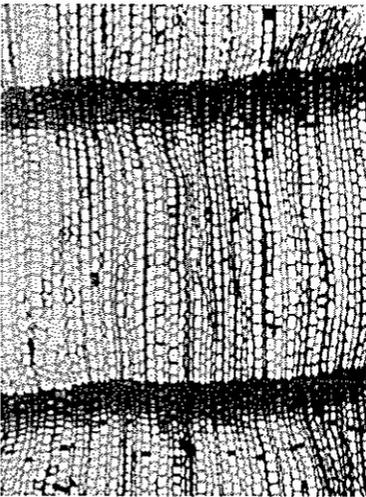
4. マツ(二葉松) C-30x
用途不明木製品 (W-23)



R-200x



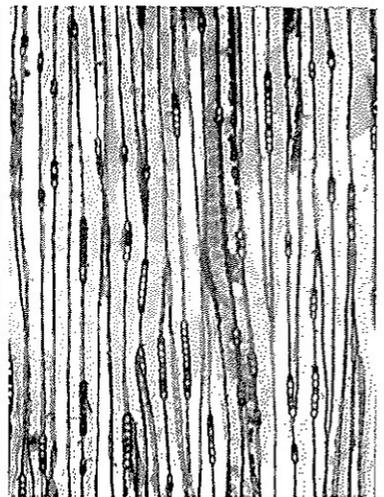
T-50x



5. スギ C-30x
杭(弥生後期Ⅲ面 杭列1)



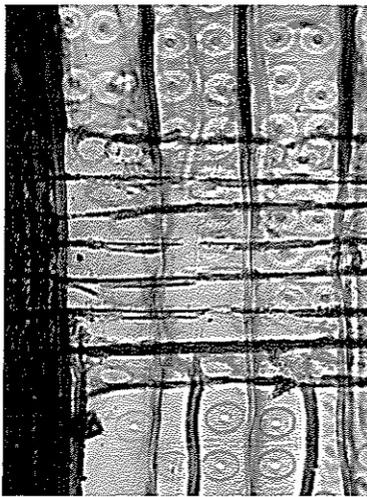
R-200x



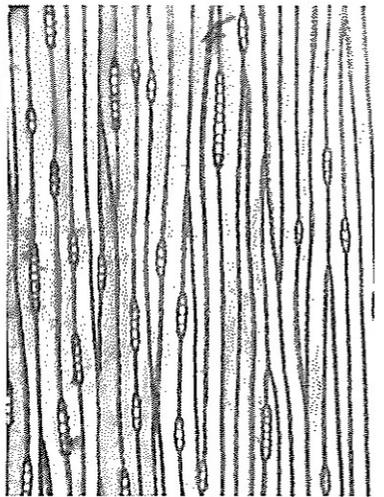
T-50x



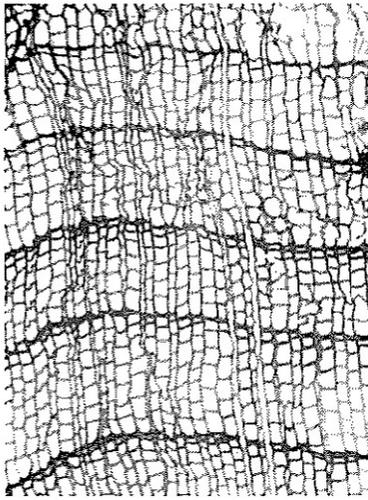
6. コウヤマキ C-50x
木棺(第1号方形周溝墓主体部 蓋板)



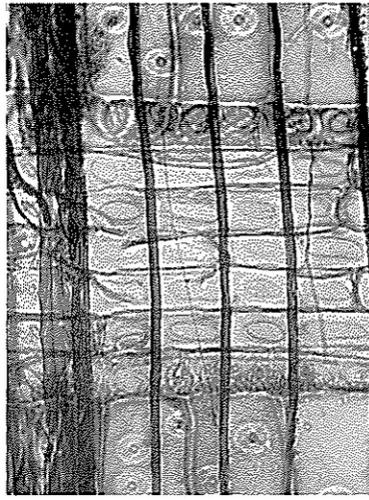
R-200x



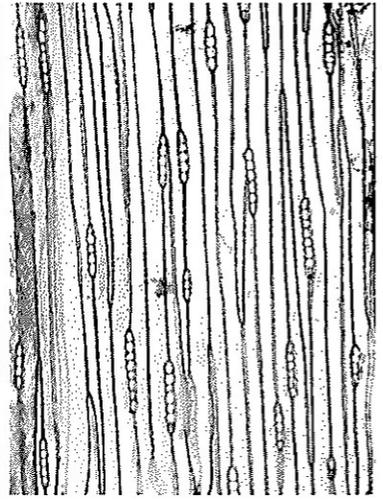
T-50x



7. コウヤマキ C-50×
木棺(第2号方形周溝墓)

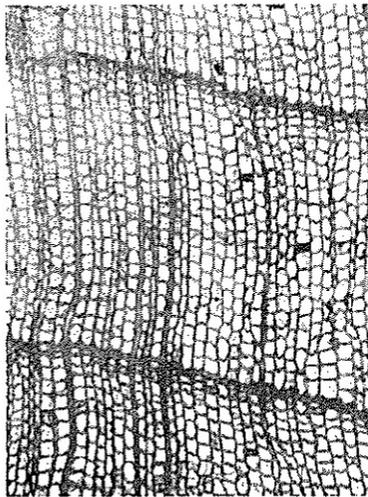


R-200×



T-50×

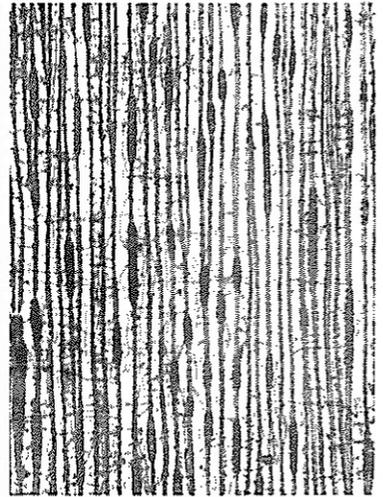
主体部 蓋板



8. ヒノキ C-50×
木棺(第1号方形周溝墓)

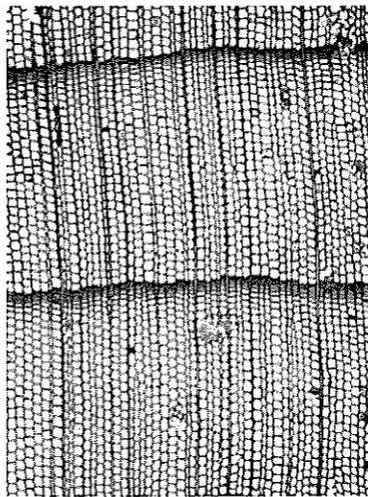


R-200×



T-50×

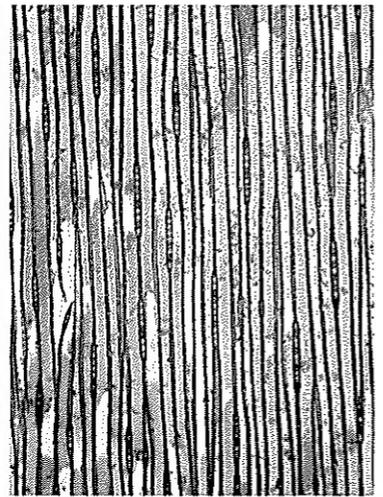
主体部 底板



9. ヒノキ C-30×
木棺(第1号方形周溝墓)

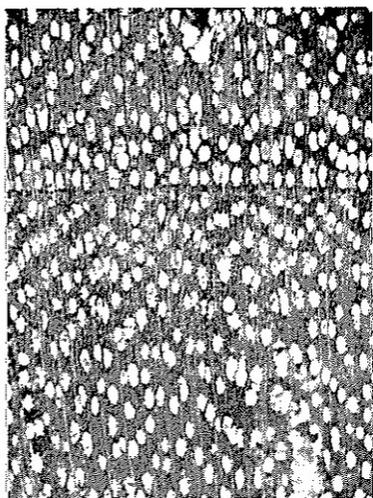


R-200×



T-50×

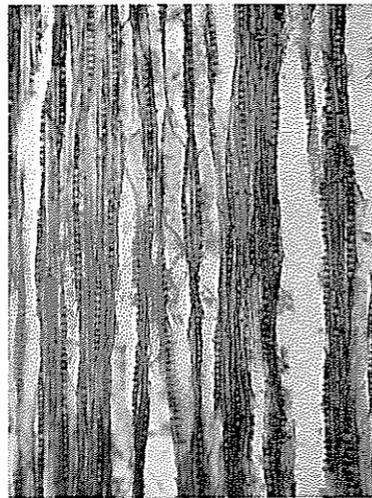
主体部 底板



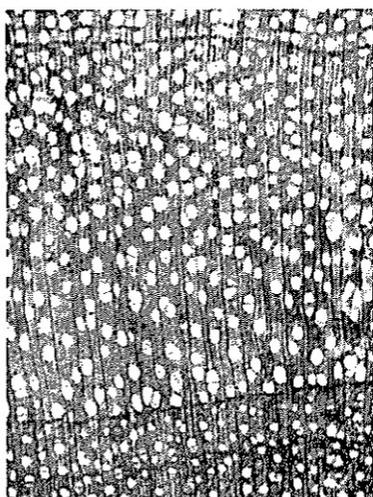
10. ヤナギ C-30x
用途不明木製品



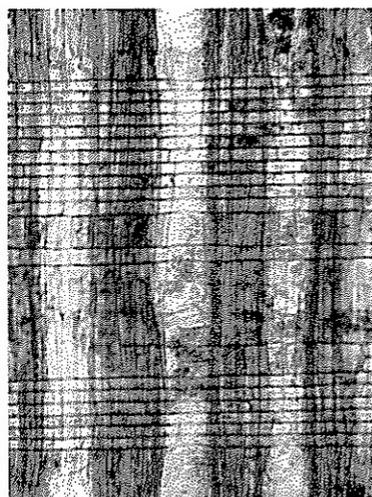
R-100x



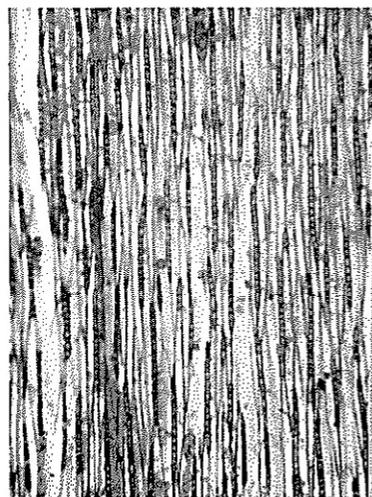
T-50x



11. ヤナギ C-30x
杭(弥生中期I面 畦畔11 杭1)



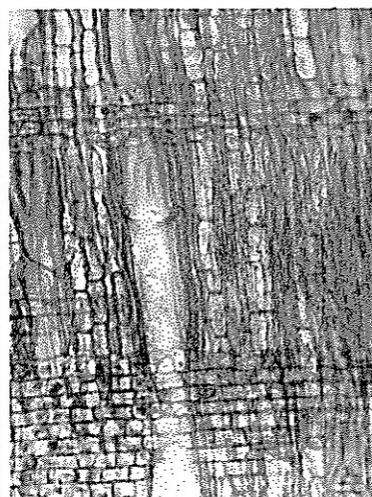
R-100x



T-50x



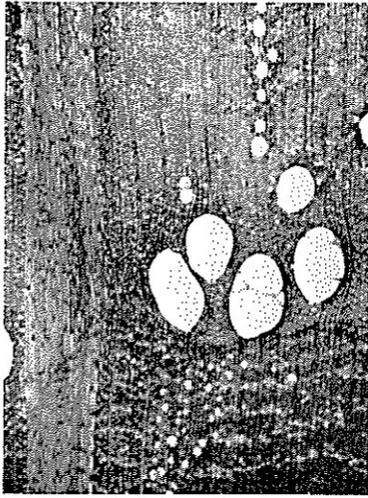
12. クヌギ C-30x
杭(弥生後期III面 杭列1 杭35)



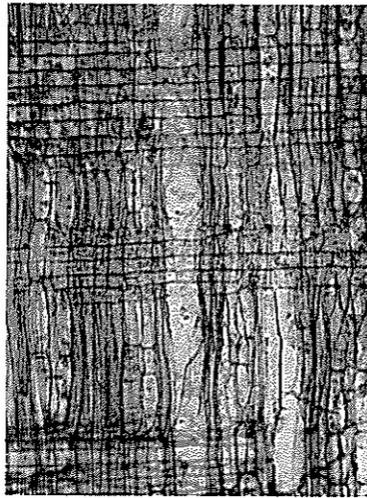
R-100x



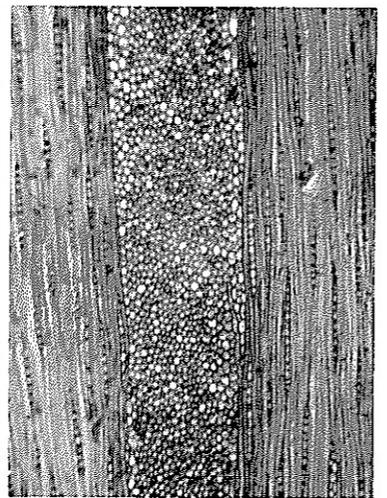
T-50x



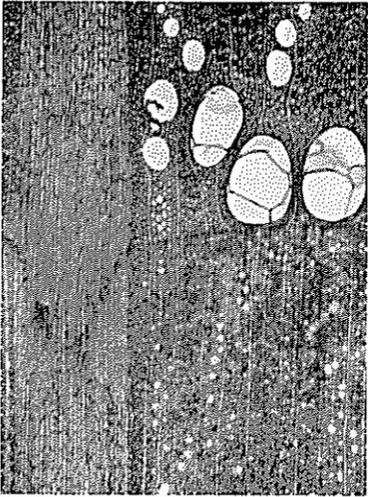
13. コナラ C-30x
杭 (弥生中期Ⅱ面 杭列1 杭5)



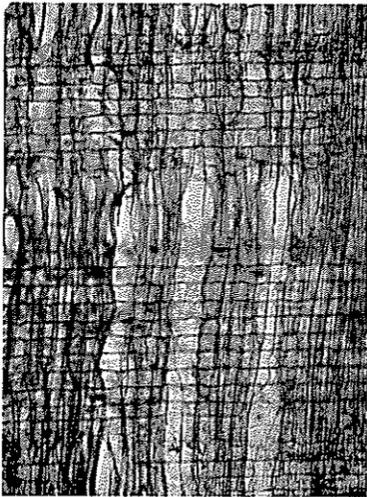
R-100x



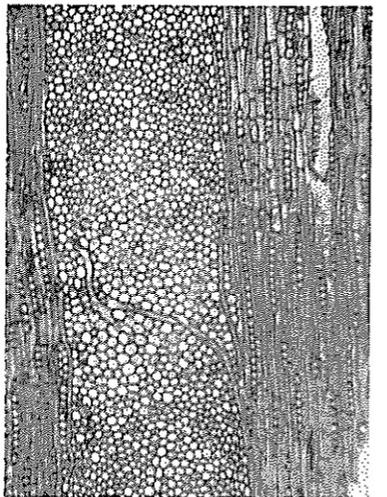
T-50x



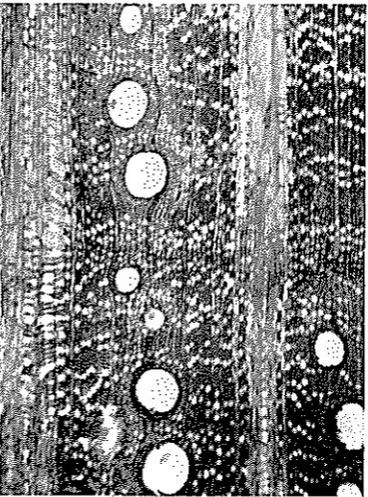
14. コナラ C-30x
杭 (弥生中期Ⅱ面 杭列1)



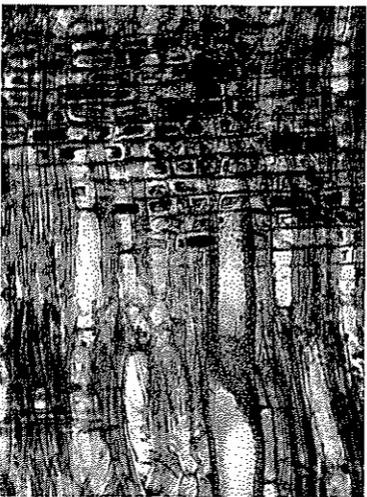
R-100x



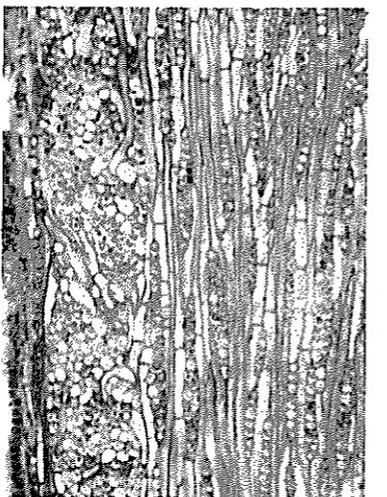
T-50x



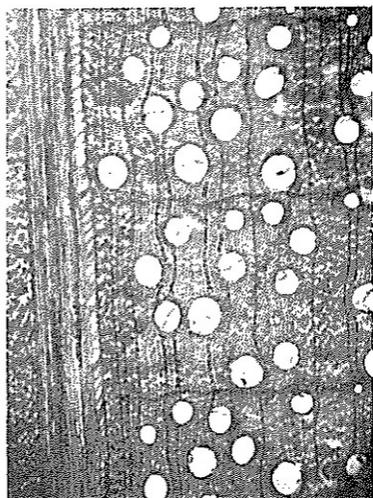
15. カシ C-30x
楸 (W-11)



R-100x



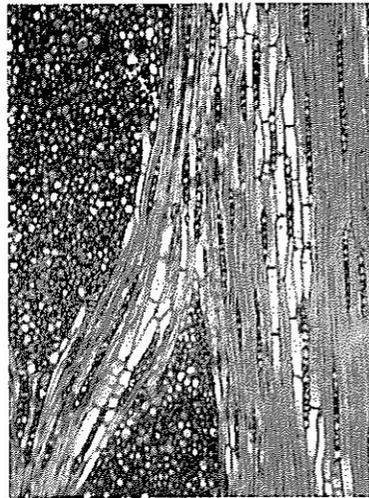
T-50x



16. カシ C-50×
鋤 (W-12)



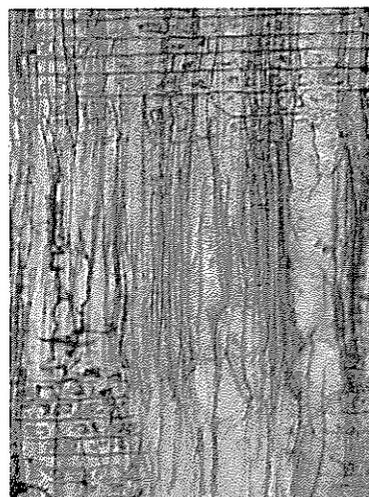
R-100×



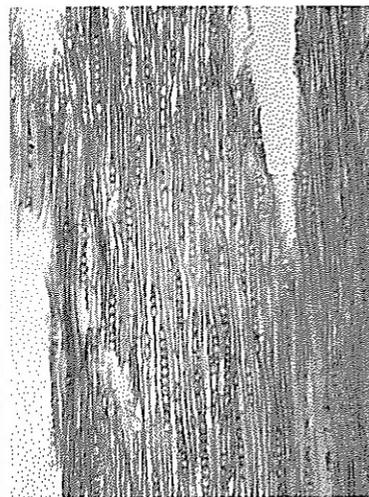
T-50×



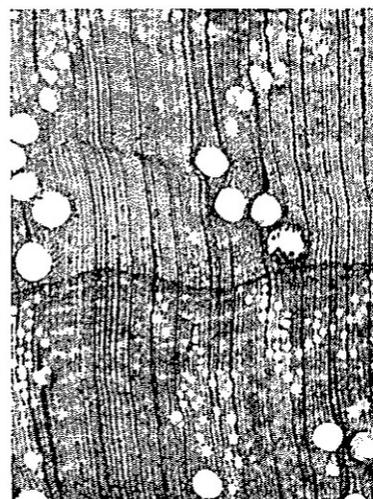
17. シイノキ C-30×
杭 (弥生後期Ⅲ面 杭列1 杭40)



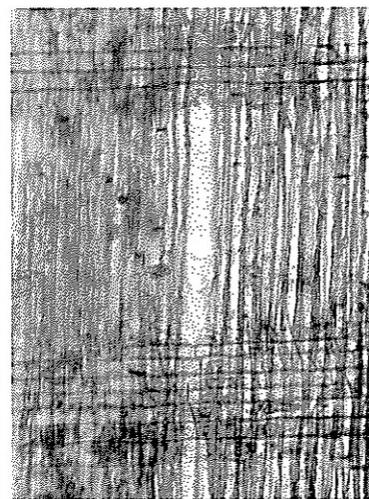
R-100×



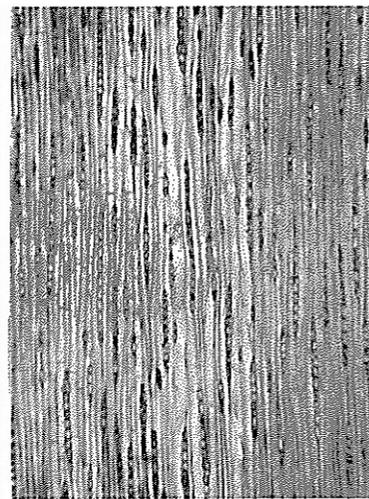
T-50×



18. シイノキ C-30×
杭 (弥生後期Ⅲ面 杭列1 杭29)



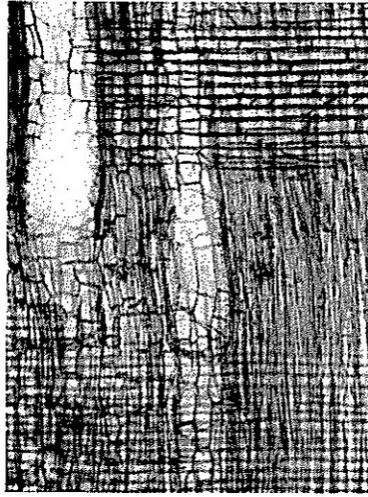
R-100×



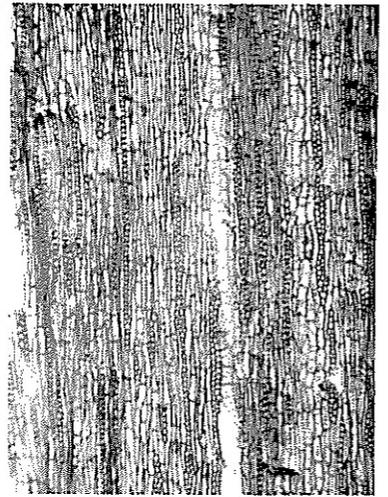
T-50×



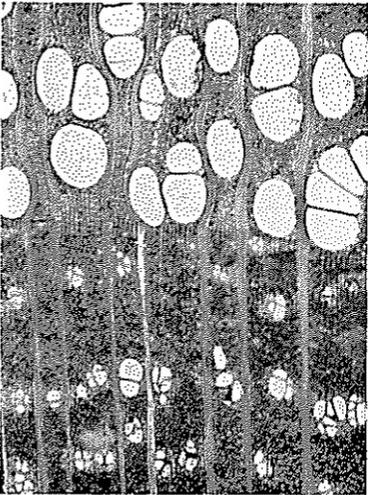
19. ムクノキ C-30x
杭 (弥生中期Ⅱ面 杭列1 杭2)



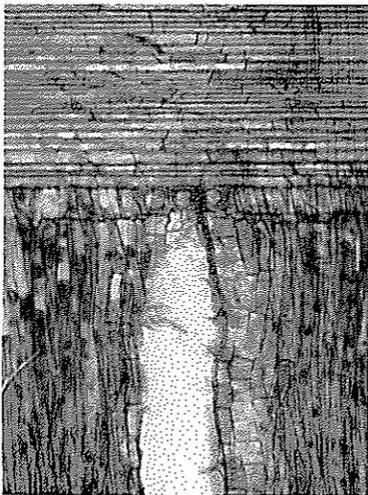
R-100x



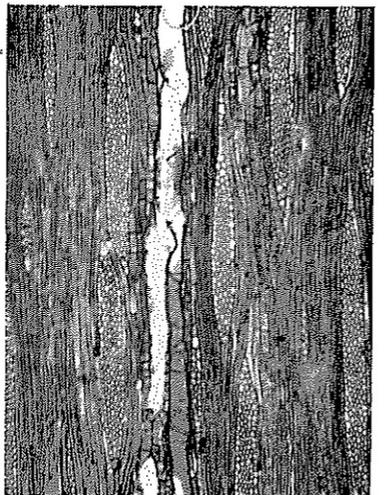
T-50x



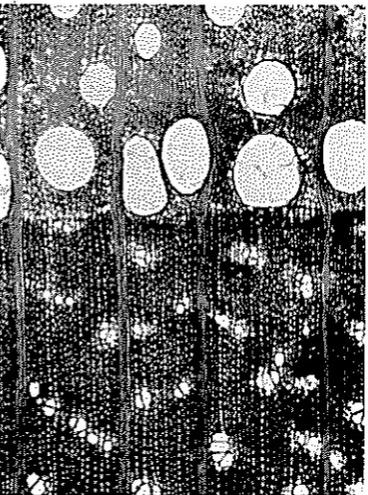
20. ヤマグチ C-30x
柄状木製品 (W-18)



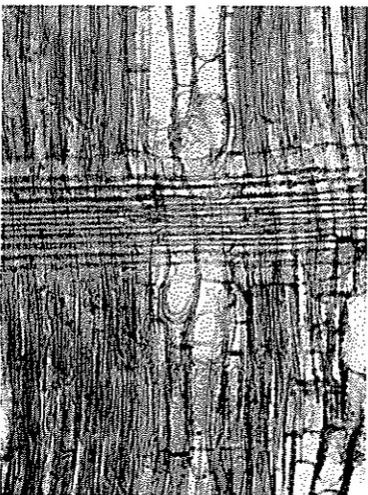
R-100x



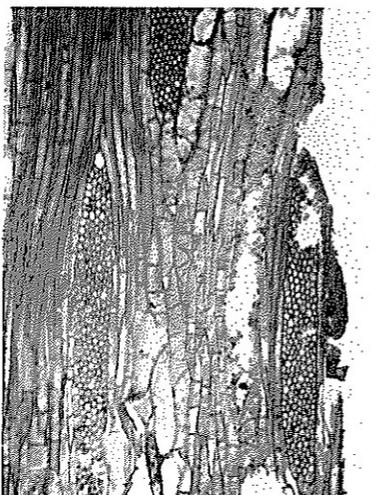
T-50x



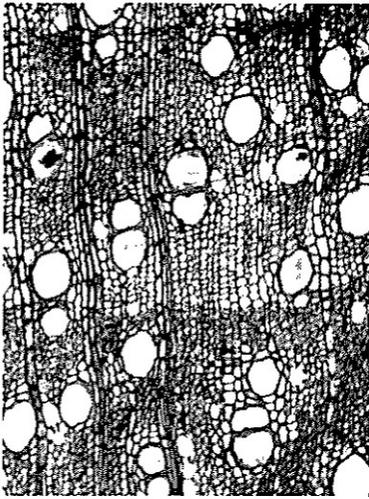
21. ヤマグチ C-30x
容器 (W-20)



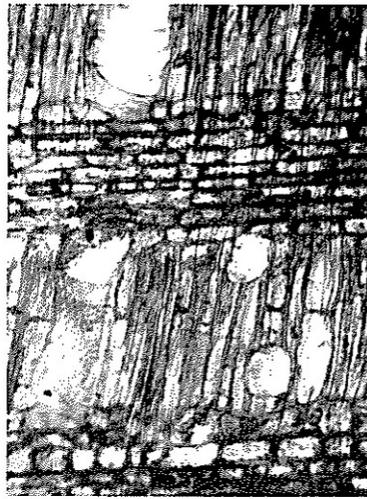
R-100x



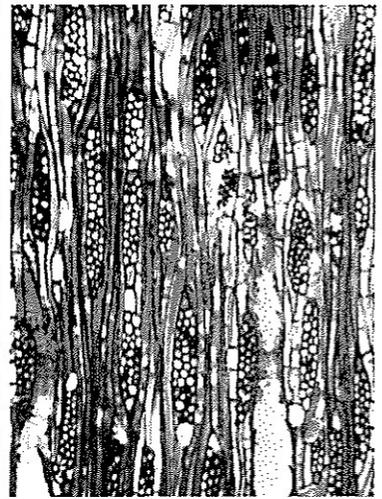
T-50x



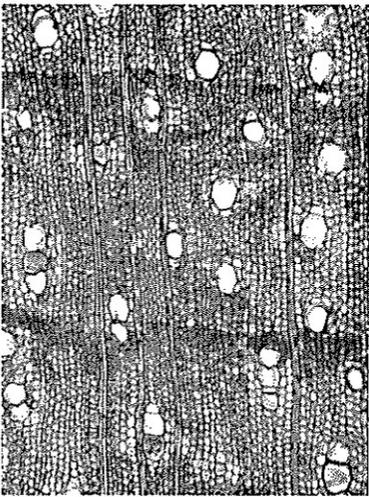
22. クスノキ C-50x
木穂1小(弥生中期I面)



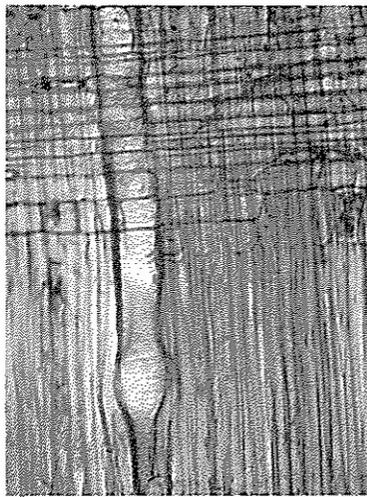
R-100x



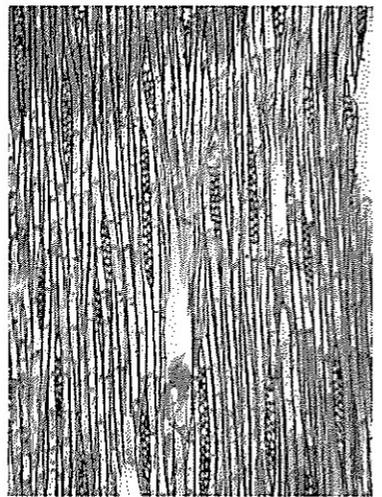
T-50x



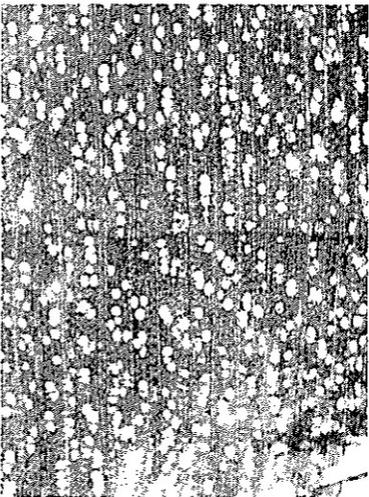
23. タブノキ C-50x
用途不明木製品 (W-27)



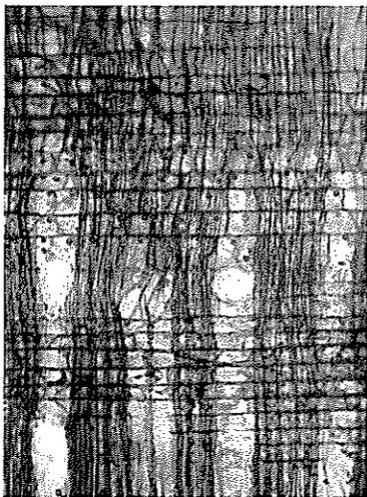
R-100x



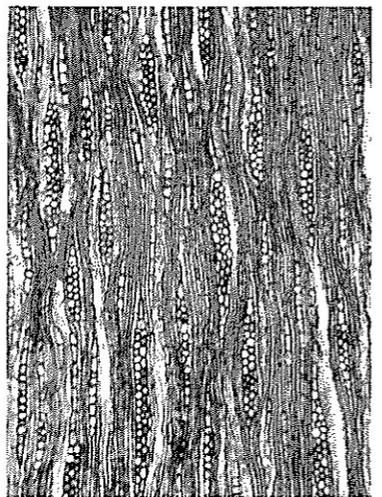
T-50x



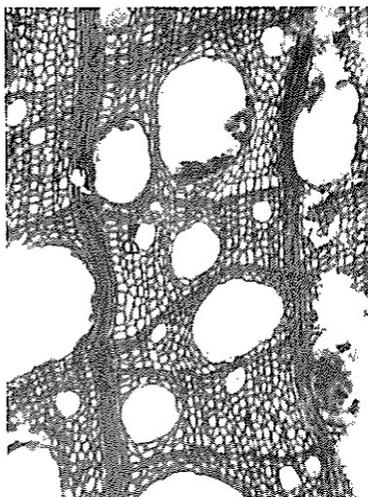
24. サクラ C-30x
杭(弥生後期III面 杭列1 杭32)



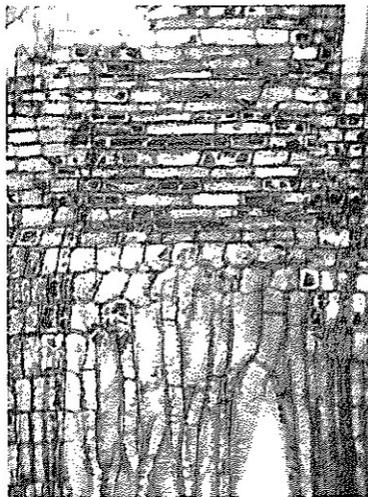
R-100x



T-50x



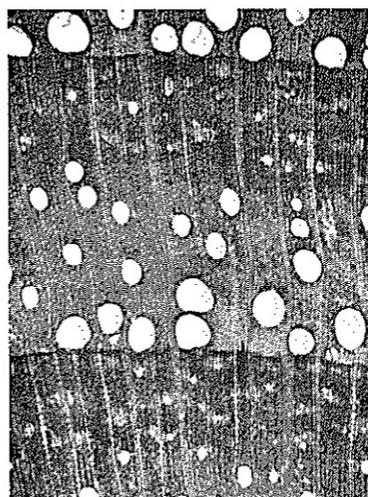
25. ヤマフジ? C-50x
鳥形木製品 (W-1)



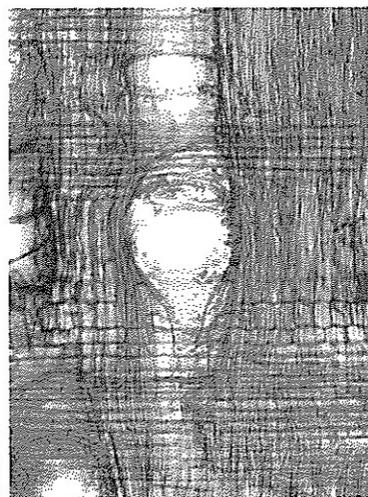
R-100x



T-50x



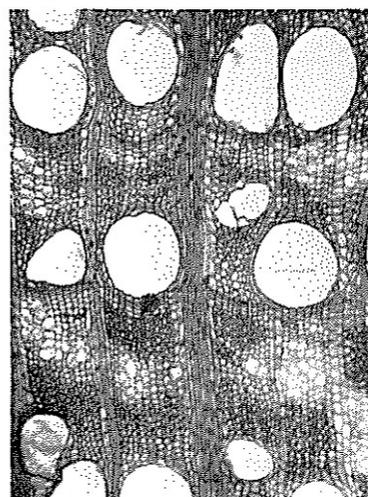
26. ムクロジ C-30x
杭 (弥生中期I面 哇畔11 杭9)



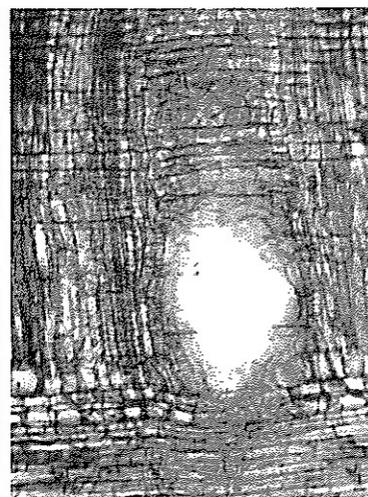
R-100x



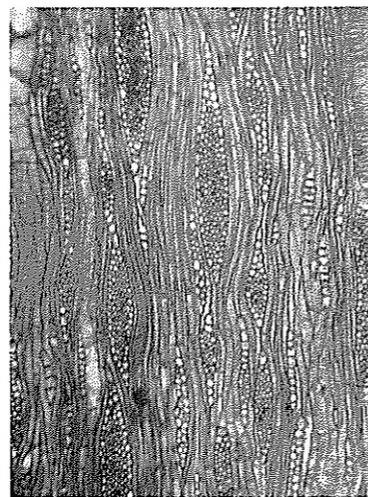
T-50x



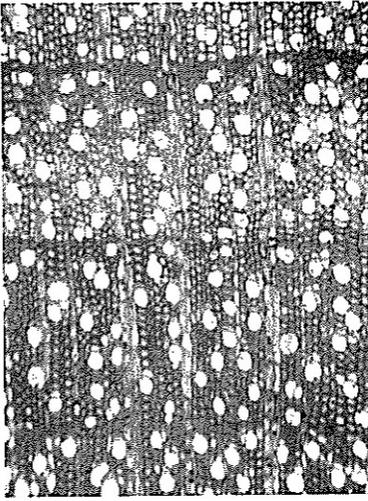
27. ムクロジ C-50x
杭 (弥生中期I面 哇畔11 杭12) - 132 -



R-100x



T-50x



28. ユズリハ C-50x

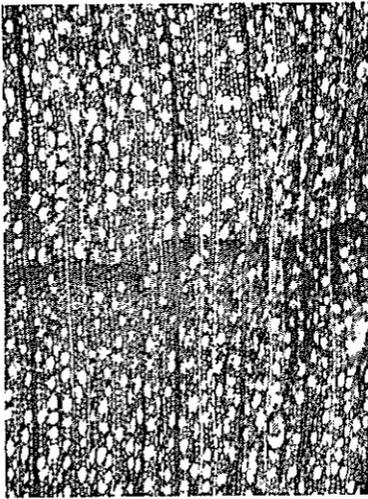
杭 (弥生後期Ⅲ面 杭列1 杭43)



R-100x



T-50x



29. ユズリハ C-30x

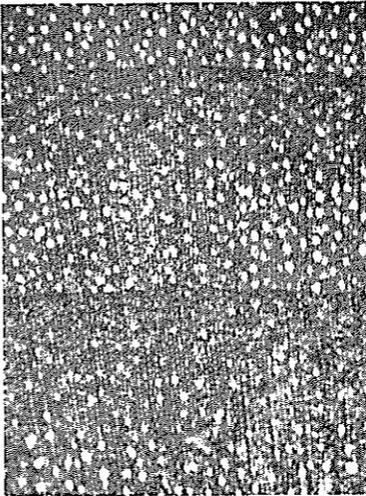
杭 (弥生後期Ⅲ面 杭列1 杭42)



R-100x

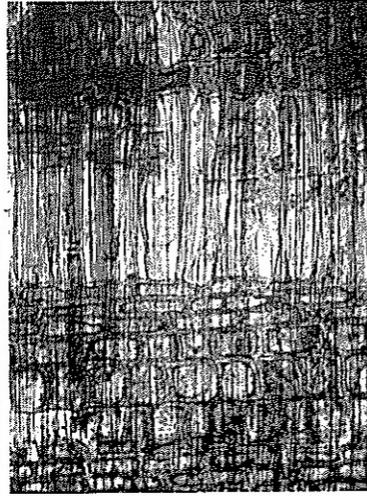


T-50x

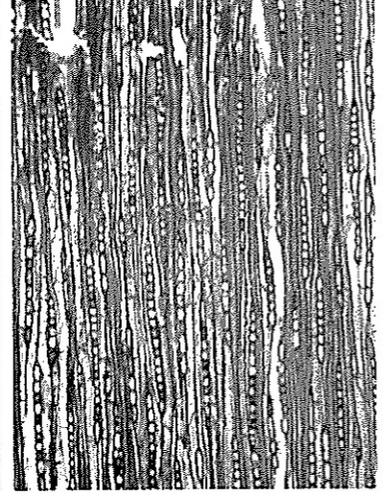


30. サカキ C-30x

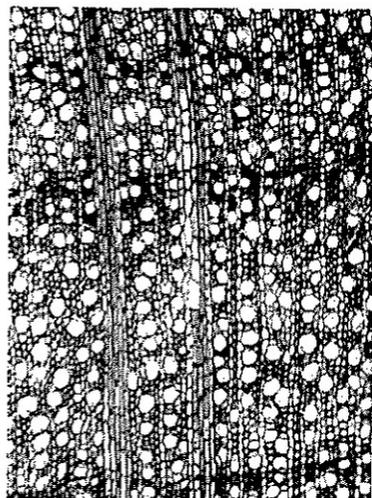
杭



R-100x



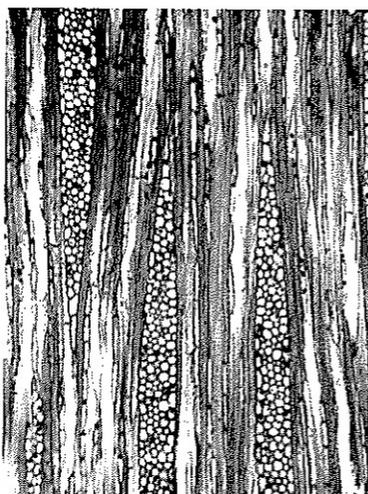
T-50x



31. シヤシャンボ C-50x
杭 (弥生後期Ⅲ面 杭列1 杭33)



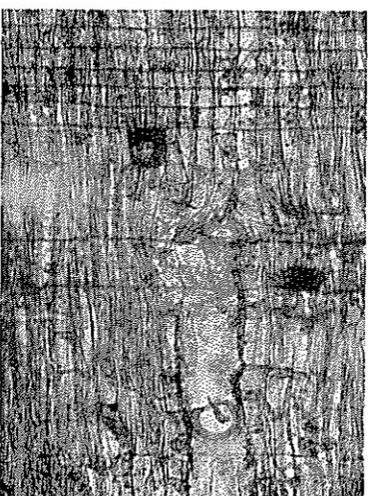
R-100x



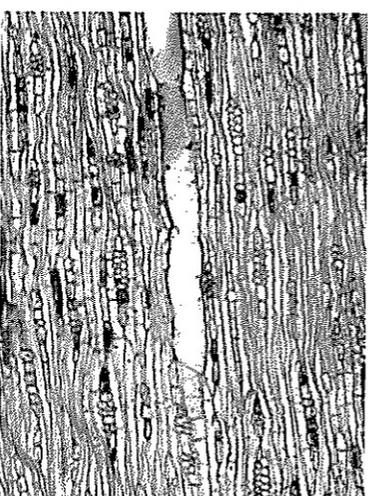
T-50x



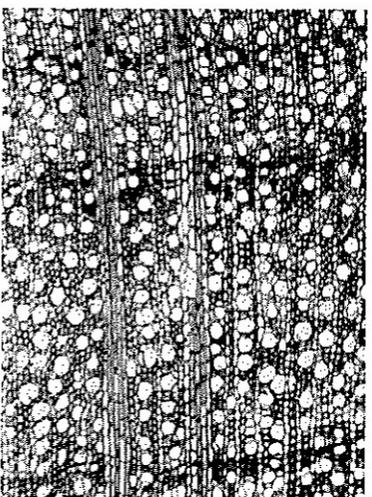
32. カキノキ C-30x
杭 (弥生後期Ⅲ面 杭列1 杭30)



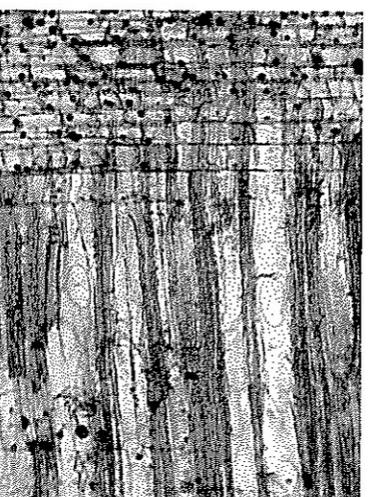
R-100x



T-50x



33. 不明 C-30x
鳥形木製品 (W-2)



R-100x



T-50x

2. 土器の胎土について

奥田 尚*・米田敏幸**

はじめに

土器の胎土を分析する方法は様々であるが、今回使用した方法は、肉眼観察による砂礫の同定である。粘土成分については肉眼にて調べがたい。含まれる砂礫を裸眼と実体鏡（×30）で調べた。土器全体の構成がでるようになるべく広い面になるように心がけた。

砂礫の構成から、出土土器は次の5つのタイプに区分される。

- 1のタイプ：石英・長石・角閃石が含まれ、角閃石は実体鏡下にてのみ確認される。
- 2のタイプ：石英・長石・チャートが含まれ、角閃石は認められない。
- 3のタイプ：石英・長石・角閃石が含まれ、角閃石は裸眼でも確認され、量が非常に多い。
- 4のタイプ：石英・長石・角閃石が含まれ、角閃石には結晶面が認められる。
- 5のタイプ：その他である。

各タイプの特徴について

各タイプに区分した特徴について述べる。

1のタイプ：構成砂礫の岩石種は花崗岩、チャートであり、鉱物種は石英、長石、雲母、角閃石である。花崗岩としたものは石英と長石がかみ合った岩片である。灰白色を呈し、亜円礫である。実体鏡下にて認められ、粗粒で、量は僅かである。チャートは灰白色、淡赤褐色を呈し、亜角礫、亜円礫である。礫径は7mmに及ぶ。量はごく僅かである。石英は無色透明、乳白色透明、赤色透明で、角礫状、亜角礫状である。粒径は1.5mmに及ぶ。量は多い場合、僅かの場合と試料によって、やや異なる。長石は無色透明、白色を呈し、角礫、亜角礫、亜円礫である。礫径は2mmに及ぶ。量は試料によって異なり、多い場合、ごく僅かの場合がある。雲母は黒色板状、茶褐色板状、金色板状である。黒色板状の雲母は礫径2mmに及ぶものもある。金色板状のものは実体鏡下にて、細粒で僅かに認められる。試料によって含まれる量は異なる。角閃石は黒色を呈し、角礫状である。実体鏡下にてのみ認められ、試料によって、粒径、量は異なる。

2のタイプ：構成砂礫の岩石種はチャートであり、鉱物種は石英、長石、雲母である。チャートは黒灰色、暗灰色、乳白色、赤褐色、淡茶褐色を呈し、角礫、亜角礫、亜円礫である。亜角礫が多い。礫径は4mmに及ぶ。量は僅かであるが、いずれの試料にも含まれる。石英は無色透明で、角礫状、亜角礫状である。角礫状のものが多く。粒径は1.5mmに及ぶ。試料によって、含まれる量、粒径は異なる。長石は白色を呈し、角礫、亜角礫である。角礫が多い。礫径は5mmに及ぶ。量は試料によって異なるが、多い場合が多い。雲母は金色板状を呈し、ごく僅かである。礫径は2mmに及ぶ。1試料にのみ認められる。

* 八尾市立刑部小学校教諭 ** 八尾市教育委員会技師

3のタイプ：3のタイプは3のタイプと3'のタイプに区分される。共に粗粒で、裸眼でも確認できる角閃石が含まれるが、量的に非常に多い場合、多い場合を3のタイプ、少ない場合を3'のタイプとした。

3のタイプの構成砂礫の岩石種は、花崗岩、斑岩、チャート、砂岩であり、鉱物種は石英、長石、雲母、角閃石である。花崗岩とした粒は実体鏡下にて、石英と長石がかみ合っているものである。灰白色を呈し、亜角礫状で僅かである。粒径は実体鏡下で粗粒である。斑岩は灰色を呈し、亜円礫状である。鏡下にて粗粒である。個数は1個で、40の試料に認められる。造岩鉱物は長石と角閃石であり、いずれも細粒である。チャートは灰色を呈し、亜円礫である。礫径は2.5mmに及ぶ。個数はごく僅かであり、2試料に認められる。砂岩は灰色を呈し、亜円礫である。礫径は3mmで、個数は1個である。石英は無色透明で、角礫、亜角礫である。礫径は2mmに及び、僅かに含まれる。試料によっては実体鏡下にてのみ認められる場合がある。長石は白色を呈し、角礫、亜角礫である。角礫を含む試料は1試料のみである。礫径は4mmに及ぶ。試料によって含まれる粒径は異なり、また、量も異なる。雲母は黒色板状、黒色粒状、金色板状である。黒色板状・粒状を呈する雲母は実体鏡下にて確認され、細粒である。角閃石は黒色を呈し、亜角礫である。礫径は3mmに及ぶ。裸眼にても多く認められ、実体鏡下で、非常に多く認められる。

3'のタイプの構成砂礫の岩石種は、チャートであり、鉱物種は石英、長石、雲母、角閃石である。チャートは黒色、暗灰色、赤褐色を呈し、角礫状、亜角礫状、亜円礫状を呈する。粒径は1.5mmに及ぶ。2試料に僅かに含まれ、1試料には認められない。石英は無色透明、白色を呈し、角礫、亜角礫である。試料によって礫形は異なる。粒径は2mmに及ぶ。試料によって、多い場合、僅かの場合がある。長石は白色を呈し、角礫、亜角礫である。粒径は2mmに及ぶ。試料によって含まれる量に差がある。雲母は黒色板状、金色板状である。粒径は0.5mmに及ぶ。いずれの試料にも、僅かかごく僅かに含まれる。角閃石は黒色を呈し、角礫状である。粒径は1mmに及ぶ。裸眼でも認められるが僅かであり、実体鏡下でも僅かである。

4のタイプ：構成砂礫の岩石種は花崗岩、チャートであり、鉱物種は石英、長石、雲母、角閃石である。花崗岩としたものは、石英と長石がかみ合っている岩片、長石と角閃石、石英がかみ合っている岩片である。灰白色を呈し、角礫、亜角礫である。礫径は3mmに及ぶ。量はごく僅かである。チャートは赤褐色、灰色を呈し、角礫、亜角礫である。礫径は3mmに及ぶ。量は中程度であるものもある。石英は無色透明、白色透明である。白色透明の場合はごく僅かである。角礫が多く、亜角礫は僅かである。礫径は3mmに及ぶ。実体鏡下にて確認される場合もある。量は中程度やごく僅かのものがある。長石は白色を呈する場合が多く、希に、無色透明の場合もある。角礫、亜角礫であるが、角礫の場合が多い。礫径は5mmに及ぶ。量は中程度からごく僅かまでである。雲母は黒色板状の場合が多く、試料によっては希に、無色透明板状や金色板状である場合がある。礫径は2.5mmに及ぶ。量は多い場合もあるが、僅かな場合が多い。角閃石は黒色を呈し、角礫状である。実体鏡下にて認められる場合が大半で、中粒から細粒である。試料によっては、

胎土による区分	摘要	試料番号	岩石破片										鉱物破片										器種	備考
			花崗岩		チャート		砂岩・泥岩		結晶片岩		ホルンフェルス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石			
			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍		
1	15		L △									M △	L △	S △	S △		L △		L-O			大型壺	I 様式	
	51												S △	L ×	S △	S ○	M ×		S ×			甕	V 様式	
	45		L △									S △	M-O	L-O	L-O	SS △	S △		S □			台付甕	V 様式	
	31											M-△	M-△	M-×	S-△	L-△	S △		S △			甕	I 様式	
	49			L ×								L-△	M-△	L-O	S-×				S-△			甕	V 様式	
2	41			L-△								S-×	L-□	L-O	M-□	L-×	S △					高杯	II 様式	
	93			L-△								M-O	M △	M-O								甕	V 様式	
	123			L-×	S-△								L-◎	L-△	M-△							甕	布留以降	
3	8			S △	L ×							S △	M-O	S △	S △	S △	M ×	SS △	S ○			鉢	I 様式	
	43			M-△								M-O	L-◎	M-□	L-□	S ×		S-×	S ×			鉢	IV 様式	
	63											L-△	L-O	L-O	M-△	S-△	S-×	M-△	M-△			鉢(こしぎ)	V 様式	
	26			L ×								S-△	S-△	L-O	SS-△		M-△	L-◎	L-□			壺	I 様式	
	38			L ×		L ×							M-O	S □	M △		M ×	SS ○	L-◎			鉢	II 様式	
	47											S-△	S △	L-□	S △			S-O	M-◎			高杯	V 様式	
	70												L-×	L-O	L-△		S-×	S-O	L-◎			甕	V 様式	
	7											M-△	L △	S-△	L △		M △	S-O	L-◎			ミニチュア壺	I 様式	
	121											L-△	S-×		S-△			M-△	L-◎			甕	庄内式	
	40											L-△	L-△	L-◎	L-△	L-△	S-△	L-△	L-O			壺の底	II 様式	
4	46												S □		S □	SS △	M-O		M-O			長頸壺	V 様式	
	120	L-□			M-×							L-×	M-×	L-O	L-O				S-□			壺	吉備系	
	44			L-□								L-O	L-O	L-△	S △				SS △			高杯	IV 様式	
	25		S-×	L-△	L-△							L-□	L-△	L-□		L-△	L-△		S-△			壺蓋	I 様式	
	39	L-×		S-×								M-×	L-△	L-□	L-△			L-△	L-△			壺の口縁	II 様式	
5	35			L △						L ×		L-O	L-O	S-□	L-□				SS ×			壺	II 様式	
	28	L ×		L-△		L-△						L-O	S-O	L-□	S-□				L-×			壺	I 様式	

(試料番号は本文中の土器番号に対応する)

記号の説明：裸眼時の粒径 L-2mm以上、M-2mm未満1mmまで、S-1mm未満。実体鏡下での粒径 L-粗粒、M-中粒、S-細粒、SS-微粒。量的にみて ◎-非常に多い、○-多い、□-中、△-僅か、×-ごく僅か。
L-、M-、S-はそれ以下の粒径を含む。

裸眼で認められる場合がある。実体鏡下で結晶面が認められる場合が多い。

5のタイプ：構成砂礫の岩石種は花崗岩、チャート、砂岩、ホルンフェルスであり、鉱物種は石英、長石、角閃石である。花崗岩とした岩片は、石英、長石、角閃石がかみ合っているものである。灰白色を呈し、亜円礫である。礫径は2mmで、個数は1個である。チャートは黒灰色、黒色を呈し、亜円礫である。礫径は2mmに及ぶ。量は僅かである。砂岩は灰緑色を呈し、亜円礫である。礫径は3mmに及ぶ。量は僅かである。ホルンフェルスは実体鏡下にて確認され、暗灰色を呈し、亜角礫である。量は僅かで、粒径は細粒である。チャートホルンフェルスである。石英は無色透明、白色透明で、角礫、亜角礫である。礫径は2mmに及ぶ。量は多い。長石は白色を呈し、角礫、亜角礫である。礫径は3mmに及ぶ。量は中程度である。角閃石は黒色を呈し、角礫状、亜円礫状である。実体鏡下にて認められ、粗粒の場合がある。量はごく僅かである。

砂礫の採取地について

各タイプの土器中の砂礫の採取地について推定する。

1のタイプ：構成砂礫は石英、長石、雲母、角閃石等であり、チャートが含まれる場合と含まれない場合とがある。鉱物構成、岩石構成は当遺跡の遺構面の砂礫構成とほぼ一致する。よって、1のタイプの土器は当遺跡付近の砂礫を採取して製作されたと推定される。

2のタイプ：構成砂礫は石英、長石、チャートである。このような組成を示す砂礫は当遺跡付近の砂礫に於て認められない。

3のタイプ：構成砂礫には石英、長石、角閃石が含まれ、チャートが希に含まれる。角閃石は肉眼でも認められ、量が非常に多い。このような土器の特徴は庄内期の庄内甕の胎土の特徴と一致する。河内湖東岸にて胎土の砂礫を採取して製作されたと推定される。

4のタイプ：構成砂礫には石英、長石、角閃石が含まれ、チャートが含まれる場合がある。角閃石には結晶面が認められ、火山岩起源であると推定される。砂礫の採取地を限定するに至らないが、八尾市中田一丁目出土の庄内期の甕、高杯等を検討した結果、角閃石に結晶面が認められる土器は形態的に吉備系とされているものとはほぼ一致した。このことから4のタイプは庄内期に吉備系の土器が製作された地域と同じ地域で製作されたものであると推定される。

5のタイプ：特徴が少ない為、砂礫の採取地を推定しがたい。

以上のように、1のタイプから4のタイプまでの砂礫の採取地を推定したのである。当遺跡付近で製作されたと推定されるものは、僅かで、他から運ばれたと推定されるものが多い。また、弥生時代のⅠ様式の時期から、既に、土器は他地域から運ばれていることが推定される。

3. 砂 礫 の 分 析

奥 田 尚

1. はじめに

採取された試料を篩で篩別した。篩別粒度は $\frac{1}{16}$ mm以上2mm未満、2mm以上4mm未満、4mm以上8mm未満、8mm以上の4段階である。篩別後、天臼で乾燥させ秤量を行ない、各粒度毎の構成岩石種・鉱物種を調べた。

2. 砂礫の粒度について

試料の粒度分布は第1表に示す。試料によって粒度の重量比には差が認められる。弥生後期Ⅲ河川1③試料は礫成分（粒度2mm以上）が半分以上を占め、同①は砂成分（粒度 $\frac{1}{16}$ mm以上2mm未満）がほとんど全てを占める。このことは、急に、同一層内に於て粒度の大きな礫を流すことができる条件から、細かい粒度のものしか流すことができない条件に変化したものであると推定される。急激な変化であるため、洪水等の堆積物が推定される。縄文面河川1の試料は礫径の大きなものが比率的に多い為、流れの速い時期の堆積物であると推定される。第6層①・②の試料は粒度にあまり変化がないことから、流速に変化がなかった時期の堆積物であると推定される。

表1 砂 礫 の 粒 度 分 布

試料番号	粒 径 mm					合 計				
	$\frac{1}{16} \leq$	< 2	$2 \leq$	< 4	$4 \leq$		< 8	$8 \leq$		
第12層	1,360	(g)	710	(g)	420	(g)	240	(g)	2,730	(g)
弥・後・Ⅲ 河川1①	1,120		10		—		—		1,130	
“ ②	1,620		940		910		240		3,710	
“ ③	1,040		1,260		730		165		3,195	
第6層①	2,140		60		10		—		2,210	
“ ②	920		240		60		—		1,220	
縄文 河川1	590		560		930		370		2,450	

3. 砂礫の供給地について

各試料の粒度4mm以上の礫種構成をみれば次のようである。

第12層試料の礫種は黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、閃緑岩、石英斑岩、流紋岩、毬果流紋岩、安

山岩、礫岩、砂岩、泥岩、チャート、流紋岩質溶結凝灰岩、変輝緑岩、ミロナイト様閃緑岩、石英、長石である。

弥生後期Ⅲ河川1②試料の礫種は黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、閃緑岩、流紋岩、安山岩、礫岩、砂岩、泥岩、チャート、流紋岩質溶結凝灰岩、泥質片岩、片麻状黒雲母花崗岩、ミロナイト様閃緑岩である。

弥生後期Ⅲ河川1③試料の礫種は黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、閃緑岩、石英斑岩、玢岩、流紋岩、石英安山岩、安山岩、礫岩、砂岩、泥岩、チャート、流紋岩質凝灰岩、石英片岩、変輝緑岩、ミロナイト様閃緑岩である。

第6層①試料の礫種は黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、チャート、泥質片岩、変輝緑岩、石英である。

第6層②試料の礫種は黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、閃緑岩、石英斑岩、流紋岩、安山岩、砂岩、泥岩、チャート、流紋岩質凝灰岩、変輝緑岩、石英、長石である。

縄文面河川1試料の礫種は黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、閃緑岩、石英斑岩、玢岩、流紋岩、礫岩、砂岩、泥岩、チャート、流紋岩質凝灰岩、石英片岩、片麻状黒雲母花崗岩、変輝緑岩、ミロナイト様閃緑岩、石英である。

表2 粒径4mm以上の礫種

岩石・鉱物種	黒雲母花崗岩	石英閃緑岩	閃緑岩	石英斑岩	玢岩	流紋岩	石英安山岩	安山岩	礫岩	砂岩	泥岩	チャート	流紋岩質凝灰岩	結晶片岩	変輝緑岩	片麻状黒雲母花崗岩	ミロナイト様閃緑岩	石英	長石
第12層	+	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+
弥・後・Ⅲ 河川1②	+	+	+			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		
弥・後・Ⅲ 河川1③	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		+		
第6層①	+	+										+	+	+	+			+	
第6層②	+	+	+	+		+	+	+		+	+	+	+	+	+			+	+
縄文・河川1	+	+	+	+	+	+			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

特徴のある礫種により、現地形をもとにして、各試料の礫の供給地を推定すれば、次のようである。石英閃緑岩は葛城石英閃緑岩の岩相の一部に酷似する。葛城石英閃緑岩は葛城山・金剛山を中心にはば円状に分布する。よって、礫の流出河川水系は葛城川水系、曾我川水系西部、石川水系東部であると推定される。流紋岩は二上山の雌岳火山岩・耳成山の流紋岩の岩相の一部に類

似する。よって、流出河川水系は米川水系、北葛城郡の葛下川水系、太子町の飛鳥川水系のいずれかであると推定される。礫岩、砂岩は和泉層群中の礫岩層・砂岩層の中の岩相の一部に岩相が酷似する。よって、石川水系の南部が礫岩・砂岩の供給地であると推定される。凝灰岩の岩相は、二上山南西麓鹿谷寺付近に分布する下部ドンズルポー層の岩相の一部に酷似する場合と室生火山岩の岩相の一部に酷似する場合とがある。前者は太子町の飛鳥川上流に礫の供給地が推定され、後者は初瀬川上流に供給地が推定される。

以上のことから、各試料の礫を供給した河川は飛鳥川水系を含む石川水系と初瀬川水系・葛城川水系等を含む大和川水系の合流した河川であると推定される。宝永元年以前の大和川の流れによる供給物質であると推定される。